
桶 川 市・北 本 市

諏訪北Ⅰ／諏訪北Ⅱ
諏訪南／ニツ家下

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
桶川北本地区埋蔵文化財発掘調査報告

2014

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 諏訪南遺跡第1号住居跡出土縄文土器



2 諏訪南遺跡出土縄文土器

序

国土交通省が整備を進める首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、首都圏の交通渋滞の緩和と産業活力の向上に加え、大規模災害発生時における避難や救助、その後の復旧活動等にも大きな役割を果たすことが期待されております。

埼玉県にとっても圏央道のような高規格幹線道路の整備は、生活の利便性を向上させるとともに、産業振興をより一層促進するものであるため、埼玉県5か年計画の施策に位置づけられております。

さて、圏央道と上尾道路の交差する桶川北本インターチェンジ周辺には、今回発掘調査を行った桶川市諏訪北Ⅰ遺跡・諏訪北Ⅱ遺跡・諏訪南遺跡、さらに北本市二ツ家下遺跡など周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しております。発掘調査は、圏央道の新設事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、諏訪北Ⅰ遺跡では中世の「地下式竈」と呼ばれる地下室（ムロ）、諏訪北Ⅱ遺跡ではかつて遺跡の北側にあった普門寺に関連する中世の堀跡、諏訪南遺跡では縄文時代中期の竪穴住居跡や土壇、旧中山道沿いの二ツ家下遺跡では江戸時代の掘立柱建物跡や畠の畝跡などが発見されました。いずれもこの地域の歴史を紐解くうえで貴重な成果となりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、桶川市教育委員会及び北本市教育委員会、並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 中 村 英 樹

例 言

1. 本書は、桶川市川田谷地内に所在する諏訪北Ⅰ遺跡（第1・2次調査）・諏訪北Ⅱ遺跡（第1～3次調査）・諏訪南遺跡（第1・2次調査）、及び本市二ツ家地内に所在する二ツ家下遺跡（第1・2次調査）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

諏訪北Ⅰ遺跡（№15-181 SWKTⅠ）
（第1次調査）
桶川市大字川田谷字諏訪北6714-7番地他
平成19年2月28日付け教生文第2-96号
（第2次調査）
桶川市大字川田谷字諏訪北6713-2番地他
平成19年4月12日付け教生文第2-5号

諏訪北Ⅱ遺跡（№15-182 スワ北Ⅱ）
（第1次調査）
桶川市大字川田谷字諏訪北6756番地他
平成21年5月13日付け教生文第2-7号
（第2次調査）
桶川市大字川田谷字諏訪北6764番地他
平成21年11月16日付け教生文第2-49号
（第3次調査）
桶川市大字川田谷字諏訪北6747番地他
平成23年7月8日付け教生文第2-25号

諏訪南遺跡（№15-180 スワ南）
（第1次調査）
桶川市大字川田谷字諏訪南5326番地他
平成20年5月29日付け教生文第2-13号
（第2次調査）
桶川市大字川田谷字諏訪南5363番地他
平成23年7月19日付け教生文第2-27号

二ツ家下遺跡（№16-107 ニツヤ下）
（第1次調査）
北本市二ツ家四丁目8番地他
平成21年7月7日付け教生文第2-19号
- （第2次調査）
北本市二ツ家四丁目20番地他
平成23年4月14日付け教生文第2-6号
3. 発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う桶川北本地区埋蔵文化財の記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人（現在 公益財団法人）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ-3に示した組織により実施した。各遺跡の発掘調査日程と担当者は以下のとおりである。

諏訪北Ⅰ遺跡第1次調査
平成19年3月1日～平成19年3月31日
担当：吉田 稔・宅間清公

諏訪北Ⅰ遺跡第2次調査
平成19年4月9日～平成19年4月30日
担当：渡辺清志・坂田敏行

諏訪北Ⅱ遺跡第1次調査
平成21年4月8日～平成21年10月31日
担当：金子直行・黒坂禎二・吉田・渡辺・矢部 瞳

諏訪北Ⅱ遺跡第2次調査
平成21年11月1日～平成22年1月29日
担当：金子・吉田

諏訪北Ⅱ遺跡第3次調査
平成23年7月1日～平成23年8月31日
担当：西井幸雄・吉田幸一

諏訪南遺跡第1次調査
平成20年5月1日～平成20年6月30日
担当：木戸春夫・植田雄己

諏訪南遺跡第2次調査
平成23年7月1日～平成23年8月31日
担当：飼持和夫

二ツ家下遺跡第1次調査

平成21年7月1日～平成21年8月31日

担当：吉田・渡辺

二ツ家下遺跡第2次調査

平成23年4月8日～平成23年6月30日

担当：西井・岩瀬 謙

整理・報告書作成事業は平成25年4月8日から平成26年2月28日まで実施し、大谷 徹・矢部が担当した。報告書は、平成26年3月25日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第409集として印刷・刊行した。

5. 発掘調査における基準点測量及び空中写真撮影は、以下のとおり委託した。

諏訪北Ⅰ遺跡第1・2次調査

基準点測量 精進測量設計株式会社

空中写真撮影 株式会社東京航業研究所

諏訪北Ⅱ遺跡第1・2次調査

基準点測量 株式会社ヤマト測建

空中写真測量 株式会社シン技術コンサル

諏訪北Ⅱ遺跡第3次調査

基準点測量 株式会社ウッド

空中写真撮影 株式会社シン技術コンサル

諏訪南遺跡第1次調査

基準点測量 株式会社サクラプランニング

空中写真撮影 株式会社シン技術コンサル

諏訪南遺跡第2次調査

基準点測量 株式会社未央測地設計

二ツ家下遺跡第1次調査

基準点測量 中央航業株式会社

空中写真撮影 中央航業株式会社

二ツ家下遺跡第2次調査

基準点測量 株式会社ビッソ測量設計

空中写真撮影 中央航業株式会社

6. 発掘調査における写真撮影は各担当者が、遺物の写真撮影は大谷が行った。巻頭図版用の遺物写真撮影は、合資会社池澤に委託した。
7. 出土品の整理・図版作成は大谷・矢部が行い、縄文土器は渡辺の協力を得た。
8. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、各遺跡の縄文時代の遺物については渡辺が、他は大谷が行った。
9. 本書の編集は大谷が行った。
10. 本書にかかる諸資料は、平成26年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
11. 発掘調査、本書の作成にあたり、桶川市教育委員会、北本市教育委員会をはじめ関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

凡 例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を指す。各遺跡の基準座標は、以下のとおりである。

諏訪北Ⅰ遺跡

D-5グリッド北西杭の座標はX=640.000 m、Y=-27870.000 m（北緯36° 00' 19" 3341、東経139° 31' 26" 9058）である。

諏訪北Ⅱ遺跡

G-8グリッド北西杭の座標はX=460.000 m、Y=-28300.000 m（北緯36° 00' 13" 4472、東経139° 31' 09" 8906）である。

諏訪南遺跡

D-5グリッド北西杭の座標はX=350.000 m、Y=-28270.000 m（北緯36° 00' 09" 8811、東経139° 31' 11" 1027）である。

二ツ家下遺跡

B-9グリッド北西杭の座標はX=1490.000

m, Y=-25410.000m (北緯36° 00' 47" 1544, 東経139° 33' 05" 1772)である。

2. 調査で使ったグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本(1グリッド)とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3. グリッドの名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット(A・B・C…), 西から東方向に数字(1・2・3…)を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッド等と呼称した。

ただし、諏訪北Ⅱ遺跡は南西隅を基点とし、南から北方向にアルファベット、西から東方向に数字を付し、同様にアルファベットと数字を組み合わせと呼称した。

4. 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡
SD…溝跡 SE…井戸跡 SK…土壇
SX…竪穴状遺構 FP…竈穴
P…ピット・柱穴

5. 本書に掲載した遺構番号は、発掘調査時に付した番号を一部振り替えた。

6. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。ただし、一部例外もある。

全体図 1:300 1:350 1:450 1:550

1:700 1:1,200

遺構図 1:20 1:30 1:40 1:60

1:80 1:100

縄文土器 1:4

土器・土器図 1:3 1:4

土師器・須恵器・陶磁器 1:3 1:4

石製品・土製品 1:3 金属製品 1:2

銭貨 3:4

7. 遺構断面図に記した水準数値は、海拔標高(単位:m)を示す。

8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・口径・器高・底径はcm単位である。

・()内の数値は推定値を示す。

・[]内の数値は残存高を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A-雲母 B-片岩 C-角閃石

D-長石 E-石英 F-軽石

G-砂粒子 H-赤色粒子 I-白色粒子

J-白色針状物質 K-黒色粒子

L-その他(小礫)

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記No.、煤の付着、生産窯、年代等を記した。

・生産窯については、胎土によって判断し、不明なものについては瀬戸美濃系と「系」をつけて表記した。

9. 本書に使用した地形図類は国土地理院発行の1/50,000地形図、桶川市都市計画図1/2,500、北本市都市計画図1/2,500を編集のうえ、使用した。

10. 文中の引用文献等は、(著者 発行年)の順で表記し、他の参考文献とともに巻末に掲載した。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	3. 中・近世の遺構と遺物	53
1. 発掘調査に至る経過	1	(1) 掘立柱建物跡	53
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(2) 竪穴状遺構	55
(1) 発掘調査	2	(3) 火葬跡	55
(2) 整理・報告書の作成	3	(4) 井戸跡	56
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	(5) 灰跡	59
II 遺跡の立地と環境	5	(6) 溝跡	60
1. 地理的環境	5	(7) 土城	89
2. 歴史的環境	6	(8) 柵列跡	119
III 諏訪北Ⅰ遺跡の調査	10	(9) ビット	121
1. 遺跡の概要	10	(10) グリッド出土遺物	122
2. 縄文時代の遺構と遺物	12	V 諏訪南遺跡の調査	125
(1) 土城	12	1. 遺跡の概要	125
(2) 土城・グリッド出土遺物	12	2. 縄文時代の遺構と遺物	127
3. 中・近世の遺構と遺物	15	(1) 竪穴住居跡	127
(1) 掘立柱建物跡	15	(2) 灰跡	146
(2) 地下式城	16	(3) 土城	147
(3) 竪穴状遺構	19	(4) ビット・グリッド出土遺物	148
(4) 溝跡	20	3. 中・近世の遺構と遺物	149
(5) 土城	21	(1) 溝跡	149
(6) ビット	29	(2) 畝状遺構	153
IV 諏訪北Ⅱ遺跡の調査	33	(3) 土城	153
1. 遺跡の概要	33	(4) ビット	156
2. 縄文時代の遺構と遺物	38	(5) グリッド出土遺物	156
(1) 竪穴住居跡	38	VI 二ツ家下遺跡の調査	157
(2) 竪穴状遺構	41	1. 遺跡の概要	157
(3) 埋甕	45	2. 縄文時代の遺構と遺物	161
(4) 土城	46	(1) 灰穴	161
(5) ビット・グリッド出土遺物	49	(2) 土器埋設遺構	162

(3) 土城	162
(4) グリッド出土遺物	166
3. 平安時代の遺構と遺物	167
(1) 土城	167
4. 近世の遺構と遺物	167
(1) 掘立柱建物跡	167
(2) 井戸跡	169
(3) 溝跡	170

(4) 畝状遺構	183
(5) 土城	192
(6) ビット	208
(7) グリッド出土遺物	208
VII 調査のまとめ	210

写真図版

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	5
第2図 周辺の遺跡	7
第3図 諏訪北Ⅰ・Ⅱ遺跡・諏訪南遺跡位置図	9
第4図 ニツ家下遺跡位置図	9

諏訪北Ⅰ遺跡

第5図 諏訪北Ⅰ遺跡基本土層	10
第6図 諏訪北Ⅰ遺跡全体図	11
第7図 土城	13
第8図 出土遺物	14
第9図 第1号掘立柱建物跡	15
第10図 地下式城出土遺物	16
第11図 第1号地下式城	17
第12図 第2号地下式城	18
第13図 第1号竪穴状遺構	19
第14図 第1・2号溝跡	20
第15図 溝跡出土遺物	21
第16図 土城出土遺物	21
第17図 土城(1)	22
第18図 土城(2)	23
第19図 土城(3)	24
第20図 土城(4)	25
第21図 土城(5)	26
第22図 土城(6)	27
第23図 土城(7)	28
第24図 土城(8)	29

第25図 土城(9)	30
第26図 土城(10)	31

諏訪北Ⅱ遺跡

第27図 諏訪北Ⅱ遺跡基本土層	33
第28図 諏訪北Ⅱ遺跡全体図	34
第29図 諏訪北Ⅱ遺跡分割図(1)	35
第30図 諏訪北Ⅱ遺跡分割図(2)	36
第31図 諏訪北Ⅱ遺跡分割図(3)	37
第32図 第2号住居跡	38
第33図 第3号住居跡(1)	40
第34図 第3号住居跡(2)	41
第35図 第4号住居跡	42
第36図 第1号竪穴状遺構	43
第37図 第2号竪穴状遺構	44
第38図 第4号竪穴状遺構	44
第39図 第1号埋甕	45
第40図 土城(1)	47
第41図 土城(2)	48
第42図 出土遺物(1)	49
第43図 出土遺物(2)	50
第44図 出土遺物(3)	52
第45図 第1号掘立柱建物跡(1)	54
第46図 第1号掘立柱建物跡(2)	55
第47図 第1号掘立柱建物跡出土遺物	55
第48図 第6号掘立柱建物跡	56
第49図 第3号竪穴状遺構	57

第50図	第1号火葬跡・出土遺物	57
第51図	井戸跡	58
第52図	井戸跡出土遺物	59
第53図	第1号井戸跡	60
第54図	第21・22号溝跡(1)	61
第55図	第21・22号溝跡(2)	62
第56図	第1・21号溝跡(1)	63
第57図	第1・21号溝跡(2)	64
第58図	第25・26・38・48・52・70・71号溝跡	65
第59図	第1・2号溝跡出土遺物	66
第60図	第21号溝跡出土遺物(1)	67
第61図	第21号溝跡出土遺物(2)	68
第62図	第21号溝跡出土遺物(3)	69
第63図	第21号溝跡出土遺物(4)	70
第64図	第21号溝跡出土遺物(5)	71
第65図	第21号溝跡出土遺物(6)	72
第66図	第21・22号溝跡出土遺物(1)	73
第67図	第21・22号溝跡出土遺物(2)	74
第68図	第22号溝跡出土遺物(1)	75
第69図	第22号溝跡出土遺物(2)	76
第70図	第22号溝跡出土遺物(3)	77
第71図	第22号溝跡出土遺物(4)	78
第72図	第22号溝跡出土遺物(5)	79
第73図	第22号溝跡出土遺物(6)	80
第74図	溝跡出土遺物(1)	81
第75図	溝跡出土遺物(2)	82
第76図	溝跡出土遺物(3)	83
第77図	土壌(1)	93
第78図	土壌(2)	94
第79図	土壌(3)	95
第80図	土壌(4)	96
第81図	土壌(5)	97
第82図	土壌(6)	98
第83図	土壌(7)	99
第84図	土壌(8)	100
第85図	土壌(9)	101

第86図	土壌(10)	102
第87図	土壌(11)	103
第88図	土壌(12)	104
第89図	土壌(13)	105
第90図	土壌(14)	106
第91図	土壌(15)	107
第92図	土壌(16)	108
第93図	土壌(17)	109
第94図	土壌(18)	110
第95図	土壌(19)	111
第96図	土壌(20)	112
第97図	土壌出土遺物(1)	113
第98図	土壌出土遺物(2)	114
第99図	第148号土壌出土遺物(1)	115
第100図	第148号土壌出土遺物(2)	116
第101図	第148号土壌出土遺物(3)	117
第102図	第1号柵列跡	119
第103図	第2～4号柵列跡	120
第104図	ビット出土遺物	121
第105図	グリッド出土遺物	123

諏訪南遺跡

第106図	諏訪南遺跡基本土層	125
第107図	諏訪南遺跡全体図	126
第108図	第1号住居跡(1)	128
第109図	第1号住居跡(2)	129
第110図	第1号住居跡(3)	130
第111図	第1号住居跡出土遺物(1)	131
第112図	第1号住居跡出土遺物(2)	132
第113図	第1号住居跡出土遺物(3)	133
第114図	第2号住居跡(1)	135
第115図	第2号住居跡(2)	136
第116図	第2号住居跡出土遺物(1)	136
第117図	第2号住居跡出土遺物(2)	137
第118図	第3号住居跡	138
第119図	第3号住居跡出土遺物	138
第120図	第3号住居跡第1～3号土壌	139
第121図	第3号住居跡第1号土壌	139

第122図	第3号住居跡第2・3号土壌	140
第123図	第3号住居跡第1号土壌出土遺物 (1)	141
第124図	第3号住居跡第1号土壌出土遺物 (2)	142
第125図	第3号住居跡第2号土壌出土遺物 (1)	143
第126図	第3号住居跡第2号土壌出土遺物 (2)	144
第127図	第3号住居跡第2号土壌出土遺物 (3)	146
第128図	第3号住居跡第3号土壌出土遺物 (1)	147
第129図	第3号住居跡第3号土壌出土遺物 (2)	147
第130図	第1号炉跡	147
第131図	第7号土壌	147
第132図	グリッド出土遺物	148
第133図	溝跡 (1)	150
第134図	溝跡 (2)	151
第135図	溝跡出土遺物	152
第136図	第1号畝状遺構・出土遺物	154
第137図	土壌	155
第138図	グリッド出土遺物	156
ニツ家下遺跡		
第139図	ニツ家下遺跡基本土層	157
第140図	ニツ家下遺跡全体図	158
第141図	ニツ家下遺跡分割図 (1)	159
第142図	ニツ家下遺跡分割図 (2)	160
第143図	第1号炉穴	161
第144図	第1・2号土器埋設遺構	162
第145図	土壌 (1)	164
第146図	土壌 (2)	165
第147図	出土遺物 (1)	166
第148図	出土遺物 (2)	166
第149図	第27号土壌	167

第150図	第2号掘立柱建物跡	168
第151図	第3号掘立柱建物跡	169
第152図	第1号井戸跡・出土遺物	170
第153図	溝跡 (1)	171
第154図	溝跡 (2)	172
第155図	溝跡出土遺物 (1)	174
第156図	溝跡出土遺物 (2)	175
第157図	溝跡出土遺物 (3)	176
第158図	溝跡出土遺物 (4)	177
第159図	溝跡出土遺物 (5)	178
第160図	溝跡出土遺物 (6)	179
第161図	溝跡出土遺物 (7)	180
第162図	第1号畝状遺構	184
第163図	第2号畝状遺構	185
第164図	第3号畝状遺構 (1)	186
第165図	第3号畝状遺構 (2)・第4号畝状遺構	187
第166図	畝状遺構出土遺物	187
第167図	第5号畝状遺構	188
第168図	第6・7号畝状遺構	189
第169図	第8～10号畝状遺構	190
第170図	第11～14号畝状遺構	191
第171図	土壌 (1)	194
第172図	土壌 (2)	195
第173図	土壌 (3)	196
第174図	土壌 (4)	197
第175図	土壌 (5)	198
第176図	土壌 (6)	199
第177図	土壌 (7)	200
第178図	土壌 (8)	201
第179図	土壌 (9)	202
第180図	土壌 (10)	203
第181図	土壌出土遺物 (1)	204
第182図	土壌出土遺物 (2)	205
第183図	土壌出土遺物 (3)	206
第184図	ビット・グリッド出土遺物	209

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	7	第22表 第148号土城出土遺物観察表	117
諏訪北Ⅰ遺跡		第23表 第148号土城出土銭貨観察表	118
第2表 地下式城出土遺物観察表	18	第24表 ビット出土遺物観察表	122
第3表 地下式城出土銭貨観察表	18	第25表 ビット出土銭貨観察表	122
第4表 溝跡出土遺物観察表	21	第26表 グリッド出土遺物観察表	124
第5表 土城出土遺物観察表	24	第27表 グリッド出土銭貨観察表	124
第6表 土城出土銭貨観察表	24	諏訪南遺跡	
第7表 土城一覧表	32	第28表 溝跡出土遺物観察表	153
諏訪北Ⅱ遺跡		第29表 第1号畝状遺構出土遺物観察表	155
第8表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表	55	第30表 土城一覧表	155
第9表 第1号火葬跡出土遺物観察表	57	第31表 グリッド出土遺物観察表	156
第10表 井戸跡出土遺物観察表	59	ニツ家下遺跡	
第11表 井戸跡出土銭貨観察表	59	第32表 第1号井戸跡出土遺物観察表	170
第12表 第1・2号溝跡出土遺物観察表	66	第33表 溝跡出土遺物観察表	181
第13表 第21号溝跡出土遺物観察表	83	第34表 溝跡出土銭貨観察表	183
第14表 第21号溝跡出土銭貨観察表	85	第35表 畝状遺構出土遺物観察表	189
第15表 第21・22号溝跡出土遺物観察表	85	第36表 畝状遺構出土銭貨観察表	189
第16表 第22号溝跡出土遺物観察表	86	第37表 土城一覧表	192
第17表 溝跡出土遺物観察表	88	第38表 土城出土遺物観察表	207
第18表 溝跡出土銭貨観察表	89	第39表 土城出土銭貨観察表	208
第19表 土城一覧表	90	第40表 ビット・グリッド出土遺物観察表	209
第20表 土城出土銭貨観察表	113	第41表 グリッド出土銭貨観察表	209
第21表 土城出土遺物観察表	114		

写真図版目次

巻頭図版 1 諏訪南遺跡第1号住居跡出土	5 第1号地下式城(1)
縄文土器	6 第1号地下式城(2)
2 諏訪南遺跡出土縄文土器	7 第2号地下式城(1)
諏訪北Ⅰ遺跡	8 第2号地下式城(2)
図版1 1 諏訪北Ⅰ遺跡(北西から)	図版2 1 第1号竪穴状遺構
2 第1・2次調査区(南から)	2 第2号溝跡
3 第1・2次調査区(北から)	3 第9号土城
4 第1号掘立柱建物跡	4 第15号土城

- 5 第20・26～28・87号土城
 6 第21・22・24号土城
 7 第80号土城
 8 第81号土城
 図版3 1 土城・グリッド (第8図1～37)
 2 グリッド (第8図38)
 3 第1・2号地下式城
 (第10図1～3・8・9)
 4 第1号溝跡 (第15図1・2)
 5 第1・2号地下式城 (第10図5～7)

諏訪北Ⅱ遺跡

- 図版4 1 諏訪北Ⅱ遺跡 (西から)
 2 第1次調査区 (西から)
 3 第2次調査区 (西から)
 4 第3次調査区 (西から)
 5 諏訪北Ⅱ遺跡全景 (合成)

- 図版5 1 第1次調査区 (1)
 2 第1次調査区 (2)
 3 第1次調査区 (3)
 4 第1次調査区 (4)
 5 第2次調査区 (1)
 6 第2次調査区 (2)
 7 第3次調査区 (1)
 8 第3次調査区 (2)

- 図版6 1 第3号住居跡
 2 第3号住居跡第1・2号土城
 3 第3号住居跡第1号土城
 遺物出土状況 (1)
 4 第3号住居跡第1号土城
 遺物出土状況 (2)
 5 第4号住居跡
 6 第4号住居跡炉跡 (1)
 7 第4号住居跡炉跡 (2)
 8 第4号住居跡炉跡 (3)

- 図版7 1 第1号竪穴状遺構
 2 第4号竪穴状遺構
 3 第1号埋甕

- 4 第20号土城
 5 第144号土城
 6 第161号土城 (1)
 7 第161号土城 (2)
 8 第230号土城
 図版8 1 第1号掘立柱建物跡
 2 第6号掘立柱建物跡
 3 第3号竪穴状遺構
 4 第1号火葬跡
 5 第1号井戸跡・第73号土城
 6 第3号井戸跡
 7 第4号井戸跡
 8 第1号炉跡

- 図版9 1 第1号溝跡 (第21号溝跡)
 2 第7号溝跡
 3 第18・19号溝跡
 4 第20号溝跡
 5 第21・22号溝跡
 6 第22号溝跡
 図版10 1 第21号溝跡 (1)
 2 第21号溝跡 (2)
 3 第21号溝跡 (3)
 4 第21号溝跡 (4)
 5 第23号溝跡 (1)
 6 第23号溝跡 (2)
 7 第24号溝跡

- 図版11 1 第25・26号溝跡 (1)
 2 第25・26号溝跡 (2)
 3 第27号溝跡
 4 第28号溝跡
 5 第28・29号溝跡
 6 第29号溝跡
 7 第30・31号溝跡
 8 第30号溝跡

- 図版12 1 第31号溝跡
 2 第32号溝跡
 3 第33号溝跡

	4	第34号溝跡	図版17	1	第84～86号土壇
	5	第36号溝跡		2	第93号土壇
	6	第41号溝跡		3	第95～97号土壇
	7	第42号溝跡		4	第117号土壇
	8	第43号溝跡		5	第133号土壇
図版13	1	第43・51号溝跡		6	第147号土壇
	2	第46号溝跡		7	第148号土壇
	3	第52号溝跡		8	第193号土壇
	4	第58・59号溝跡(1)	図版18	1	第201号土壇
	5	第58・59号溝跡(2)		2	第203号土壇
	6	第61号溝跡		3	第213～215号土壇
	7	第60・61号溝跡		4	第216・217号土壇
	8	第63・65・66号溝跡		5	第228・229号土壇
図版14	1	第64号溝跡		6	第232～236号土壇
	2	第67号溝跡		7	第244～249号土壇
	3	第68号溝跡		8	第253～257号土壇
	4	第69号溝跡	図版19	1	第3号住居跡第1号土壇 (第42図1)
	5	第70号溝跡		2	第4号住居跡(第42図2)
	6	第76号溝跡		3	グリッド(第43図36)
	7	第77号溝跡・第262号土壇		4	第1号埋甕(第42図3)
	8	第79号溝跡		5	グリッド(第44図37・38)
図版15	1	第1号土壇		6	第3・4号住居跡・第1号埋甕・ グリッド(第43図4～21・33)
	2	第2号土壇	図版20	1	グリッド(第43図22～32・34・35)
	3	第3号土壇		2	グリッド(第44図39～48)
	4	第15号土壇		3	第21号溝跡 (第60図14・16～23 第61図24)
	5	第16号土壇	図版21	1	第21号溝跡(第60・61図)
	6	第17号土壇		2	第21号溝跡(第62図33・34)
	7	第17号土壇遺物出土状況		3	青磁(第60・74・98・105図)
	8	第31号土壇	図版22	1	第1号火葬跡(第50図1)
図版16	1	第34号土壇		2	第21・22号溝跡(第66図1)
	2	第40号土壇		3	第21・22号溝跡(第66図2)
	3	第41号土壇		4	第21・22号溝跡(第66図4)
	4	第58・59号土壇		5	第21・22号溝跡(第66図6)
	5	第61号土壇		6	第21・22号溝跡(第66図7)
	6	第69号土壇			
	7	第71号土壇			
	8	第79号土壇			

	7	第21・22号溝跡 (第66図8)
	8	第21・22号溝跡 (第66図9)
	9	第21・22号溝跡 (第66図10)
	10	第21・22号溝跡 (第66図12)
図版23	1	第21・22号溝跡 (第66図13)
	2	第21・22号溝跡 (第66図14)
	3	第21・22号溝跡 (第66図15)
	4	第21・22号溝跡 (第66図18)
	5	第21・22号溝跡 (第66図19)
	6	第21・22号溝跡 (第66図20)
	7	第21・22号溝跡 (第67図21)
	8	第21・22号溝跡 (第67図24)
	9	第21・22号溝跡 (第67図26)
	10	第21・22号溝跡 (第67図28)
図版24	1	第22号溝跡 (第68図9)
	2	第22号溝跡 (第68図10)
	3	第22号溝跡 (第68図11)
	4	第22号溝跡 (第68図18)
	5	第22号溝跡 (第68図20)
	6	第148号土壇 (第99図1)
	7	第148号土壇 (第99図2)
	8	第148号土壇 (第99図3)
	9	第148号土壇 (第99図4)
	10	第148号土壇 (第99図5)
図版25	1	第148号土壇 (第99図6)
	2	第148号土壇 (第99図7)
	3	第148号土壇 (第99図8)
	4	第148号土壇 (第99図10)
	5	第148号土壇 (第99図11)
	6	第148号土壇 (第99図12)
	7	第148号土壇 (第99図13)
	8	第148号土壇 (第100図14)
	9	第148号土壇 (第100図15)
	10	第148号土壇 (第100図16)
図版26	1	第148号土壇 (第100図17)
	2	第148号土壇 (第100図18)
	3	第148号土壇 (第100図19)

	4	第148号土壇 (第100図21)
	5	第148号土壇 (第100図23)
	6	第148号土壇 (第101図25)
	7	第148号土壇 (第101図26)
	8	第148号土壇 (第101図27)
図版27	1	第148号土壇 (第100図24)
	2	土製品 (第98・105図)
	3	第22号溝跡 (第69図33～35)
	4	煙管 (第101・104図)
	5	第21号溝跡 (第63図44)
	6	第21号溝跡 (第62図36～39)
	7	第70号溝跡 (第76図42～44)
	8	グリッド (第105図6)
図版28	1	第21号溝跡 (第64図56)
	2	第21号溝跡 (第64図57)
	3	第21号溝跡 (第65図58)
	4	第22号溝跡 (第70図36)
	5	第22号溝跡 (第70図41)
	6	第22号溝跡 (第71図42)
	7	第148号土壇 (第101図33)

諏訪南遺跡

図版29	1	諏訪南遺跡・大平遺跡
	2	第1次調査区 (東から)
	3	第1次調査区 (南東から)
	4	第1次調査区 (南から)
	5	諏訪南遺跡・諏訪北Ⅱ遺跡
	6	第2次調査区 (西から)
	7	第2次調査区 (北から)
	8	第1号住居跡
図版30	1	第1号住居跡遺物出土状況 (1)
	2	第1号住居跡遺物出土状況 (2)
	3	第1号住居跡炉跡
	4	第1号住居跡炉跡遺物出土状況 (1)
	5	第1号住居跡炉跡遺物出土状況 (2)
	6	第2号住居跡

	7	第2号住居跡第1・2号炉跡	(第125図4)	
	8	第2号住居跡第1号炉跡	6	第3号住居跡第2号土壇
図版31	1	第2号住居跡第2号炉跡(1)	(第127図32)	
	2	第2号住居跡第2号炉跡(2)	7	第3号住居跡第3号土壇
	3	第3号住居跡	(第128図1)	
	4	第3号住居跡遺物出土状況(1)	8	第3号住居跡第3号土壇
	5	第3号住居跡遺物出土状況(2)	(第128図2)	
	6	第3号住居跡第1号土壇遺物	9	第1号住居跡(第113図46・47)
		出土状況	図版35	1 第1号住居跡(第112図3～28)
	7	第3号住居跡第2・3号土壇遺物	2	第1号住居跡(第112図29～45)
		出土状況	3	第1号住居跡(第113図48～54)
	8	第7号土壇	図版36	1 第2・3号住居跡(第117・119図)
図版32	1	第1・2号溝跡	2	第3号住居跡第1号土壇
	2	第3号溝跡	(第124図2～7)	
	3	第3号溝跡遺物出土状況	3	第3号住居跡第1号土壇
	4	第4号溝跡	(第124図8・9)	
	5	第5・6号溝跡	図版37	1 第3号住居跡第2号土壇
	6	第11・12号溝跡	(第126図7～17)	
	7	第1号畝状遺構	2	第3号住居跡第2号土壇
	8	第1号土壇	(第126図18～28)	
図版33	1	第1号住居跡(第111図1)	3	第3号住居跡第2号土壇
	2	第1号住居跡(第111図2)	(第127図29～31・33～36)	
	3	第2号住居跡(第116図1)	図版38	1 第3号住居跡第3号土壇
	4	第2号住居跡(第116図2)	(第129図3～5)	
	5	第3号住居跡第1号土壇	2	グリッド(第132図1～14)
		(第123図1)	3	第3号住居跡第2号土壇・グリッド
	6	第3号住居跡第2号土壇	(第127・132図)	
		(第125図1)	図版39	1 第3号溝跡(第135図1)
図版34	1	第3号住居跡第2号土壇	2	第3・4号溝跡(第135図2～9)
		(第125図2)	3	第7・11・13号溝跡
	2	第3号住居跡第2号土壇	(第135図10～13・15・16・19)	
		(第125図3)	4	第11・12号溝跡(第135図17・18)
	3	第3号住居跡第2号土壇	5	第7号溝跡(第135図14)
		(第125図5)	6	第1号畝状遺構(第136図1)
	4	第3号住居跡第2号土壇	7	グリッド(第138図1)
		(第125図6)	8	グリッド(第138図5)
	5	第3号住居跡第2号土壇	9	グリッド(第138図3・4)

10 グリッド (第138図6～8)

ニツ家下遺跡

- 図版40 1 ニツ家下遺跡 (西から)
 2 第1次調査区 (北から)
 3 第1次調査区 (1)
 4 第1次調査区 (2)
 5 ニツ家下遺跡 (東から)
 6 第2次調査区 (南から)
 7 第2次調査区 (1)
 8 第2次調査区 (2)
- 図版41 1 第1号竈穴・第40号土壇
 2 第1号竈穴
 3 第1号土器埋設遺構 (1)
 4 第1号土器埋設遺構 (2)
 5 第2号土器埋設遺構 (1)
 6 第2号土器埋設遺構 (2)
 7 第31・41号土壇
 8 第41号土壇
- 図版42 1 第43号土壇
 2 第45号土壇
 3 第46号土壇
 4 第49号土壇
 5 第50号土壇
 6 第51号土壇
 7 第53号土壇
 8 第54号土壇
- 図版43 1 第27号土壇 (1)
 2 第27号土壇 (2)
 3 第27号土壇 (3)
 4 第2号掘立柱建物跡
 5 第3号掘立柱建物跡
 6 第1・2号溝跡
 7 第3～6号溝跡
 8 第10号溝跡
- 図版44 1 第16号溝跡 (1)
 2 第16号溝跡 (2)
 3 第16号溝跡 (3)

- 4 第1・2号畝状遺構
 5 第2号畝状遺構
 6 第3号畝状遺構 (1)
 7 第3号畝状遺構 (2)
 8 第5号畝状遺構
- 図版45 1 第6・7号畝状遺構
 2 第10号畝状遺構
 3 第11号畝状遺構
 4 第1号土壇
 5 第2号土壇
 6 第3号土壇
 7 第4号土壇
 8 第5号土壇
- 図版46 1 第7号土壇
 2 第8号土壇
 3 第9号土壇
 4 第10号土壇
 5 第12号土壇
 6 第13号土壇
 7 第15号土壇
 8 第16号土壇
- 図版47 1 第17・18号土壇
 2 第19号土壇
 3 第21号土壇
 4 第26号土壇
 5 第28号土壇
 6 第29号土壇
 7 第30号土壇
 8 第32号土壇
- 図版48 1 第33～35号土壇
 2 第36号土壇
 3 第37号土壇
 4 第38号土壇
 5 第39号土壇
 6 第42号土壇
 7 第44号土壇
 8 第47号土壇

図版49	1 第52号土壌	4 第10号溝跡 (第155図17)
	2 第55～57号土壌	5 第10号溝跡 (第155図20)
	3 第59・60号土壌	6 第16号溝跡 (第157図43)
	4 第66～68・94号土壌	7 第16号溝跡 (第157図45)
	5 第1号井戸跡・第81・82号土壌	8 第2号畝状遺構 (第166図3)
	6 第94号土壌漆碗出土状況 (1)	9 第72号土壌 (第181図5)
	7 第94号土壌漆碗出土状況 (2)	10 第72号土壌 (第181図8)
	8 第103号土壌	図版52 1 第81号土壌 (第182図17)
図版50	1 第1号土器埋設遺構 (第147図1)	2 第81号土壌 (第182図19)
	2 グリッド (第147図2)	3 第81号土壌 (第182図25)
	3 第1・2号土器埋設遺構・グリッド (第148図3～17)	4 第82号土壌 (第183図39)
	4 グリッド (第148図18)	5 第103号土壌 (第183図45)
	5 第10号溝跡 (第156図38)	6 グリッド (第184図3)
	6 第16号溝跡 (第157図48)	7 グリッド (第184図4)
	7 第81号溝跡 (第183図38)	8 第16号溝跡 (第159図78～80)
	8 グリッド (第184図8)	9 第16号溝跡 (第159図81)
図版51	1 第10号溝跡 (第155図8)	図版53 1 埴塙 (第155・157・181・184図)
	2 第10号溝跡 (第155図11)	2 銅製品 (第156・157・181・183図)
	3 第10号溝跡 (第155図12)	3 砥石 (第152・156・182～184図)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

平成24年度から28年度の埼玉県の新5か年計画「埼玉県5か年計画—安心・成長・自立自尊の埼玉へ—」において「埼玉の成長を支える社会基盤を作る」という基本目標が掲げられている。このような中で、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道は県内を東西に結ぶ大動脈として完成が望まれている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、首都圏中央連絡自動車道建設に係る埋蔵文化財の保護について、昭和62年の入間・狭山・日高地区を皮切りに現在まで国土交通省などとの関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

さて、本書で報告される箇所については、工事計画に先立ち建設省関東地方建設局大宮国道事務所長（当時）より埼玉県教育委員会教育長あて平成10年11月10日付け大宮調二第30号で工事予定地内の埋蔵文化財の所在の有無と取り扱いについて照会があった。

埼玉県教育委員会では平成11年1月14日付け教文第1244号で埋蔵文化財の所在と工事予定地内の試掘調査が必要な範囲について回答した。平成18年度から20年度にかけて試掘調査を実施し、その結果をもとに発掘調査が必要である旨を国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長あて以下の通り回答した。

・諏訪北Ⅰ遺跡

平成19年2月22日付け教生文第2492号

・諏訪北Ⅱ遺跡

平成19年10月5日付け教生文第1512-1号

平成23年3月2日付け教生文第2117号

・諏訪南遺跡

平成19年2月22日付け教生文第2492号

平成23年3月2日付け教生文第2117号

・二ツ家下遺跡

平成21年2月12日付け教生文第2369号

平成23年3月2日付け教生文第2117号

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（現在は公益財団法人）と国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、生涯学習文化財課の三者により調査の方法等の問題を中心に協議が行われた。

文化財保護法第94条第1項の規定による埋蔵文化財発掘通知は国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長から提出され、第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され発掘調査が実施された。

発掘調査に係る通知は以下の通りである。

・諏訪北Ⅰ遺跡

平成19年2月28日付け教生文第2-96号

平成19年4月12日付け教生文第2-5号

・諏訪北Ⅱ遺跡

平成21年5月13日付け教生文第2-7号

平成21年11月16日付け教生文第2-49号

平成23年7月8日付け教生文第2-25号

・諏訪南遺跡

平成20年5月29日付け教生文第2-13号

平成23年7月19日付け教生文第2-27号

・二ツ家下遺跡

平成21年7月7日付け教生文第2-19号

平成23年4月14日付け教生文第2-6号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

諏訪北Ⅰ遺跡（第1・2次）・諏訪北Ⅱ遺跡（第1～3次）・諏訪南遺跡（第1・2次）・二ツ家下遺跡（第1・2次）の発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う桶川北本地区埋蔵文化財発掘調査に先立ち、平成18年度から21・23年度にかけて実施した。

・諏訪北Ⅰ遺跡

発掘調査は、平成18年度から19年度にかけて、第1次調査と第2次調査に分けて実施した。調査面積は2,210㎡である。

第1次調査は平成19年3月1日から3月31日まで行い、引き続き第2次調査を平成19年4月9日から4月30日まで実施した。3月上旬に発掘事務所の設営と並行して、調査区の保護と安全確保のため囲柵工事を行い、重機による表土除去を開始した。その後、人力による遺構確認作業に着手し、縄文時代の土壌、中・近世の地下式竈、溝跡、土壌などを検出した。遺構について順次、土層断面図・遺構平面図・遺物出土状況図等の作成、写真撮影を行い、精査・記録作業を実施した。

第2次調査は、第1次調査で未着手であった遺構の精査を継続し、4月下旬に空中写真撮影を実施した。遺構調査を終了した後、旧石器時代の確認調査を行い、4月末に調査を終了した。

・諏訪北Ⅱ遺跡

発掘調査は、平成21年度に第1次調査と第2次調査を実施した。また、平成23年度に第1・2次調査区に囲まれL字形に残されていた調査対象範囲を第3次調査として調査した。調査面積は第1次調査11,843㎡、第2次調査4,091㎡、第3次調査1,458㎡、総面積17,392㎡である。

平成21年度の調査は、工事工程の変更により第1次調査終了後、引き続き第2次調査を実施した。調査期間は、第1次調査が平成21年4月8日から平成21年10月31日まで、第2次調査が平成21年11

月1日から平成22年1月29日までである。

第1次調査は、4月上旬に発掘事務所の設営、調査区の囲柵工事を実施し、4月中旬から重機による表土掘削を開始した。人力による遺構確認作業を進め、縄文時代の住居跡、土壌、中・近世の掘立柱建物跡、溝跡などの数多くの遺構を検出した。調査面積が広いと、調査の進捗に合わせ6月下旬と10月上旬の二回に分けて遺跡全体を航空機による空中写真撮影を実施した。10月下旬までに調査対象範囲の遺構の精査・記録作業を概ね終了し、引き続き第2次調査を行った。

第2次調査は、第1次調査区の南隣りの工事用残土置場にあたり、残土搬出後10月下旬から重機による表土除去を開始した。第1次調査区から続く、館跡を区画する堀跡などが検出された。調査は順調に推移し、12月中旬に空中写真撮影を行い、12月下旬までに遺構精査・記録作業を終了した。12月末に遺物・器材等の撤収、囲柵・発掘事務所等の撤去を行い、翌平成22年1月には事務処理等を実施した。

第3次調査は、平成23年7月1日から平成23年8月31日までの2箇月間、南に隣接する諏訪南遺跡第2次調査と並行して調査を実施した。7月上旬に重機による表土除去を行い、7月中旬に基準点測量及び基準杭の打設を実施した。8月中旬までに精査・記録作業を終了し、8月下旬に空中写真撮影を行い、8月末に調査を終了した。

・諏訪南遺跡

発掘調査は、平成20年度に第1次調査、平成23年度に第2次調査を実施した。調査面積は第1次調査1,389㎡、第2次調査1,531㎡、総面積2,920㎡である。

第1次調査は平成20年5月1日から6月30日まで行い、諏訪南遺跡の南に隣接する大平遺跡第2次調査と合わせて調査を進めた。5月上旬から発掘事務所の設営と囲柵工事を行い、5月中旬から

重機による表土除去を開始した。調査区内は擾乱が激しかったが、縄文時代中期の住居跡や近世の溝跡、土壌などを検出した。6月下旬に空中写真撮影を実施し、6月末に調査を終了した。

第2次調査は平成23年7月1日から8月31日まで実施した。第1次調査区の北隣にあたり、検出された遺構は第1次調査区同様、縄文時代中期の住居跡や近世の溝跡が中心であった。7月上旬から表土除去を開始し、並行して人力による遺構の確認作業を実施した。遺構は順次、土層断面図・遺構平面図・遺物出土状況図などを作成のうえ、写真撮影を行った。8月下旬までに精査・記録作業を終え、調査を終了した。

・二ツ家下遺跡

発掘調査は、平成21年度に第1次調査、平成23年度に第2次調査を実施した。調査面積は第1次調査2,114㎡、第2次調査4,381㎡、総面積6,495㎡である。

第1次調査は、平成21年7月1日から平成21年8月31日まで実施した。7月初旬に発掘事務所の設営と囲柵工事を行い、重機による表土除去に着手した。並行して人力による遺構確認作業を行い、近世の溝跡、畝状遺構、土壌などを検出した。順次、土層断面図・平面図・遺物出土状況図などを作成し、写真撮影を行った。8月中旬に空中写真撮影を実施し、8月下旬までに精査・記録作業を終了した。8月末に遺物・器材の撤収、発掘事務所の撤去を行い、調査を終了した。

第2次調査は、平成23年4月8日から平成23年6月30日まで実施した。平成21年度に調査を実施した第1次調査区の東隣にあたり、調査区の北東端は旧中山道に続いている。4月上旬に重機による表土除去を開始し、並行して人力による遺構確認作業を行った。第1次調査区と同様、近世の掘立柱建物跡、溝跡、畝状遺構などを検出した。遺構の精査・記録作業を進め、6月中旬に空中写真撮影を実施した。6月下旬に重機により調査区を埋戻し、6月末に調査を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書の作成作業は、平成25年4月8日から平成26年2月28日まで実施した。

4月から出土遺物の水洗・注記を行い、出土土器の接合、石膏による補強復元を実施した。復元を終えた土器は、順次機械や手測りによる実測・手描きトレース・採拓を行った。同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図などの照合・修正を行い、第二原図を作成した。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレース、土層説明等のデータを組み込み、レイアウトして印刷用の図版を作成した。

12月上旬から1月下旬にかけて遺構・遺物図版の割り付け、遺物の写真撮影と写真図版の作成を行うとともに、原稿執筆と編集作業を行った。2月上旬に原稿を印刷業者に入稿し、3回の校正を経て、平成26年3月25日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成18年度（発掘調査）

理事長	福田 陽 充
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一
総務部	
総務部副部長	昼 間 孝 志
総務課長	高 橋 義 和

調査部

調査部長	今 泉 泰 之
調査部副部長	小 野 美代子
主幹兼調査第一課長	金 子 直 行
主 査	吉 田 稔
主 事	宅 間 清 公

平成19年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一
総務部	
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 課 長	松 盛 孝

調査部

調 査 部 長	村 田 健 二
調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
調査監兼調査第一課長	金 子 直 行
主 任	渡 辺 清 志
主 事	坂 田 敏 行

平成20年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆
総務部	
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 課 長	松 盛 孝

調査部

調 査 部 長	村 田 健 二
調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
調査監兼調査第一課長	金 子 直 行
主 任	木 戸 春 夫
主 事	植 田 雄 己

平成21年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆
総務部	
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 課 長	田 中 雅 人

調査部

調 査 部 長	小 野 美代子
調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
調査監兼調査第一課長	金 子 直 行
主 査	黒 坂 禎 二
主 査	吉 田 稔
主 査	渡 辺 清 志
主 事	矢 部 瞳

平成23年度（発掘調査）

理 事 長	藤 野 龍 宏
常務理事兼総務部長	根 本 勝
総務部	
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行
総 務 課 長	矢 島 将 和

調査部

調 査 部 長	小 野 美代子
調 査 部 副 部 長	鯛 持 和 夫
主幹兼調査第二課長	瀧 瀬 芳 之
主 査	西 井 幸 雄
主 査	岩 瀬 謙 一
主 事	吉 田 幸 一

平成25年度（報告書作成）

理 事 長	中 村 英 樹
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎
総務部	
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 課 長	藤 倉 英 明

調査部

調 査 部 長	昼 間 孝 志
調 査 部 副 部 長	鯛 持 和 夫
主幹兼整理第二課長	大 谷 徹
主 事	矢 部 瞳

2. 歴史的環境

旧石器時代

遺跡群の周辺には旧石器時代の遺跡は多くない。石川堀左岸の桶川市狐塚遺跡(25)から尖頭器やナイフ形石器が出土しているほか、同じ石川堀最奥部の桶川市大沼遺跡(6)では大型の槍先形尖頭器の採集や、剥片類の出土があった。

江川流域では桶川市高井東遺跡(18)や諏訪野遺跡(5)等で旧石器時代の遺物が出土している。

赤堀川支流の北本市提灯木山遺跡(34)では、立川ローム層第IV層下部で検出された礫群とともに、4箇所で石器集中区が検出され、ナイフ形石器と多量の角錐状石器が出土している。また、綾瀬川源流部に近い桶川市本村遺跡でも石器集中区が調査されている。

縄文時代

縄文時代早期では、荒川本流に面した桶川市西台遺跡(8)や石川堀最奥部の大平遺跡(7)で捻系文土器が、江川中流左岸の桶川市愛宕遺跡(19)や高井遺跡(21)で有舌尖頭器が出土している。

早期後葉では、江川下流右岸の桶川市楽中遺跡(31)で竈穴群が調査されたほか、石川堀左岸の桶川市小在家遺跡(26)や荒川本流側の北本市宮岡Ⅱ遺跡(51)で条痕文土器が出土している。江川上流域には、かつて荒川最奥の貝塚である桶川市谷津貝塚(62)が所在していた。

前期に入ると江川流域を中心に遺跡数が著しく増加する。中流の桶川市滝の宮坂遺跡(24)で前期初頭の花積下層式期の住居跡が調査され、やや下流の後山遺跡(68)では関山式土器が出土している。上流域の北本市域にも向郷遺跡(61)・氷川神社北遺跡(57)・両大師裏遺跡(52)・東谷足Ⅱ遺跡(43)・東谷足Ⅲ遺跡(42)等、多くの遺跡が分布しており、この時期に江川の谷奥部における縄文人の活動が活発化したことが窺われる。

石川堀流域では大平遺跡で前期の住居跡が調査

されているほか、荒川本流側の桶川市前原遺跡(9)で前期末の甕割り葬とみられる例が報告されている。

注目されるのは、荒川本流沿いの低地でも遺跡の存在が明らかになったことである。川島町東野遺跡(77)や芝沼堤外遺跡(73)では現地表下約5mから前期後葉～末葉の住居跡が発見され、当時の地形や集落立地を復元する上で貴重な資料を提供している。

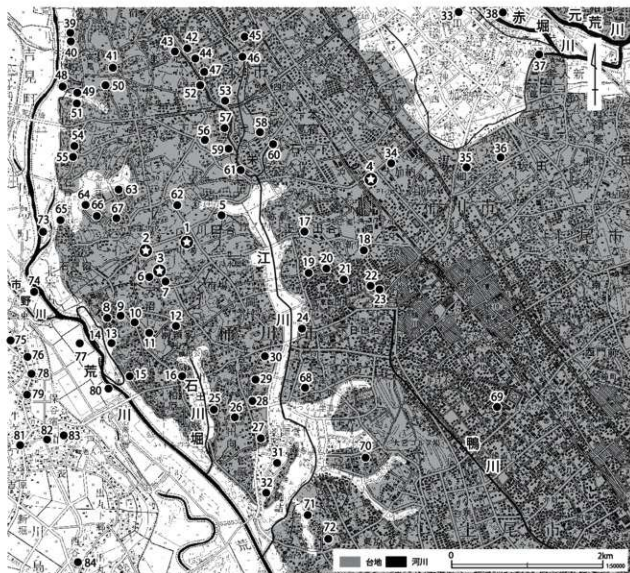
中期の集落は前期に引き続き、江川・石川堀及びその支谷の奥に集中している。江川中流部の川田谷・上日出谷地区周辺ではいくつかの支谷が合流して広い沖積地を形成しているが、ここには桶川市諏訪野遺跡・高井遺跡、北本市デーノタメ遺跡(60)等の大宮台地西部でも屈指の環状集落が集中する。いずれも中期中葉から後葉にかけて営まれたもので、江川の本流からやや奥まった支谷沿いに立地する。こうした大規模集落を取り巻く小規模集落として桶川市諏訪南遺跡(3)・諏訪北Ⅱ遺跡(2)等は出現している。

下流の荒川との合流点付近には上尾市中井遺跡(71)が存在している。これまでに60軒以上の住居跡が検出されており、中流部の諸遺跡とも有機的な関連をもつと考えられる。

赤堀川支流では加納地区に中規模の集落である桶川市ふじ山遺跡(35)、同じ支流の上流には中期末葉～後期初頭の集落である提灯木山遺跡が存在している。

後期に入ると他地域と同様、桶川市周辺も遺跡数の減少が著しい。大規模環状集落は姿を消し、周辺地域に数軒単位の小規模な集落が営まれるようになる。提灯木山遺跡や石川堀の谷奥の桶川市前領家遺跡(12)はその代表例といえる。

後期中葉以降、ふたたび拠点的な大集落が営まれるようになり、その多くは晩期中葉まで継続する。赤堀川流域の桶川市後谷遺跡(33)は中期か



第2図 周辺の道跡

第1表 周辺の道跡一覧表

1 諏訪北Ⅰ道跡	2 諏訪北Ⅱ道跡	3 諏訪南道跡	4 ニツ木下道跡	5 諏訪野道跡	6 大沼道跡
7 大平道跡	8 西台道跡	9 前原道跡	10 中台Ⅱ道跡	11 永久保道跡	12 前田家道跡
13 原山古墳群	14 荒川河床内道跡	15 東台道跡	16 三ツ木城跡	17 愛宕西道跡	18 高井東道跡
19 愛宕道跡	20 高井北道跡	21 高井道跡	22 高井泥炭層道跡	23 高井南道跡	24 縄の宮坂道跡
25 孤塚道跡	26 小在家道跡	27 薬師堂道跡	28 桑上道跡	29 砂ヶ谷戸Ⅱ道跡	30 砂ヶ谷戸Ⅰ道跡
31 家中道跡	32 熊野神社古墳	33 後谷道跡	34 提灯木山道跡	35 ふじ山道跡	36 堀の内道跡
37 宮ノ脇道跡	38 加納城跡	39 高尾白山古墳	40 中井1号古墳	41 高尾道跡	42 東谷足田道跡
43 東谷足Ⅱ道跡	44 東谷足Ⅰ道跡	45 北本宿道跡	46 下石戸下道跡	47 勝林山中道跡	48 独木舟出土地点
49 宮岡Ⅰ道跡	50 宮岡水川神社道跡	51 宮岡Ⅱ道跡	52 両大師裏道跡	53 勝林道跡	54 市場Ⅰ道跡
55 間尾坂道跡	56 月夜道跡	57 水川神社北道跡	58 台原道跡	59 大蔵寺裏道跡	60 デーノタメ道跡
61 向郷道跡	62 谷津貝塚	63 八重塚道跡	64 諏訪山北道跡	65 石戸城跡	66 諏訪山南道跡
67 堀ノ内館跡	68 後山道跡	69 中裏三丁目道跡	70 小谷津道跡	71 中井道跡	72 石神道跡
73 芝沼場外道跡	74 荒川河床市野川合流地点	75 尾崎道跡	76 富士浅間塚古墳	77 東野道跡	78 愛宕塚道跡
79 元宿道跡	80 荒川河床太郎衛門墓付近	81 養竹寺院内古墳	82 廣徳寺古墳	83 廣徳寺道跡	84 西谷道跡

ら晩期の遺構が発見されているが、低地部では多量の土器や、土偶をはじめ、弓、石斧の柄、編物等の木製品、獣骨等の自然遺物も多く出土しており、後晩期の生業を推測させる貴重な遺跡となっている。

江川の支谷奥の台地上には学史的に著名な桶川市高井東遺跡があり、近隣の低地部には高井泥炭層遺跡(22)が存在する。

荒川本流沿いには北本市宮岡水川神社遺跡(50)がある。発掘調査によって土製品や石製品が多量に出土し、周辺の地形からは環状盛土遺構の存在が推定されている。

弥生時代

弥生時代の遺跡の大半は後期から営まれる。特に江川中流右岸の台地肩部に集中しており、住居跡と方形周溝墓が発見された桶川市砂ヶ谷Ⅱ遺跡(29)、弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡である桶川市栗上遺跡(28)等が点在する。江川上流では谷奥の桶川市丸山遺跡、左岸側の上日出谷地区には桶川市愛宕西遺跡(17)が分布する。

古墳時代

古墳時代前期の遺跡は、荒川・江川・元荒川に面した台地縁辺部に点在しているほか、荒川低地の自然堤防上には川島町元宿遺跡(79)・尾崎遺跡(75)・西谷遺跡(84)・富田後遺跡等がみられ、低地部の開発が大きく進展したことを窺わせる。

中期になると低地部の遺跡は減少し、江川や石川堀等の谷沿いに集落が集中するようになる。桶川市愛宕遺跡・愛宕耕地遺跡・高井遺跡・宮遺跡・狐塚遺跡等が代表的な遺跡である。

後期には台地部でも桶川市八幡耕地遺跡、北本市夷塚遺跡など遺跡が増加する一方、荒川本流沿いの低地部にも再び集落が営まれるようになる。

江川と荒川の合流点に位置する桶川市熊野神社古墳(32)は4世紀中葉の築造とされ、大宮台地周辺における代表的な前期古墳である。

荒川沿いの台地縁辺部には後期古墳が数多く分

布し、川田谷古墳群と呼ばれている。支群の一つである桶川市原山古墳群(13)は、6世紀後半から7世紀にかけて営まれた群集墳として知られる。また、荒川の低地部には川島町廣徳寺古墳(82)をはじめ、富士浅間塚古墳(76)・養竹寺院内古墳(81)が現存するほか、富田後遺跡では埴輪を有する古墳跡を発見している。

奈良・平安時代

赤堀川流域の桶川市宮ノ脇遺跡(37)は奈良時代の小鍛冶工房を伴う集落跡が発見されたことで知られている。石川堀谷奥部の前領家遺跡でも鍛冶炉を伴う平安時代の集落跡が調査され、鉄滓や金属製品が出土している。

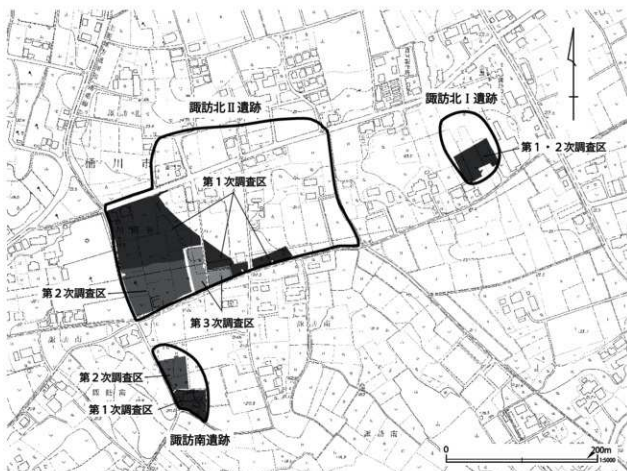
江川流域では上尾市石神遺跡(72)等から奈良・平安時代の集落が発見されているほか、荒川本流沿いの谷の周辺及び斜面部にも該期の集落跡が分布している。

中・近世

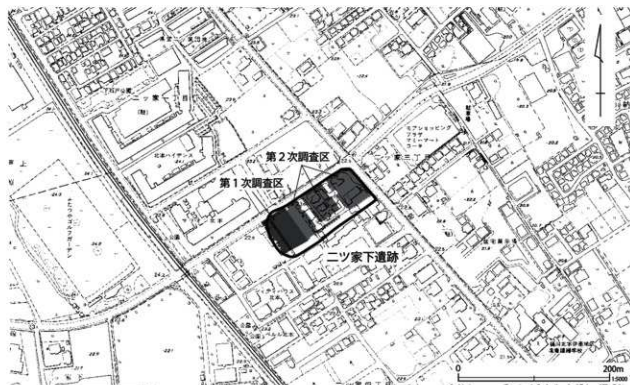
桶川市諏訪北Ⅱ遺跡(2)では中世の大規模な薬研堀が検出されたが、周辺には平安～鎌倉時代の居館跡とされる北本市堀之内館跡(67)をはじめ、二重に土塁を巡らした桶川市三ツ木城跡(16)、戦国期に岩附太田氏の支城であった北本市石戸城跡(65)、桶川市加納城跡(38)等が存在する。

上尾市石神遺跡では中世の火葬墓、桶川市諏訪北Ⅰ遺跡(1)・薬師堂遺跡(27)では中世の地下式塋を検出している。北本市石戸宿の諏訪山南遺跡(66)では地下式塋に加え、中世の竪穴状遺構から金泥や朱による荘厳を施した木板が出土しており注目される。

近世になると北本市石戸宿から桶川市川田谷周辺は、石戸領五千石を領した旗本牧野氏の支配下に置かれ、大平遺跡からは牧野氏の屋敷に関連する遺構を発見している。一方、旧中山道沿いの北本市二ツ家下遺跡(4)では、街道に直交ないし並行する区画溝や畠跡だけでなく、屋敷地の一部を検出している。



第3図 諏訪北Ⅰ・Ⅱ遺跡・諏訪南遺跡位置図



第4図 ニツ家下遺跡位置図

Ⅲ 諏訪北Ⅰ遺跡の調査

1. 遺跡の概要

諏訪北Ⅰ遺跡は、桶川市川田谷字諏訪北に所在し、JR高崎線桶川駅の西方約3.5kmに位置する。遺跡の西方約2kmを南流する荒川と、その支流である江川に挟まれた標高約23mの台地のほぼ中央に立地する。

調査地点から北東へ約50mには、江戸時代の石戸領総鎮守である諏訪神社が鎮座する。天正19(1591)年に朱印状を受けたことが『新編武蔵風土記稿』にみられる。また、諏訪北Ⅱ遺跡とは西に約350m、諏訪南遺跡とは南西に約450mをそれぞれ隔てている。遺跡の広がりには南北約100m、東西約70mで、調査地点は遺跡の南半分にあたる。調査区は長さ約52m、幅約42mの長方形で、調査面積は2,210㎡である。西に位置する諏訪北Ⅱ遺跡との間には南から浅い埋没谷が入り込み、地形的に隔てられている。

諏訪北Ⅰ遺跡の調査では、縄文時代の土壌9基、中・近世の掘立柱建物跡1棟、地下式竈2基、竪穴状遺構1基、溝跡2条、土壌79基、ピット73基を検出した(第6図)。

縄文時代の遺構は、調査区中央の西寄りから南側にかけて土壌9基を検出した。遺物を出土したものは少ないが、中期後半の土器片が出土している。遺構外ではあるが、前期(諸磯式)、中期(加曾利EⅢ式・加曾利EⅣ式)、後期(堀之内Ⅰ式)、晩期前葉の土器片と打製石斧が出土した。

中・近世の遺構は、調査区の東と西の両端に、それぞれ軸を揃えて南北に走行する2条の溝跡によって挟まれた空間地に、掘立柱建物跡、地下式竈、竪穴状遺構、土壌等がまとまっていた。

今回の調査成果として、諏訪神社境内地周辺の土地利用のあり方を知ることができたことが挙げられる。

東側の第1号溝跡は断面葉研形の規模の大きな

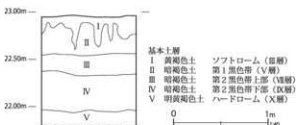
ものであるのに対し、西側の第2号溝跡は底面の平らな断面箱葉研形である。溝跡の形状から南北に細長い短冊形の地割溝を構成すると考えられる。

第1号掘立柱建物跡は、南北に長い2間×2間の側柱建物跡で、2基の地下式竈に挟まれた格好である。地下式竈は、横長方形の地下室の長辺中央に階段状の入口部を付設したもので、入口部は第1号掘立柱建物跡に向けて開口する。また、周囲には溝状の大型土壌や竪穴状遺構が所在する。

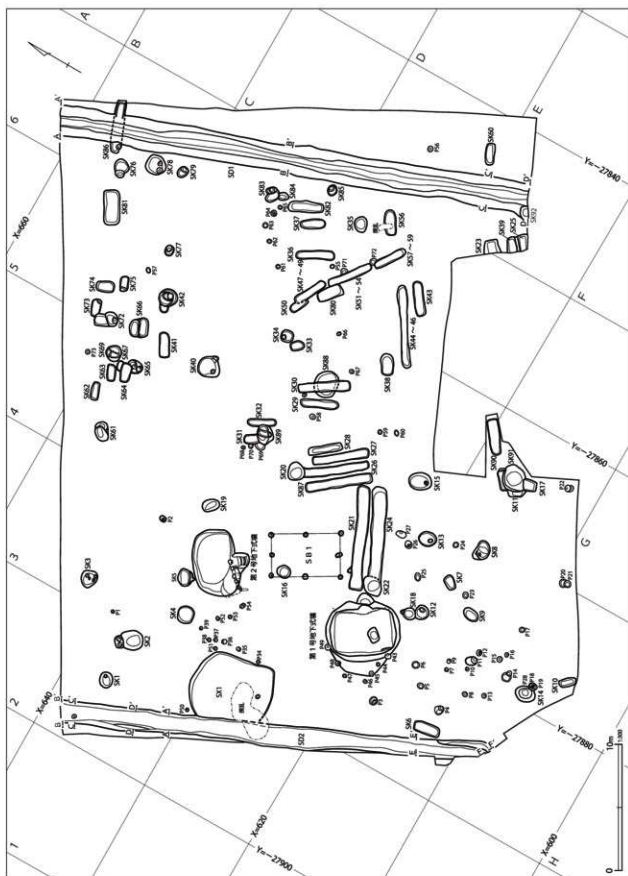
土壌は平面形が楕円形もしくは長方形のものが大部分を占める。このうち長方形の土壌には2ないし3基を一単位として、並列もしくは縦列するものがみられる。土壌の用途については明確にできないが、平面形や断面形状から農作物の貯蔵用敷設が多いと思われる。

遺物は、陶器片口鉢・捏鉢・甕、在地産のかわらけ皿・瓦質土器鉢、砥石、銭貨(開元通寶・咸平元寶・祥符元寶・寛永通寶)等が出土した。遺物の細かな時期は12世紀から16世紀まで、幅広く出土しており、13世紀後半が中心である。一部に古墳時代の土師器杯や古代の須恵器瓶類の破片も含まれているが、混入と考えられる。

本遺跡の基本土層を第5図に示した。第Ⅰ層がソフトローム、第Ⅱ層が第Ⅰ黒色帯、第Ⅲ・Ⅳ層が第Ⅱ黒色帯、第Ⅴ層がハードロームで、武蔵野台地標準層位(Ⅲ～Ⅹ層)に概ね相当する。



第5図 諏訪北Ⅰ遺跡基本土層



第6図 諏訪北Ⅰ遺跡全体図

2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土壌

縄文時代の遺構は、調査区中央の西寄りから南側にかけて土壌9基を検出した。平面形は楕円形を基調とし、浅い掘り込みのものが多い。遺物は少なく、覆土の状態から該期と判断した。

第7号土壌 (第7図)

調査区南側のF-4グリッドに位置する。平面不整形で、規模は長軸1.13m、短軸0.72m、深さ0.24mである。底面は概ね平坦である。

第8号土壌 (第7図)

調査区南側のF-4グリッドに位置する。平面不整形で、規模は長軸1.65m、短軸1.07m、深さ0.50mである。底面にピットを穿ち、凹凸がある。

第9号土壌 (第7図)

調査区南側のF-4グリッドに位置する。平面楕円形で、規模は長軸1.31m、短軸0.83m、深さ0.25mである。底面は概ね平坦である。

第12号土壌 (第7図)

調査区南側のF-4グリッドに位置する。第18号土壌に一部壊される。不整形の平面形で、底面にピットを穿つ。規模は長軸1.16m、短軸1.09m、深さ0.45mである。

第13号土壌 (第7図)

調査区南側のE・F-4グリッドに位置する。平面楕円形で、底面に浅いピットを穿つ。規模は長軸1.43m、短軸1.15m、深さ0.21mである。

第14号土壌 (第7図)

調査区南端のG-4グリッドに位置する。平面楕円形で、規模は長軸1.62m、短軸1.24m、深さ0.66mである。断面形は鍋底形に掘り込む。

第15号土壌 (第7図)

調査区中央のE-5グリッドに位置する。平面楕円形で、底面にピットを穿つ。規模は長軸1.79m、短軸1.35m、深さ0.26mである。

第16号土壌 (第7図)

調査区中央のE-3・4グリッドに位置する。

平面楕円形で、規模は長軸1.09m、短軸0.94m、深さ0.52mである。覆土中から縄文時代中期後半の土器片が出土した(第8図1)。

第19号土壌 (第7図)

調査区中央のD-4グリッドに位置する。平面楕円形で、規模は長軸1.38m、短軸0.89m、深さ0.46mである。断面形は逆台形に掘り込む。

(2) 土壌・グリッド出土遺物

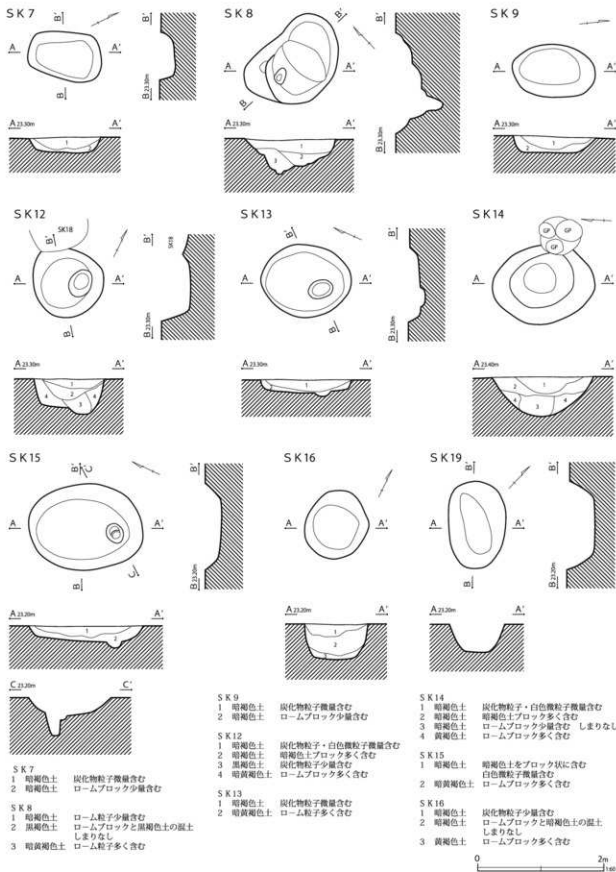
縄文時代の遺物は、第16号土壌から中期の土器片が出土したのみである。その他は中・近世の遺構への混入と考えられる(第8図)。

1は加曾利EⅢ式古段階の土器である。地文は横位の平行沈線による区画がみられ、R縦位回転の燃糸文を施文して、沈線間の地文を磨り消している。第16号土壌から出土した。2は折り返し口縁の無文深鉢で、晩期前葉の粗製土器である。近世土壌の第80号土壌から出土した。

3は前期の諸磯式で、半裁竹管による結節沈線文を描く。4～7は中期の加曾利E式に伴う連弧文系の土器である。4・5は口縁下に交互刺突を伴う平行沈線が巡る。6は口縁部～胴上半部で、平行沈線間に円形刺突が巡り、縦位の平行沈線文が垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。7は交互刺突を伴う平行沈線文で、口縁ないし胴部中段の区画部分の破片である。

8～13は磨り消し懸垂文を描く胴部で、加曾利EⅢ式のキャリパー類深鉢である。9・11は単沈線の蛇行懸垂文を併用する。地文は8がR L複節、13がLの燃糸文で、他はR L単節縦位回転の縄文である。14はRの燃糸文を施文する胴部で、加曾利EⅢ式期のものであろう。

16～26は唐草文系の土器で、やはり加曾利EⅢ式に並行する時期のものである。いずれも胴下半部で、歯輪状工具の条線を地文とし、2本隆帯の懸垂文が垂下する。19は1本隆帯の蛇行懸垂文である。27は加曾利EⅣ式である。「く」の字に内



第7図 土坑



第8図 出土遺物

屈する口縁部で、R L単節横位回転の微細な縄文を施文する。

28～32は後期の堀之内1式である。28・29は無文地に平行沈線文を描く。30・31は3本沈線の懸垂文を描く胴部で、地文は30がL無節縦位回転、31はR L単節横位回転の縄文を施文する。32は縦位の集合沈線文で、斜め方向にも沈線が延びる。

33～35は晩期前葉の粗製土器である。33は折り返し口縁で器面に輪積み痕と指頭圧痕を残す。34

は口縁直下に2条の沈線が巡る。35は非常に薄手の胴部で、鋭状工具の調整痕がみられる。

36・37は無文の破片で、36は胴部、37は底部である。中期後葉から後期のものと考えられる。

38は打製石斧である。末広がりの撚形で、基部を折損する。刃部腹面に節理面を残して、背面側のみ調整剥離を施す片刃の石斧である。現存長7.3cm、幅5.4cm、厚さ2.3cm、重さ81.0gで、石材はチャートである。

3. 中・近世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

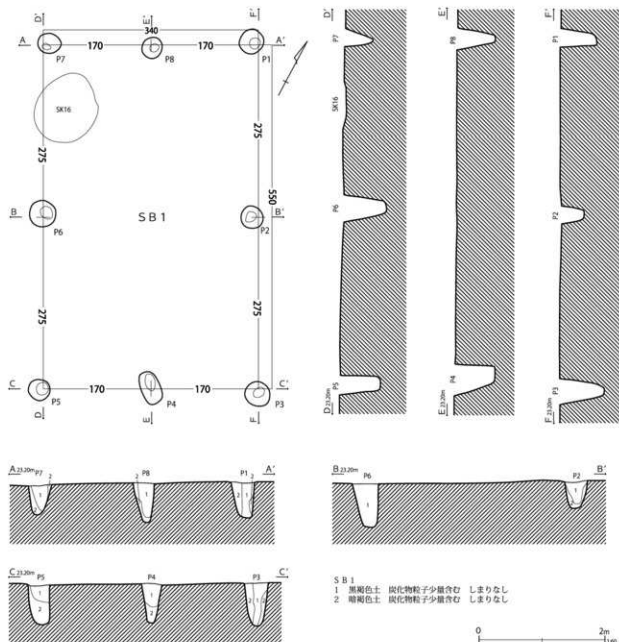
第1号掘立柱建物跡（第9図）

調査区中央西寄りのD-4、E-3・4グリッドに位置する。第1号地下式竈と第2号地下式竈に近接し、両者に挟まれた格好である。南北に長い桁行2間、梁行2間の側柱建物跡である。規模は桁行寸法5.50m、梁行寸法3.40m、桁行の方位はN-27°-Wを指す。桁行の柱間寸法は2.75m

等間に揃い、同様に梁行の柱間寸法は1.70m等間に揃う。

柱穴は径33～52cmの円形で、比較的小振りである。柱穴の掘り込みは43～69cmと全体に深い。柱痕は第1層の黒褐色土を想定することができる。

遺物がまったく出土していないため時期は不明であるが、覆土の状態から中世に帰属すると思われる。



第9図 第1号掘立柱建物跡

(2) 地下式墳

第1号地下式墳 (第11図)

調査区西寄りのE・F-3・4グリッドに位置する。北東壁のほぼ中央に階段状の入口部を付設した地下式墳である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸6.47m、短軸5.78m、深さ2.58mである。長軸方位はN-61°-Eを指す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上半部でやや開く。覆土は床面上に天井崩落土と推定される土砂の堆積後は、概ね自然堆積を示す。床面はほぼ平坦で、中央やや南寄りにP1を検出した。

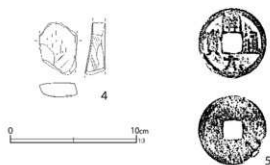
覆土上層から銭貨（開元通寶）が出土したほか、在地産の瓦質土器鉢・常滑の陶器片口鉢・山茶碗系の捏鉢（第10図1～5）など、13世紀後半を主体とする遺物が出土した。

第2号地下式墳 (第12図)

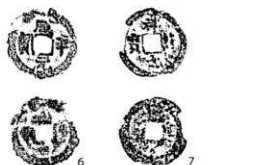
調査区西寄りのD-3・4グリッドに位置する。南東壁のほぼ中央に階段状の入口部を付設した地下式墳である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸5.23m、短軸4.41m、深さ2.19mである。長軸方位はN-35°-Wを指す。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、入口部から南西隅部の壁際にかけて6本のピットが一列に並んでいた。いずれも斜めに掘り込まれており、天井及び壁面の崩落を防ぐ土留めに関わる施設であろう。このうちP6からは銭貨（第10図6・7）が出土した。

このほか覆土中からは在地産瓦質土器の鉢・渥美の陶器甕（第10図8・9）など、12世紀から13世紀に位置づけられる土器が出土した。

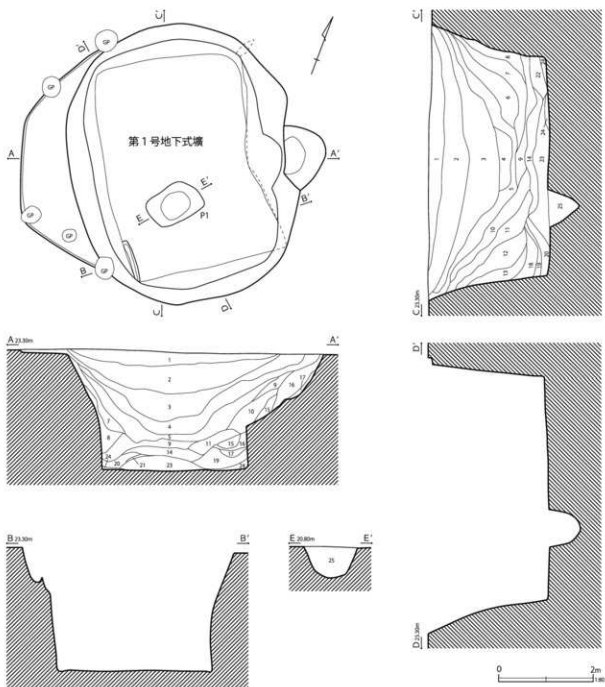
第1号地下式墳



第2号地下式墳



第10図 地下式墳出土遺物

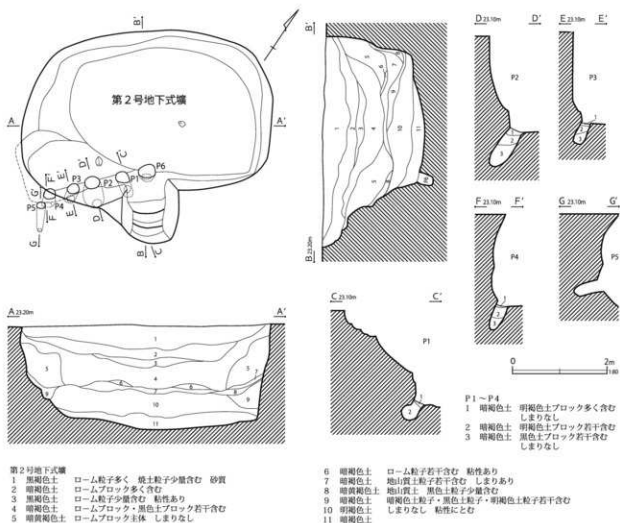


第1号地下式構

- | | |
|---------|------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 炭化物粒子・焼土粒子少量 白色微粒子微量含む |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子・炭化物粒子少量 焼土粒子微量含む |
| 3 黒褐色土 | ロームブロック・黒褐色土ブロック若干 炭化物粒子微量含む |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒子や多く 黒色土ブロック少量含む |
| 5 暗黄褐色土 | ロームブロック主体 黒色土粒子微量含む |
| 6 黒褐色土 | 炭化物粒子・焼土粒子微量含む |
| 7 暗褐色土 | ロームブロック多く ローム粒子少量含む |
| 8 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子若干含む |
| 9 暗褐色土 | ロームブロック若干 ローム粒子少量含む |
| 10 暗褐色土 | ロームブロックと黒色帯ブロックの混土 |
| 11 暗褐色土 | ロームブロック主体 黒色帯ブロック少量含む |
| 12 暗褐色土 | しまりなし |

- | | | |
|---------|-------------------|------------|
| 13 暗褐色土 | ロームブロック少量 | ローム粒子や多く含む |
| 14 暗褐色土 | ロームブロック若干 | ローム粒子多く含む |
| 15 暗褐色土 | ロームブロック若干 | ローム粒子多く含む |
| 16 暗褐色土 | ロームブロック微量 | ローム粒子若干含む |
| 17 暗褐色土 | ロームブロック多く | ローム粒子少量含む |
| 18 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子若干含む | しまりなし |
| 19 暗褐色土 | ロームブロック少量 | ローム粒子若干含む |
| 20 暗褐色土 | ロームブロックや多く | ローム粒子多く含む |
| 21 暗褐色土 | ローム粒子微量含む | |
| 22 暗褐色土 | ロームブロック若干 | ローム粒子少量含む |
| 23 暗褐色土 | ロームブロック若干 | ローム粒子多く含む |
| 24 暗褐色土 | ロームブロック若干 | ローム粒子少量含む |
| 25 黄褐色土 | ロームブロック非常に多く | ローム粒子若干含む |

第11図 第1号地下式構



第12図 第2号地下式竈

第2表 地下式竈出土遺物観察表 (第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	瓦質土器	鉢	(28.0)	[5.3]	—	E H I K	5	普通	に、黄、粉	SE1 C区 在地産 中世	3-3
2	陶器	片口鉢	(24.4)	[5.2]	—	E H I	5	普通	灰	SE1 C区 常滑 13C後半	3-3
3	陶器	捏鉢	(25.0)	[2.5]	—	I K	5	良好	灰白	SE1 B区 山茶碗窯系(東濃か) 13C後半	3-3
4	石製品	砥石	長さ[4.1]cm	幅3.0cm	厚さ1.6cm				凝灰岩	SE1 砥面は4面	
8	瓦質土器	鉢	(26.4)	[5.6]	—	E H K	15	普通	に、黄、粉	SE2 A区 在地産 外面指頭圧痕 中世	3-3
9	陶器	甕	—	[5.5]	—	E H I	5	普通	灰	SE2 A区 渥美 外面刻印 12C～13C	3-3

第3表 地下式竈出土銭貨観察表 (第10図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
5	銭貨	開元通寶	24.41	24.41	1.02～1.05	2.1	SE1 唐 845年初鋳	3-5
6	銭貨	咸平元寶	24.90	24.50	0.95～1.00	1.3	SE2 P6 北宋 998年初鋳	3-5
7	銭貨	祥符元寶	24.31	24.35	1.12～1.20	1.5	SE2 P6 北宋 1008年初鋳	3-5

(3) 竪穴状遺構

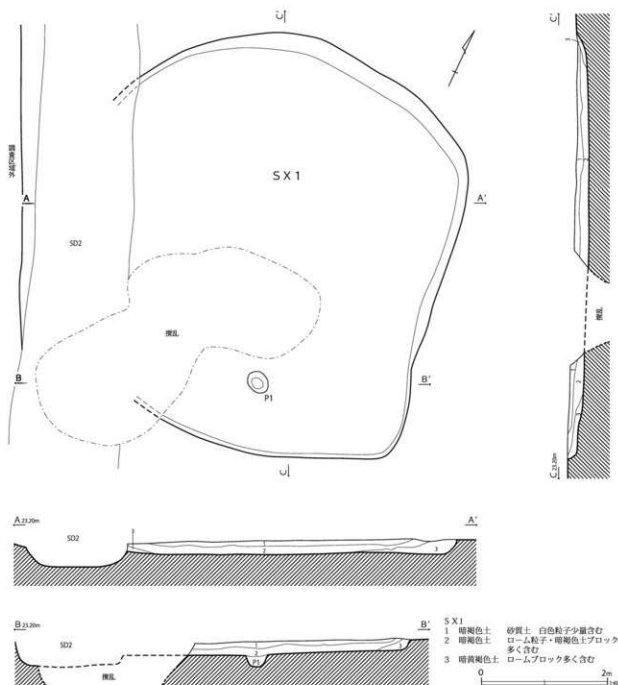
第1号竪穴状遺構 (第13図)

調査区中央西端のD・E-2・3グリッドに位置する。西側を第2号溝跡によって壊されていた。平面形は不整形と推定される。規模は検出部分において南北6.65m、東西5.25m、深さ0.36mである。掘り込みは全体に浅い。南北軸の方位は

N-27° -Wである。

床面はほぼ平坦で、灰跡や硬化面はみられず、南側からピット1基を検出したのみである。覆土は暗褐色土を主体に、概ね自然堆積である。

遺物がまったく出土していないため、時期を特定することはできないが、覆土の状態から中・近世の遺構と考えられる。



第13図 第1号竪穴状遺構

(4) 溝跡

調査区の東西両端に、それぞれ軸を揃えて南北に走行する2条の溝跡が検出された。この溝跡に挟まれた空間の西寄りには、掘立柱建物跡、地下式竈などの中世の遺構がまとまっている。

第1号溝跡 (第6・14図)

調査区の東辺に沿って南北に延びる比較的規模の大きな溝跡である。A・B-6、C・D-6・7、E-7グリッドに位置し、第86・92号土壌が重複する。規模は検出長27.50m、幅2.03~2.50m、確認面からの深さ0.80~1.20mである。走行方向はN-23°-Wを指し、底面は南から北へ傾斜している。断面形は葉研形である。覆土は概ね自然堆積を示しているが、暗褐色土を主体とする第3・4層によって埋没後、小規模な溝として再掘削されたことが第1・2層の堆積状況から窺われる。

覆土中から出土した常滑甕の胴部片(第15図1・2)からみて、遺構の時期は中世である。

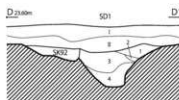
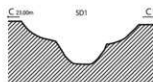
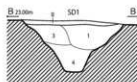
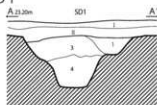
溝跡の性格については直線的に掘削されていることから推して、地割溝であろう。

第2号溝跡 (第6・14図)

調査区の西辺に沿って直線的に延びる溝跡で、D-2、E・F-2・3、G-3グリッドに位置する。溝の南端は調査区域外に延びているため判断としないが、西側に直角に折れ曲がっている可能性もある。規模は検出長28.30m、幅1.50~1.90m、深さ0.30mである。走行方向はN-20°-Wを指す。底面は概ね平坦で、北から南に向かって緩やかに傾斜しながら、幅を減じていた。断面形は逆台形である。覆土は暗褐色土を主体としており、概ね自然堆積である。

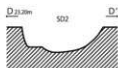
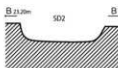
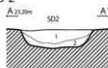
覆土中から中世のかわかけ皿(第15図3)が出土した。第1号溝跡とは約45mの距離を隔てて、並行して延びていることから、短冊形に区画された地割溝と考えられる。時期は出土遺物から中世後半の15世紀から16世紀に位置づけられる。

SD 1



- SD 1
- 1 暗褐色土 粘性強い
 - 2 暗褐色土 粘性あり
 - 3 暗褐色土 ローム粒子若干含む
 - 4 暗褐色土 ロームブロック主体
 - 5 暗褐色土 ロームブロック若干
 - 6 暗褐色土 ローム粒子多く含む

SD 2

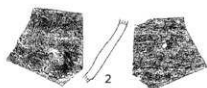
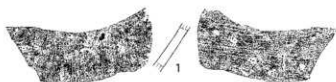


- SD 2
- 1 暗褐色土 ローム粒子若干 炭化物粒子少量含む
 - 2 暗褐色土 ロームブロック多く 炭化物粒子微量含む



第14図 第1・2号溝跡

SD1



SD2



第15図 溝跡出土遺物

第4表 溝跡出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	甕	—	[5.1]	—	E H I K	5	普通	灰	SD1 D-7G 常滑 内面自然釉 中世	3-4
2	陶器	甕	—	[6.7]	—	I K	5	良好	黄灰	SD1 B-6G 常滑 中世	3-4
3	かわらけ	皿	(10.0)	2.2	(7.0)	H K	10	普通	にぶい黄橙	SD2 E-2G 底部回転糸切り 15C~16C	

(5) 土壌

中・近世の土壌は、調査区全体から79基を検出した(第17~26図、第7表)。遺物を出土するものが少なく、時期を特定することは難しいものの、覆土の状態で該期に帰属すると判断した。

前述したように縄文時代の土壌が調査区の南側に集中していたのに対し、中・近世の土壌は第1号溝跡と第2号溝跡に挟まれた空間に広く分布する。特に第1号掘立柱建物跡から第1号溝跡の間に、溝状の大型土壌がまとまっていた。また、第1号溝跡以東への土壌の分布はやや希薄となるようである。

土壌の平面形は、楕円形(31基)、長方形(26基)、隅丸方形(2基)、不整円形(1基)、不整形(19基)等のさまざまな形態がみられる。大部分が楕円形もしくは長方形で、不整形が一定量を占め、隅丸方形、不整円形は僅少であった。

楕円形とした土壌は、長軸1.00m以下の小型のものから、長軸4.00m以上の溝状のものがある。長軸2.00m前後が主体をなし、第88号土壌のように長軸と短軸の差の小さな円形に近いものもある。

特異なものとして、3基ないし4基の土壌が長軸方向に縦列し、最終的に溝状を呈するものが挙げられる。第44~46号土壌・第47~49号土壌・第51~54号土壌・第57~59号土壌などで、いずれも断面形は箱形である。

長方形とした土壌は、2基もしくは3基を一単位として、並列することが特徴である(第21・24号土壌・第26~28・87号土壌)。規模は、長軸1.00m前後から長軸8.00m以上の溝状に近い形態のものがある。長軸1.00~2.00mが基本的な大きさで、

SK17



SK42

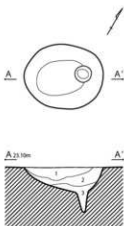


SK81

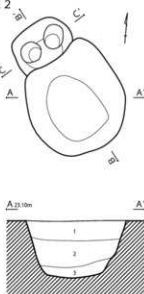


第16図 土壌出土遺物

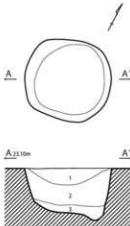
SK 1



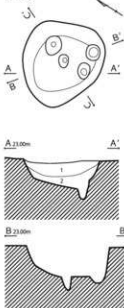
SK 2



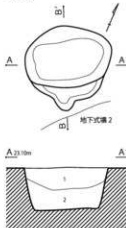
SK 4



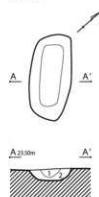
SK 3



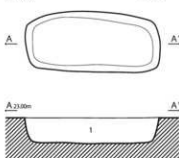
SK 5



SK 10



SK 6



SK 1
1 暗褐色土 炭化物粒子微量含む
2 暗褐色土 炭化物粒子少量含む
3 ロームブロック多く含む

SK 2
1 暗褐色土 炭化物粒子少量含む
2 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土
しまりなし
3 黒褐色土 炭化物粒子・黒色帯ブロック
多く含む

SK 3
1 暗褐色土 炭化物粒子微量含む
2 暗褐色土 炭化物粒子少量含む

SK 4
1 暗褐色土 炭化物粒子少量含む
2 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土
しまりなし
3 黒褐色土 炭化物粒子・黒色帯ブロック
多く含む

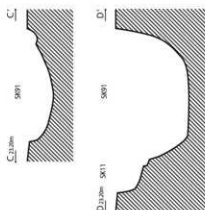
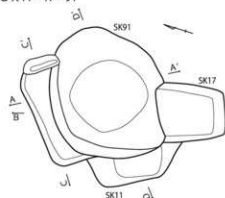
SK 5
1 暗褐色土 炭化物粒子少量含む
2 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土
しまりなし

SK 6
1 黒褐色土 ロームブロック・炭化物粒子多く
含む しまりなし

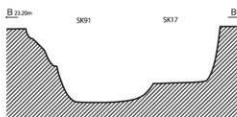
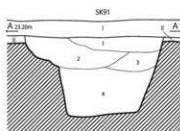
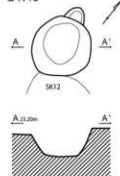
SK 10
1 暗褐色土 炭化物粒子少量含む
2 暗褐色土 ローム粒子多く含む

0 2m 1m

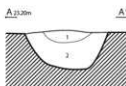
SK11・17・91



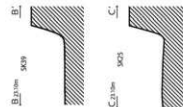
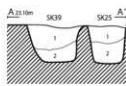
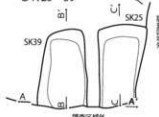
SK18



SK23



SK25・39



- SK23
1 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒子少量含む
2 黒褐色土 暗褐色土・黒褐色土・ロームブロックの混土

- SK25・39
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子若干含む
2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・黒色土粒子若干含む

- SK91
1 暗褐色土 耕土・浅層A軽石少量含む
II 暗褐色土 ソフトローム層
III 暗褐色土 ローム土主体に暗褐色土を帯状に含む
2 暗褐色土 暗褐色土主体にローム土をブロック状に含む
3 暗褐色土 暗褐色土とロームブロックの混土
4 暗褐色土 炭化物粒子少量含む 暗褐色土とローム土の混土

第18図 土壌(2)

調査区北側のB・C-4・5グリッドに集中している。

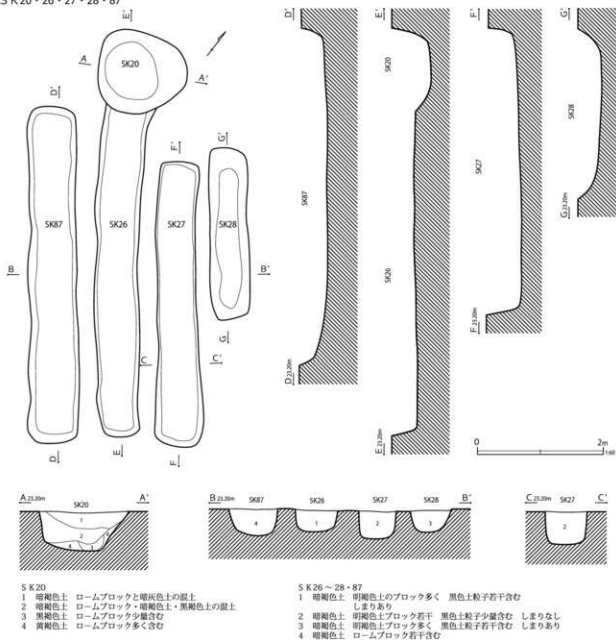
不整形とした土壌は、形態・規模共に一様ではない。中には第42号土壌のように断面漏斗状に掘り込み、底面が階段状になるものがある。

土壌の長軸方位については、楕円形・長方形では東北東-西西南方向、北西-南東方向を指すものに大きく分かれる。特に前者は第1・2号溝跡

に直交することから、何らかの規制を受けていたのであろう。全体的な覆土の状態はロームブロックを含む暗褐色土、黒褐色土を基調とし、しまりを欠くものが多い傾向が認められた。

土壌の用途や性格について明確なものは少ないが、第21・24号土壌は溝状で断面箱形に掘り込まれていることから、ムロなどの農作物の貯蔵施設等の可能性が高い。

S K 20・26・27・28・87



第19図 土坑(3)

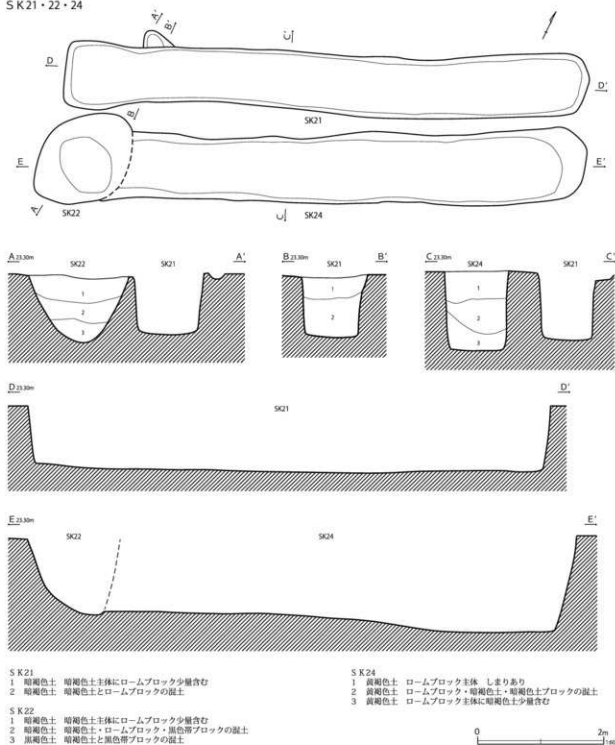
第5表 土坑出土遺物観察表(第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	瓶類	—	[3.0]	(6.0)	I J K	15	良好	灰	SK17 南北金産	
3	土師器	坏	(9.9)	[2.5]	—	E H I K	5	普通	にぶい橙	SK81 比金型坏 赤彩	

第6表 土坑出土銭貨観察表(第16図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
2	銭貨	寛永通寶	22.01	22.08	0.92～1.00	1.4	SK42 新 江戸 1697～1747年、1767～1781年	

SK21・22・24



第20図 土坑(4)

土坑出土遺物 (第16図)

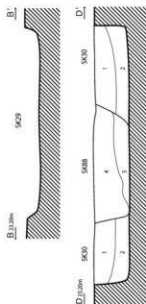
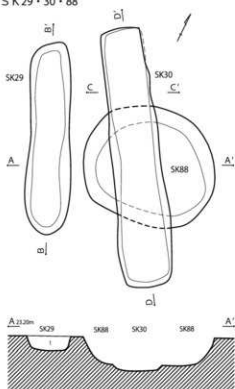
土坑からは近世以降の陶磁器類が少量出土しているが、図示できるものは少ない。

1は須恵器瓶類の底部片である。胎土に白色針状物質を含むことから南比企業跡群の製品で、奈

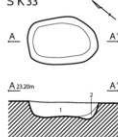
良時代の所産であろう。第17号土坑から出土しているが、覆土の状態から中・近世の土坑と判断されるものであり、混入であろう。

2は新寛永の無背銭で、元禄10年(1697)初鋳である。第42号土坑の覆土中から出土しており、

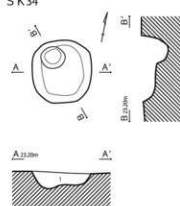
S K 29・30・88



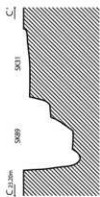
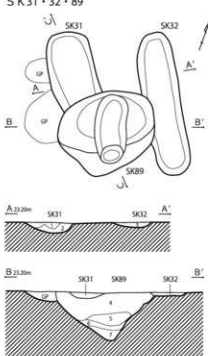
S K 33



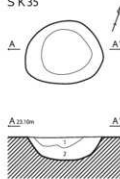
S K 34



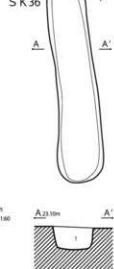
S K 31・32・89



S K 35



S K 36



0 2m 100

S K 29

1 暗褐色土 しまりなし

S K 30・88

- 1 暗褐色土 暗褐色土粒子多く含む しまりなし
- 2 暗褐色土 暗褐色土ブロック若干含む しまりあり
- 3 暗褐色土 ロームブロック多く含む
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子若干含む
- 5 暗褐色土 ロームブロック多く含む ローム粒子若干含む

S K 33

- 1 暗褐色土 暗褐色土粒子若干含む しまりなし
- 2 暗褐色土 暗褐色土粒子若干含む しまりあり

S K 34

- 1 暗褐色土 暗褐色土粒子多く含む しまりなし

S K 35

- 1 暗褐色土 暗褐色土粒子多く含む しまりなし
- 2 暗褐色土 暗褐色土粒子非常に多く含む しまりなし

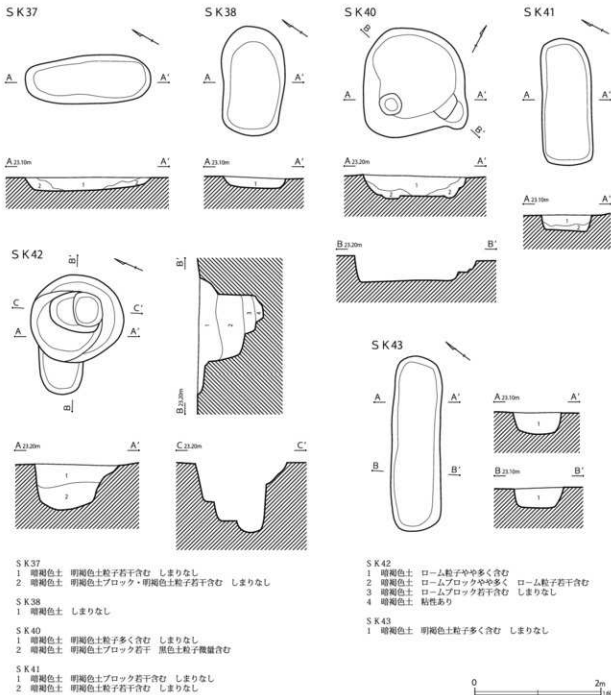
S K 36

- 1 暗褐色土 暗褐色土粒子多く含む しまりなし

S K 31・32・89

- 1 暗褐色土 暗褐色土粒子多く含む しまりなし
- 2 暗褐色土 暗褐色土粒子若干含む
- 3 暗褐色土 暗褐色土粒子非常に多く含む しまりなし
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 5 暗褐色土 ロームブロック主体
- 6 暗褐色土 ロームブロック少量含む
- 7 暗褐色土 ローム粒子多く含む

第21図 土壌(5)



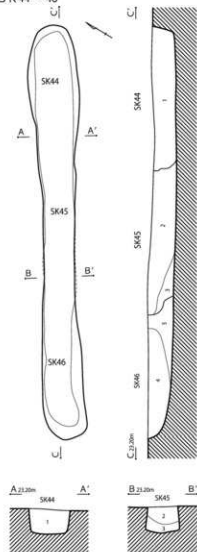
第22図 土塊(6)

遺構に伴うものと考えられる。

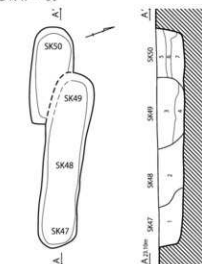
3は土師器杯の口縁部片である。口縁部がS字状に緩やかに外反し、口唇部内面に沈線を巡らした比企型環で、内外面に赤彩を施す。口径が10cm

以下に縮小している特徴から7世紀前半代の所産であろう。第81号土塊から出土しているが、覆土の状態から中・近世の土塊と判断されるものであり、混入であろう。

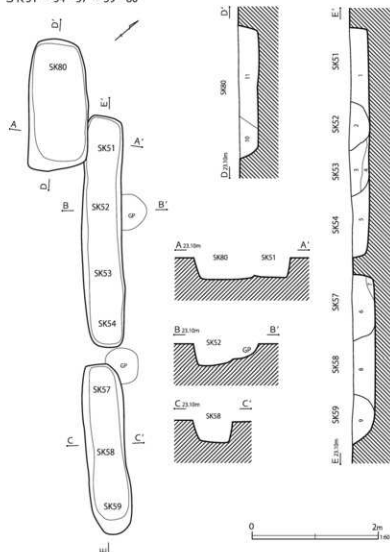
S K 44 ~ 46



S K 47 ~ 50



S K 51 ~ 54 · 57 ~ 59 · 80



S K 44 ~ 46

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 3 暗褐色土 ロームブロック若干 ローム粒子やや多く含む
- 4 暗褐色土 ロームブロック微量 ローム粒子少量含む
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子若干含む

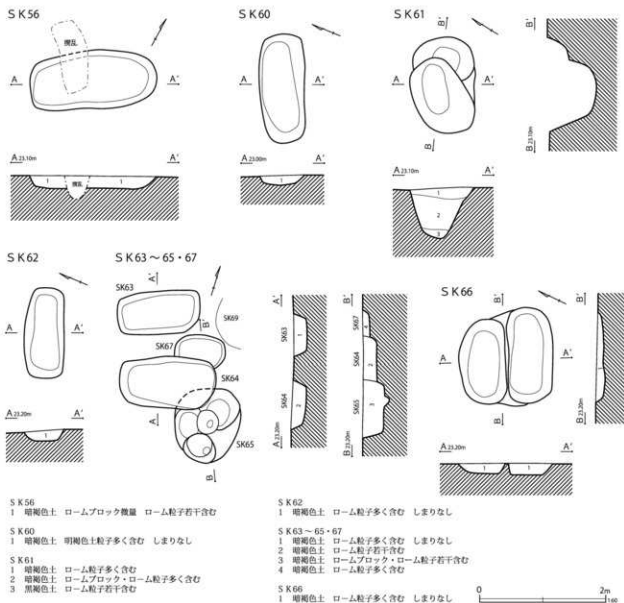
S K 47 ~ 50

- 1 暗褐色土 明褐色土ブロック・黒色土粒子若干含む しまりなし
- 2 暗褐色土 明褐色土粒子多く含む しまりなし
- 3 暗褐色土 明褐色土ブロック若干含む しまりなし
- 4 暗褐色土 黒色土粒子若干含む しまりなし
- 5 暗褐色土 明褐色土粒子多く含む しまりなし
- 6 暗褐色土 明褐色土ブロック非常に多く含む しまりなし
- 7 暗褐色土 黒色土粒子若干含む しまりあり

S K 51 ~ 54 · 57 ~ 59 · 80

- 1 暗褐色土 ローム粒子・黒色土粒子多く含む しまりあり
- 2 暗褐色土 ローム粒子・黒色土粒子若干含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子若干含む しまりなし
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・黒色土粒子若干含む
- 5 暗褐色土 ローム粒子多く含む しまりなし
- 6 暗褐色土 ローム粒子若干含む
- 7 暗褐色土 ローム粒子多く含む
- 8 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量含む しまりなし
- 9 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子若干含む しまりなし
- 10 暗褐色土 ロームブロック微量 明褐色土粒子多く含む しまりなし
- 11 暗褐色土 ローム粒子・明褐色土粒子多く含む しまりなし

第23図 土壌(7)



第24図 土坑(8)

(6) ピット

調査区全体からピット65基を検出した。平面形は円形もしくは楕円形のものが大部分である。規模は径30~40cmのものが多く、深さは10~70cmとやや幅をもつが、概ね20~40cmに集中する。

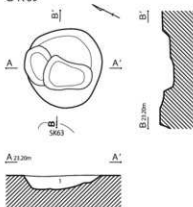
覆土の大半は暗褐色土・黒褐色土を基調とし、柱痕跡を確認できるものもあった。

調査区全体に分布するものの、特に調査区南側の第1号地下式竈周辺のF-3・4グリッドに集中していた。また、調査区西側、D-3グリッド

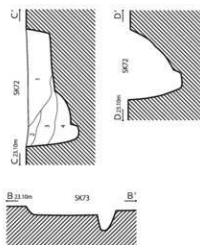
の第2号地下式竈と第1号竪穴状遺構に挟まれた部分や、調査区東側のC-6グリッドにも小さなまとまりが認められる。いずれにせよ、掘立柱建物跡や地下式竈など、中世遺構の周辺に分布がまとまる傾向が窺われる。

単独での検出が多く、第1号掘立柱建物跡以外に配列や覆土の状態に規則性の認められるものはなかった。遺物を出土するものも少なく、時期を判定することは難しいが、覆土の状態から推して中・近世に帰属するものと思われる。

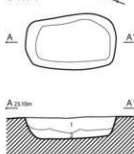
SK 69



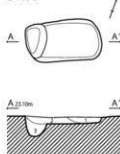
SK 72・73



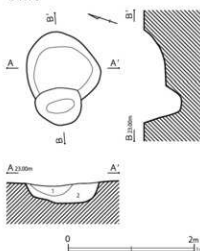
SK 74



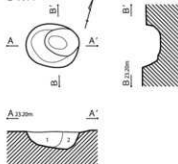
SK 75



SK 76



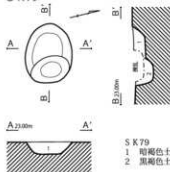
SK 77



SK 78



SK 79



SK 79
1 暗褐色土 ローム粒子・暗褐色土粒子主体
2 黒褐色土 ロームブロック若干含む

SK 69

1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子若干含む

SK 72・73

1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子若干含む
2 暗褐色土 ロームブロック多く含む
3 暗褐色土 ローム粒子・黒色土粒子若干含む
4 暗褐色土 ローム粒子微量 黒色土粒子若干含む
5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子若干含む

SK 74

1 暗褐色土 明褐色土粒子多く含む しまりなし
2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子若干含む 明褐色土粒子多く含む しまりなし

SK 75

1 暗褐色土 ローム粒子若干含む
2 暗褐色土 ローム粒子多く含む
3 暗褐色土 ロームブロック若干含む

SK 76

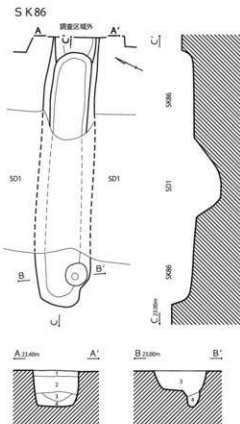
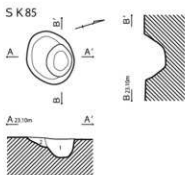
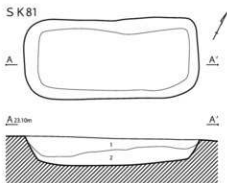
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子若干含む
2 暗褐色土 ロームブロック若干 ローム粒子多く含む

SK 77

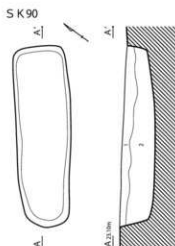
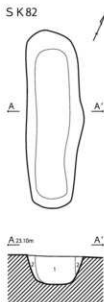
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子若干含む
2 暗褐色土 ロームブロック若干 ローム粒子多く含む

SK 78

1 暗褐色土 ローム粒子多く含む
2 暗褐色土 ロームブロック・暗褐色土ブロック主体



- S K 86
- 1 黒褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土・ローム粒子若干含む
 - 4 暗褐色土・ローム粒子多く含む



- S K 81
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土

- S K 82
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土

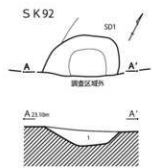
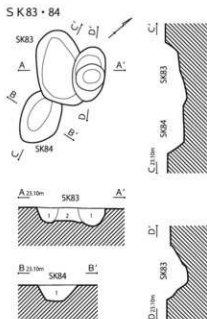
- S K 83
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土

- S K 84
- 1 暗褐色土

- S K 85
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土

- S K 90
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土

- S K 92
- 1 暗褐色土



第26図 土坑(10)

第7表 土壌一覧表(第7・17～26図)

番号	位置	形 態	長軸	短軸	深さ	備 考	番号	位置	形 態	長軸	短軸	深さ	備 考
1	D-2	楕円形	1.23	1.02	0.33		47	D-6	楕円形	0.74	0.61	0.39	SK48より古
2	D-2	不整形	2.22	1.54	0.91		48	D-6	楕円形	0.91	0.58	0.41	SK47より新 SK49より古
3	C-3	不整形	1.34	1.31	0.50		49	D-5	楕円形	1.14	0.66	0.47	SK48・50より新
4	D-3	隅丸方形	1.35	1.30	0.71		50	D-5	楕円形	1.53	0.70	0.45	SK49より古
5	D-3	不整形	1.37	1.32	0.65		51	D-6	楕円形	1.20	0.58	0.31	SK52より古
6	F-3	長方形	2.12	0.96	0.44		52	D-6	楕円形	0.74	0.62	0.33	SK51・53より新
7	F-4	不整形	1.13	0.72	0.24	縄文	53	D-6	楕円形	0.72	0.62	0.28	SK52より古 SK54より新
8	F-4	不整形	1.65	1.07	0.50	縄文	54	D-6	楕円形	0.94	0.61	0.28	SK53より古
9	F-4	楕円形	1.31	0.83	0.25	縄文	55	欠番					
10	G-4	長方形	1.33	0.64	0.22		56	D-6	楕円形	1.98	0.93	0.25	
11	F-5	不整形	1.44	(0.39)	0.31	SK17・91より古	57	D-6	楕円形	0.14	0.66	0.38	SK58より新
12	F-4	不整形	1.16	1.09	0.45	縄文 SK18より古	58	D-6	楕円形	0.54	0.62	0.35	SK57・59より古
13	E-4	楕円形	1.43	1.15	0.21	縄文	59	D-6	楕円形	0.76	0.67	0.34	SK58より新
14	G-4	楕円形	1.62	1.24	0.66	縄文	60	D-7	長方形	1.71	0.71	0.16	
15	E-5	楕円形	1.79	1.35	0.26	縄文	61	C-4	不整形	1.49	1.02	0.78	
16	E-3	楕円形	1.09	0.94	0.52	縄文	62	C-4	長方形	1.43	0.62	0.19	
17	F-5	長方形	(1.03)	0.92	0.87	SK11より新 SK91より古	63	C-4	長方形	1.32	0.69	0.25	
18	F-4	不整形	1.19	0.92	0.45	SK12より新	64	C-4	長方形	1.53	0.80	0.26	SK65より古 SK67より新
19	D-4	楕円形	1.38	0.89	0.46	縄文	65	C-4	不整形	1.20	1.02	0.34	SK64より新
20	D-4	不整形	1.39	1.28	0.60	SK26より新	66	C-5	不整形	1.53	1.51	0.21	
21	E-4	長方形	8.22	0.92	1.09		67	C-4	楕円形	0.79	0.45	0.10	SK64より古
22	E-4	不整形	1.77	1.32	1.18	SK24より新	68	欠番					
23	E-7	長方形	(1.03)	1.29	0.52		69	C-4	不整形	1.24	1.22	0.23	
24	E-4	長方形	(7.17)	1.10	1.37	SK22より古	70	欠番					
25	E-7	長方形	(1.36)	0.75	0.57		71	欠番					
26	E-4	長方形	(5.06)	0.72	0.42	SK20より古	72	B-5	不整形	1.80	1.13	0.39	SK73より新
27	E-5	長方形	4.46	0.71	0.55		73	B-5	長方形	1.40	0.73	0.11	SK72より古
28	D-4	長方形	2.67	0.60	0.38		74	B-5	長方形	1.42	0.86	0.33	
29	D-5	楕円形	3.00	0.72	0.25		75	B-5	長方形	1.18	0.64	0.12	
30	D-5	長方形	4.08	0.84	0.54	SK88より古	76	B-6	不整形	1.46	1.15	0.33	
31	D-4	楕円形	(1.10)	0.74	0.12	SK89より新	77	C-5	楕円形	0.84	0.68	0.28	
32	D-4	楕円形	2.26	0.60	0.12	SK89より新	78	B-6	不整形	1.58	1.50	0.56	
33	D-5	楕円形	1.09	0.74	0.24		79	B-6	楕円形	0.93	0.72	0.31	
34	D-5	隅丸方形	0.98	0.93	0.22		80	D-6	長方形	2.07	0.95	0.35	
35	D-6	楕円形	1.20	1.03	0.38		81	B-5	長方形	2.72	1.24	0.43	
36	D-6	楕円形	3.22	0.71	0.37		82	C-6	長方形	2.78	0.90	0.47	
37	C-6	楕円形	1.96	0.76	0.20		83	C-6	不整形	1.17	1.07	0.27	SK84より新
38	E-5	楕円形	1.72	0.98	0.18		84	C-6	楕円形	(0.82)	0.61	0.26	SK83より古
39	E-7	長方形	(1.23)	(0.72)	0.60		85	C-6	楕円形	0.86	0.73	0.34	
40	C-5	不整形	1.70	1.60	0.38		86	B-6	楕円形	(4.28)	0.81	0.36	
41	C-5	長方形	1.98	0.77	0.32		87	E-4	長方形	5.77	0.71	0.43	
42	C-5	不整形	1.90	1.45	1.10		88	D-5	楕円形	2.11	1.79	0.49	SK30より新
43	D-6	長方形	2.73	0.77	0.35		89	D-4	不整形	1.54	1.22	0.87	SK31・32より古
44	D-6	楕円形	2.25	0.79	0.40	SK45より新	90	F-5	長方形	2.85	0.87	0.56	
45	E-6	楕円形	2.28	0.57	0.42	SK44より古 SK46より新	91	F-5	不整形	2.20	2.07	1.14	SK11・17より新
46	E-5	楕円形	1.95	0.64	0.30	SK45より古	92	E-7	不整形	1.20	(0.65)	0.32	

Ⅳ 諏訪北Ⅱ遺跡の調査

1. 遺跡の概要

諏訪北Ⅱ遺跡は、大宮台地北西部の桶川市川田谷字諏訪北に所在し、JR高崎線桶川駅の西方約4kmに位置する。石川堀の源流にあたる支谷に向かって緩やかに傾斜する南西斜面に立地しており、標高は約22mである。また、東側にもごく浅い谷が南側から入り込み、見た目よりも複雑な地形を呈している。

周辺には、東へ約350m離れて諏訪北Ⅰ遺跡が、南へ約100mには諏訪南遺跡が所在する。さらに、諏訪神社の参道から続く市道を隔てた北隣には、平安時代の天長年間に慈覚大師がこの地を訪れ、飢饉に苦しむ人々を助けた記憶をとどめるために、後世、食物を給した小屋の跡に一寺を建立したと、開山の由緒を伝える東叡山泉福寺の末寺である諏訪山臨濟院普門寺が所在する。現在は堂宇を失っているが、江戸時代には幕府より寺領三石の朱印地を与えられるとともに、石戸領総鎮守の諏訪神社の別当として栄えたことが知られている。

諏訪北Ⅱ遺跡の調査では、縄文時代の竪穴住居跡3軒、竪穴状遺構3基、埋甕1基、土城18基、中・近世の掘立柱建物跡2棟、竪穴状遺構1基、火葬跡1基、井戸跡4基、炉跡1基、溝跡80条、土城266基、柵列跡4条、ピット3,071基を検出した(第28図)。

縄文時代の遺構は、第1次調査区北側の中央部を谷奥とする南に開く浅い谷を取り巻くように分布している。

谷奥には中期の第2号住居跡と後期前葉の第3号住居跡、谷の西斜面に中期後半の第4号住居跡がそれぞれ分布する。この他に谷奥には柄鏡状ピット列の第1号竪穴状遺構と小竪穴の第2号竪穴状遺構が、谷の中央付近には同じく小竪穴の第4号竪穴状遺構を検出した。また、第4号住居跡の北側には中期後半の深鉢を埋設した第1号埋甕を

単独で検出した。

土壌は用途不明のものがほとんどだが、第144号土城は集石土城、第161号土城は貯蔵用の袋状土城と思われる。

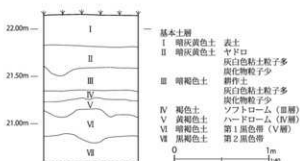
中・近世の遺構は調査区全体に広がり、L字形に開削された薬研堀の第21号溝跡を中心に、その周囲から溝跡、井戸跡、土城などを多数検出した。

第21号溝跡は東西・南北辺共に一町半以上の規模を有する大規模な薬研堀で、断面形状や出土した中世陶器や板碑などから、中世の館跡、もしくは普門寺に関連する区画溝の可能性がある。また、この堀跡の東側に沿って夥しい数のピットが検出されており、垣根(生垣)などによる境界施設が付随していたものと思われる。

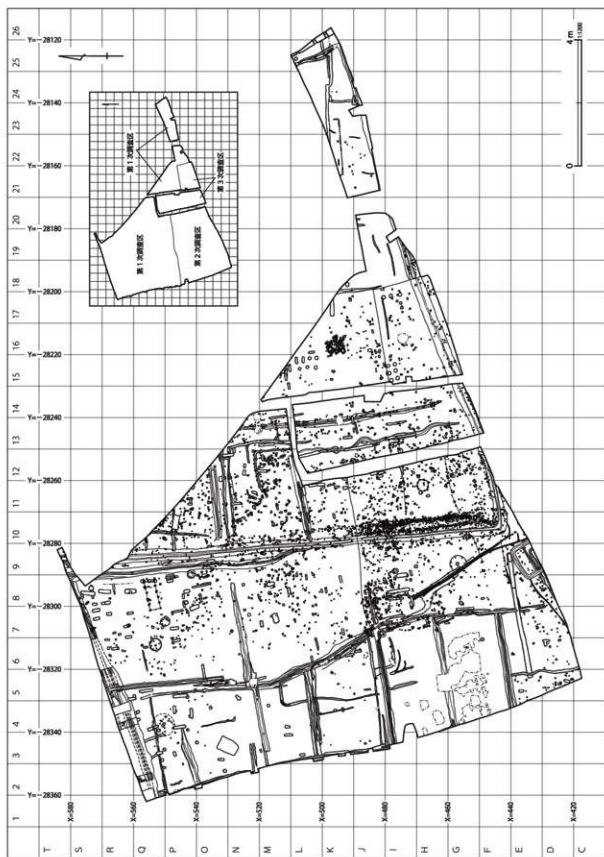
土城は長方形のものが大半を占め、調査区北側及び第21号溝跡の東側にまとまって検出した。その中には六道銭と考えられる渡来銭(北宋銭・明銭)を出土した2基の土城墓が含まれている。

近世の第1号火葬跡では、かわらけの中に団子状炭化物が供えられたままの状態で見つかっており、送葬儀礼に伴う所作を復元する上で貴重な事例として注目される。

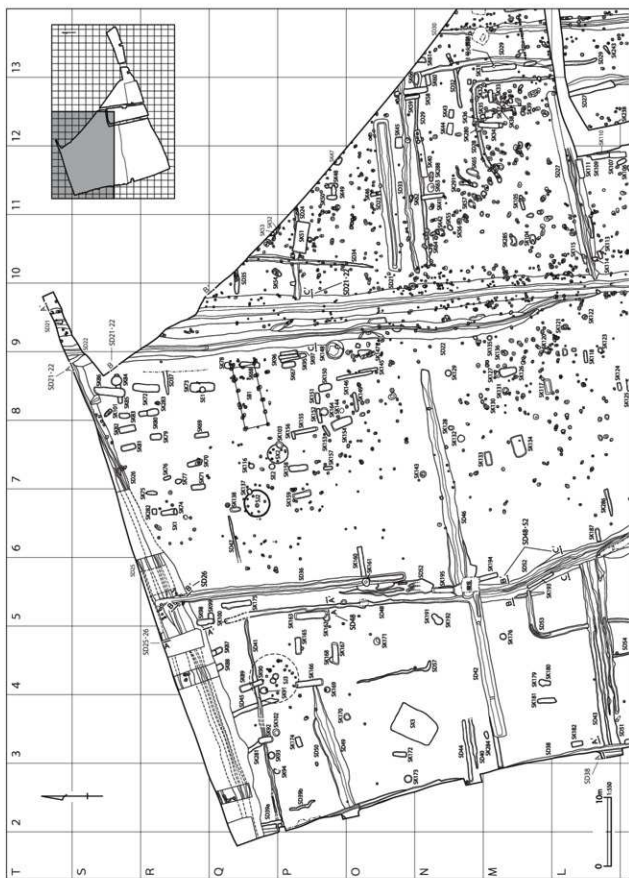
本遺跡の基本土層を第27図に示した。第Ⅰ層が現代の耕作土、第Ⅱ層がヤドロ、第Ⅲ層が近世の畠作土、第Ⅳ層以下がローム層である。



第27図 諏訪北Ⅱ遺跡基本土層



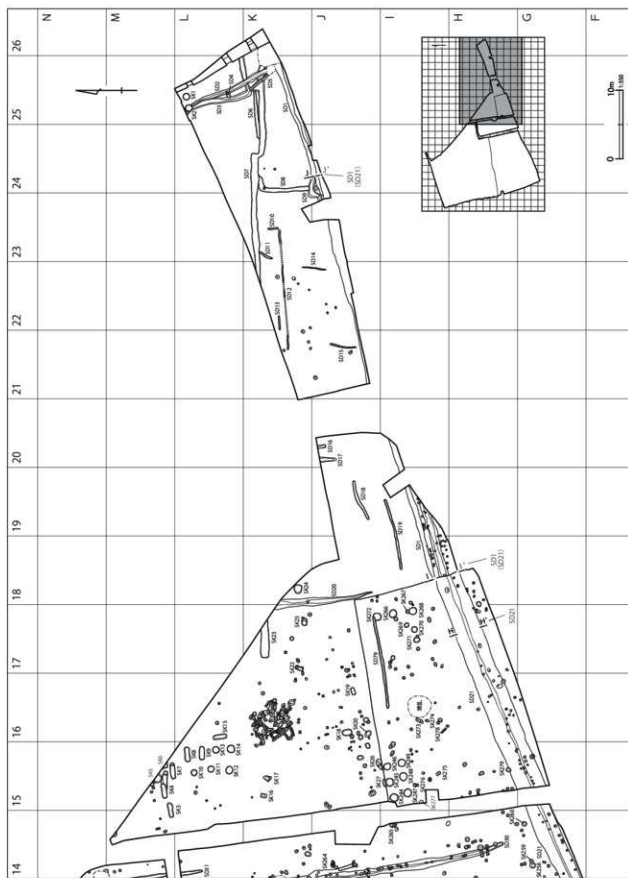
第28図 諏訪北Ⅱ遺跡全体図



第29図 諏訪北Ⅱ遺跡分割図(1)



第30図 諏訪北Ⅱ遺跡分割図(2)



第31図 諏訪北Ⅱ遺跡分割図(3)

2. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は竪穴住居跡3軒、竪穴状遺構3基、埋甕1基、土壇18基を検出した。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は中期2軒、後期1軒である。これらの遺構は、第2次調査区から第1次調査区の北西側に湾入する浅い谷を取り巻くように分布していた。

第2号住居跡 (第32図)

第1次調査区北端のQ-6グリッドに位置する。床面の一部が露出した状態で、円形に巡る壁溝によって住居跡の平面形を確認した。

覆土がほとんど失われているほか、近世の第137号土壇に東側床面の一部が壊されていた。なお、本住居跡の南東約4.3mには第2号竪穴状遺構が存在している。

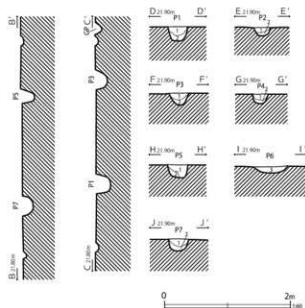
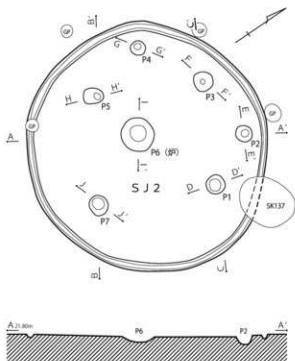
平面形は円形で、規模は長径3.95m、短径3.80mである。住居跡中央西寄りのP6が位置的にみて炉跡と考えられるが、壁面や底面に明確な被熱痕がみられず、覆土にも焼土粒子や炭化物粒子の

混入が僅かに認められただけで、断定することはできなかった。P6の規模は径52cm、深さ7cmである。P6を炉跡と仮定し、柱穴を基準とした長軸方位はN-56°-Wを指す。

床面は概ね平坦であったが、硬化面などを確認することはできなかった。壁溝は全周し、幅8~15cm、深さ3~5cmでほぼ均一に巡っている。

床面からはP6を除き、柱穴を6本検出した。位置的にP1・P3・P5・P7の4本、あるいはP4を加えた5本が主柱穴と考えられる。掘り込みの規模は径24~34cm、深さ15~20cmで全体に浅い。覆土は炭化物粒子を若干混入する暗褐色土・暗黄褐色土を主体とする。なお、P2は径が小さく、壁際に位置することからみて出入口施設に関わる柱穴の可能性がある。

遺物がまったく出土していないため時期を特定することはできないが、住居跡の平面形態や覆土の状態から縄文時代中期と考えておきたい。



- SJ2 ビット1~7
 1 暗褐色土 炭化物粒子若干 しまりややなし
 2 暗黄褐色土 ローム粒子多 しまりあり
 3 暗褐色土 炭化物粒子少 焼土粒子若干

第32図 第2号住居跡

第3号住居跡 (第33図)

第1次調査区北西端のP・Q-4グリッドに位置する。東に存在する第2号住居跡とは約21mの距離を隔てている。

調査時、既に覆土が失われ、床面の一部が削平された状態で検出された。かろうじて第1・2号土壌の周囲に配された15本の柱穴により、径約7mの円形の住居跡が推定された。住居跡の北側には第89～91号土壌及び第41号溝跡が、さらに南側には第166号土壌が重複しており、それらによって床面の一部が壊されていた。

床面は既に一部削平されており、壁溝や硬化面等はなかった。住居跡と推定した中央部には炉跡は検出されなかったが、第1・2号土壌が接した状態で検出された。

第1号土壌 (旧SK189) と第2号土壌 (旧SK190) は土層断面の観察の結果、第2号土壌の埋没後に、第1号土壌を掘り込んでいることが判明した。第1号土壌の規模は長径0.85m、短径0.75m、深さ0.15mで、底面は平坦である。第2号土壌の規模は長径0.90m、短径0.85m、深さ0.15mで、底面は凹凸がある。覆土は暗褐色土・暗黄褐色土を主体とし、焼土粒子や炭化物粒子を混入していることから、炉跡を壊して構築された可能性もある。遺物は第1号土壌の覆土上層を中心に堀之内式期の土器片がまとめて出土した。

柱穴は15本を検出した。配置に規則性はみられないが、規模・深度等の検討からP2・P5・P9・P12・P15の5本が主柱穴と考えられる。掘り込みの規模は径22～42cm、深さ20～90cmと幅がある。覆土は暗褐色土・暗黄褐色土を基調とし、第2層の暗褐色土が柱痕跡に相当する。

第3号住居跡第1号土壌出土遺物 (第42・43図)

堀之内式期の土器片が出土している。

1は第1号土壌から出土した深鉢の胴下半である。2本沈線の懸垂文が垂下する。現存高14.4cm、復元最大径22.1cmである。胎土は多量の砂粒、雲

母粒子混じりのシルトを含み、器壁は外面が暗褐色、内面が暗褐色で、黒色付着物がみられる。焼成はやや良好である。

4～7は第1号土壌から出土した破片資料である。4は無文の口縁である。緩やかに外反し、口唇断面外削ぎ状である。5は口縁下に無文帯をもち、胴部との境に横位の沈線が巡る。6は櫛歯状工具による条線が交差する。7はLR単節横位回転の縄文を施文する。

第4号住居跡 (第35図)

第2次調査区中央のG-9グリッドに位置する。住居跡の南西側は第58・59号溝跡に大きく壊されていた。

径5.15mの円形の住居跡で、後世の削平が床面近くまで及んでいた。確認面からの深さは0.05mである。炉跡と柱穴を基準とした長軸方位は、N-52°-Eを指す。

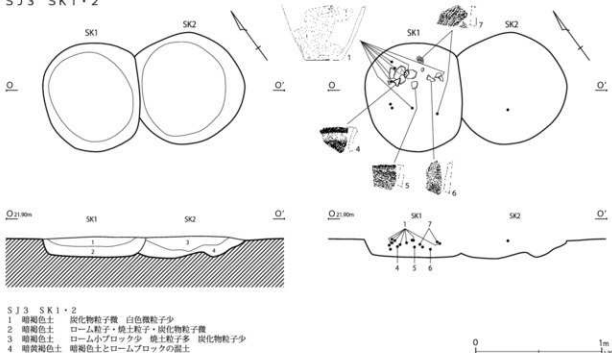
床面は概ね平坦で、壁溝は検出されなかった。覆土は床面を覆うように第1層の黒褐色土が薄く堆積していた。

柱穴は壁際に沿って円形に配された7本を検出した。これらは1.50～2.00mの間隔で規則的に配置されていた。P1-P2・P5-P6の間隔が1.20mと他の部分よりもやや狭くなっている。掘り込みの規模は径22～33cm、深さ18～30cmで全体に小振りである。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土・暗黄褐色土を主体とし、明確な柱痕跡は確認できなかった。

炉跡は住居跡のほぼ中央で検出し、掘り込みの規模は、長径1.05m、短径1.00m、深さ0.33mである。中央には第42図2の深鉢形土器が正位の状態では炉体土器として埋設されていた。埋設は浅く掘り込んだ小ピットの中であつた。炉体土器の周囲から西側にかけて、被熱により赤色に変色した硬化面 (カキ) が顕著に認められた。

ほとんど床面が露出した状況であつたため、炉体土器以外には図示できる遺物は少ない。

S J 3 SK1・2



第34図 第3号住居跡(2)

第4号住居跡出土遺物 (第42・43図)

遺物は炉体土器と破片資料1点を図示した。

2は炉体土器である。小型の深鉢で、胴下半部を欠損する。3単位の緩やかな波状口縁で、胴部中段が軽微にくびれ、胴上半部から口縁部にかけて緩やかに内湾しつつ立ち上がる。口縁直下に平行沈線が巡り、胴部にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。現存高12.4cm、復元最大径16.7cmである。胎土はチャート・小礫を多く含む。器壁は黄橙色である。焼成はやや良好で、外面全体に二次焼成痕がみられる。加曾利EⅢ式古段階の土器である。

8は破片資料である。深鉢胴部で、櫛歯状工具による小波状のモチーフが描かれる。やはり加曾利EⅢ式古段階であろう。

(2) 竪穴状遺構

調査時、明確な炉跡を検出することができず、竪穴住居跡として断定することのできなかった性格不明遺構(SX)のうち、平面形や柱穴等の配置・深度を検討した結果、居住施設の可能性が高

いと判断したものについて、竪穴状遺構として報告する。

第1号竪穴状遺構 (第36図)

第1次調査区北端のR-6グリッドに位置し、南側に第2号住居跡、第2号竪穴状遺構が存在する。東西8.00m、南北6.30mの範囲に13本のピットが東に張出部をもつ柄杓形に並んだ状態で検出されたものである。

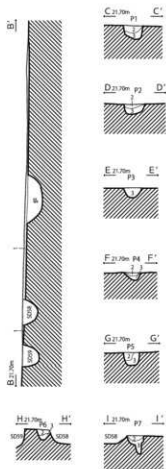
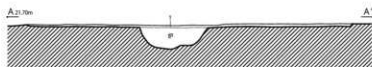
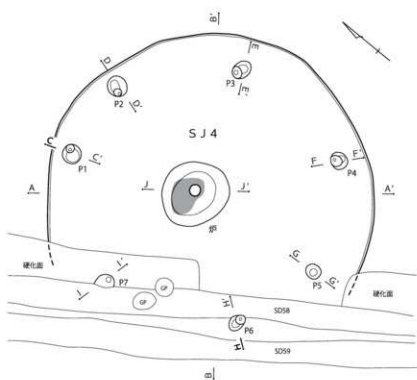
後世の削平により床面が露出し、壁の立ち上がりや、炉跡、壁溝などが検出できなかったため、住居跡と断定することはできなかった。

ピットは径30～70cm、深さ18～40cmと一様でなく、全体に掘り込みも浅い。覆土はロームブロックを含む暗黄褐色土を主体とし、柱痕跡の確認されるものもある。

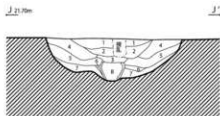
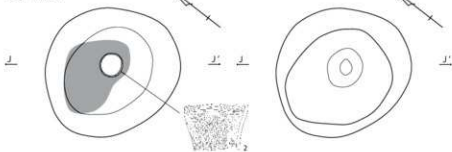
遺物はまったく出土していないが、ピットの配置や覆土の状態から縄文時代の遺構と判断した。

第2号竪穴状遺構 (第37図)

第1次調査区北側のP・Q-7グリッドに位置し、北西約4.3mに第2号住居跡が存在する。近



SJ4 炉跡



SJ4 砂礫

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子若干
- 2 暗褐色土 褐色土ブロック多 しまりあり
- 3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多 しまりあり
- 4 暗褐色土 1層に近い 焼土粒子やや多
- 5 暗褐色土 褐色土ブロック・焼土ブロック多 しまりあり
- 6 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多 しまりあり
- 7 暗褐色土 焼土粒子少 炭化物粒子多 しまりなし
- 8 暗褐色土 焼土粒子少 炭化物粒子多 しまりなし

SJ4 ビット1~7

- 1 暗褐色土 暗褐色土小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子多
- 2 暗褐色土 焼土粒子多 炭化物粒子若干
- 3 暗褐色土 焼土粒子多 しまりなし 粘性なし

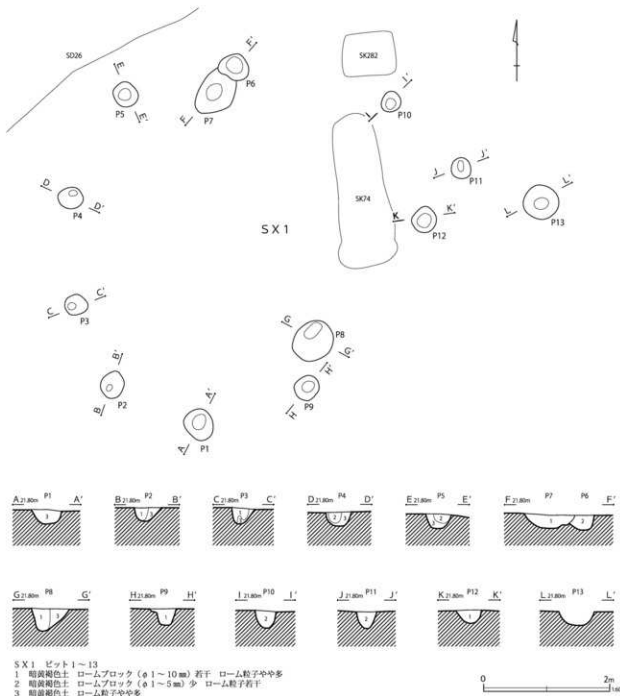


第35図 第4号住居跡

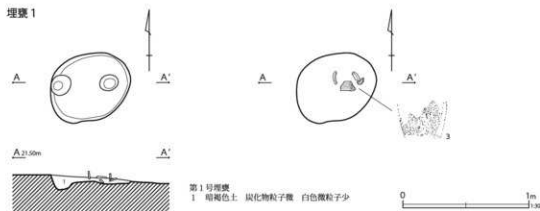
世の第103号土城に東壁の一部が壊されていた。

平面形は南北にやや長い楕円形で、規模は長軸3.05m、短軸2.70m、深さ0.10mの小竪穴で、灰跡や壁溝が認められなかったため、竪穴状遺構とした。柱穴の配列から推定した長軸方位はN—2°—Wを指す。

床面は概ね平坦ながら、明確な硬化面の検出はなかった。覆土は故意の埋戻しと推定される黒褐色土ブロックと、ロームブロックを含む暗褐色土の単一層である。壁際に寄った位置から柱穴6本を検出した。配列はやや不規則であるが、P1～P5を五角形に配している。規模は径20～37cm、



第36図 第1号竪穴状遺構



第39図 第1号埋喪

深さ10～35cmで総じて小規模である。

遺物が出土していないため時期は明確でないが、覆土の状態から縄文時代の遺構と判断した。

第4号竪穴状遺構（第38図）

第2次調査区東寄りのH-11・12グリッドに位置し、周囲には縄文時代の土城の第199・205号土城が存在している。

平面形は略円形で、壁の立ち上がりに食い込むように柱穴を巡らしていた。床面に瓦跡や壁溝が検出できず、住居跡と断定できなかったため、竪穴状遺構とした。

平面形は略円形で、規模は長径3.80m、短径3.70m、深さ0.04mとほとんど掘り込みをもたない小竪穴である。柱穴の配列から推定した長軸方位はN-13°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、中央部南寄りにP9・10が並列した状態で検出された。P9は土層断面に柱痕跡が認められた。

壁の立ち上がりに食い込むように巡る柱穴は、ほぼ等間隔に10本検出した。規模は径26～65cm、深さ10～50cmで、全体に掘り込みが深い。覆土は黒褐色土・にぶい黄褐色土を主体とし、柱痕跡（第2層）を観察できるものが多い。

遺物がまったく出土していないため詳しい時期は不明であるが、柱穴や覆土の状態から縄文時代の遺構と判断した。

（3）埋喪

第1号埋喪（第39図）

第2次調査区中央のI-8グリッドで、縄文時代中期の埋喪1基を検出した。埋設に係る掘り込みは長軸0.65m、短軸0.52mの楕円形で、深さは0.10mと浅い。

底面には両端に一对の小ピットが穿たれ、東側の小ピットに深鉢形土器を埋設し、暗褐色土を充填していた。

底面近くまで後世の削平が及んでおり、埋喪本体の遺存状態は良好でない。このため土器の埋設状態については不明確であるが、第42図3の深鉢形土器を正位に据え置いていたものと推定される。口縁部や底部を打ち欠いていたか否かは明らかでない。

第1号埋喪出土遺物（第42・43図）

3は連弧文土器の胴下半部である。3本沈線の連弧文が巡り、弧状文の下底部から底部に向かって3本沈線の懸垂文が垂下する。地文はR縦位回転の撚糸文である。

現存高10.0cm、復元最大径13.0cmである。胎土は砂質で、器壁は外面が暗褐色、内面が黒褐色である。焼成はやや不良で、全体に二次焼成による風化が著しい。

9・10は、3と同一個体と考えられる連弧文土器の破片である。

(4) 土壌

調査区中央から南側に延びる浅い谷の周囲から縄文時代の土壌18基を検出した。

その分布状況は大きく三つに分けられる。第1次調査区東側の1基(第20号土壌)、第1次調査区北側の第2・3号住居跡周辺に分布する6基(第143・144・161・162・164・171号土壌)、第2次調査区中央の第4号住居跡周辺に分布する11基(第196・200・204・206・218・224・230号土壌)である。

第20号土壌 (第40図)

第1次調査区東側のJ-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.10m、短軸0.80m、深さ0.10mである。断面形は皿形で、長軸方位はN-48°-Wを指す。

第143号土壌 (第40図)

第1次調査区北側のN-7グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径0.95m、短径0.90m、深さ0.40mである。断面形は逆台形である。

第144号土壌 (第40図)

第1次調査区北側のP-8グリッドに位置する。確認面から円礫がまとまって出土したことから、集石土壌の底面付近である可能性が考えられる。ほとんど掘り込みがなく、平面形及び規模については判然としないが、径約0.70mの円形の土壌と推定される。

円礫は拳大からそれ以下の大きさの小振りのものが多く、13点を検出した。被熱を受けたものは2点のみと少ない。遺物が出土していないため、詳細な時期については不明である。

第161号土壌 (第40図)

第1次調査区北側のO-5グリッドに位置し、第36号溝跡によって壊されていた。平面形は楕円形で、検出された部分の規模は長軸1.20m、短軸1.05m、深さ1.80mである。断面形はフラスコ形である。長軸方位はN-70°-Eを指す。断面形態から貯蔵穴と考えられる。

第162号土壌 (第40図)

第1次調査区北側のP-5グリッドに位置し、第163号土壌と重複する。平面形は楕円形で、検出された部分の規模は、長軸0.90m以上、短軸0.95m、深さ0.30mである。断面形は逆台形で、長軸方位はN-55°-Eを指す。

第164号土壌 (第40図)

第1次調査区北側のP-8グリッドに位置し、第152号土壌と重複していた。平面形は円形で、規模は長径1.30m、短径1.20m、深さ0.30mである。断面形は逆台形である。

第171号土壌 (第40図)

第1次調査区北側西寄りのO-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.10m、短軸0.92m、深さ0.30mである。断面形は逆台形で、長軸方位は、N-87°-Eを指す。

第196号土壌 (第40図)

第2次調査区東寄りのG-12グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.00m、短軸0.80m、深さ0.45mである。断面形はU字形で、長軸方位はN-60°-Eを指す。

第197号土壌 (第40図)

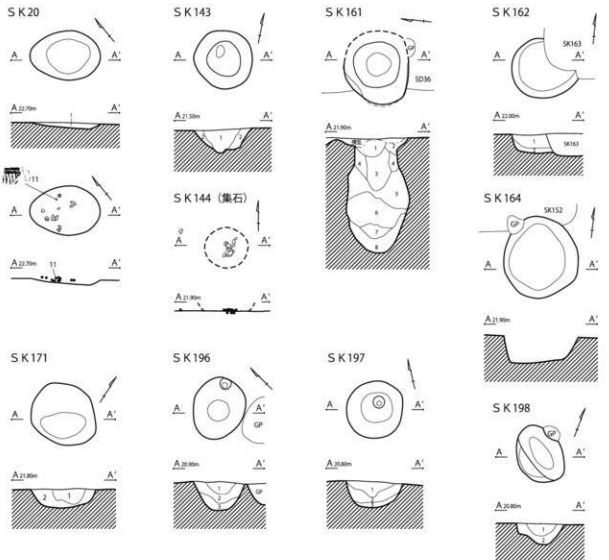
第2次調査区南東端のF・G-12グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径0.90m、短径0.87m、深さ0.45mである。断面形はU字形で、底面に小ビットが穿たれていた。覆土は3層に分層され、概ね自然堆積を示す。

第198号土壌 (第40図)

第2次調査区南東端のG-11グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸0.95m、短軸0.70m、深さ0.30mである。断面形はU字形で、長軸方位はN-55°-Wを指す。

第199号土壌 (第41図)

第2次調査区東寄りのH-11グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.20m、短軸0.80m、深さ0.25mである。断面形は逆台形で、長軸方位はN-5°-Wを指す。



SK 20
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm) 若干 ローム粒子多

SK 143
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ 2 ~ 5 mm) 炭化物粒子若干
2 褐色土 ロームブロック (φ 2 ~ 5 mm) 多

SK 161
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) 少 ローム粒子多
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm) ・ローム粒子やや多
3 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 30 mm) ・ローム粒子若干
4 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) 若干 ローム粒子やや多
5 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 20 mm) 多 ローム粒子やや多
6 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) ・ローム粒子若干
7 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) 極多 ローム粒子若干
8 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) ・ローム粒子少

SK 162
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 2 ~ 3 cm) ・ローム粒子 (φ 2 ~ 5 mm) 多
2 褐色土 ロームブロック (φ 2 ~ 3 cm) 極多 ローム粒子 (φ 2 ~ 5 mm) 多

SK 171
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm) 若干 ローム粒子少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 20 mm) やや多 ローム粒子若干

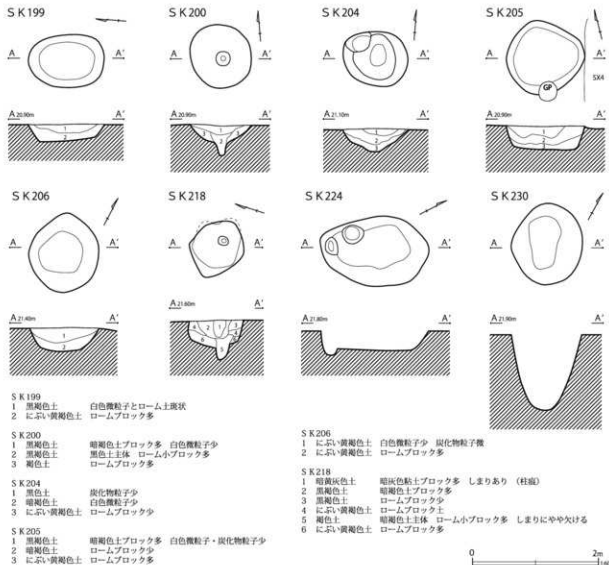
SK 196
1 暗褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック・白色微粒子少
2 暗褐色土 暗褐色土ブロック多 炭化物粒子少
3 にぶい・黄褐色土 ロームブロック多 炭化物粒子少

SK 197
1 暗褐色土 暗褐色土ブロック多 白色微粒子少 炭化物粒子微
2 褐色土 暗褐色土ブロックとロームブロックの混土 炭化物粒子少
3 にぶい・黄褐色土 ロームブロック多

SK 198
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少
2 褐色土 暗褐色土とローム土の混土

0 2m
1:100

第40図 土壌 (1)



第41図 土壌(2)

第200号土壌 (第41図)

第2次調査区東側のI-10グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径1.00m、短径0.95m、深さ0.45mである。断面形はU字形で、底面の中央に小ピットが穿たれている。

小ピットは、土層断面の観察から柱痕跡である可能性が高い。覆土の状態から縄文時代の遺構と判断した。

第204号土壌 (第41図)

第2次調査区東寄りのI-11グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.00m、短軸0.85m、深さ0.35mである。長軸方位はN-82°

ーEを指す。

覆土は3層に分層され、概ね自然堆積を示す。遺物は出土していないが、覆土の状態から縄文時代に帰属すると考えられる。

第205号土壌 (第41図)

第2次調査区東寄りのH-11グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.23m、短軸1.10m、深さ0.35mである。断面形は逆台形で、長軸方位はN-75°ーWを指す。

覆土は最下層の第3層がロームブロックを多量に含み、人為的な埋戻しの可能性がある。覆土の状態から縄文時代の遺構と判断した。

第206号土壌 (第41図)

第2調査区中央のH・I-9グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸1.25m、短軸1.10m、深さ0.35mである。断面形は逆台形で、長軸方位はN-22°-Wを指す。覆土は2層に分層され、概ね自然堆積を示す。

第218号土壌 (第41図)

第2調査区中央のI-8グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.00m、短軸0.90m、深さ0.60mである。断面形は逆台形で、長軸方位はN-80°-Eを指す。底面の中央にビットが穿たれる。土層断面に柱痕跡が確認された。

第224号土壌 (第41図)

第2調査区中央のG-8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.70m、短軸1.10m、深さ0.40mである。断面形は逆台形で、長軸方位はN-26°-Eを指す。底面は平坦であるが、壁際に小ビットが穿たれていた。

第230号土壌 (第41図)

第2調査区中央西寄りのF-6グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.30m、短軸1.10m、深さ1.20mである。断面形はU字形で、長軸方位はN-27°-Wを指す。断面形状から推して、陥穴と考えられる。

土壌出土遺物**土器 (第43図)**

土壌から出土した縄文土器を一括した。なお、第20号土壌以外は平面形や覆土の状態から中・近世の土壌と考えられるものであり、いずれも混入

であろう。

第20号土壌出土遺物 (第43図)

11は堀之内1式新段階の深鉢口縁部である。口縁内湾して口端外面に1条の沈線が巡る。胴部は斜行する平行沈線で区画し、密な集合沈線の渦巻文を描く。

第102号土壌出土遺物 (第43図)

12は加曾利EⅣ式である。胴部中段で、楕円形の区画文を上下対向して描く。地文縄文は施文しない。13は無文地に縦位の沈線文を描く胴部で、同時期のものと考えられる。

第132号土壌出土遺物 (第43図)

14は縄文のみ施文される胴部で、加曾利B式と考えられる。

第154号土壌出土遺物 (第43図)

15は地文のみ施文される胴部である。地文はR・L単節縦位回転の縄文である。

第158号土壌出土遺物 (第43図)

16は称名寺Ⅱ式で、列点文を伴う平行沈線でJ字文を描く。

(5) ビット・グリッド出土遺物

縄文時代のビット及び中・近世の遺構や遺構外から出土したものを一括する。早期から後期までの土器が出土している。

土器 (第43図)

17は田戸下層式で、横位の平行沈線文と貝殻腹縁圧痕文を描く胴部である。18は田戸上層式で、胎土に繊維を混入する。口縁下に平行沈線が巡り、胴上半部には平行沈線による菱形文を描く。

SJ3 SK1

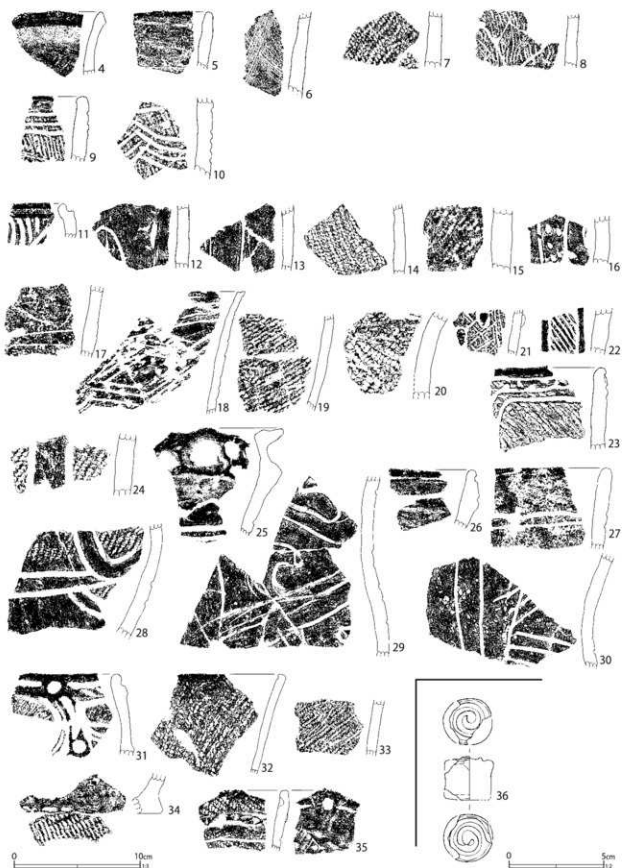
SJ4

埋篋1



0 10cm 1m

第42図 出土遺物(1)



第43図 出土遺物(2)

19・20は黒浜式とみられる。19はL無節、20はRL単節の縄文を横位回転で施文する。胎土に繊維を含む。

21・22は諸磯c式である。半裁竹管状工具の沈線で格子目文を描き、縦長の貼り瘤を配する。22は半裁竹管状工具の平行沈線間に斜位の集合沈線を施文する。

23は連弧文系の深鉢口縁部で、交互刺突を伴う平行沈線が巡り、胴部には平行沈線の懸垂文が垂下する。地文はLR単節縦位回転の縄文である。

24は加曾利EⅢ式で、幅広の磨り消し懸垂文を描く。地文はRL単節縦位回転の縄文である。

25～31は堀之内Ⅰ式である。25は波状口縁で、口縁下に段をもつ。波頂部直下に大小の盲孔を配し、左右に沈線が巡る。頸部は無文で、胴部との境を平行沈線により区画する。26は水平口縁で、やはり口縁下に段をもち、平行沈線の区画が巡る。27も水平口縁だが、口縁下に段をもたず、頸部に平行沈線が巡る。

28は磨り消し縄文の深鉢胴部である。平行沈線により縦長の楕円文を描き、下端を弧状モチーフによって左右連繫する。地文はRL単節の縄文である。

29・30は地文をもたない沈線のみで土器である。29は平行沈線の紡錘文を斜行する平行沈線で多段に連繫して三角形の区画を作り出し、内部に対向方向の小J字文を配する。30は3本沈線の懸垂文が垂下し、間を斜位の3本沈線で多段に区画して三角形の区画文を構成する。

31は浅鉢である。口縁直下に1条の沈線と刻みをもつ隆帯が巡る。胴上半部には楕円形の区画文が並び、接点には上下に盲孔をもつ弧状の単沈線を描く。

32・33は縄文のみの破片で、やはり堀之内式期のものである。32の口縁は僅かに外反しつつ直線的に開く朝顔形の深鉢で、口唇内面に1条の沈線が巡る。33は胴部である。いずれも地文はLR単

節横位回転の縄文である。

34は無文の底部で、底面に網代痕をもつ。35は加曾利B式で、波状口縁の深鉢である。波頂部に小突起をもち、内面に盲孔をもつて、左右に1条の沈線が巡る。外面には押圧を伴う浮線が巡る。胴上半部には平行沈線文を描く。地文はRL単節横位回転の縄文である。

36は土製耳飾である。側面のくびれが比較的小ない円筒形で、表裏ともに渦巻文を描く。

石器 (第44図)

37・38は石鏃である。

37はJ-8グリッドP2から出土した。平基の石鏃で、右翼を折損するが、本来端正な二等辺三角形であったと思われる。現存部分の長さ2.15cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm、重量0.5gで、石材は黒曜石である。

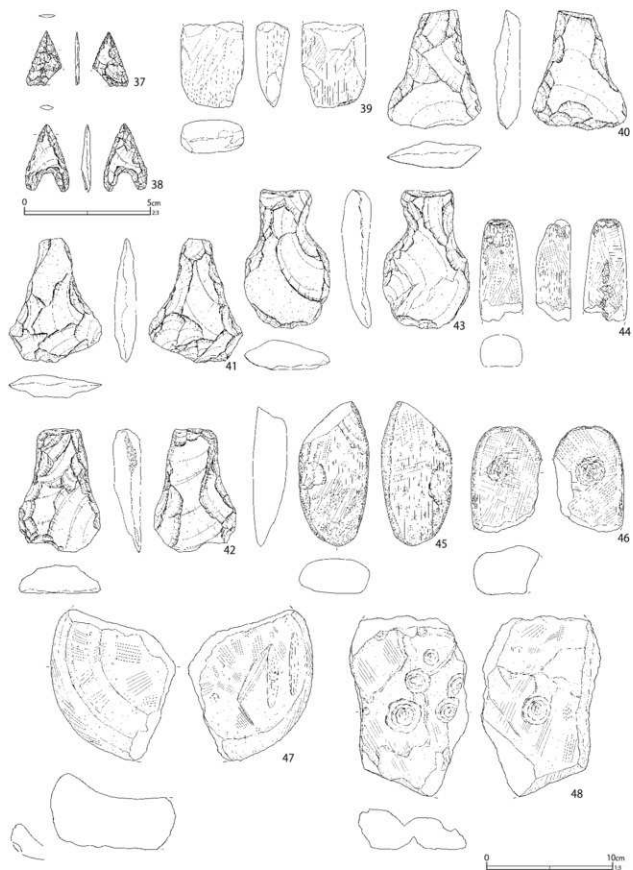
38はJ-12グリッドP8から出土した。完形品で、基部がV字に深く切れ込む凹基の石鏃である。長さ2.6cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量1.3gで、石材はチャートである。

39は磨製石斧である。断面定角形で、中段から基部側を折損し、刃部に刃こぼれがみられるほか、表面の剥落が著しい。現存長6.7cm、幅5.0cm、厚さ2.5cm、重量100.0gで、石材は安山岩である。

40～43は打製石斧である。40は撚形で、基部末端に自然面を残し、腹面に打割面が存在する。刃部は腹面側のみに調整剥離を施した片刃となっている。長さ9.4cm、幅7.45cm、厚さ2.05cm、重量146.0gで、石材はホルンフェルスである。

41は撚形で、背面基部側に自然面、腹面に打割面を残す。長さ9.85cm、幅7.4cm、厚さ2.2cm、重量134.0gで、石材はホルンフェルスである。

42は撚形で、基部と刃部の幅の差が比較的小ない。腹面に広く打割面を残し、基部両側縁に顕著な潰し加工がみられる。長さ9.8cm、幅6.5cm、厚さ2.2cm、重量134.0gで、石材はホルンフェルスである。



第44図 出土遺物(3)

43は撓形で、両側縁基部側にくびれをもち、刃部は楕円形で、背面に自然面、腹面に打割面を残す。長さ10.95cm、幅6.8cm、厚さ2.3cm、重量159.6gで、石材は砂岩である。

44～46は磨石である。

44は棒状の磨石で、断面長方形で4面使用する。胴部中段で短軸方向に折損する。長軸一端に細かな剥離や叩打が集中するほか、裏面の中央部付近にも中心線に沿って細かな叩打痕が並ぶ。現存長さ8.1cm、幅3.4cm、厚さ2.8cm、重量235.9gで、石材は安山岩である。

45は楕円形の磨石で、長軸一端を斜め方向に折損する。断面長方形で、表裏に使用面をもち、表裏とも側縁からの剥離がみられる。現存長さ11.4cm、幅5.6cm、厚さ2.8cm、重量235.9gで、石材は安山岩である。

46は楕円形の磨石で、長軸一端から右側縁にか

けて折損する。表裏に使用面をもち、側縁部にも擦痕がみられる。凹石に転用されており、両面とも中央に一箇所の凹孔をもつ。また、長軸側の端部にも叩打痕がみられる。現存長さ8.4cm、現存幅5.6cm、厚さ4.2cm、重量326.1gで、石材は安山岩である。

47は石皿片である。円形ないし楕円形の石皿であったとみられるが、現状で4分の1程度が残存している。裏面は平坦で、凹石の凹孔がみられるほか、槌状の溝が3箇所に走っており、砥石としても使用されたものと考えられる。現存部分の長さ11.9cm、幅9.8cm、厚さ6.75cm、重量822.9gで、石材は安山岩である。

48は凹石である。表裏に複数の凹孔をもつ、いわゆる「雨垂れ石」で、また表裏に擦痕をもつ。現存長さ14.30cm、現存幅9.35cm、厚さ3.3cm、重量595.3gで、石材は緑泥片岩である。

3. 中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構は調査区全体で掘立柱建物跡2棟、竪穴状遺構1基、火葬跡1基、井戸跡4基、炉跡1基、溝跡80条、土壌266基、柵列跡4条、ビット3,071基を検出した。近世の遺構は調査区内に広く分布するのにに対し、中世の遺構は第21号溝跡周辺から東側にかけて分布している。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第45・46図)

第1次調査区北側のQ-7・8グリッドに位置する。桁行5間、梁行1間の側柱建物跡である。規模は桁行寸法9.00m、梁行寸法3.30mで、東西方向に細長く、桁行きの方位はN-79°-Eを指す。桁行の柱間寸法は等間とはならず、1.50m・1.80m・2.10mと不揃いである。柱筋については比較的良く通る。

柱穴は円形を基調とし、径40～80cmと比較的大きい。深度も20～70cmと様でないが、50cmを超えるものが大部分である。土層観察では第1層及

び第3層の暗褐色土が柱痕跡、第4層のロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が充填土に相当する。また、P6・P8のように建て替えを窺わせる柱穴も認められた。

遺物は陶器天目茶碗、釘が出土した (第47図)。

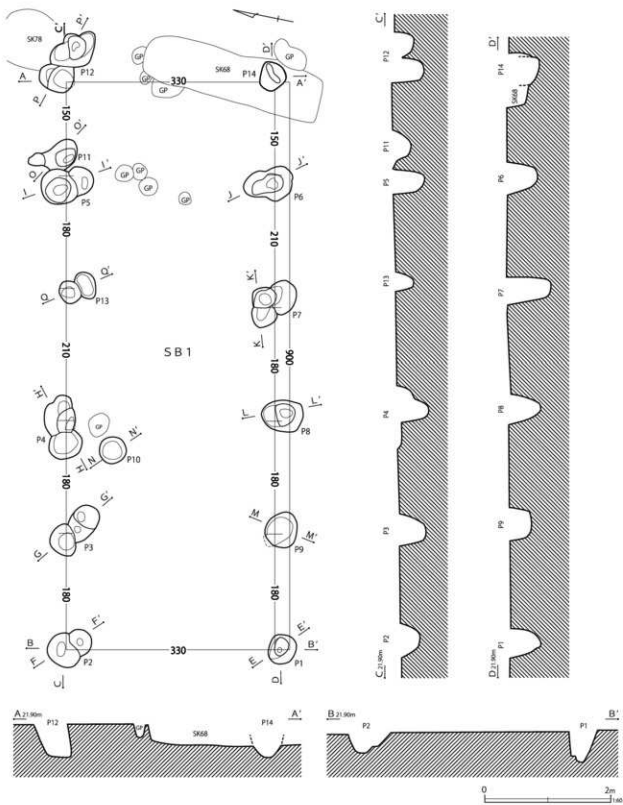
1は瀬戸美濃産の鉄軸天目茶碗で、17世紀前半の所産である。2はいわゆる頭巻き釘で、P13からの出土である。

時期は遺物が少なく明確に示得ないが、天目茶碗の年代から近世に帰属するものと判断される。

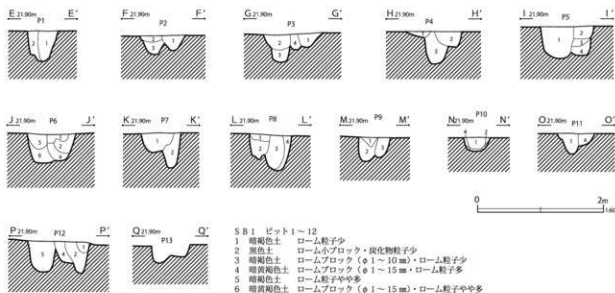
第6号掘立柱建物跡 (第48図)

第3次調査区西端のI-12・13グリッドに位置する。西側が調査区域外にかかるため全体の規模や形状については不明であるが、桁行3間以上、梁行2間の側柱建物跡になる。検出した範囲の規模は桁行寸法2.40m、梁行寸法3.00mである。桁行の方位をN-82°-Eに採る東西棟である。

柱間寸法は、桁行が1.20m等間、梁行が1.50m



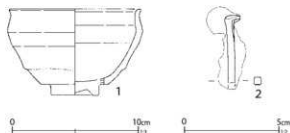
第45图 第1号掘立柱建物跡(1)



第46図 第1号掘立柱建物跡(2)

等間に揃い、柱筋も比較的良く通る。柱穴は円形もしくは楕円形で、規模は径36～68cm、深さ50～85cmで、掘り込みが全体に深い。覆土は第1・7層の暗褐色土が柱痕跡、その他が充填土に相当する。

遺物が出土していないため、時期については明確にしないが、覆土の状態から中・近世に属するものと判断した。



第47図 第1号掘立柱建物跡出土遺物

第8表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	天目茶碗	(10.2)	6.0	—	H I K	15	普通	灰黄	瀬戸・美濃 鉄釉 17C前半	
2	鉄製品	釘	長さ[3.5]cm	幅0.4cm	厚さ0.4cm	重さ9.4g				P13	

(2) 竪穴状遺構

第3号竪穴状遺構 (第49図)

第1次調査区北西端のN・O-3グリッドに位置する。平面形は長方形で、北西隅・北東隅はほぼ直角に屈曲しているが、南西隅・南東隅は隅丸気味となる。規模は長軸6.30m、短軸4.35m、深さ0.03mである。長軸方位はN-27°-Eを指す。

床面は概ね平坦であったが、特に踏み固められた硬化面はなく、炉跡やピット等の施設も検出されなかった。

覆土はロームブロック・焼土ブロック・炭化物

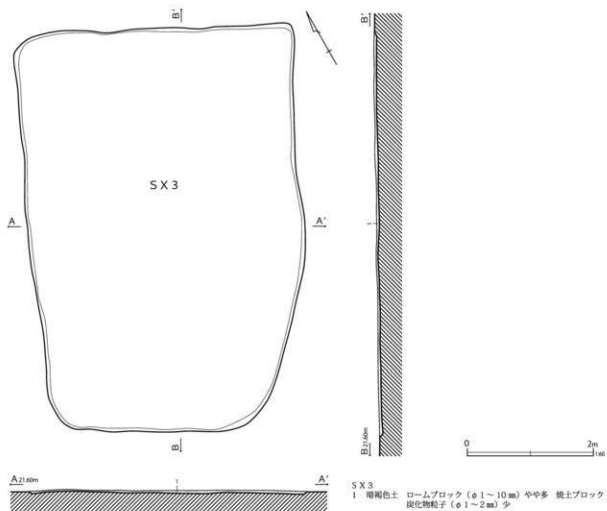
粒子を含む暗褐色土の単一層が、薄く堆積している。

遺物がまったく出土していないため時期は不明である。ただし、第41・42・48号溝跡に囲まれた区画の中に存在していること、また覆土の状態から中・近世の遺構と判断した。なお、遺構の性格については特定し得ないが、作業小屋的な施設と想定される。

(3) 火葬跡

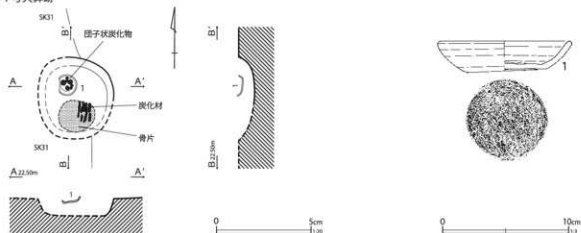
第1号火葬跡 (第50図)

第1次調査区のM-13グリッドに位置する。第



第49図 第3号竪穴状遺構

第1号火葬跡



第50図 第1号火葬跡・出土遺物

第9表 第1号火葬跡出土遺物観察表(第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	かわらけ	皿	10.3	2.4	6.2	AH1	90	普通	にぶい褐	SK31 No.1 内外面煤付着 底部回転系切刃 近世	22-1

ムブロックの混入は少ないが、固くしまっていることから故意に埋め戻されたと思われる。

遺物は凝灰岩製の砥石（第52図1）が出土した。時期を示す遺物はないが、覆土の状態から中・近世に帰属するものと判断した。

第2号井戸跡（第51図）

第1次調査区北側中央のQ-7グリッドに位置する。東側約6mに第1号掘立柱建物跡が存在する。平面形は円形で、断面形はやや袋状気味となる円筒形である。規模は上端で径0.80m、深さは1.80m以上であるが、調査の安全性を考慮し、底面までの掘削を断念した。

覆土は、しまりのない暗褐色土を主体とする。

遺物は覆土中から寛永通寶（文銭 第52図2）が出土しており、覆土の状態から近世に帰属するものと判断した。

第3号井戸跡（第51図）

第2次調査区中央のI-9グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は上端部が漏斗状に開いた円筒形である。規模は上端で径2.05×1.65m、

深さは1.00m以上である。

覆土は4層に分層され、黒色土とロームブロックの混土層の第3層や被熱ロームブロックを含む第2層は故意に埋め戻されたものと思われる。

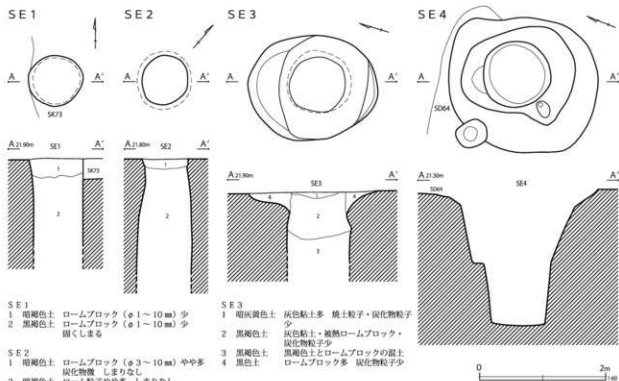
遺物はまったく出土していないため時期は不明であるが、覆土の状態から近世に帰属するものと判断した。

第4号井戸跡（第51図）

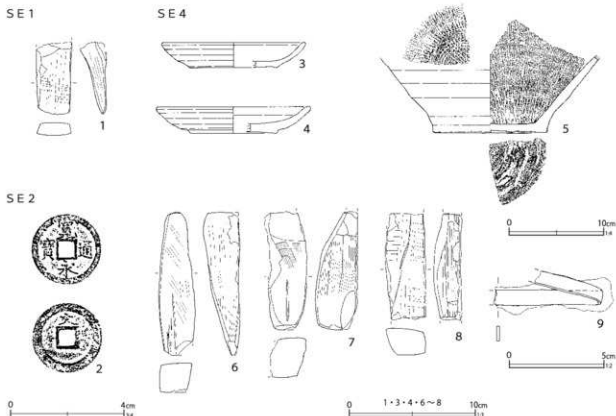
第2次調査区中央やや西寄りのI・J-7グリッドに位置する。南北の第52号溝跡と東西の第64号溝跡の交差する箇所にあたる。平面形は不整形であるが、井戸の内部は略円形である。断面は漏斗状に開いた円筒形で、北西側壁面にはステップ状の掘り込みが認められた。規模は上端部で径2.35×2.10m、井戸内部で径1.05m、深さ2.10mである。

遺物は陶器皿・播鉢、砥石、棒状鉄製品（第52図3～9）が出土した。

3・4は瀬戸美濃産の長石釉の掛った皿である。時期は17世紀前半から中葉に位置づけられる。



第51図 井戸跡



第52図 井戸跡出土遺物

第10表 井戸跡出土遺物観察表(第52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	石製品	砥石	長さ5.7cm	幅2.8cm	厚さ2.1cm	重さ29.8g	凝灰岩			SE1 砥面は4面だが主として表裏2面を使用	
3	陶器	皿	11.2	2.0	(6.8)	H I	30	普通	灰黄	SE4 美濃焼 長石釉 底面目痕 削り出し高台 17C前半～中葉頃	
4	陶器	皿	12.0	2.1	(6.8)	I K	30	普通	暗灰黄	SE4 美濃焼 長石釉 見込目痕 底面回転ベアズ 17C前半～中葉頃	
5	陶器	播鉢	—	[8.3]	(12.0)	E H I K	25	良好	にぶい黄橙	SE4 丹波焼 17C後半～18C前半	
6	石製品	砥石	長さ11.3cm	幅2.8cm	厚さ2.7cm	重さ96.8g	凝灰岩			SE4 砥面は4面 一部に櫛歯状工具痕 V字状の刃物痕 被熱	
7	石製品	砥石	長さ9.3cm	幅3.0cm	厚さ3.3cm	重さ115.5g	凝灰岩			SE4 砥面は3面だが主として表面を使用 櫛歯状工具痕 被熱	
8	石製品	砥石	長さ8.4cm	幅3.2cm	厚さ2.1cm	重さ82.0g	凝灰岩			SE4 砥面は4面だが主として2面を使用 櫛歯状工具痕	
9	鉄製品	棒状品	長さ9.3cm	幅0.8cm	厚さ0.2cm	重さ9.3g				SE4 大きく屈曲する	

第11表 井戸跡出土銭貨観察表(第52図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
2	銭貨	寛永通寶	25.00	24.88	1.23～1.30	2.8	SE2 新文銭 江戸 1668～1683年	

5は丹波産の播鉢で、櫛歯状工具による細かい摺目をもつ。時期は17世紀後半から18世紀前半に位置づけられる。

6～8は凝灰岩製の砥石である。9は棒状品を折り曲げた不明鉄製品で、用途は不明である。

出土遺物の様相から、遺構の時期は近世と判断される。

(5) 炉跡

第1号炉跡(第53図)

第3次調査区北西にあたるJ-12グリッドの北

東隅に検出した。地山ロームが楕円形に焼土化した地床炉である。規模は長軸1.21m、短軸1.00mである。

底面は被熱により硬化した部分は認められず、浅く皿状に掘り込まれていた。覆土は焼土粒子を多量に含む暗褐色土の単一層である。

遺物が出土していないため時期は不明であるが、周囲に存在する第241・242号土壇やピットの状況から中・近世の遺構と判断した。

(6) 溝跡

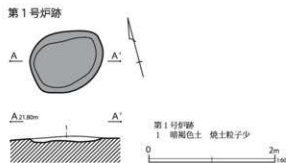
中・近世の溝跡は、調査区全体で80条を検出した。このうち第21・22号溝跡からは中・近世の遺物がまともに出土しているものの、他の溝跡からはほとんど遺物が出土していない。そのため詳細な時期判定は難しく、他の遺構との重複関係や位置関係、及び覆土の状態などからそれぞれの時期を推定するほかない。

第21号溝跡は、第1次調査区北側から第2次調査区を南北に縦断し、第2次調査区南端で東にほぼ直角に折れ曲がり、第3次調査区から第1次調査区東側の調査区南辺に沿って開削された大規模な葉研堀である。方形竈跡、もしくは普門寺に関連する堀跡と推定され、出土遺物からみて中世段階に開削されたものであることは明らかである。

出土遺物が少ないため確証は得られないが、第21号溝跡の東側に中世の溝跡が多く分布し、西側には近世の区画溝が分布する傾向が窺われる。

中世の溝跡としては、第21号溝跡に直交する東西溝の第23・42・60・69号溝跡、並行する南北溝の第34・36号溝跡、東側に隣接し、L字形に屈曲する第28・29号溝跡などが、区画溝を構成するものと考えられる。

近世の溝跡には、第1次調査区西側を緩やかに蛇行しながら南北に縦断する第48・52号溝跡に接続する第70・71号溝跡に対して、直交して延びる東西溝の第41・43・46・51・55・56・64・67・68号溝跡などは短冊形地割に伴う区画溝である。



第53図 第1号炉跡

以下、遺物を出土した溝跡を中心に略述する。

第1号溝跡 (第31・56・57図)

第1次調査区東側の南辺に沿って東西に延びる葉研堀である。第3次調査の結果、第21号溝跡と同一の溝跡であることが明らかとなったが、調査時の記録との齟齬を防ぐため、遺構名はそのままとして報告する。

遺物は古瀬戸の天目茶碗・常滑甕・瓦質土器鉢、鉢、碗形鉢台、板碑 (第59図1～7) などが出土した。時期は、遺物から推して中世に帰属するものである。

第2号溝跡 (第31図)

第1次調査区東端のK・L-25グリッドに位置し、北西から南東に向かって直線的に走行する。

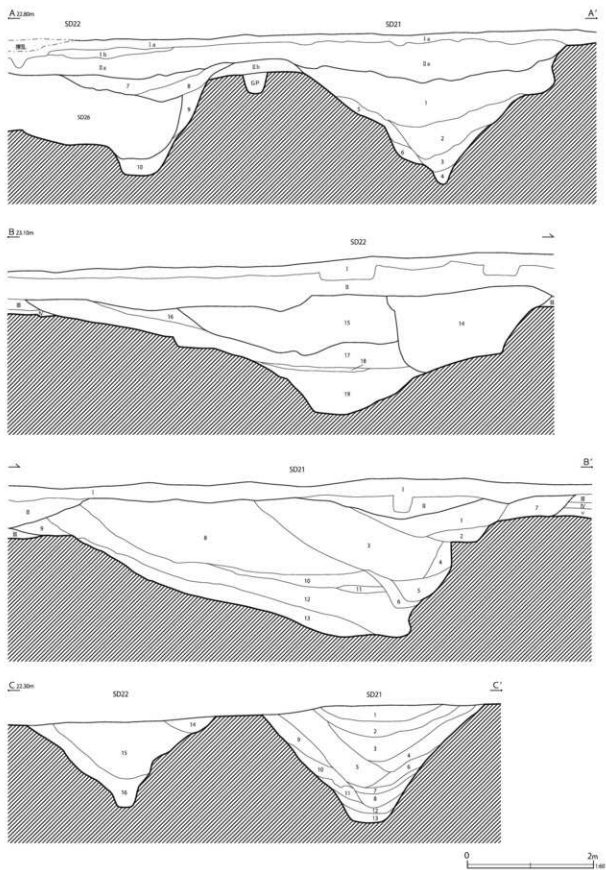
覆土中から常滑の片口鉢の底部片 (第59図8) が出土した。時期は、遺物及び覆土の状態などから中世に帰属すると思われる。

第3号溝跡 (第31図)

第1次調査区東端のK・L-25グリッドに位置し、第2号溝跡によって一部壊される。北から南に向かって延び、東へ直角に折れ曲がり調査区域外に延びる。時期は、遺構の重複状況及び覆土の状態などから中世に帰属する。

第7号溝跡 (第31図)

第1次調査区東側のK-22～25グリッドに位置する、南にクランク状に張り出した東西溝である。遺物は出土していないが、遺構の重複状況及び覆土の状態から中世に帰属すると思われる。



第54図 第21・22号溝跡(1)

SD21・22 (A-A')

1 a 灰褐色シルト	ヤドロ層
1 b 暗灰色土	灰褐色シルト状 灰褐色シルトブロック (φ2~5mm)
	若干 ロームブロック (φ2~5mm) 少
II a 暗褐色土	灰褐色土ブロック少
II b 暗褐色土	ローム粒子多
1 暗褐色土	ロームブロック (φ2~5mm)・ローム粒子 (φ2~5mm)・炭化物粒子少
2 黒褐色土	ロームブロック (φ2~5mm)・ローム粒子 (φ2~5mm) 少
3 黒褐色土	ロームブロック (φ2~5mm)・ローム粒子 (φ2~5mm) 多
4 褐色土	ロームブロック (φ2~5mm) 多
	ローム粒子 (φ2~5mm) 多
5 褐色土	ロームブロック (φ2~5mm)・ローム粒子 (φ2~5mm) 極多
6 褐色土	ロームブロック (φ2~5mm) 極多
7 暗褐色土	ローム小ブロック (φ2mm未満)・焼土粒子・炭化物粒子少
	ややしまりに欠ける やや粘質
8 褐色土	褐色土主体 ロームブロック (φ2~5mm) 多
	ややしまりに欠ける やや粘質
9 暗褐色土	暗褐色土とロームブロックの混生 ややしまりに欠ける
10 明褐色土	暗褐色土ブロック多 しまりあり 粘質
(B-B')	
I 暗褐色土	耕作土
II 暗褐色土	浅層A軽石粒子・焼土粒子・炭化物粒子多
III 暗褐色土	浅層A軽石粒子 焼土粒子・炭化物粒子少
IV 暗褐色土	暗褐色土主体 ヤドロ粒子 少 やや粘質
V 暗褐色土	ソフトローム
1 暗褐色土	ローム小ブロック (φ1mm未満)・炭化物粒子少 粘質
2 暗褐色土	ロームブロック (φ5mm程度) 多 ややしまりに欠ける
	粘質
3 暗褐色土	ローム小ブロック (φ1mm未満) 多 炭化物粒子少
	しまりに欠ける やや砂質
4 暗褐色土	ローム小ブロック (φ1mm未満) 多 ややしまりに欠ける
	砂質
5 暗褐色土	暗褐色土主体 ローム小ブロック (φ1mm未満) 少
	しまりややあり やや砂質
6 暗褐色土	暗褐色土ブロック主体 ローム小ブロック (φ1mm未満) 少
	やや砂質
7 暗褐色土	ローム小ブロック (φ2mm未満)・暗褐色土ブロック多
	しまりあり 粘質
8 暗褐色土	炭化物粒子少 しまりややあり 粘質
9 暗褐色土	暗褐色土とロームブロックの混生 やや粘質
10 暗褐色土	ローム粒子と暗褐色土粘土粒子多 粘質

11 にぶい黄褐色土	ローム粒子・暗褐色土粘土粒子多 粘質
12 にぶい黄褐色土	炭化物粒子・白色粘土粒子 しまりあり 粘質
13 黒褐色土	暗褐色土主体 ロームブロック・黒褐色土ブロック少
	しまりややあり 粘質
14 灰褐色土	焼土粒子・炭化物粒子少 近世陶磁器多
15 灰褐色土	焼土粒子・炭化物粒子多 近世陶磁器・瓦多
16 暗褐色土	ローム小ブロック (φ2mm未満) 多 しまりあり
	やや砂質
17 暗褐色土	ローム小ブロック (φ2mm未満) 少 しまりなし 粘質
18 暗褐色土	ロームブロック層状 しまりあり 粘質
19 暗褐色土	暗褐色土ブロック多 ロームブロック しまりなし
	粘質

(C-C')

1 にぶい黄褐色土	ローム小ブロック (φ1mm未満) 多 ややしまりに欠ける
	やや砂質
2 暗褐色土	暗褐色土主体 ローム小ブロック (φ1mm未満) 少 ややしまりに欠ける
	やや砂質
3 暗褐色土	暗褐色土小ブロック・ローム小ブロック (φ1mm未満) 少
	ややしまりに欠ける やや粘質
4 にぶい黄褐色土	ローム小ブロック (φ1mm未満) 多 ややしまりに欠ける
	やや砂質
5 暗褐色土	炭化物粒子少 しまりあり 粘質
6 にぶい黄褐色土	ローム小ブロック (φ1mm未満) 多 ややしまりに欠ける
	やや砂質
7 黒褐色土	ローム小ブロックと黒褐色土小ブロックの混生 しまり
	ややあり やや粘質
8 暗褐色土	ローム小ブロック (φ1mm未満) 多 ややしまりに欠ける
	やや砂質
9 暗褐色土	暗褐色土ブロックとロームブロックも混生 しまりあり
	粘質
10 黒褐色土	暗褐色土主体 黒褐色土小ブロック (φ1mm未満) 多
	粘質
11 暗褐色土	ロームブロック (φ2mm程度) 多 ややしまりに欠ける
	粘質
12 暗褐色土	ロームブロックと暗褐色土ブロックの混生 ややしまりに欠ける
	粘質
13 暗褐色土	暗褐色土ブロックとロームブロックの混生 ややしまりに欠ける
	粘質
14 暗褐色土	暗褐色土ブロック (φ2mm程度) 多 浅層A軽石粒子 (φ5mm程度) 少 ややしまりに欠ける 粘質
15 暗褐色土	暗褐色土ブロックとロームブロックの混生 ややしまりに欠ける 粘質
16 暗褐色土	暗褐色土ブロック主体 ローム小ブロック (φ2mm未満)・炭化物粒子少

第55図 第21・22号溝跡(2)

第21号溝跡 (第29~31・54~57図)

第1次調査区から第2次調査区にかけて南北に直線的に延び、第2次調査区南端で直角に向きを東へ変え、第3次調査区から第1次調査区東側の南辺に沿って延びる薬研堀である。

調査区内における規模は南北辺142.40m、東西辺169.00m (第1号溝跡を含む) である。幅2.40~5.00m、深さ1.00~1.70mの断面V字形である。覆土は概ね自然堆積を示しているが、埋没後に掘り直しを行っている部分もみられた。

遺物は青磁碗、陶器皿・鉾皿・平碗・甕・片口鉢、羽釜、瓦質土器片口鉢、砥石、石臼、飾金具、碗形鍛冶滓、板碑、銭貨 (第60~65図1~62) などの中世遺物がまとめて出土したほか、覆土上層を中心に近世陶磁器類が廃棄されていた (第66・67図1~35)。開削時期は、遺物及び覆土の状態などから中世に遡る。

第22号溝跡 (第29・54・55図)

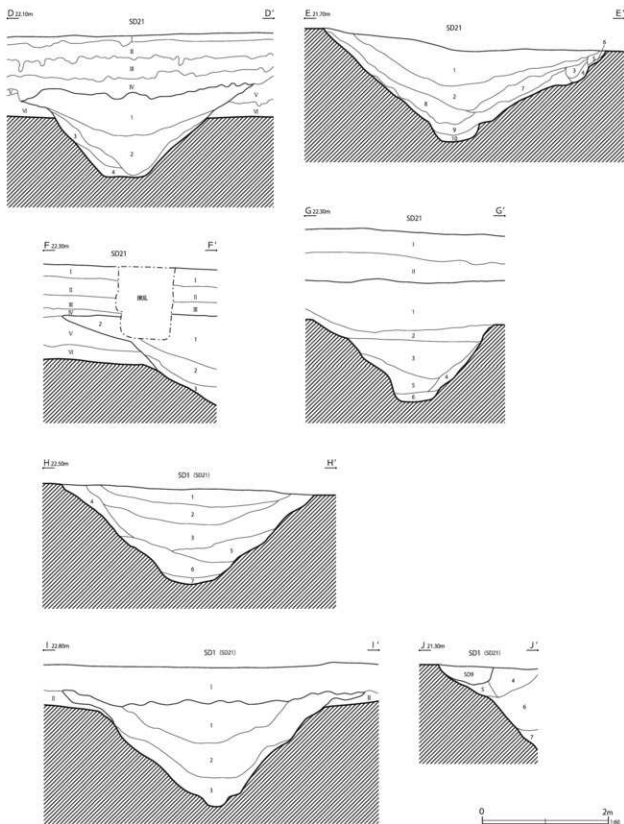
第1次調査区北側のL~R-9、Q~S-8グリッドに位置する。第21号溝跡の西側を併走しながら、南側で緩やかにカーブして接続する。規模は検出長70.00m、幅1.50~3.00m、深さ0.8~1.70mの断面V字形である。

遺物は古瀬戸瓶子や常滑甕・天目茶碗、板碑などの中世遺物を含むものの、主体は陶磁器、瓦、砥石などの近世遺物 (第68~73図1~74) であることから、開削時期は近世と考えられる。

第23号溝跡 (第29図)

第1次調査区北側のO-10~12グリッドに位置する。第21号溝跡に直交する東西溝で、長さ22.20m、幅1.90~2.30m、深さ0.60~0.90mである。断面V字形で、覆土は自然堆積を示す。

遺物は中世のかわかけ皿、常滑の片口鉢 (第74図1・2) が出土しており、中世に帰属する。



第56図 第1・21号溝跡(1)

S D21 (D-D')

I 暗灰褐色土	耕作土・浅層A軽石粒子多 粘質
II 灰褐色土	灰色粘土ブロック・浅層A軽石粒子多 焼土粒子・炭化物粒子・ヤドロ粒子少 粘質
III 暗褐色土	灰色粘土少ブロック多 やや粘質
IV 暗褐色土	暗褐色土主体 ヤドロ粒子少 やや粘質
V 暗褐色土	白色炭粒少
VI 暗褐色土	ローム土塊
1 暗褐色土	ローム粒子 炭化物粒子少
2 暗褐色土	ローム粒子 炭化物粒子微
3 暗褐色土	黒褐色土主体 ローム粒子・暗褐色土粒子少
4 暗褐色土	黒褐色土ブロックとロームブロックの混在

(E-E')

1 黄灰褐色土	炭化物粒子多 焼土粒子微
2 黒褐色土	ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子少
3 黒褐色土	ローム小ブロック多 しまり強い
4 暗灰褐色土	灰黄色土主体 ロームブロック多 しまり強い
5 オリブ褐色土	ローム粒子多
6 オリブ褐色土	ローム小ブロック多
7 オリブ褐色土	ローム小ブロック多 やや粘質
8 黒褐色土	ローム粒子少 炭化物粒子多
9 オリブ褐色土	暗褐色土ブロック多
10 暗オリブ褐色土	暗褐色土ブロックとロームブロックの混在

(F-F')

I 暗灰黄褐色土	耕作土
II 暗灰黄褐色土	灰白色粘土多 炭化物粒子・ヤドロ粒子少
III 暗オリブ褐色土	灰白色粘土・炭化物粒子少
IV 暗褐色土	暗褐色粘質土・炭化物粒子・焼土粒子少
V 暗褐色土	炭化物粒子少 しまりあり
VI 暗褐色土	白色炭粒少 しまりあり
1 褐色土	暗褐色土ブロック多 炭化物粒子少
2 黒褐色土	暗褐色土ブロックと黒褐色土ブロックの混在
3 黒褐色土	ロームブロック多

(G-G')

1 暗褐色土	砂質
II 灰褐色土	砂質
1 暗褐色土	ローム粒子若干
2 暗褐色土	ローム粒子少
3 暗褐色土	ローム粒子少
4 暗褐色土	ローム粒子多
5 暗褐色土	ロームブロック・ローム粒子多
6 褐色土	ローム粒子少
7 黒褐色土	粘質

S D1 (S D21) (H-H')

1 暗褐色土	ローム粒子多
2 暗褐色土	ローム粒子少
3 黒褐色土	ローム粒子若干
4 褐色土	ロームブロック・ローム粒子多
5 暗褐色土	ローム粒子多
6 褐色土	ローム小ブロック (φ 2 cm未満)・ローム粒子多
7 黒褐色土	ローム粒子若干 粘質

(I-I'・J-J')

1 灰褐色シルト	ロームブロック (φ 1~20 mm)・ローム粒子若干
II 暗褐色土	灰色シルトブロック (φ 1~30 mm)・ロームブロック (φ 1~2 mm) 少
2 暗褐色土	ロームブロック (φ 1~20 mm) やや多 炭化物粒子少
3 暗褐色土	ロームブロック (φ 1~20 mm) やや多 炭化物粒子少
4 暗褐色土	ローム粒子 (φ 2~5 mm) 少
5 暗褐色土	ロームブロック (φ 1~3 cm)・ローム粒子 (φ 2~5 mm) 少
6 暗褐色土	ロームブロック (φ 1~3 cm)・ローム粒子 (φ 2~5 mm)・炭化物粒子 (φ 2~5 mm) 多
7 暗褐色土	ローム粒子 (φ 2~5 mm) 多

第57図 第1・21号溝跡(2)

第25・26号溝跡 (第29・58図)

第1次調査区北辺に沿って北東から南西に向かって併走する大きな溝跡である。遺物は瀬戸美濃産の丸碗形片口鉢、在地産の焙烙、茶臼の下臼(第74図3~5)などが出土した。時期は遺物及び覆土の状態から近世に帰属する。

第27号溝跡 (第29・30図)

第1次調査区から第3次調査区に続く、G~K-13、L-9~12、M-12グリッドに位置する。L字形に屈曲した溝跡で、西端部は第21号溝跡と交差する。土層断面の観察所見では第21号溝跡が埋没した後に開削されていることから、おそらく第22号溝跡に接続するものと思われる。

遺物はかわかけ皿、陶器碗(第74図6~8)が出土しており、近世に帰属する。

第30号溝跡 (第29~31図)

第1次調査区から第3次調査区に続く、H~K-14、J~N-13グリッドに位置する直線的な南北溝である。規模は検出長63.00m、幅0.60~2.10m、深さ0.05~0.50mである。

遺物は青磁碗、陶器碗・有耳壺・播鉢・甕、須

恵器甕、砥石、桃形鍛冶滓(第74図9~16)などが出土した。時期は覆土の状態から近世である。

第34号溝跡 (第29図)

第1次調査区北側のO~Q-10グリッドに位置する。第21号溝跡の東側を併走する南北溝で、常滑の甕(第74図17)が出土したのみである。

時期は遺物及び覆土の状態から中世に帰属すると思われる。

第36号溝跡 (第29図)

第1次調査区北側のO~R-5グリッドに位置する。第21号溝跡に並行して直線的に伸びる南北溝で、北端部は第26号溝跡によって壊される。

遺物は古瀬戸の縁袖小皿、板碑片、砥石(第75図18・19・34~36)が出土した。時期は遺物及び覆土の状態から中世に帰属する。

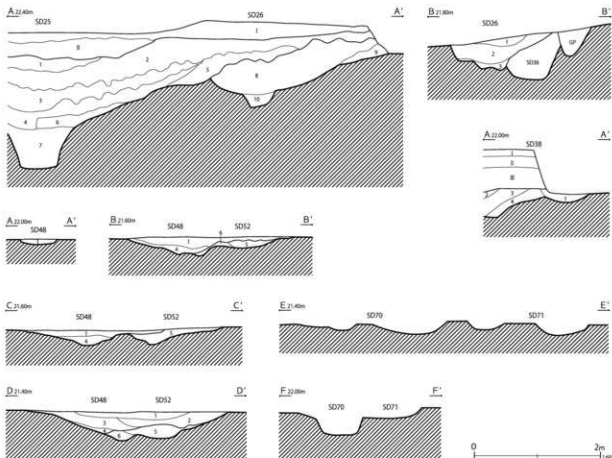
第38号溝跡 (第29・30・58図)

第1次調査区西辺に沿って南北に伸びる溝跡で、I~M-3、M~P-2グリッドに位置する。

時期は覆土の状態から近世に帰属する。

第41号溝跡 (第29図)

第1次調査区北端のP-2、Q-2~5グリッ



- S D 25・26
- 1 灰褐色土 表土
 - 2 灰褐色土 浅間A軽石粒子混状
 - 3 灰褐色土 浅間A軽石粒子中 炭化物粒子中 しまりあり 粘質
 - 4 暗褐色土 浅間A軽石粒子少 炭化物粒子少 しまりあり 粘質
 - 5 暗褐色土 暗褐色土小ブロック (φ 2 cm未満) 中 ロームブロック (φ 5 cm程度) 小 しまりやや強い 粘質
 - 6 暗褐色土 暗褐色土主体 ローム小ブロック (φ 2 cm未満) 中 ややしみに欠ける やや粘質
 - 7 暗褐色土 ロームブロックと黒色帯ブロックの混土 ややしみに欠ける
 - 8 暗褐色土 暗褐色土主体 ローム小ブロック (φ 2 cm未満) 多 炭化物粒子少 しまりあり 粘質
 - 9 暗褐色土 暗褐色土主体 黒色帯ブロック多 ややしみに欠ける 粘質
 - 10 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 cm程度) と黒色帯ブロック (φ 3 cm程度) の混土 ややしみに欠ける 粘質
- S D 26
- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1~3 cm)・ローム粒子 (φ 2~5 mm) 少
 - 2 褐色土 浅間A軽石粒子微 (下層)
 - 3 褐色土 ロームブロック (φ 1~5 cm)・ローム粒子 (φ 2~5 mm) 極多
 - 4 褐色土 ロームブロック (φ 1~5 cm) 少 ローム粒子 (φ 2~5 mm) 多

- S D 38
- 1 灰褐色土 耕作土 粘質土
 - 2 灰褐色土 浅間A軽石粒子・焼土粒子少 炭化物粒子多 粘質
 - 3 灰褐色土 粘土粒子多 炭化物粒子少 粘質
 - 4 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒子少 砂質
 - 5 暗褐色土 暗褐色土小ブロックとロームブロックの混土 しまりあり (道路硬化面)
 - 6 暗褐色土 灰褐色粘土小ブロック・ロームブロック・炭化物粒子少 しまりややあり
 - 7 暗褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック多
- S D 48
- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 2~3 cm)・ローム粒子 (φ 2~5 mm) 少
- S D 48・52
- 1 灰褐色土 灰色シルトブロック (φ 1~10 mm) やや多 ロームブロック (φ 1~15 mm) 若干 炭化物粒子 (φ 1~3 mm) 少
 - 2 灰褐色土 灰色シルトブロック (φ 1~10 mm)・ロームブロック (φ 1~15 mm) 若干 炭化物粒子 (φ 1~3 mm) 少
 - 3 灰褐色土 灰色シルトブロック (φ 1~10 mm) 若干 ロームブロック (φ 1~15 mm) やや多 炭化物粒子 (φ 1~3 mm) 少
 - 4 灰褐色土 灰色シルトブロック (φ 1~10 mm) 少 ロームブロック (φ 1~15 mm) 若干 炭化物粒子 (φ 1~3 mm) 少
 - 5 灰褐色土 ロームブロック (φ 1~30 mm) 極多
 - 6 暗褐色土 ロームブロック多

第58図 第25・26・38・48・52・70・71号溝跡

ドに位置する東西溝である。東端部は第48号溝跡に直交する。時期は覆土の状態から近世である。

第42号溝跡 (第29図)

第1次調査区北側のM-2~5、N-4・5グリッドに位置する東西溝で、第46・48・52号溝跡

と重複する。検出長26.40m、幅0.62~1.90m、深さ0.18~1.20m、断面逆台形である。

時期は覆土の状態から中世と考えられる。

第43・51号溝跡 (第29図)

第1次調査区北側のL-3~5グリッドに位置

する東西に併走する溝跡である。東端部は第48号溝跡に直交することから、南へ約20m隔てた第55・56・64号溝跡と共に、短冊形の地割溝を構成している。

遺物は寛永通寶（第75図32）が出土した。時期は覆土の状態から近世と思われる。

第46号溝跡（第29図）

第1次調査区北側のN-5～8グリッドに位置する。第52号溝跡に直交するように伸びる幅広の東西溝である。覆土上層に浅間A軽石粒子を含むことから、近世に帰属するものである。

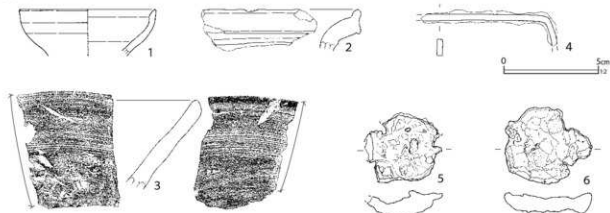
第47号溝跡（第29図）

第1次調査区北端のQ-6グリッドに位置する。東西方向に伸びる溝跡で、第41号溝跡の延長線上に存在する。遺物は近世のかわらけ皿（第75図20・21）が出土している。

第48・52号溝跡（第29・30・58図）

第1次調査区北側の西寄りを南北方向に併走する溝跡で、南側で東に緩やかに向きを変える。第41・43・46・51・55・64号溝跡のように直交して終わる溝跡が多いことから推して、短冊形に区画する地割溝と考えられる。

SD1



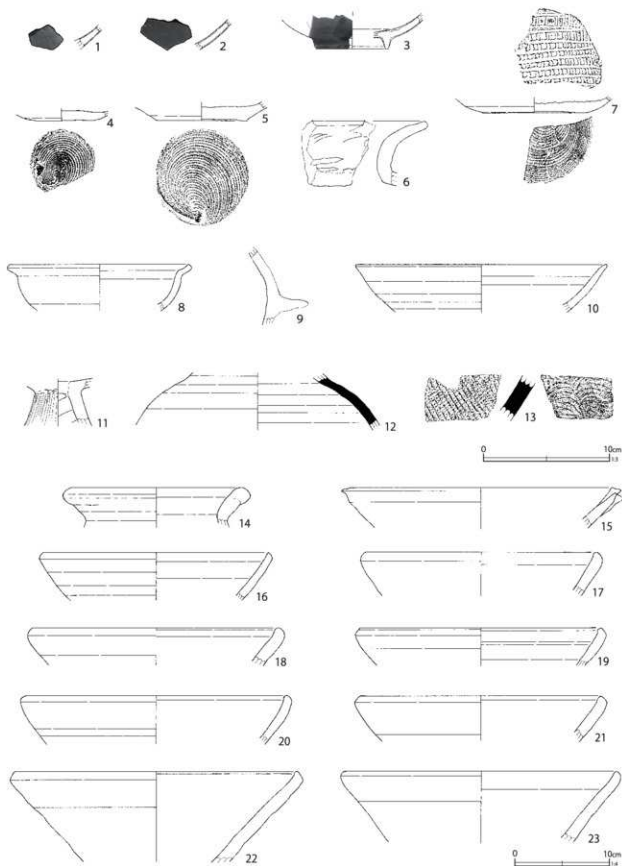
SD2



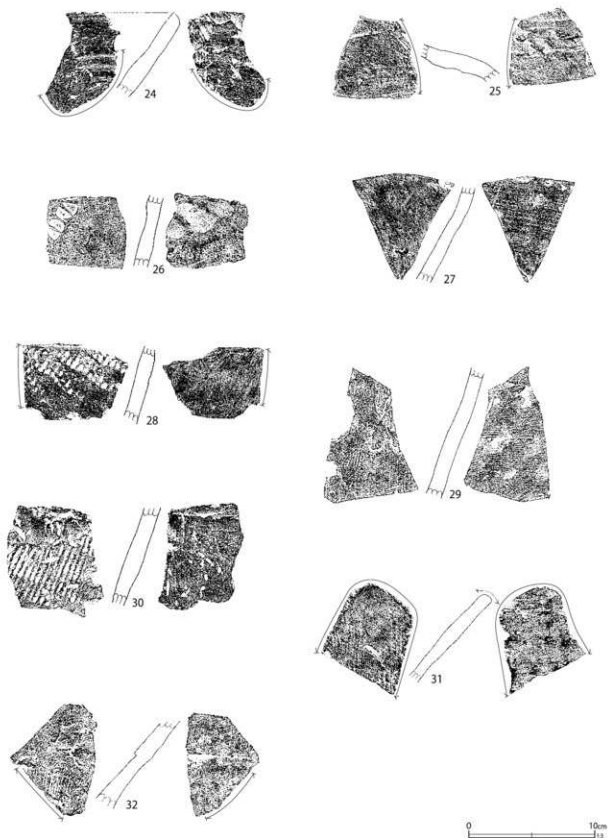
第59図 第1・2号溝跡出土遺物

第12表 第1・2号溝跡出土遺物観察表(第59図)

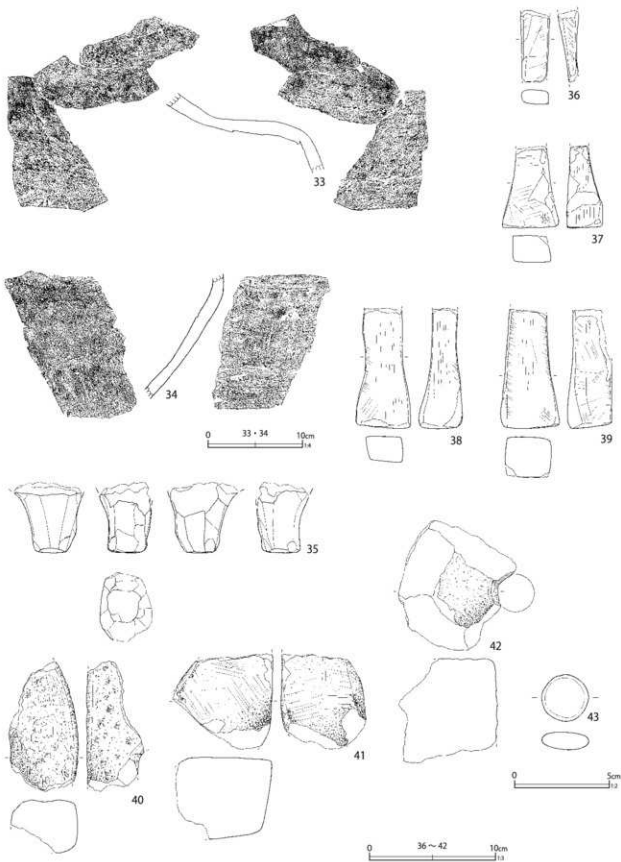
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	天目茶碗	(10.6)	3.7	—	I	10	普通	灰白	SD1 I-18G 古瀬戸 鉄釉 15C前半～中頃	
2	陶器	甕	—	[3.4]	—	E I K L	5	良好	灰赤	SD1 常滑 5型式～6a型式 13C中頃	
3	瓦質土器	鉢	—	[7.1]	—	K	5	普通	灰白	SD1 在地産 転用砥具 中世	
4	鉄製品	鋸	長さ[7.2]cm	幅0.85cm	厚さ0.3cm	重さ14.3g				SD1 J-22G	
5	椀形鍛冶滓		長さ[7.9]cm	幅7.0cm	厚さ2.5cm	重さ154.3g				SD1 I-19G	
6	椀形鍛冶滓		長さ9.1cm	幅8.0cm	厚さ2.0cm	重さ186.8g				SD1	
7	石製品	板碑	長さ[9.6]cm	幅6.5cm	厚さ1.3cm	重さ122.3g			緑泥片岩	SD1 J-23G 二次加工による線刻	
8	陶器	片口鉢	—	[2.7]	—	E H I	10	普通	灰白	SD2 常滑 13C代	



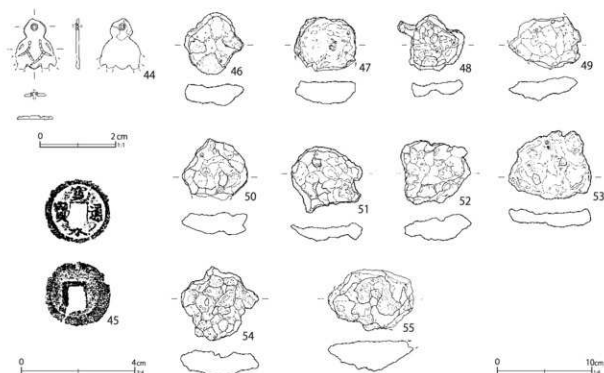
第60図 第21号溝跡出土遺物(1)



第61图 第21号满跡出土遺物(2)



第62図 第21号溝跡出土遺物(3)



第63図 第21号溝跡出土遺物(4)

遺物は須恵器甕、板破片が混入しているものの、かわけ皿、陶器皿・播鉢、焙烙、砥石などの近世遺物(第75図23～31・37)が主体である。時期は遺物及び覆土の状態から近世に帰属する。

第49・50号溝跡(第29図)

第1次調査区北端のO-2、P-2～4グリッドに位置する。既に埋没した第50号溝跡を掘り込むように第49号溝跡は開削され、西端部は第38号溝跡に直交する。遺物は近世のかわけ皿(第75図22)が出土したのみである。時期は遺物及び覆土の状態などから近世に帰属する。

第53号溝跡(第29・30図)

第1次調査区西側の南西寄り、J～M-5、L・M-4グリッドに位置する。第48・52号溝跡に接続するL字形に屈曲した溝跡である。覆土中から元豊通寶(第75図33)が出土した。時期は遺物及び重複関係から中世に帰属すると思われる。

第55号溝跡(第30図)

第1次調査区と第2次調査区の境界付近を東西

に走行する溝跡で、J-3～7グリッドに位置する。南側に第56・64号溝跡が併走する。

遺物が出土していないため時期は明確でないが、覆土の状態から近世に帰属すると思われる。

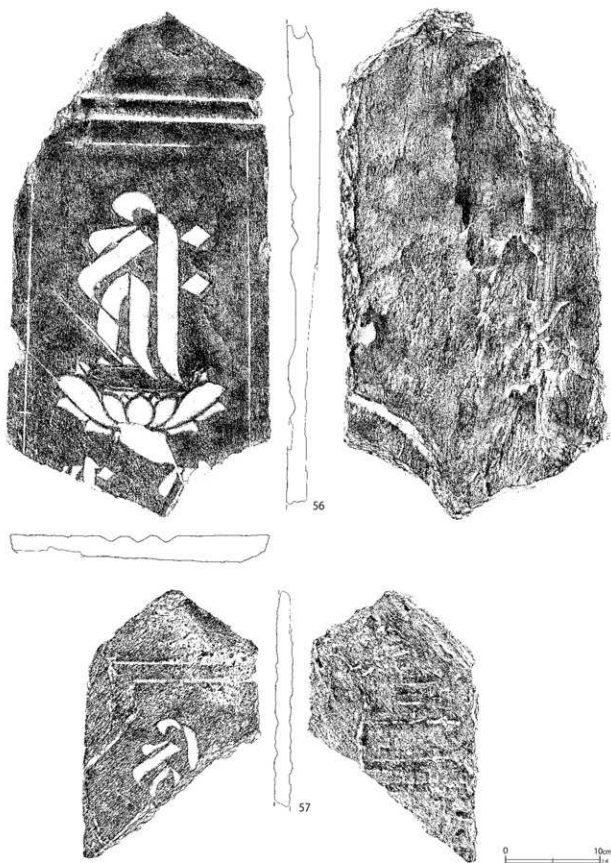
第58・59号溝跡(第30図)

第2次調査区中央に位置し、北西から南東に向かって併走し、南端部で二股に分かれる幅の狭い溝跡である。溝跡の両側には顕著な硬化面が認められたことから、道路跡として機能していたことが推定される。

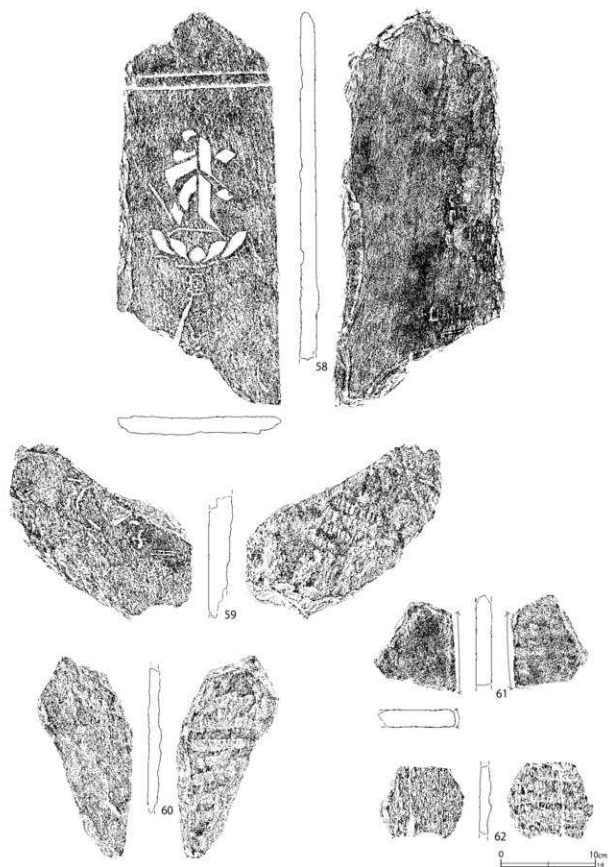
遺物が出土していないため、時期については明確にしない。走行方向が第48・52号溝跡の延長線にあることから推して、近世に帰属するものであろう。

第60・69号溝跡(第30図)

第2次調査区南側のE-5～9、F-8・9グリッドに位置し、直線的に伸びる東西溝である。調査時、東側の掘り込みの深い部分を第60号溝跡、西側の掘り込みの浅い部分を第69号溝跡に分けて



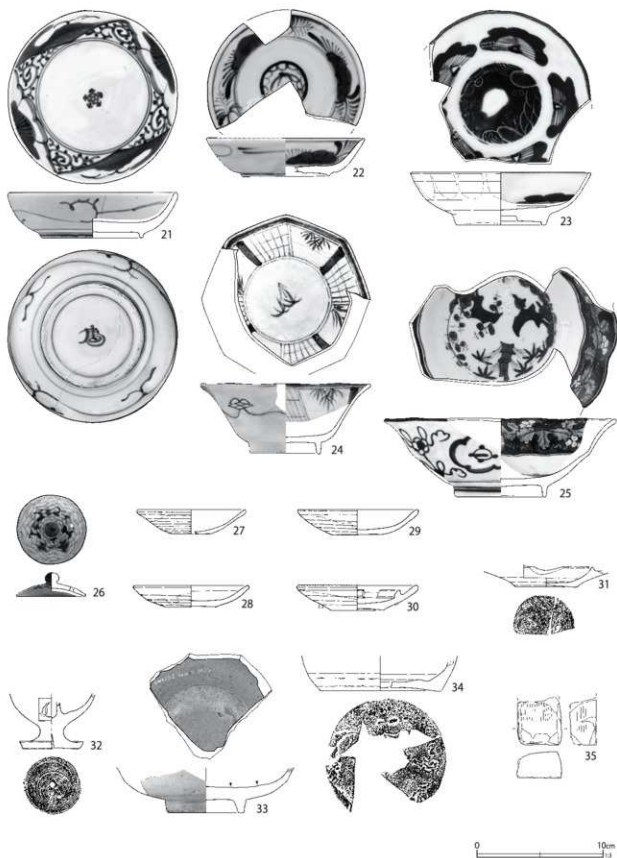
第64図 第21号溝跡出土遺物(5)



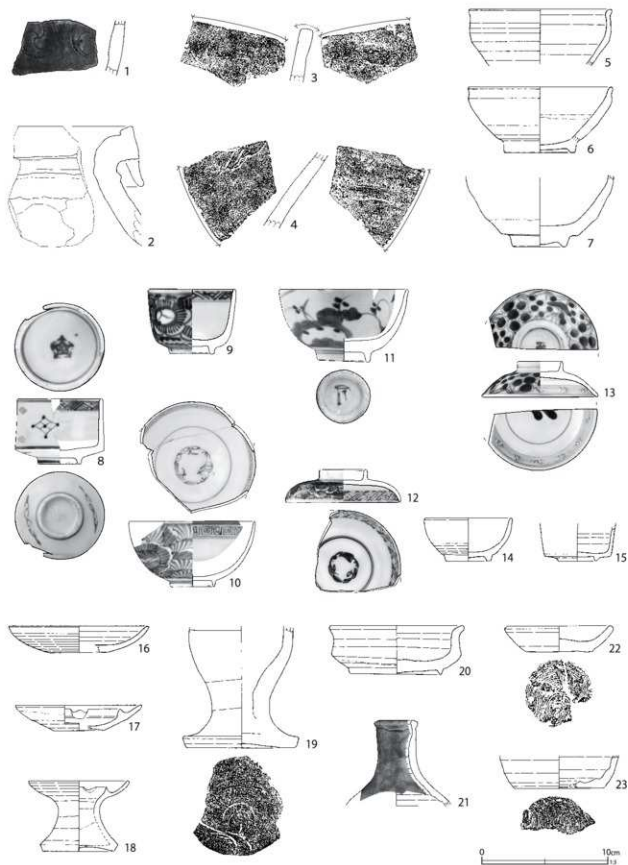
第65图 第21号满跡出土遺物(6)



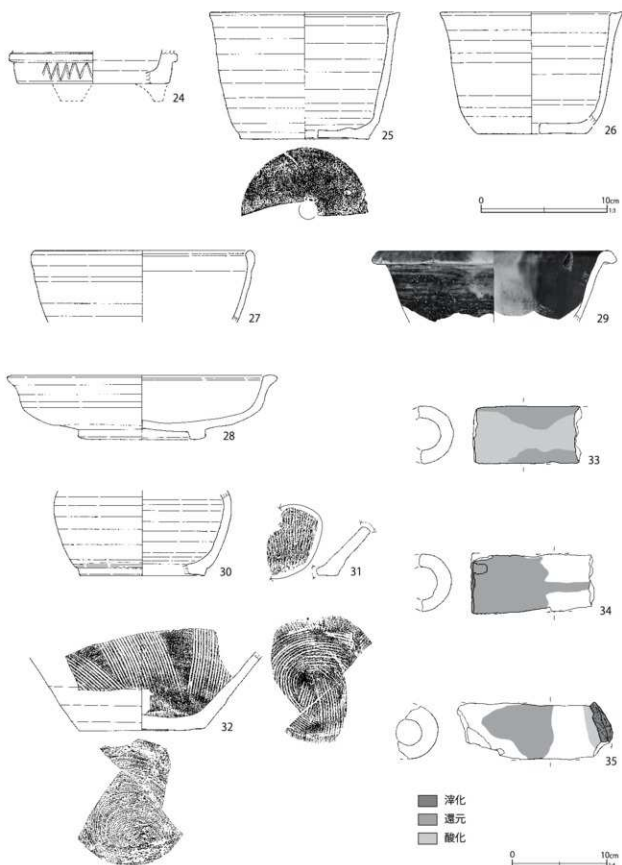
第66図 第21・22号溝跡出土遺物(1)



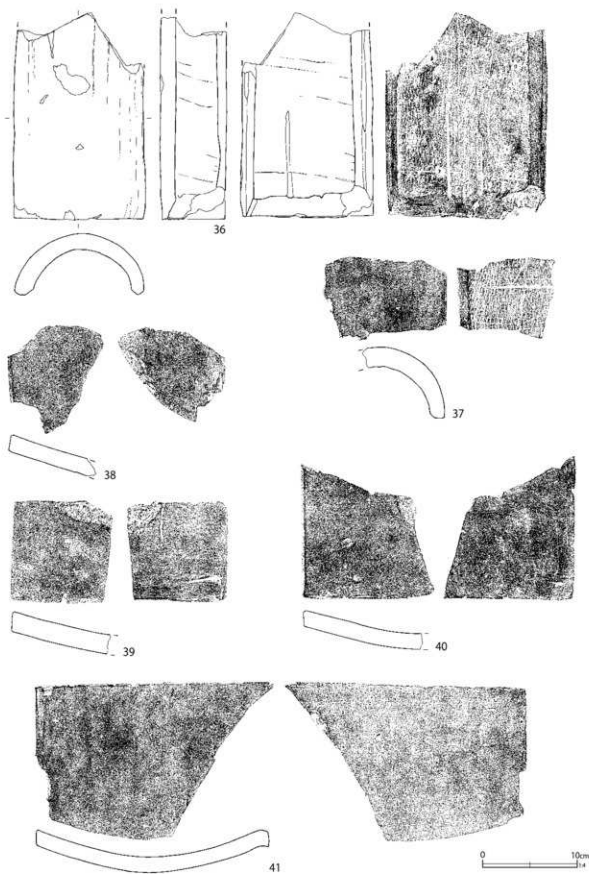
第67图 第21·22号满跡出土遺物(2)



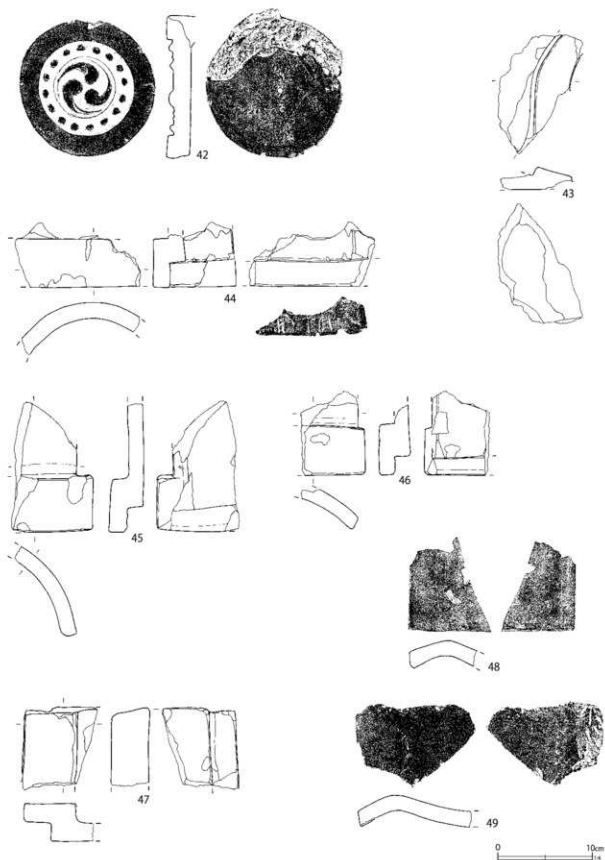
第68図 第22号溝跡出土遺物(1)



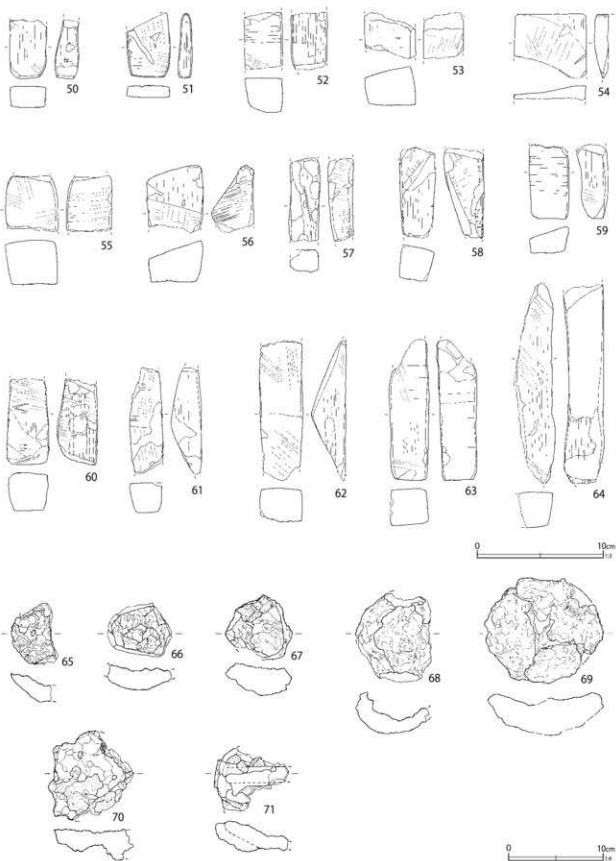
第69図 第22号溝跡出土遺物(2)



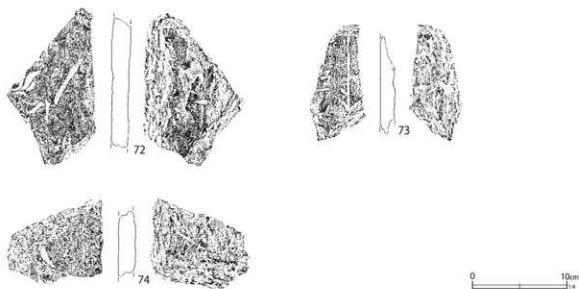
第70図 第22号溝跡出土遺物(3)



第71图 第22号满跡出土遺物(4)



第72図 第22号溝跡出土遺物(5)



第73図 第22号溝跡出土遺物(6)

呼称したが、走行方向から同一の溝跡と判断した。遺物が出土していないため時期を特定できないものの、第21号溝跡の屈曲部の延長線上に位置することや、覆土の状態から中世に帰属する。

第61号溝跡 (第30図)

第2次調査区南端のD～F・9、E・F・8、E・10グリッドに位置する。南側が調査区域外にかかるため全体の規模・形状は明確でないが、コの字形に巡る溝跡である。第59・60・63・65・66号溝跡と重複し、北東隅部を第60号溝跡によって壊されている。規模は北西辺の長さ11.70m、幅1.30～1.60m、深さ0.60～1.20mで、断面逆台形である。遺物が出土していないため時期は特定できないが、覆土の状態から中世に帰属すると考えられる。性格についても「堂宇」の周囲を巡る溝跡の可能性もあるが判然としない。

第64号溝跡 (第30図)

第1次調査区と第2次調査区の境界付近のI・3～6、J・5～8グリッドに位置する。東西方向に併走する2条からなる溝跡である。北側の第55号溝跡と共に区画溝を構成する。

遺物は砥石(第75図38)が出土したのみで時期を特定できないが、形状や覆土の状態から近世に

帰属すると考えられる。

第67号溝跡 (第30図)

第2次調査区西寄りのG・4・5、H・4～7グリッドに位置する東西方向の区画溝である。東端部は第48・52号溝跡から続く、第70・71号溝跡に直交する。遺物は砥石(第75図39)のみが出土しており、時期は明確でないが断面形状及び覆土の状態から近世に帰属するものと思われる。

第68号溝跡 (第30図)

第2次調査区西寄りのE・4・5、F・4～7グリッドに位置する。東西方向に並行する2条の溝跡で、東端部は第70・71号溝跡に直交する。

遺物が出土していないため時期は特定できないが、覆土の状態から近世に帰属する。

第70・71号溝跡 (第30・58図)

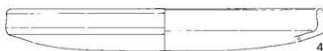
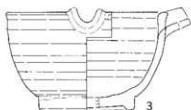
第2次調査区中央を南北に走行する断続的な溝跡で、東西溝の第67・68号溝跡が直交することから、区画溝であることが分かる。遺物は、第70号溝跡から中世の常滑甕、板碑片、近世のかわけ皿(第76図40～45)が出土した。第71号溝跡からは砥石(第76図46・47)が出土した。

時期は中・近世の遺物が混在しているため明確でないが、覆土の状態から近世と考えられる。

SD23

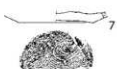


SD25

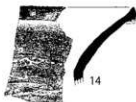
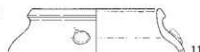
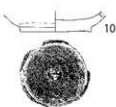
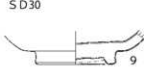


0 2・4 10cm
1/4

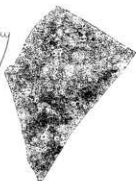
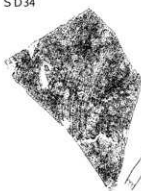
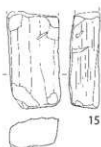
SD27



SD30



SD34

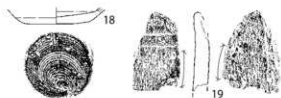


0 10cm
1/4

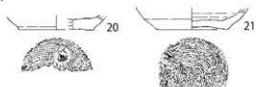
0 1・3・5・15・17 10cm
1/3

第74図 溝跡出土遺物(1)

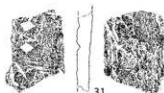
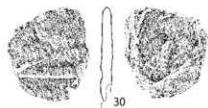
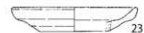
SD36



SD47



SD48・52



0 10cm
1:3

0 19・28～31 10cm
1:4



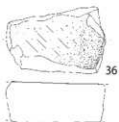
SD43・51



SD53



SD36



SD48



SD64



SD67

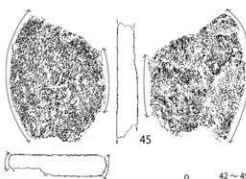
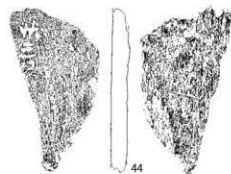
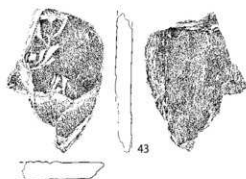
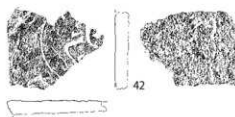
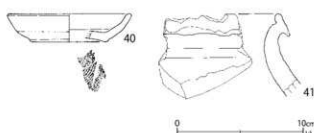


0 4cm
1:4

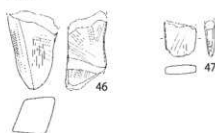
0 10cm
1:3

第75図 溝跡出土遺物(2)

SD70



SD71



0 42~45 10cm

0 10cm

第76図 溝跡出土遺物(3)

第13表 第21号溝跡出土遺物観察表(第60~65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	青磁	碗	—	[2.0]	—	I K	5	良好	灰	龍泉窯(大宰府Ⅱ類) 13C代	21-3
2	青磁	碗	—	[2.5]	—	I K	5	良好	灰	龍泉窯(大宰府Ⅱ類) 13C代	21-3
3	青磁	碗	—	[2.9]	(5.8)	K	10	良好	灰白	龍泉窯(大宰府Ⅱ類) 13C代	21-3
4	陶器	緑釉小皿	—	[0.8]	5.0	A H I K	50	普通	灰黄	古瀬戸 灰釉 見込重ね焼き痕 内面平滑 底部回転糸切り 15C中~後半	
5	陶器	皿類	—	[1.5]	7.2	I K	80	普通	灰	古瀬戸 見込重ね焼き痕 底部回転糸切り 15C代	
6	陶器	甕	—	[5.2]	—	E I	5	普通	灰	常滑 12C後半	21-1
7	陶器	卸し皿	—	[1.3]	(8.2)	I K	25	普通	灰黄	古瀬戸 灰釉 底部回転糸切り 14C後半~15C前半	
8	陶器	折縁中皿	(14.0)	[3.7]	—	I K	5	良好	灰白	M-9G 古瀬戸 内外面灰釉 14C前半	
9	土師質土器	羽釜小	—	[6.2]	—	A E H I	5	不良	にぶ、黄橙	非在地	
10	陶器	平碗	(19.8)	[3.8]	—	—	10	良好	灰白	古瀬戸 灰釉 14C後半~15C前半	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
11	土師器	器台	—	[3.8]	—	E H I K	40	普通	にぶい褐	M-9G 外面へラミガキ 脚部内面へラウズリ 五須式期	
12	須恵器	長頸瓶	—	[4.6]	—	I K	20	良好	褐灰	東金子産 外面降灰	
13	須恵器	甕	—	[3.6]	—	I	5	普通	灰	外面縦格子叩き目 内面同心円当て具痕	
14	土師質土器	壺	(18.4)	[4.2]	—	E H K	10	普通	にぶい黄緑	在地産 中世	20-3
15	陶器	片口鉢	(28.0)	[4.3]	—	E I K	5	良好	灰赤	常滑 14C前半	
16	瓦質土器	鉢	(24.0)	[5.1]	—	G I K	10	普通	灰	在地産 中世	20-3
17	瓦質土器	鉢	(24.8)	[4.6]	—	E H I	5	普通	灰	在地産 中世	20-3
18	瓦質土器	鉢	(26.2)	[4.1]	—	E I K	5	普通	灰	O-9G 在地産 中世	20-3
19	瓦質土器	鉢	(25.8)	[4.0]	—	C E I K	5	普通	灰黄褐	在地産 中世	20-3
20	瓦質土器	鉢	(27.8)	[5.2]	—	E	10	普通	灰黄	在地産 中世	20-3
21	瓦質土器	鉢	(25.6)	[4.9]	—	H I K	5	普通	黄灰	在地産 中世	20-3
22	瓦質土器	片口鉢	(30.0)	[9.6]	—	C E H I	10	不良	褐灰	在地産 片口部一部残存 中世	20-3
23	瓦質土器	片口鉢	(29.0)	[7.6]	—	E I K	10	普通	灰黄	在地産 片口部一部残存 中世	20-3
24	瓦質土器	鉢	—	[6.7]	—	I K	5	普通	黄灰	M-9G 在地産 転用砥具 中世	20-3
25	陶器	甕	—	[3.2]	—	A E I	5	普通	褐灰	常滑 転用砥具 中世	21-1
26	陶器	甕	—	[5.7]	—	I	5	良好	灰褐	常滑 外面刻印 中世	21-1
27	陶器	甕	—	[7.7]	—	E I K	5	良好	灰黄	常滑 中世	21-1
28	陶器	甕	—	[6.2]	—	I K	5	普通	灰	常滑 転用砥具 外面刻印 中世	21-1
29	陶器	甕	—	[10.3]	—	E I K	5	普通	にぶい黄褐	常滑 中世	21-1
30	陶器	甕	—	[7.9]	—	I	5	普通	黄灰	湿美焼 外面叩き目 12C～13C	21-1
31	陶器	甕	—	[7.0]	—	I	5	普通	灰	M-9G 常滑 転用砥具 中世	21-1
32	陶器	甕	—	[6.9]	—	E I K	5	普通	灰黄	常滑 内外面降灰 転用砥具 中世	21-1
33	陶器	甕	—	[8.2]	—	E I K	5	良好	灰褐	M-O-9G 常滑 13C～14C	21-2
34	陶器	甕	—	[13.3]	—	E I K	5	良好	灰褐	O-9G 常滑 肩部降灰 13C～14C	21-2
35	土師質土器	火鉢類	長さ[5.6]cm 幅[4.1]cm 厚さ[5.4]cm 重さ95.9g	にぶい黄緑							在地産 脚部 中世
36	石製品	砥石	長さ[5.7]cm 幅[2.3]cm 厚さ1.6cm 重さ21.7g	凝灰岩							砥面は4面 V字状の刃物傷
37	石製品	砥石	長さ[6.5]cm 幅[4.5]cm 厚さ2.8cm 重さ92.9g	凝灰岩							砥面は4面 被熱
38	石製品	砥石	長さ[9.5]cm 幅[4.3]cm 厚さ4.3cm 重さ160.6g	凝灰岩							砥面は5面 V字状の刃物傷 全体的に被熱
39	石製品	砥石	長さ[9.4]cm 幅[4.6]cm 厚さ3.5cm 重さ196.5g	凝灰岩							砥面は5面 V字状の刃物傷
40	石製品	石臼	長さ[10.3]cm 幅[5.4]cm 厚さ[4.5]cm 重さ234.2g	安山岩							横打込式の挽き木穴をもつ上臼 左側面に僅かに擦痕 折れ面を砥石として再利用か
41	石製品	砥石	長さ[7.5]cm 幅[7.8]cm 厚さ[6.6]cm 重さ478.4g	砂岩							P-9G 砥面は3面 被熱により全体的に赤味を帯びる
42	石製品	石臼	長さ[9.8]cm 幅[8.8]cm 厚さ[7.6]cm 重さ617.9g	安山岩							全体的に被熱し表面が剥落している
43	石製品	円板	縦2.4cm 横2.5cm 厚さ0.9cm 重さ7.9g	安山岩							P-9G 基石か
44	金銅製品	鍔金具	長さ[11.3]cm 幅[1.0]cm 厚さ0.09cm 重さ0.3g								M-9G タガネ形 荘厳具鍔金具か 表裏面に金箔残存
46	埴形鍛冶滓		長さ6.2cm 幅6.4cm 厚さ2.1cm 重さ98.8g								M-9G
47	埴形鍛冶滓		長さ6.3cm 幅[5.6]cm 厚さ2.3cm 重さ159.6g								O-9G
48	埴形鍛冶滓		長さ5.4cm 幅[5.4]cm 厚さ1.4cm 重さ75.8g								
49	埴形鍛冶滓		長さ7.3cm 幅[5.2]cm 厚さ2.0cm 重さ157.0g								O-9G
50	埴形鍛冶滓		長さ6.8cm 幅[6.0]cm 厚さ2.3cm 重さ135.1g								
51	埴形鍛冶滓		長さ7.5cm 幅[6.7]cm 厚さ1.7cm 重さ134.7g								O-9G
52	埴形鍛冶滓		長さ7.0cm 幅[6.6]cm 厚さ2.5cm 重さ137.8g								
53	埴形鍛冶滓		長さ8.6cm 幅[7.1]cm 厚さ1.5cm 重さ164.5g								
54	埴形鍛冶滓		長さ8.2cm 幅[7.7]cm 厚さ2.5cm 重さ207.5g								
55	埴形鍛冶滓		長さ[9.0]cm 幅[6.4]cm 厚さ3.1cm 重さ228.6g								

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
56	石製品	板碑	長さ[53.0]cm	幅27.5cm	厚さ3.4cm	重さ7660.3g	緑泥片岩			阿弥陀三尊種子 蓮座 二条線 側縁部研磨痕 14C前半～中葉頃	28-1
57	石製品	板碑	長さ[29.2]cm	幅18.4cm	厚さ2.0cm	重さ1432.9g	緑泥片岩			阿弥陀種子 二条線 裏面加工痕 14C代	28-2
58	石製品	板碑	長さ[42.2]cm	幅17.6cm	厚さ1.9cm	重さ2537.8g	緑泥片岩			O-9G 阿弥陀一尊種子 二条線 「曆応三年」(1340) 裏面加工痕	28-3
59	石製品	板碑	長さ[18.8]cm	幅[19.4]cm	厚さ2.5cm	重さ1022.3g	緑泥片岩			O-9G □年 □月□ 裏面加工痕 再利用痕顯著 被熱痕	
60	石製品	板碑	長さ[22.1]cm	幅[10.3]cm	厚さ1.3cm	重さ391.3g	緑泥片岩			O-9G 裏面押し削り痕	
61	石製品	板碑	長さ[10.5]cm	幅[8.6]cm	厚さ1.7cm	重さ268.6g	緑泥片岩			側縁部二次加工痕	
62	石製品	板碑	長さ[8.0]cm	幅[8.9]cm	厚さ1.2cm	重さ128.2g	緑泥片岩			裏面加工痕 二次加工痕	

第14表 第21号溝跡出土銭貨観察表(第63図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
45	銭貨	寛永通寶	22.70	23.66	1.00～1.02	1.0	古 江戸 1636～1659年	

第15表 第21・22号溝跡出土遺物観察表(第66・67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(6.9)	3.5	2.7	K	70	良好	灰白	複乱 瀬戸美濃 19C前半	22-2
2	磁器	碗	7.2	3.8	2.8	K	65	良好	灰白	複乱 瀬戸美濃 19C前半	22-3
3	磁器	碗	(7.6)	4.1	(3.6)	K	45	良好	灰白	複乱 瀬戸美濃 19C前半	
4	磁器	碗	(6.2)	5.3	2.7	K	50	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	22-4
5	磁器	碗	(6.8)	5.8	3.7	K	50	良好	灰白	複乱 瀬戸美濃 19C前半	
6	磁器	碗	6.9	5.5	3.3	K	70	良好	灰白	複乱 瀬戸美濃 19C前半	22-5
7	磁器	碗	(7.8)	6.6	4.5	K	65	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	22-6
8	磁器	碗	(9.4)	4.7	5.0	I K	50	良好	灰白	複乱 瀬戸美濃 色絵 19C中葉頃	22-7
9	磁器	碗	9.2	4.5	3.6	K	70	良好	灰白	複乱 瀬戸美濃 19C前半	22-8
10	磁器	碗	10.4	5.4	3.6	K	55	良好	灰白	複乱 肥前 半珠碗 19C前半	22-9
11	磁器	碗	(10.2)	5.8	4.0	K	50	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	
12	磁器	碗	(10.4)	5.8	(3.8)	K	30	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	22-10
13	磁器	碗	10.4	5.7	4.2	I K	90	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	23-1
14	磁器	碗	(11.4)	6.7	5.5	K	55	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	23-2
15	磁器	碗	(11.4)	6.2	4.0	K	55	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	23-3
16	磁器	碗	(6.7)	6.0	(4.8)	K	30	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	
17	磁器	碗	7.4	5.5	(5.4)	I K	40	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	
18	磁器	蓋	8.6	2.6	—	K	85	良好	灰白	複乱 肥前 つまみ径3.2cm 19C前半	23-4
19	磁器	蓋	9.5	2.8	—	—	95	良好	灰白	複乱 肥前 つまみ径3.8cm 19C前半	23-5
20	磁器	蓋	9.2	2.9	—	K	90	良好	灰白	肥前 つまみ径3.6cm 19C前半	23-6
21	陶器	皿	13.2	3.6	7.7	K	100	良好	灰白	複乱 肥前 18C前半	23-7
22	磁器	皿	12.3	3.1	6.8	K	60	良好	灰白	複乱 P-8G 肥前 19C前半	
23	磁器	皿	(14.2)	4.2	7.0	K	75	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	
24	陶器	鉢	(13.2)	5.6	5.3	K	80	良好	灰白	複乱 肥前 19C前半	23-8
25	磁器	鉢	(18.2)	6.3	7.0	K	50	良好	灰白	肥前 焼き継ぎか 19C前半	
26	陶器	蓋	5.4	1.9	—	H K	100	良好	灰白	複乱 産地不明 つまみ径1.1cm	23-9
27	陶器	灯明皿	(8.4)	1.9	(3.0)	H I	40	良好	灰白	京都信楽系 灰釉 19C前半	
28	陶器	灯明皿	9.0	1.7	3.1	K	100	良好	灰黄	複乱 瀬戸美濃 鉄釉 口縁部外面油煙付着 18C後半～19C前半	23-10
29	陶器	灯明皿	9.4	2.0	4.0	I K	70	良好	褐灰	複乱 瀬戸美濃 鉄釉 見込重ね焼き痕 18C後半～19C前半	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
30	陶器	灯明受皿	9.2	2.0	4.2	K	90	良好	灰黄	攪乱 鉄軸 外面重ね焼き痕 19C前半	
31	施釉土器	灯明受皿	—	1.6	4.8	H I K	50	普通	橙	攪乱 口径2 (7.3)cm 鉄軸 底部回転糸切り 19C代	
32	陶器	重燗	—	[4.4]	4.5	K	80	良好	灰黄	攪乱 鉄軸 底部回転糸切り	
33	陶器	碗	—	[3.6]	(6.0)	H I K	30	良好	灰白	肥前系 灰軸 見込蛇の目軸割ぎ 18C前半	
34	瓦質土器	植木鉢	—	[2.8]	9.6	A C I K	70	普通	に、黄、黄、黄	攪乱 在地産 19C代	
35	石製品	砥石	長さ3.8cm 幅3.5cm 厚さ2.1cm 重さ45.4g					凝灰岩		砥面は4面 櫛歯状工具痕	

第16表 第22号溝跡出土遺物観察表(第68～73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	瓶子	—	[4.4]	—	—	5	良好	灰白	攪乱含 古瀬戸 灰軸 巴文 14C中葉	
2	陶器	甕	—	[9.6]	—	I	5	普通	黄灰	攪乱 常滑 14C前半～中葉	
3	陶器	甕	—	[4.2]	—	E I	5	普通	灰	常滑 転用砥具 中世	
4	陶器	甕	—	[6.0]	—	I	5	普通	灰	R-9G 常滑 転用砥具 中世	
5	陶器	天目茶碗	11.0	4.5	—	—	15	良好	灰白	瀬戸美濃 鉄軸 17C前半	
6	陶器	天目茶碗	(10.3)	[4.4]	—	I K	10	良好	灰黄	R-9G 瀬戸美濃 鉄軸 16C末～17C初頭	
7	陶器	天目茶碗	—	[5.8]	4.4	I	60	良好	淡黄	瀬戸美濃 鉄軸 削り出し高台 16C～17C前半	24-1 24-2 24-3
8	磁器	碗	(6.5)	5.1	3.5	K	60	良好	灰白	R-9G 肥前 筒形碗 18C後半	
9	磁器	碗	(6.7)	5.1	(3.4)	K	70	良好	灰白	肥前	
10	磁器	碗	(9.8)	5.2	3.4	—	60	良好	灰白	肥前 19C前半	
11	磁器	碗	10.0	5.7	3.9	K	80	良好	灰白	肥前 18C代	
12	磁器	蓋	(9.0)	2.6	—	—	50	良好	灰白	攪乱 肥前 つまみ径(3.6)cm 19C前半	24-4 24-5
13	磁器	蓋	(9.0)	2.8	—	K	50	良好	灰白	肥前 つまみ径(3.4)cm 19C前半	
14	陶器	小坏	(6.8)	3.4	(3.6)	I K	50	良好	灰黄	産地不明 灰軸	
15	陶器	香炉	—	3.0	3.0	K	35	良好	灰白	瀬戸美濃 灰軸	
16	陶器	灯明皿	(11.0)	2.1	(4.6)	I K	35	良好	灰黄	R-9G 鉄軸 見込重ね焼き痕	
17	陶器	灯明受皿	(10.0)	2.0	(4.0)	—	40	良好	灰白	口径2 (6.5)cm 鉄軸 内外面油煙付着	24-4 24-5
18	陶器	脚付灯明受皿	7.8	5.6	5.7	—	100	良好	灰白	攪乱含 口径2 4.3cm 透明釉	
19	陶器	仏花瓶	—	[9.7]	(8.5)	K	70	良好	灰白	R-9G 瀬戸美濃系 外面上部灰軸・下部鉄軸 内面流し掛け 底部回転糸切り 18C後半	
20	陶器	香炉	10.4	3.9	7.2	I	95	良好	灰黄	志登呂か 鉄軸 見込重ね焼き痕	
21	陶器	徳利	2.6	[6.9]	—	—	70	良好	浅黄	R-9G 瀬戸美濃 灰軸 18C中頃	
22	かわらけ	皿	(8.0)	2.0	5.3	C E H I K	50	普通	橙	M-9G 底部回転糸切り	24-5
23	土師質土器	植木鉢	—	[2.6]	(7.0)	A H I K	40	普通	橙	底部回転糸切り	
24	瓦質土器	火鉢類	—	[2.7]	(12.0)	H I K	10	普通	灰白	外面鋸歯文線刻 脚部欠損	
25	瓦質土器	植木鉢	(14.8)	10.1	10.2	A C H I K	45	普通	灰	R-9G 在地産 内外面クロコナデ 19C代	
26	瓦質土器	植木鉢	(14.2)	[9.0]	—	A C H I K	25	普通	灰	R-9G 在地産 内外面クロコナデ 19C代	
27	陶器	捏鉢	(22.8)	[7.6]	—	I	20	普通	淡黄	R-9G 瀬戸美濃系 灰軸 18C後半	24-5
28	陶器	大皿	(27.6)	6.8	13.7	E I K	15	普通	灰白	SD21・22攪乱 瀬戸美濃系 灰軸 目痕 18C後半～19C前半	
29	陶器	植木鉢	(24.2)	[7.5]	—	I	20	普通	灰白	R-9G 瀬戸美濃系 19C前半	
30	陶器	壺	—	[8.9]	(13.4)	I	20	良好	灰黄	R-9G 瀬戸美濃 鉄軸	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
31	陶器	播鉢	—	[5.1]	—	E I K	5	普通	にぶい赤褐色	R-9G 埴・明石系 転用器具 18C後半～19C前半	
32	陶器	播鉢	—	[8.3]	13.5	E K	30	良好	灰白	R-9G 瀬戸美濃 鉄輪 底部回転糸切り	
33	土製品	羽口	長さ[11.5]cm	外径6.0cm	孔径3.4cm	重さ182.4 g				胎土にスサを多く含む	27-3
34	土製品	羽口	長さ[13.0]cm	外径6.0cm	孔径3.5cm	重さ180.0 g				胎土にスサを多く含む	27-3
35	土製品	羽口	長さ[16.5]cm	外径5.5cm	孔径2.7cm	重さ264.2 g				先端部洋化 胎土にスサを多く含む	27-3
36	瓦	丸瓦	長さ[21.8]cm	幅13.7～14.0cm	厚さ1.4～2.0cm	高さ6.4cm				胎土精良 光沢あり 表面色調:灰 内部色調:灰白	28-4
37	瓦	丸瓦	長さ[9.0]cm	幅8.8cm	厚さ1.6～2.1cm	胎土精良 光沢あり				表面色調:灰 内部色調:灰白	R-9G
38	瓦	平瓦	長さ[11.8]cm	幅11.0cm	厚さ1.7cm	胎土精良	やや光沢あり			表面色調:灰 内部色調:灰白	R-9G 切り欠き 凸面へう描き「×」
39	瓦	平瓦	長さ[10.9]cm	幅10.6cm	厚さ2.1cm	胎土やや砂質 光沢無し				表面色調:灰白 内部色調:灰白	攪乱含
40	瓦	平瓦	長さ[15.2]cm	幅14.5cm	厚さ1.7cm	胎土精良	やや光沢あり			表面色調:灰 内部色調:灰白	
41	瓦	平瓦	長さ[16.8]cm	幅24.9cm	厚さ1.8cm	弧深4.5cm	胎土精良	やや光沢あり		表面色調:灰 内部色調:灰白	R-9G
42	瓦	軒丸瓦	瓦当径15.1×14.7cm	厚さ1.8～2.5cm	胎土精良	光沢あり				表面色調:灰 内部色調:灰	
43	瓦	鬼瓦	長さ[13.0]cm	幅7.5cm	厚さ1.5～2.4cm	胎土精良 光沢あり				表面色調:灰 内部色調:灰白	攪乱含
44	瓦	棟瓦	長さ[6.8]cm	幅12.6cm	厚さ1.7cm	胎土精良 光沢あり				表面色調:灰黄 内部色調:灰黄	
45	瓦	棟瓦	長さ[13.7]cm	幅8.7cm	厚さ1.5～1.8cm	胎土精良 光沢あり				表面色調:灰 内部色調:灰白	
46	瓦	軒瓦	長さ[8.8]cm	幅6.1cm	厚さ1.7cm	胎土精良	やや光沢あり			表面色調:灰白 内部色調:灰白	R-9G
47	瓦	解瓦	長さ[8.1]cm	幅7.7cm	厚さ1.9cm	胎土精良	やや光沢あり			表面色調:灰黄 内部色調:灰白	R-9G
48	瓦	棧瓦	長さ[10.3]cm	幅8.5cm	厚さ1.6cm	胎土精良 光沢あり				表面色調:灰 内部色調:灰白	R-9G
49	瓦	棧瓦	長さ[9.0]cm	幅12.1cm	厚さ1.6cm	胎土精良 光沢あり				表面色調:灰白 内部色調:灰白	攪乱含
50	石製品	砥石	長さ[4.7]cm	幅2.9cm	厚さ1.8cm	重さ38.0 g	凝灰岩			砥面は4面 櫛歯状工具痕 被熱により全体的に赤みを帯びる	
51	石製品	砥石	長さ[5.0]cm	幅3.5cm	厚さ1.1cm	重さ29.0 g	凝灰岩			R-9G 砥面は4面	
52	石製品	砥石	長さ[4.5]cm	幅3.0cm	厚さ2.9cm	重さ66.1 g	凝灰岩			砥面は主として2面 櫛歯状工具痕	
53	石製品	砥石	長さ[3.7]cm	幅4.0cm	厚さ3.1cm	重さ52.0 g	凝灰岩			攪乱含 砥面は4面 櫛歯状工具痕	
54	石製品	硯	長さ[5.0]cm	幅5.7cm	厚さ1.1cm	重さ35.2 g	凝灰岩			R-9G 内隅を面取りし、外形が丁寧に整形されている	
55	石製品	砥石	長さ[4.5]cm	幅4.65cm	厚さ3.6cm	重さ106.1 g	凝灰岩			砥面は4面	
56	石製品	砥石	長さ[5.3]cm	幅4.4cm	厚さ3.35cm	重さ79.3 g	凝灰岩			砥面は4面 V字状の傷痕 被熱により全体的に黒色化	
57	石製品	砥石	長さ[6.6]cm	幅2.4cm	厚さ2.0cm	重さ47.9 g	凝灰岩			砥面は4面 へう状工具痕 被熱により全体的に黒色化 一部赤味を帯びる	
58	石製品	砥石	長さ[7.2]cm	幅2.8cm	厚さ3.1cm	重さ76.0 g	凝灰岩			O-9G 砥面は4面	
59	石製品	砥石	長さ[5.85]cm	幅3.1cm	厚さ2.45cm	重さ53.6 g	凝灰岩			砥面は4面 櫛歯状工具痕 被熱によりに赤味を帯びる	
60	石製品	砥石	長さ[6.8]cm	幅3.35cm	厚さ3.2cm	重さ111.1 g	凝灰岩			砥面は4面 櫛歯状工具痕(へうの可能性あり) 被熱により全体的に黒色化	
61	石製品	砥石	長さ[8.4]cm	幅2.6cm	厚さ2.4cm	重さ64.7 g	凝灰岩			砥面は4面 被熱により全体的に赤味を帯びる	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
62	石製品	砥石	長さ[11.5]cm	幅3.4cm	厚さ2.7cm	重さ113.7g	凝灰岩			砥面は4面 V字状の傷痕 被熱	
63	石製品	砥石	長さ[11.1]cm	幅3.2cm	厚さ3.1cm	重さ164.8g	凝灰岩			砥面は4面 V字状の刃傷痕 一部にへう状工具痕	
64	石製品	砥石	長さ[15.8]cm	幅3.0cm	厚さ3.15cm	重さ201.4g	凝灰岩			R-9G 砥面は3面 欠損後再利用している 被熱により赤味を帯びる	
65	柳形鋸治洋	柳形鋸治洋	長さ4.2cm	幅6.3cm	厚さ1.9cm	重さ61.7g					
66		柳形鋸治洋	長さ[6.7]cm	幅5.6cm	厚さ2.2cm	重さ143.0g				攪乱含 P-9G	
67		柳形鋸治洋	長さ7.0cm	幅6.5cm	厚さ2.9cm	重さ203.0g					
68		柳形鋸治洋	長さ7.8cm	幅9.0cm	厚さ3.6cm	重さ231.4g				R-9G	
69		柳形鋸治洋	長さ12.2cm	幅10.8cm	厚さ4.0cm	重さ658.3g					
70		柳形鋸治洋	長さ[8.4]cm	幅8.7cm	厚さ3.1cm	重さ258.7g				攪乱含 P-9G	
71	柳形鋸治洋	柳形鋸治洋	長さ[7.7]cm	幅6.5cm	厚さ2.8cm	重さ122.0g				R-9G 鉄製品付着	
72	石製品	板碑	長さ[15.1]cm	幅9.3cm	厚さ2.0cm	重さ402.1g	緑泥片岩			阿券陀三尊種子カ 蓮座一部残存 15C代	
73	石製品	板碑	長さ[11.8]cm	幅5.3cm	厚さ1.6cm	重さ136.4g	緑泥片岩			枠線・文字あり	
74	石製品	板碑	長さ[7.6]cm	幅11.4cm	厚さ1.8cm	重さ216.6g	緑泥片岩			枠線・文字あり 側縁加工痕がみられる 二次利用	

第17表 溝跡出土遺物観察表(第74～76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	かわらけ	皿	—	[2.0]	4.2	A E H I J	70	不良	にぶい橙	SD23 底部回転糸切り	
2	陶器	片口鉢	(33.8)	[8.9]	—	E I K	10	普通	橙	SD23 常滑 15C後半	
3	陶器	片口鉢	(12.2)	[7.8]	(7.6)	I	30	良好	淡黄	SD25 瀬戸美濃 灰釉 トチン痕 18C後半～19C前半	
4	土師質土器	埴埴	(33.2)	[3.5]	(33.6)	H I K	10	普通	にぶい橙	SD25 在地産 丸底タイプ 19C代	
5	石製品	茶臼	長さ[7.5]cm	幅[6.6]cm	高さ[5.0]cm	重さ204.8g	安山岩			SD25 下臼 皿状の凸部部分の一部 被熱により赤化	
6	かわらけ	皿	—	[1.0]	(5.4)	A C H I K	45	良好	橙	SD27 底部回転糸切り	
7	かわらけ	皿	—	[0.8]	6.0	C H I K	50	普通	橙	SD27 底部回転糸切り	
8	陶器	碗	—	[1.7]	(4.4)	I K	40	良好	浅黄橙	SD27 京焼系 朝日焼 底面「朝日」刷印 18C～19C	
9	青磁	碗	—	[2.7]	6.4	K	25	良好	灰オリーブ	SD30 №1 龍泉窯系 12C後半	
10	陶器	碗	—	[1.6]	5.6	K	80	良好	淡黄	SD30 肥前系 底面「松小吉」刷印 灰釉 17C後半～18C前半	
11	陶器	有耳壺	(10.0)	[3.6]	—	I K	20	良好	淡黄	SD30 瀬戸美濃 褐釉 把手欠損	
12	陶器	鉢鉢	—	[2.7]	—	E H K	5	普通	灰白	SD30 瀬戸美濃系 鉄釉 17C前半	
13	陶器	甕	—	[2.6]	—	H K	5	良好	にぶい黄橙	SD30 常滑 転用紙具 外面自然釉	
14	須恵器	甕	—	[6.2]	—	E H I K	5	普通	褐灰	SD30 東金子産	
15	石製品	砥石	長さ[7.6]cm	幅4.0cm	厚さ2.4cm	重さ115.9g	凝灰岩			SD30 砥面は側面の2面 ヘラ状工具痕	
16	柳形鋸治洋	柳形鋸治洋	長さ[3.8]cm	幅8.7cm	厚さ3.4cm	重さ184.0g				SD30	
17		甕	—	[12.7]	—	C E I K	5	良好	黄灰	SD34 常滑 中世	
18	陶器	鉢鉢小皿	—	[1.3]	5.2	I K	80	普通	灰黄	SD36 古瀬戸 鉄釉 底部回転糸切り 15C	
19	石製品	板碑	長さ[8.7]cm	幅5.3cm	厚さ1.6cm	重さ107.2g	緑泥片岩			SD36 二条線・ケガキ線 側面部二次加工痕	
20	かわらけ	皿	—	[1.1]	6.0	C H I K	45	普通	橙	SD47 底部回転糸切り 近世	
21	かわらけ	皿	—	[1.7]	(5.6)	B H I K	35	普通	橙	SD47 底部回転糸切り 近世	
22	かわらけ	皿	(9.5)	[2.0]	—	C H I K	15	普通	にぶい橙	SD49 近世	
23	かわらけ	皿	(9.6)	[1.9]	(5.6)	C H I K	10	普通	橙	SD52 O-5G 近世	
24	かわらけ	皿	(9.4)	[1.9]	—	C H I	10	普通	橙	SD52 K-6G 近世	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
25	かわらけ	皿	—	[1.5]	(5.4)	A C H I K	20	普通	にふい橙	SD48-52 近世	
26	陶器	皿	—	[1.8]	(6.9)	E I	40	良好	灰黄	SD48 J-6G 瀬戸美濃 灰釉 削り出し高台 重ね焼き痕 17C後半	
27	須恵器	甕	—	[4.3]	—	E H I K	5	良好	灰	SD48 外面平行叩き目 内面無文当て貝痕	
28	陶器	播鉢	(32.0)	[4.6]	—	I K	5	良好	灰白	SD48-52 瀬戸美濃 鉄釉 17C末～18C前半	
29	瓦質土器	焙烙	(35.8)	5.5	(30.3)	I K	10	普通	褐灰	SD52 在地産 18C～19C	
30	石製品	板碑	長さ[10.1]cm 幅8.9cm 厚さ1.1cm 重さ163.1g				緑泥片岩				SD48-52 二条線
31	石製品	板碑	長さ[9.0]cm 幅[6.5]cm 厚さ1.6cm 重さ153.4g				緑泥片岩				SD52 K-6G 阿弥陀種子 涅槃点 側縁部二次加工痕
34	石製品	碇石	長さ[5.8]cm 幅2.9cm 厚さ2.1cm 重さ46.8g				凝灰岩				SD36 砥面は4面
35	石製品	碇石	長さ[8.7]cm 幅2.7cm 厚さ1.7cm 重さ58.0g				凝灰岩				SD36 砥面は4面 被熱
36	石製品	碇石	長さ[5.3]cm 幅[7.9]cm 厚さ3.3cm 重さ209.2g				安山岩				SD36 砥面は2面
37	石製品	碇石	長さ[17.5]cm 幅3.6cm 厚さ1.7cm 重さ62.3g				凝灰岩				SD48 砥面は3面だが主として表面を使用 櫛歯状工具痕 被熱
38	石製品	碇石	長さ[7.2]cm 幅3.1cm 厚さ2.1cm 重さ59.0g				凝灰岩				SD64 砥面は4面 被熱により赤化
39	石製品	碇石	長さ[7.7]cm 幅2.8cm 厚さ2.2cm 重さ67.1g				凝灰岩				SD67 砥面は表面のみ 他の3面に櫛歯状工具痕
40	かわらけ	皿	(9.6)	2.2	(6.0)	C E H I K	20	普通	橙	SD70 底部回転糸切り 近世	
41	陶器	甕	—	[6.6]	—	H I K	5	普通	灰白	SD70 常滑 13C後半	
42	石製品	板碑	長さ[8.9]cm 幅[10.8]cm 厚さ1.5cm 重さ228.3g				緑泥片岩				SD70 阿弥陀種子 月輪あり 背面剥離 15C～16C前半
43	石製品	板碑	長さ[15.4]cm 幅[10.5]cm 厚さ1.7cm 重さ411.4g				緑泥片岩				SD70 阿弥陀三尊種子 月輪・蓮座あり 被熱 二次研磨 15C～16C前半
44	石製品	板碑	長さ[18.3]cm 幅[10.0]cm 厚さ1.9cm 重さ498.9g				緑泥片岩				SD70 「廿三日」 側縁部二次加工痕
45	石製品	板碑	長さ[14.1]cm 幅[10.4]cm 厚さ2.2cm 重さ538.7g				緑泥片岩				SD70 側縁部二次加工痕
46	石製品	碇石	長さ[6.1]cm 幅3.3cm 厚さ3.2cm 重さ84.1g				凝灰岩				SD71 砥面は4面
47	石製品	碇石	長さ[2.8]cm 幅2.5cm 厚さ0.8cm 重さ6.9g				凝灰岩				SD71 砥面は4面だが主として2面を使用

第18表 溝跡出土銭貨観察表(第75図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
32	銭貨	寛永通寶	22.94	23.01	1.30～1.41	2.7	SD43・51 新 江戸 1668～1683年	
33	銭貨	元豊通寶	22.91	23.81	1.00～1.03	1.7	SD53 篆書 北宋 1078年初鑄	

(7) 土壌

中・近世の土壌は調査区全体から266基を検出した(第77～96図、第19表)。分布状況は調査区の全域に及び、とりわけ第21号溝跡の周辺に集中したあり方を示していた。

土壌の形状や規模はさまざまであるが、平面形からは①円形、②楕円形、③長方形、④方形、⑤隅丸方形、⑥溝状、⑦不整形に大きく分けられる。

①の円形土壌は43基である。規模は径0.55～2.75m、深さ0.05～0.70mと幅があり、多種・多

様な用途や性格が想定される。調査区内の数箇所において径1.00m前後の底面の平らな円形土壌2基ないし3基が、一列に並んだ状態で検出されている。均一な形態・規模で、東西・南北の二方向に意図的に配置されたものと思われる。

覆土は暗褐色土や黒褐色土の単一層からなり、桶等の埋設物の痕跡は認められなかった。遺物を出土するものが少なく、用途や性格の明らかなものはない。

②の楕円形土壌は35基である。規模は長軸0.55

～3.06m、短軸0.24～1.10m、深さ0.03～0.50mと幅がある。長軸を基準に細分すると0.90m前後、1.50m前後、2.60m以上の三種類となる。大部分は長軸0.90m前後のものである。

③の長方形土壌は137基で、検出した土壌の過半を占める。規模や断面形の特徴から、細分することが可能である。

規模は長さ0.42～8.65mと大きさまでであるが、1.00～2.00mが中心的な大きさである。他に長さ3.00～4.00mの細長い土壌も一定量みられる。

一方、幅は0.42～2.00mの範囲に収まり、大半が1.00m以下と狭いのが特徴である。壁面が垂直

に立ち上がるものも多い。

長方形土壌は長軸方位を南北方向に採るものが多く、第1次調査区北側で検出された軸を描き並列するもののほか、同一地点において連続的に構築された結果、縦列した状態で重複するものや並列した状態で重複するものもある。

出土遺物が少なく、時期や性格を明確にし得ないが、全体の形状から推して、農作物の貯蔵施設である「ムロ」が多数含まれていると考えられる。

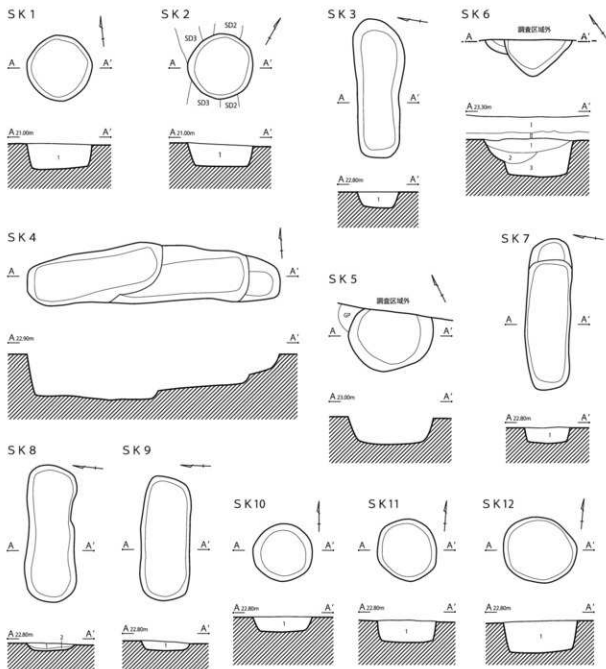
④の方形土壌は6基で、第6・16・25・114・127・280号土壌である。一辺の長さが1.50mの第280号土壌以外は1.00m以下の小規模なものが

第19表 土壌一覧表(第40・41・77～96図)

番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考	番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考
1	L-25	円形	1.05	1.00	0.40	SD2-3より新	36	M-12	不整形	(1.25)	1.10	0.10	SK35・37より古
2	L-25	円形	1.05	1.03	0.35		37	M-12	不整形	(0.60)	0.80	1.25	SK36より新
3	M-14	長方形	2.20	0.80	0.25		38	M-12	不整形	0.75	0.72	0.25	SK39より古
4	M-15	長方形	4.00	0.95	0.70		39	M-12	不整形	0.60	0.50	0.35	SK38より新
5	M-15	円形	1.35	(0.90)	0.40		40	N-11	長方形	7.00	0.85	1.00	SD29より古
6	M-15	方形か	1.35	0.55	0.40		41	N-11	長方形	3.45	0.70	0.23	SD29より古
7	M-15	長方形	2.40	0.70	0.25		42	N-10	不整形	1.55	1.05	0.40	SK64より新
8	L-15	長方形	2.15	0.80	0.10		43	N-12	長方形	1.25	0.75	0.25	SD33より古
9	L-15	長方形	1.95	0.80	0.15		44	N-12	長方形	1.70	0.85	0.50	
10	L-15	円形	0.95	0.90	0.25		45	O-12	長方形	1.65	1.15	0.15	
11	L-15	円形	1.00	0.95	0.33		46	O-11	長方形	(1.60)	0.55	0.30	
12	L-15	円形	1.15	1.00	0.50		47	P-11	不整形	1.45	(0.85)	0.30	
13	L-15	円形	1.05	1.00	0.35		48	P-11	不整形	1.95	0.75	0.25	SK49より新
14	L-15	円形	1.10	1.10	0.40		49	P-11	楕円形	(1.45)	0.70	0.15	SK48より古 SK50より新
15	L-16	長方形	2.05	0.70	0.40		50	P-11	楕円形	1.55	0.70	0.15	SK49より古
16	K-15	方形	0.85	0.60	0.65	縄文	51	P-10	長方形	4.55	2.00	0.70	SK53より新
17	K-15	不整形	1.20	0.80	0.50		52	P-10	不整形	—	—	0.40	
18	J-16	楕円形	1.45	0.95	0.23		53	Q-10	不整形	(1.20)	(0.60)	0.60	
19	J-16	長方形	1.10	0.55	0.05		54	Q-10	楕円形	1.50	0.85	0.50	
20	J-16	楕円形	1.10	0.80	0.10		55	N-10	楕円形	0.95	0.65	0.10	
21	欠番						56	N-10	楕円形	0.90	0.65	0.42	
22	K-17	長方形	1.15	0.55	0.20		57	N-11	楕円形	1.55	0.90	0.30	
23	K-17	長方形	(5.50)	1.20	0.10		58	O-12	長方形	4.95	1.00	0.30	SD29より新 SD33より古
24	K-18	隅丸方形	1.30	1.20	0.30		59	O-12	長方形	3.55	0.60	0.20	SD29より新 SD33より古
25	K-17	方形	1.10	0.80	0.20		60	N-12	長方形	1.70	0.80	0.15	SD29より新
26	J-15	不整形	1.60	0.80	0.40	第1号火葬跡より古	61	N-13	長方形	1.40	0.75	0.40	SD33より古
27	I-15	長方形か	1.20	(0.35)	0.50		62	O-11	不整形	1.15	0.65	0.40	
28	欠番						63	N-11	楕円形	1.25	1.00	0.35	
29	欠番						64	N-10	楕円形	(0.90)	0.55	0.15	
30	欠番						65	N-11	楕円形	1.85	0.95	0.20	
31	M-13	長方形	5.00	0.75	0.75		66	N-12	長方形	1.70	0.70	0.25	SD29より新
32	M-12	長方形	1.85	0.70	0.15		67	P-8	長方形	2.00	0.95	0.30	SB1より古
33	M-12	不整形	1.50	(0.65)	0.20		68	Q-8	長方形	2.88	0.80	0.35	
34	M-12	長方形	4.10	1.55	0.65		69	R-7	長方形	2.10	0.75	0.20	
35	N-12	不整形	(0.90)	0.65	0.08	SK36より新	70	R-7	長方形	2.30	1.10	0.20	

番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考	番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考
71	R-7	長方形	2.10	0.80	0.25		127	M-8	方形	0.95	0.73	0.33	SK126より古
72	R-8	長方形	3.90	1.10	0.33		128	N-7	楕円形	0.85	0.65	0.20	
73	R-8	長方形	3.10	1.30	0.30	SE1より古	129	N-8	円形	0.95	0.90	0.13	
74	R-6	長方形	2.40	0.90	0.05	SK1より新	130	M-8	不整形	0.70	0.65	0.50	
75	R-6	楕円形	1.65	0.60	0.03		131	M-8	不整形	1.00	0.80	0.30	
76	R-7	楕円形	1.05	0.40	0.03		132	N-7	円形	1.05	0.98	0.30	
77	R-7	楕円形	1.00	0.70	0.03		133	M-7	長方形	2.00	1.00	0.25	
78	Q-8	楕円形	(0.90)	0.90	0.10	SB1より古	134	M-7	長方形	3.10	1.80	0.25	
79	R-7	長方形	1.70	0.90	0.20		135	M-9	円形	0.75	0.70	0.15	
80	R-8	長方形	2.95	1.05	0.25		136	M-8	不整形	1.10	0.80	0.25	
81	S-7	長方形	2.15	0.90	0.30		137	Q-6	楕円形	0.90	0.70	0.15	SJ2より新
82	S-7	長方形	2.45	1.00	0.25		138	Q-6	長方形	1.55	0.70	0.20	
83	S-8	長方形	1.60	0.75	0.10		139	K-11	長方形	1.65	1.05	0.40	
84	S-8	円形	1.60	1.40	0.20	SK85より新	140	K-12	長方形	(1.60)	(0.90)	0.25	
85	S-8	長方形	4.30	0.80	0.05	SK84・86より古	141	K-7	楕円形	(1.80)	0.85	0.30	
86	S-8	長方形	4.60	1.25	0.30	SK85より新	142	K-11	長方形	1.75	0.60	0.10	
87	Q-4	長方形	(1.75)	0.95	0.20	SD26より古	143	N-7	円形	0.95	0.90	0.40	縄文
88	Q-4	長方形か	(1.00)	0.95	0.25	SD26より古	144	P-8	円形	—	—	—	縄文
89	Q-4	長方形	2.05	1.00	0.25	SK90より新	145	O-8	長方形	2.85	0.50	0.15	SK146より新
90	Q-4	長方形	(1.55)	0.80	0.20	SK89より古 SD41より新	146	O-8	長方形	5.30	0.53	0.30	SK145より古
91	Q-4	楕円形	1.15	1.10	0.10		147	O-8	不整形	2.00	1.10	0.80	
92	Q-3	長方形	2.15	0.90	0.25	SD41・42より新	148	P-9	円形	2.75	2.60	0.70	SD22より古
93	Q-3	円形	1.05	1.00	0.10		149	O-8	楕円形	2.85	0.65	0.30	
94	Q-2	円形	0.95	(0.70)	0.05		150	P-8	長方形	2.00	1.10	0.10	
95	P-8	長方形	3.85	0.70	0.10	SK96より新	151	P-8	長方形	1.60	0.75	0.10	
96	P-8	長方形	2.85	0.55	0.15	SK95より古 SK97より新	152	P-8	長方形	2.15	0.70	0.10	SK164より新
97	P-8	長方形	2.55	0.55	0.15	SK96より古	153	P-7	楕円形	1.85	0.50	0.10	
98	R-5	長方形	2.60	0.90	0.20	SK99より新	154	P-7	長方形	3.10	1.40	0.20	
99	Q-5	長方形	(0.90)	0.85	0.10	SK98より古	155	P-7	長方形	3.55	0.60	0.30	SK156より新
100	Q-5	長方形	(0.85)	0.80	0.05		156	P-7	長方形	1.15	0.45	0.20	SK155より古
101	S-8	楕円形	1.43	0.60	0.25		157	P-7	長方形	1.35	0.55	0.05	
102	Q-3	円形	1.08	0.98	0.25		158	P-7	長方形	2.80	0.95	0.38	
103	P-7	円形	1.10	0.98	0.30	SK2より新	159	P-6	長方形	2.72	0.95	0.35	
104	M-10	不整形	1.40	0.90	0.30		160	O-5	長方形	(4.35)	0.70	0.25	SK36より古
105	M-11	不整形	2.25	0.95	0.40		161	O-5	楕円形	(1.20)	1.05	1.80	縄文 SK36より古
106	K-11	長方形	1.45	0.70	0.13		162	P-5	楕円形	(0.90)	0.95	0.30	縄文 SK163より古
107	L-11	長方形	2.45	0.80	0.70		163	P-5	長方形	4.80	1.10	0.35	SK162より新
108	K-11	不整形	2.35	0.55	0.20		164	P-8	円形	1.30	1.20	0.30	縄文 SK152より古
109	L-11	不整形	(2.70)	(0.90)	0.20	SK110より新	165	P-4	長方形	2.50	0.80	0.25	
110	L-11	長方形	1.65	(0.30)	0.40	SK109より古	166	P-4	長方形	4.05	1.00	0.30	SD49より新
111	L-11	長方形	2.80	0.85	0.70	SD27より新	167	P-4	長方形	3.20	0.95	0.40	SK168より新
112	K-10	長方形	1.70	0.70	0.20		168	P-4	楕円形	0.90	(0.50)	0.05	SK167より古
113	L-10	長方形	1.20	0.60	0.07		169	P-4	円形	0.90	0.80	0.25	
114	L-10	方形	0.08	0.60	0.10	SD27より新	170	O-3	円形	1.00	0.90	0.10	
115	L-10	長方形	1.50	(0.52)	0.10	SD27より新	171	O-4	楕円形	1.10	0.92	0.30	縄文
116	Q-7	円形	0.90	0.80	0.20		172	O-3	長方形	2.05	0.75	0.15	
117	M-8	長方形	2.20	1.00	0.40		173	O-2	円形	1.12	1.10	0.10	
118	L-8	長方形	1.80	0.50	0.15		174	P-3	長方形	1.50	0.85	0.20	
119	K-8	長方形	1.90	0.65	0.17		175	Q-5	長方形	4.40	0.95	0.15	
120	M-8	不整形	1.15	0.80	0.35		176	M-4	円形	1.00	0.95	0.06	
121	L-9	不整形	1.00	0.80	0.40		177	K-6	長方形	2.63	0.70	0.13	
122	L-9	円形	0.80	0.75	0.20		178	J-6	長方形	2.30	0.72	0.20	
123	L-9	楕円形	0.80	0.70	0.25		179	M-4	不整形	(1.00)	1.00	0.10	SK180より新
124	L-8	長方形	1.15	0.50	0.10		180	M-4	長方形	(0.70)	0.70	0.12	SK179より古
125	K-8	長方形	(1.65)	0.60	0.15		181	M-3	長方形	2.80	0.75	0.10	
126	M-8	長方形	2.55	1.40	0.25	SK127より新	182	L-3	長方形	1.65	0.75	0.10	

番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考	番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考
183	K-4	楕円形	0.95	(0.75)	0.07	SD54より古	238	L-12	円形か	0.65	(0.35)	0.10	
184	K-4	長方形	1.35	0.65	0.05	SD54より古	239	I-12	円形	1.53	(1.42)	0.36	SB6より古
185	欠番						240	K-12	不整形	2.55	2.05	0.18	SD27より古
186	K-6	長方形	2.00	0.63	—	SD52より古	241	K-12	円形	1.22	1.10	0.08	
187	L-6	長方形	2.00	0.60	0.15		242	J-12	隅丸方形	0.68	0.68	0.22	
188	K-3	長方形	7.85	0.80	0.10	SD38より古	243	L-13	不整形	1.52	0.50	0.15	
189	欠番						244	I-15	円形	1.20	1.20	0.26	
190	欠番						245	I-15	円形	1.20	1.20	0.30	
191	N-5	楕円形	(0.95)	0.80	0.10	SK192より古	246	I-15	円形	1.10	1.10	0.20	
192	N-5	円形	1.00	1.18	0.20	SK191より新	247	I-15	円形	1.24	1.24	0.24	
193	M-5	長方形	4.25	0.50	(0.60)	SD48より新	248	I-15	円形	1.20	1.20	0.35	
194	M-5	長方形	(2.85)	0.70	0.25		249	I-15	円形	1.14	1.14	0.20	
195	N-5	長方形	3.30	0.80	0.50	SD52より新	250	K-13	楕円形	3.06	0.90	0.12	
196	G-12	楕円形	1.00	0.80	0.45	縄文	251	K-13	楕円形	0.84	0.54	0.12	
197	F-12	円形	0.90	0.87	0.45	縄文	252	K-13	楕円形	2.60	0.80	0.35	SD30より新
198	G-11	楕円形	0.95	0.70	0.30	縄文	253	I-13	長方形	2.10	0.80	0.20	SK254より古
199	H-11	楕円形	1.20	0.80	0.25	縄文	254	I-13	長方形	3.35	0.85	0.25	SK253より新 SK255より古
200	I-10	円形	1.00	0.95	0.45	縄文	255	I-13	円形	1.58	1.20	0.30	SK254より新 SK256より古
201	J-12	長方形	2.20	0.85	0.50		256	I-13	長方形	3.35	0.64	0.30	SB6より新 SD27より古
202	J-12	長方形	2.05	0.90	0.13		257	I-13	長方形	6.50	0.66	0.30	SK256 SD27より古
203	J-12	長方形	2.05	0.80	0.50		258	G-14	円形	0.84	0.75	0.15	SK259より新
204	I-11	楕円形	1.00	0.85	0.35	縄文	259	G-14	円形	0.68	0.56	0.20	SK258より古
205	H-11	不整形	1.23	1.10	0.35	縄文	260	G-14	円形	0.75	0.68	0.20	
206	I-9	円形	1.25	1.10	0.35	縄文	261	I-13	溝状	6.80	0.80	0.40	
207	I-9	長方形	1.80	0.65	0.15		262	J-13	長方形	1.96	0.82	0.20	
208	I-8	長方形	3.75	1.25	0.20		263	I-13	不整形	1.05	0.50	0.10	
209	H-8	長方形	1.30	0.70	0.30	SD59より新	264	J-14	不整形	1.05	0.65	0.25	
210	I-8	長方形	[3.10]	1.10	0.35		265	I-14	不整形	0.80	0.60	0.20	
211	J-9	不整形	1.25	1.05	0.35		266	I-17	円形	1.24	1.15	0.20	
212	I-8	長方形	[4.10]	1.50	0.30		267	I-17	円形	0.55	(0.55)	0.15	SK268より古
213	I-8	長方形	2.80	(0.35)	0.17	SK214・215より古	268	I-17	円形	1.15	1.05	0.30	SK267より新
214	I-8	長方形	(1.35)	(0.20)	0.15	SK213より新 SK215より古	269	I-17	円形	0.75	0.65	0.08	
215	I-8	長方形	5.35	0.70	0.70	SK213・214より新	270	I-17	円形	0.90	0.85	0.14	
216	I-8	長方形	2.25	0.75	0.25	SK217より新	271	I-17	楕円形	0.90	0.80	0.15	
217	I-8	長方形	3.25	0.80	0.12	SK216より古	272	J-17	隅丸方形	1.24	1.10	0.15	
218	I-8	不整形	1.00	0.90	0.60	縄文	273	I-16	不整形	1.20	0.45	0.28	
219	D-5	長方形	0.93	0.80	0.30		274	I-16	楕円形	0.55	0.35	0.17	
220	D-5	不整形	1.25	1.00	0.60		275	I-15	長方形	0.72	0.42	0.20	
221	E-5	長方形	1.65	0.80	0.10		276	I-15	不整形	0.80	0.66	0.10	
222	D-6	長方形	(1.50)	0.90	0.15		277	I-15	楕円形か	0.65	(0.45)	0.45	
223	D-6	長方形	2.30	0.60	0.15		278	I-16	楕円形	1.05	0.24	0.22	
224	G-8	楕円形	1.70	1.10	0.40	縄文	279	H-15	円形	0.66	(0.64)	0.30	SD21より古
225	F-8	長方形	1.15	0.55	0.07		280	N-12	方形	1.50	1.10	0.12	SK34より新
226	G-7	長方形	5.60	0.65	0.35		281	Q-3	長方形	(2.50)	0.75	0.05	SK92 SD26より古
227	H-7	不整形	1.70	0.65	0.05		282	R-6	長方形	0.85	0.67	0.03	
228	H-7	不整形	(2.05)	0.95	0.25	SK229より古	283	R-8	不整形	0.72	0.52	0.25	
229	H-7	長方形	2.00	0.65	0.20	SK228より新	284	M-3	楕円形	1.10	0.57	0.05	
230	F-6	楕円形	1.30	1.10	1.20	縄文	285	M-10	不整形	1.90	1.00	0.30	
231	G-6	長方形	0.90	0.45	0.03		286	L-6	溝状	4.00	0.60	0.07	
232	G-7	長方形	2.60	0.60	0.25	SD70より新	287	J-5	溝状	2.15	0.50	0.03	
233	G-7	長方形	(6.00)	(0.80)	0.25	SD67より新	288	N-11	楕円形	1.42	0.56	0.35	
234	G-7	長方形	(5.75)	(1.30)	0.40	SD67より新	289	D-6	長方形	0.93	0.53	0.15	
235	H-7	長方形	(3.55)	(0.65)	0.50	SD67より新	290	F-9	楕円形	1.06	0.70	0.50	
236	H-7	長方形	(8.65)	0.60	0.40	SD67・70より新	291	N-11	不整形	2.65	0.70	0.25	
237	I-6	長方形	2.50	1.00	0.25	SD72より新							



SK 1・2
1 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 7$ mm）やや多 炭化物粒子（ $\phi 2 \sim 4$ mm）少 しまりあり

SK 3
1 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 15$ mm）・ローム粒子若干

SK 6
I 灰色シルト
II 暗褐色土 灰色シルトブロック多
III 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 10$ mm）・ローム粒子若干
2 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 20$ mm）若干
3 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 10$ mm）やや多 ローム粒子若干

SK 7
1 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 15$ mm）・ローム粒子若干

SK 8
1 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 2$ mm）・ローム粒子若干
2 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 10$ mm）若干 ローム粒子少

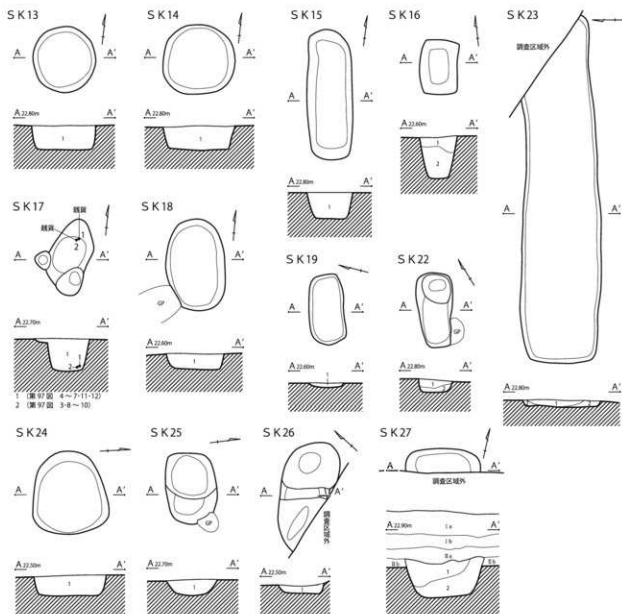
SK 9
1 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 20 \sim 30$ mm）若干 ローム粒子少

SK 10
1 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 3$ mm）若干

SK 11
1 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 20$ mm）少

SK 12
1 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 1 \sim 10$ mm）・ローム粒子若干

第77図 土坑(1)



SK13
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm)・ローム粒子若干

SK14
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm)・ローム粒子若干

SK15
1 黒褐色土 ロームブロック (φ1~5mm) 若干

SK16
1 暗黄褐色土 ロームブロック (φ1~5mm) 極多
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~7mm) 若干

SK17
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 少量

SK18
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~20mm) やや多

SK19
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~7mm) やや多 ローム粒子若干

SK22
1 黒褐色土 ロームブロック (φ1~5mm) 若干 ローム粒子少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干 ローム粒子多

SK23
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~7mm) やや多 ローム粒子若干
2 暗黄褐色土 ロームブロック (φ1~7mm)・ローム粒子多

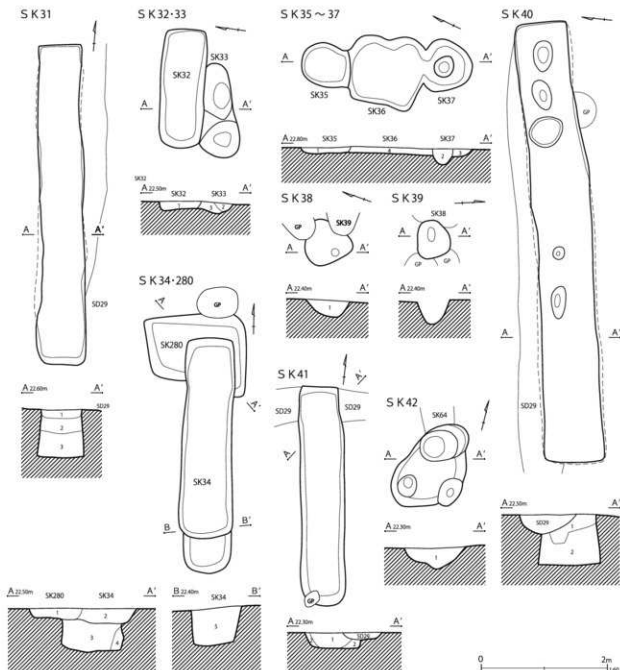
SK24
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~5mm)・ローム粒子若干

SK25
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~20mm) 若干

SK26
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) やや多 灰色シルト (φ1~5mm) 若干

SK27
I a 灰色シルト
I b 暗灰褐色土 灰色シルトブロック (φ1~10mm) 若干 灰色シルト粒子やや多
II a 黒褐色土 ロームブロック (φ1~3mm) 少
II b 暗褐色土 ロームブロック (φ5~10mm)・ローム粒子若干
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干 ローム粒子少量
2 暗黄褐色土 ロームブロック (φ1~15mm) 若干 ローム粒子やや多

第78図 土壌(2)



- SK31
 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3mm) 多
 2 黒褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) やや多
 3 暗褐色土 ロームブロック (φ1~20mm) やや多 ローム粒子若干

- SK32・33
 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3mm) やや多
 2 暗褐色土 ローム粒子若干
 3 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3mm)・ローム粒子若干

- SK34・280
 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 少
 2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3mm) 多
 3 暗褐色土 ロームブロック (φ1~15mm)・ローム粒子若干
 4 暗褐色土 ロームブロック (φ1~30mm) やや多 ローム粒子若干
 5 黒褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) やや多 ローム粒子若干

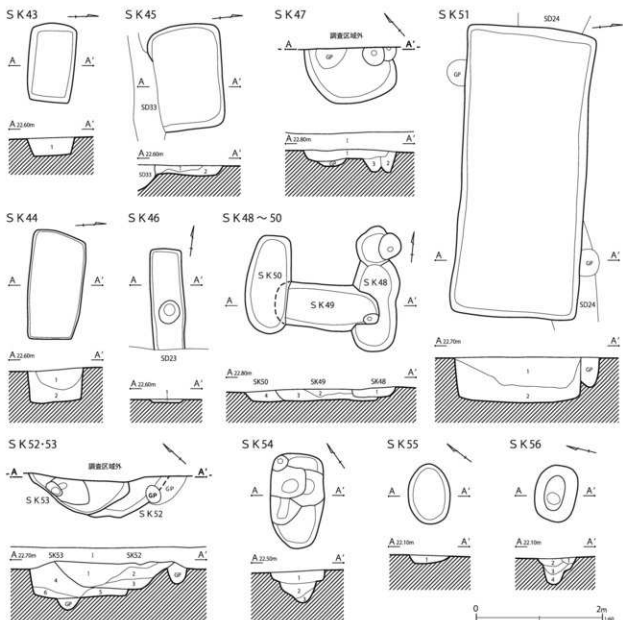
- SK35~37
 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~30mm) 若干
 2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~15mm) 少
 3 黒褐色土 ロームブロック (φ1~30mm) 少
 4 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干 ローム粒子やや多

- SK38
 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~7mm)・ローム粒子若干

- SK40
 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~30mm) 少 ローム粒子若干
 2 黒褐色土 ロームブロック (φ1~15mm)・ローム粒子若干

- SK41
 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3mm)・ローム粒子若干
 2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~15mm) やや多 ローム粒子若干

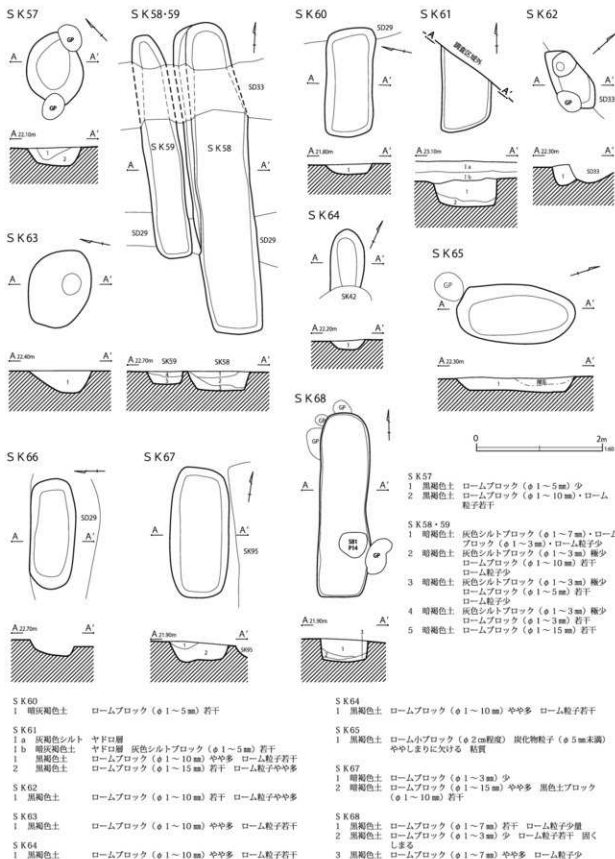
- SK42
 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~20mm) 若干 ローム粒子少



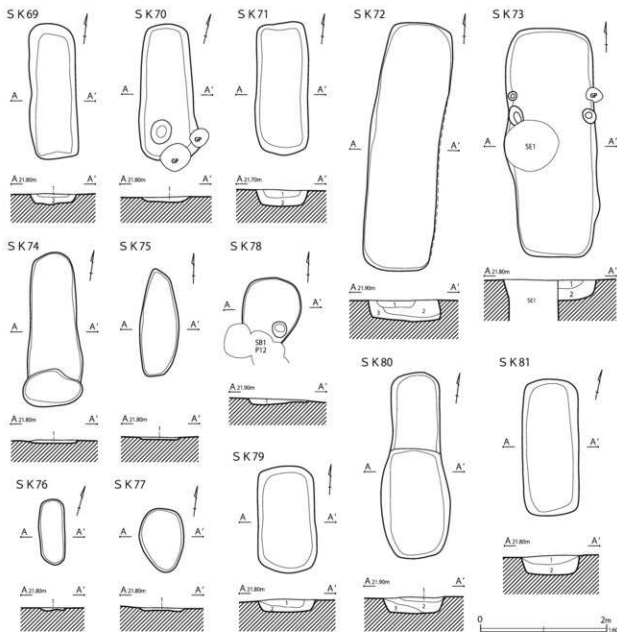
- SK 43
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干
- SK 44
1 黒褐色土 ロームブロック (φ1~7mm) やや多
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干 ローム粒子やや多
- SK 45
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3mm)・ローム粒子若干
2 黒褐色土 ロームブロック (φ1~7mm) 若干
- SK 46
1 黒褐色土 ローム粒子 (φ1~5mm) 少
- SK 47
1 暗灰褐色土 表土
2 黒褐色土 ローム粒子 (φ2~5mm) 少
3 暗褐色土 ロームブロック (φ2~4cm) 少 ローム粒子 (φ2~5mm) 少
4 褐色土 ロームブロック (φ2~4cm)・ローム粒子 (φ2~5mm) 多
- SK 48~50
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ2~5mm) 横
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1cm)・ローム粒子 (φ2~5mm) 少
3 褐色土 ロームブロック (φ1~5cm)・ローム粒子 (φ2~5mm) 多
4 暗褐色土 ロームブロック (φ1cm)・ローム粒子 (φ2~5mm) 少

- SK 51
1 褐色土 ロームブロック (φ2~5cm) 少 ローム粒子 (φ2~4mm) 多
2 褐色土 ロームブロック (φ2~5cm) 多 ローム粒子 (φ2~4mm) 横多
- SK 52~53
表土
1 褐色土 ロームブロック (φ1~5cm) 少 ローム粒子 (φ2~5mm) 多
2 黒褐色土 ロームブロック (φ1~5cm) 少 ローム粒子 (φ2~5mm) 多
3 黄褐色土 ロームブロック (φ1~10cm) 多 ローム粒子 (φ2~5mm) 横多
4 暗褐色土 ロームブロック (φ1~2cm)・ローム粒子 (φ2~5mm) 多
5 暗褐色土 ロームブロック (φ1~5mm) 少 ローム粒子 (φ2~5mm) 多
6 褐色土 ロームブロック (φ1~2cm) 少 ローム粒子 (φ2~5mm) 多
- SK 54
1 暗灰褐色土 ロームブロック (φ2mm) 横 ローム粒子 (φ2~5mm) 少
2 褐色土 ロームブロック (φ2~5cm)・ローム粒子 (φ2~5mm) 多
3 暗褐色土 ロームブロック (φ2~5cm) 少 ローム粒子 (φ2~5mm) 多
- SK 55
1 黒褐色土 ロームブロック (φ1~3mm) やや多
- SK 56
1 黄褐色土 ローム粒子横多
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~5mm)・ローム粒子若干
3 黒褐色土 ロームブロック (φ1~5mm)・ローム粒子少
4 暗褐色土 ロームブロック (φ1~5mm) 多 ローム粒子やや多

第80図 土壌 (4)

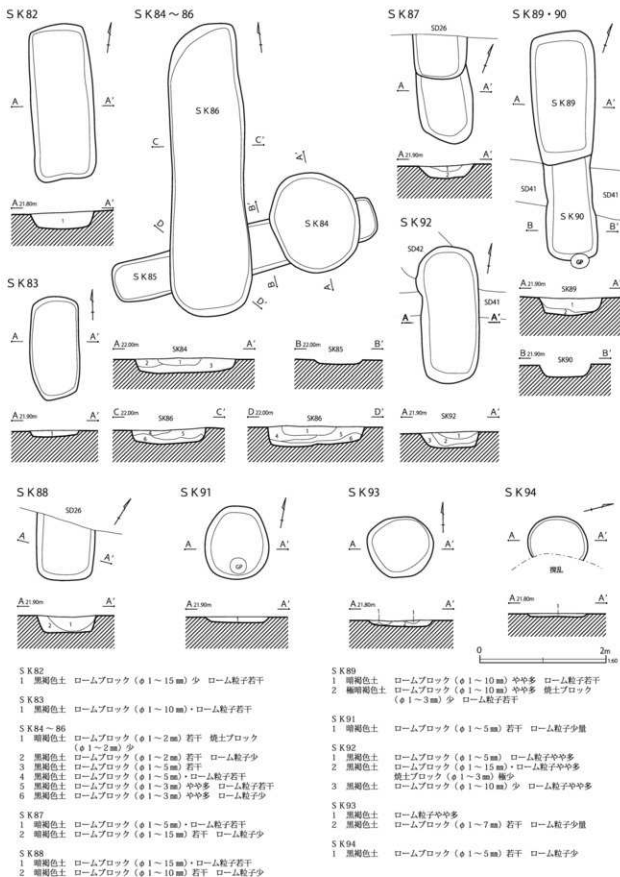


第81図 土壌(5)



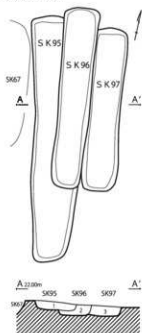
- S K 69
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 3 mm) 少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 7 mm) やや多 ローム粒子少
- S K 70
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 7 mm) 若干 ローム粒子少
- S K 71
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) やや多 ローム粒子少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 3 mm) 若干 ローム粒子少
- S K 72
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 mm) 少 ローム粒子若干
2 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) ・ローム粒子少
3 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 mm) やや多 ローム粒子若干
- S K 73
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 mm) やや多
2 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) 若干
- S K 74
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 7 mm) 若干

- S K 75
1 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) やや多
- S K 76
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 3 mm) やや多
- S K 77
1 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) やや多
- S K 78
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm) ・ローム粒子若干
- S K 79
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 mm) やや多 ローム粒子若干
2 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm) ・ローム粒子若干
- S K 80
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 mm) 少 ローム粒子若干
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) ・ローム粒子若干
3 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 20 mm) やや多 ローム粒子少
- S K 81
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 3 mm) 少 ローム粒子若干
2 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 20 mm) 若干 ローム粒子少

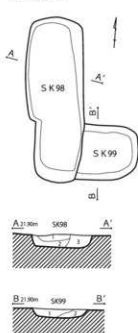


第83図 土坑(7)

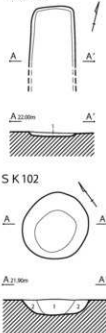
SK 95 ~ 97



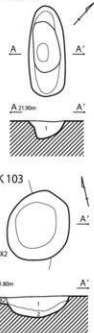
SK 98 ~ 99



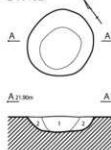
SK 100



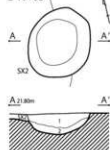
SK 101



SK 102



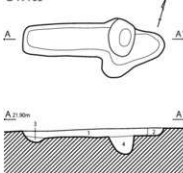
SK 103



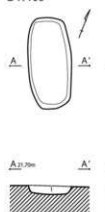
SK 104



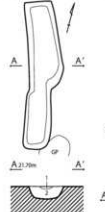
SK 105



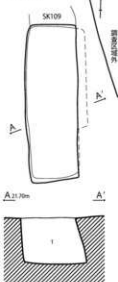
SK 106



SK 108



SK 107



SK 95 ~ 97

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 cm程度)・ローム粒子 (φ 1 ~ 5 mm) 少
2 褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 3 cm) 少 ローム粒子 (φ 1 ~ 5 mm) 多
3 褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 cm) 多 ローム粒子 (φ 2 ~ 5 mm) 極多

SK 98

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) 若干
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm) やや多
3 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm) 若干

SK 99

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm) 少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) 多

SK 100

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 mm) 若干

SK 101

- 1 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm)・ローム粒子少

SK 102

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) 若干 炭化物粒子少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) 若干 ローム粒子やや多 炭化物粒子少

SK 103

- 1 黒褐色土 ローム粒子少 しまりあり
2 暗褐色土 ローム粒子多 しまりあり

SK 104

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 mm) やや多 ローム粒子少 しまりなし

SK 105

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 cm程度) 少量 ローム粒子少量 しまりなし
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 10 ~ 20 mm) 少 ローム粒子微 しまりなし
3 暗褐色土 ロームブロック (φ 2 cm程度)・ローム粒子少 しまりなし
4 暗褐色土 ロームブロック (φ 3 ~ 5 mm)・ローム粒子やや多 しまりなし

SK 106

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 mm程度) 少 ローム粒子微 しまりなし

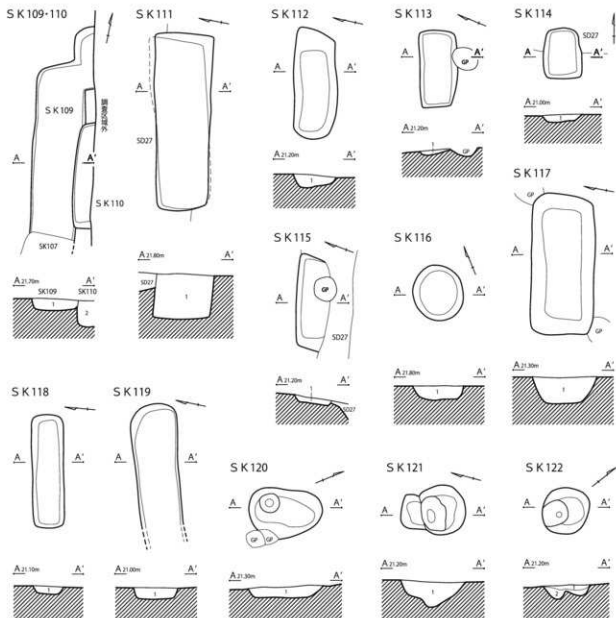
SK 107

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 10 ~ 20 mm) 多 ローム粒子やや多 しまりなし

SK 108

- 1 黒褐色土 ロームブロック (φ 5 mm程度) 少 炭化物粒子微
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 cm程度) やや多 炭化物粒子微

第84図 土壌(8)



SK109・110
1 暗褐色土 ロームブロック (φ10～20mm)・ローム粒子多 しまりなし
2 黄褐色土 ロームブロック (φ20～30mm) 多 ローム粒子やや多
しまりなし

SK111
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1cm程度) やや多 ローム粒子少 しまりあり

SK112
1 暗褐色土 ロームブロック (φ10～20mm) やや多 炭化物粒子微 しまり
あり

SK113
1 暗灰褐色土 ロームブロック (φ3mm程度) 少 しまりなし

SK114
1 暗褐色土 ロームブロック (φ3mm程度) やや多 炭化物粒子微 しまりなし

SK115
1 暗灰褐色土 灰色ブロック (φ5mm程度)・ロームブロック (φ5mm程度) 少
しまりあり

SK116
1 暗褐色土 ローム粒子少 炭化物粒子微 しまりあり

SK117
1 暗褐色土 ロームブロック (φ3mm程度) やや多 ローム粒子少
しまりなし

SK118
1 暗褐色土 ローム粒子少 炭化物粒子微 しまりなし

SK119
1 暗褐色土 ローム粒子少 炭化物粒子微

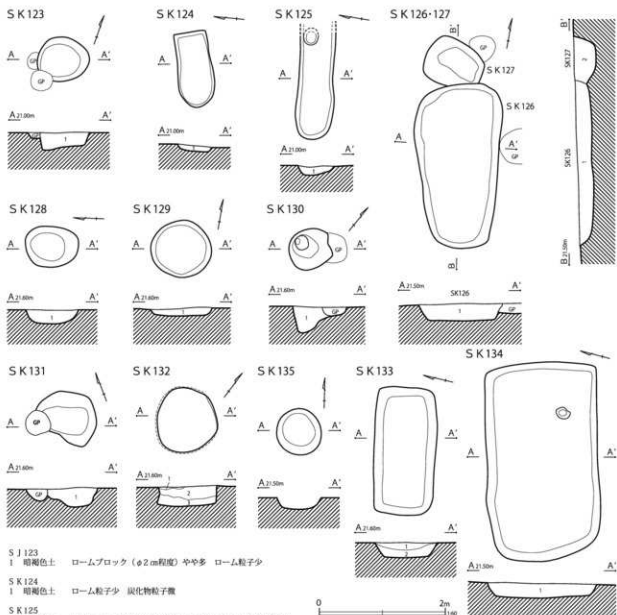
SK120
1 暗褐色土 ロームブロック (φ3～5mm) 少 炭化物粒子微

SK121
1 暗黄褐色土 ロームブロック (φ3～10mm) やや多 炭化物粒子微

SK122
1 黒褐色土 ロームブロック (φ3～10mm) 少 ローム粒子やや多
炭化物粒子微
2 黄褐色土 ロームブロック (φ10～20mm) 多 ローム粒子やや多

0 2m

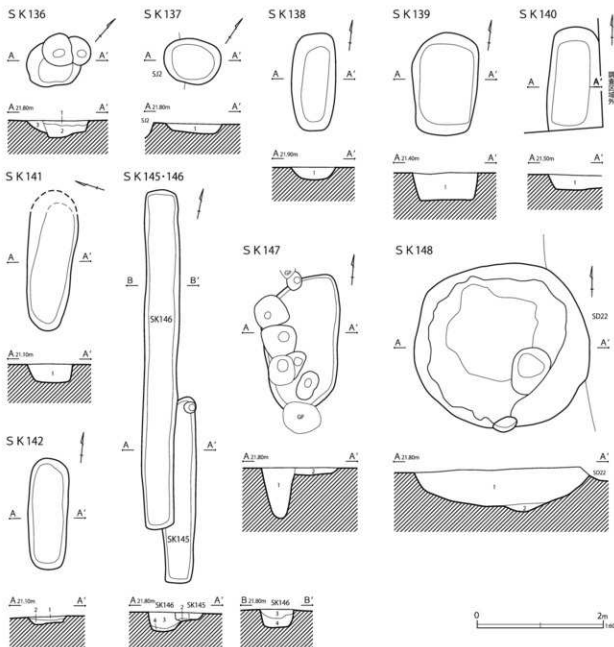
第85図 土壌 (9)



- S J 123
1 暗褐色土 ロームブロック (φ2 cm程度) やや多 ローム粒子少
- S K 124
1 暗褐色土 ローム粒子少 炭化物粒子微
- S K 125
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1 cm程度)・ローム粒子少 炭化物粒子微
- S K 126・127
1 暗褐色土 ロームブロック (φ3~5 mm)・ローム粒子少 炭化物粒子微
2 黒褐色土 ロームブロック (φ5~10 mm)・ローム粒子少 炭化物粒子微 しまりなし
- S K 128
1 暗褐色土 ロームブロック (φ10~20 mm) やや多 ローム粒子少 しまりあり
- S K 129
1 暗褐色土 ロームブロック (φ3 cm程度)・ローム粒子少 炭化物粒子微
- S K 130
1 暗褐色土 ロームブロック (φ10~20 mm) やや多 ローム粒子少 しまりあり

- S K 131
1 暗褐色土 ロームブロック (φ5~10 mm) 多 ローム粒子少 しまりなし
- S K 132
1 灰褐色土 ローム粒子少 炭化物微 しまりあり
2 暗褐色土 ローム粒子多 炭化物微 しまりあり
3 暗褐色土 ロームブロック (φ1 cm程度)・ローム粒子少 炭化物粒子微
- S K 133
1 暗褐色土 ロームブロック (φ5 mm程度)・ローム粒子少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ2 cm程度) 少 ローム粒子多 炭化物粒子微
- S K 134
1 暗褐色土 ロームブロック (φ2 cm程度) 多 ローム粒子少 炭化物粒子微 しまりなし

第86図 土壌(10)



S K 136
1 黒褐色土 ローム粒子多 炭化物粒子微 しまりなし
2 暗炭褐色土 ロームブロック (φ 1 cm程度) 少 ローム粒子多 しまりなし
3 暗炭褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm)・ローム粒子少

S K 137
1 暗炭褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm)・ローム粒子少 炭化物粒子微 しまりあり

S K 138
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 ~ 20 mm)・ローム粒子多 炭化物粒子微 しまりあり

S K 139
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 cm程度) 多

S K 140
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 cm程度) 多

S K 141
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 20 mm)・灰色シルトブロック (φ 1 ~ 20 mm)・焼土ブロック (φ 1 ~ 20 mm)・炭化物粒子少

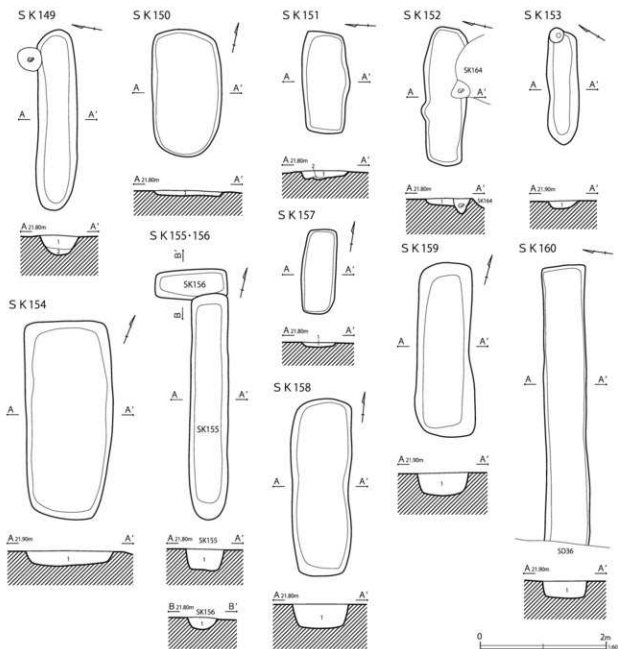
S K 142
1 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1 ~ 10 mm) 少
2 褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 3 cm) 少

S K 145
1 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1 ~ 5 mm) 少
2 褐色土 ロームブロック多 ローム粒子 (φ 1 ~ 5 mm) 少
3 暗褐色土 ロームブロック (φ 3 cm程度) 多 ローム粒子 (φ 1 ~ 5 mm) 極多
4 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1 ~ 5 mm) 多

S K 147
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 2 ~ 3 cm)・ローム粒子 (φ 1 ~ 5 mm) 多
2 暗褐色土 ローム粒子 (φ 1 ~ 5 mm) 少

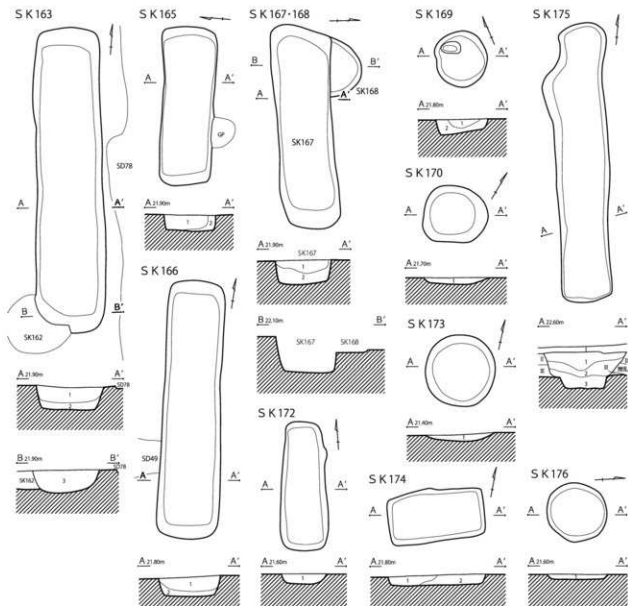
S K 148
1 灰褐色シルト層 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) 若干 焼土ブロック (φ 1 ~ 5 mm)・炭化物 (φ 1 ~ 30 mm) やや多
2 暗炭褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) やや多 灰褐色シルト 粒子若干

第87図 土坑(11)



- SK 149
1 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 多
2 褐色土 ロームブロック (φ 2~4cm) 多 ローム粒子 (φ 1~5mm) 少
- SK 150
1 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 多
- SK 151
1 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm)
2 褐色土 ロームブロック (φ 2cm程度)・ローム粒子 (φ 1~5mm) 多
- SK 152
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 多
- SK 153
1 黒褐色土 ロームブロック (φ 1cm程度) 多
- SK 154
1 黒褐色土 ロームブロック (φ 1~4cm)・ローム粒子 (φ 1~5mm) 少

- SK 155
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 3cm程度) 少 ローム粒子 (φ 1~5mm) 多
- SK 156
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 少 SK 155 より古い
- SK 157
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 多
- SK 158
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1~5cm)・ローム粒子 (φ 1~5mm) 多
- SK 159
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1~5cm)・ローム粒子 (φ 1~5mm) 多
- SK 160
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 多



- SK163
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) やや多
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 少
3 暗褐色土 ローム粒子 (φ1~5mm) 少

- SK165
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干 炭化物粒子 (φ1~5mm) 極少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~9mm) 少

- SK166
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~15mm) 若干 ローム粒子少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm)・ローム粒子若干

- SK167
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~20mm) やや多 黒色土ブロック (φ1~10mm) 少 ローム粒子若干
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm)・ローム粒子若干 焼土ブロック (φ1~10mm) 少 炭化物粒子極少

- SK169
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干 ローム粒子少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm)・ローム粒子若干

- SK170
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) やや多 ローム粒子少 炭化物粒子 (φ1~5mm) 若干

- SK172
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm)・ローム粒子若干 炭化物粒子 (φ1~5mm) 極少

- SK173
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) やや多 焼土ブロック (φ1~10mm) 極少 炭化物粒子少

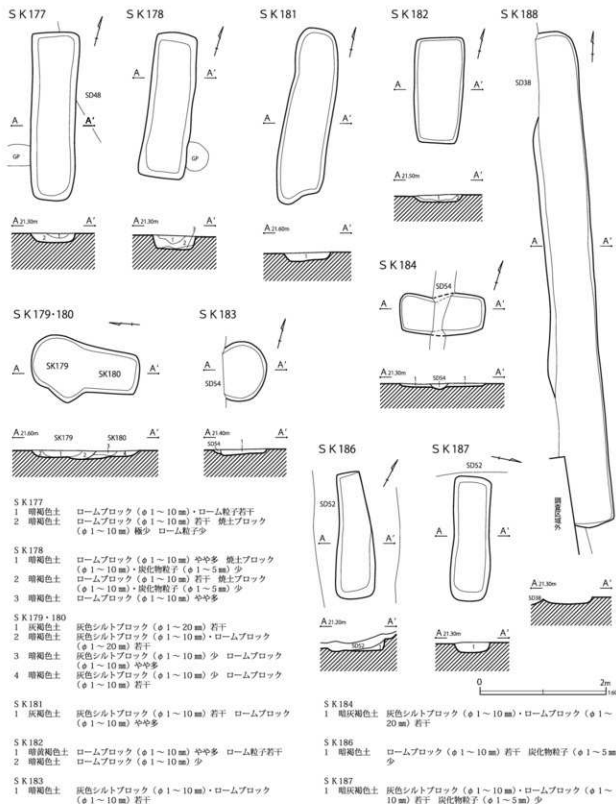
- SK174
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) やや多 ローム粒子若干 炭化物粒子少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干 ローム粒子少

- SK175
1 表土
2 炭褐色土・炭化物粒子少
3 焼土・ローム
4 暗褐色土
5 浅間A軽石粒子炭状 焼土粒子・炭化物粒子少 しまりあり 粘質
6 暗褐色土
7 暗褐色土 炭褐色土・炭化物粒子少 しまりあり 粘質
8 暗褐色土 炭褐色土・炭化物粒子少 しまりあり 粘質

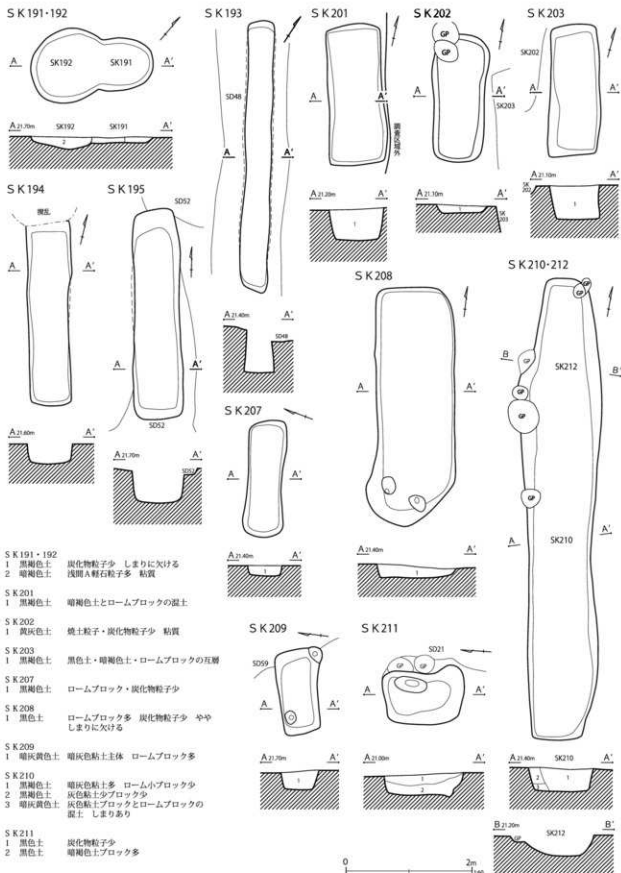
- SK176
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干

0 2m

第89図 土坑(13)

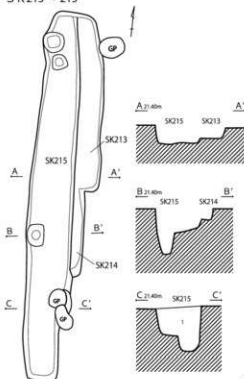


第90図 土坑(14)

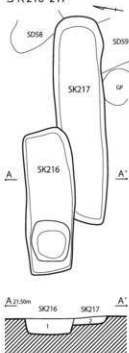


第91図 土壌 (15)

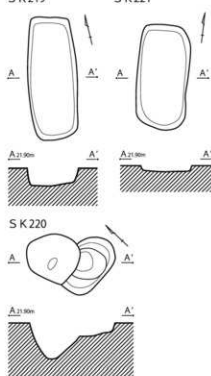
S K 213 ~ 215



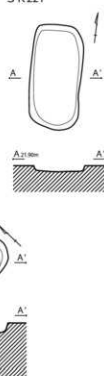
S K 216・217



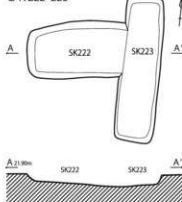
S K 219



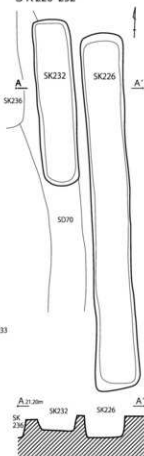
S K 221



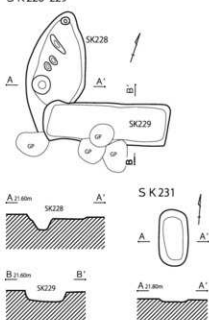
S K 222・223



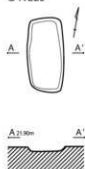
S K 226・232



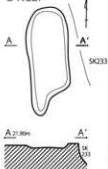
S K 228・229



S K 225



S K 227



S K 231



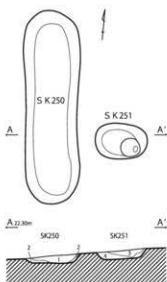
S K 215
1 黒褐色土 暗灰色粘土多 ローム小ブロック少

S K 216・217
1 黒褐色土 暗灰色粘土多 ローム小ブロック少
2 黒褐色土 灰色粘土小ブロック少

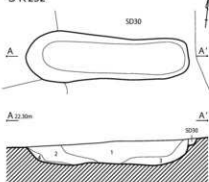
0 2m
1:40

第92図 土城(16)

S K 250-251



S K 252



S K 250・251

- 1 暗褐色土 ローム粒子多 焼土粒子微
- 2 暗褐色土 黄褐色土多
- 3 暗褐色土 ローム粒子多 黒褐色土少
- 4 暗褐色土 ロームブロック多

S K 252

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 cm 程度) 少
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (φ 1 ~ 5 mm) 多 しまり強い
- 3 暗褐色土 1層よりもロームブロック・ローム粒子多 しまり強い
- 4 暗褐色土 1層よりもロームブロック多 ローム粒子少 しまり強い
- 5 黄褐色土 暗褐色土少

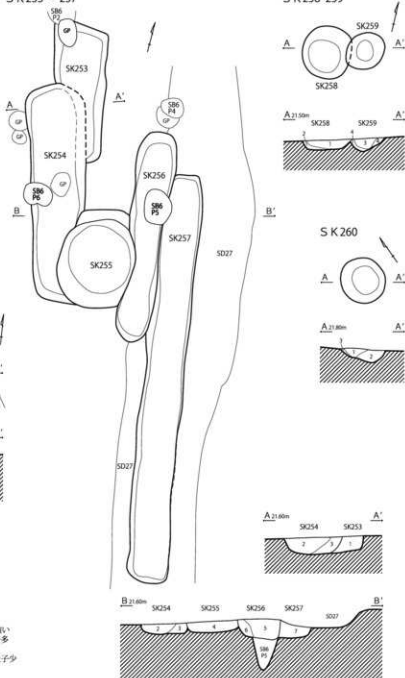
S K 258・259

- 1 暗褐色土 黄褐色土・黒褐色土多
- 2 暗褐色土 暗褐色土少
- 3 暗褐色土 黒褐色土少
- 4 黄褐色土 暗褐色土多

S K 260

- 1 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒子多
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (φ 1 ~ 5 mm) 黄褐色土多
- 3 黄褐色土 暗褐色土多

S K 253 ~ 257

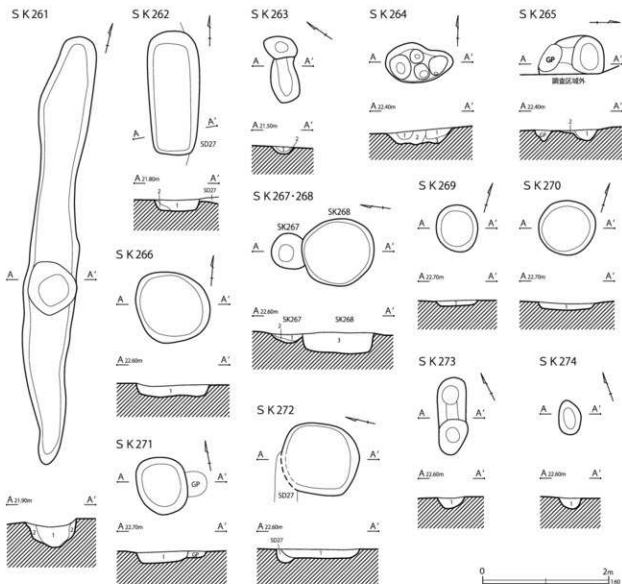


S K 253 ~ 257

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 cm 程度) 少 ローム粒子 (φ 1 mm 程度) 多 しまり強い
- 2 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 cm 程度) 少 ローム粒子 (φ 1 mm 程度) 多 灰白色土少
- 3 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 ~ 10 cm) 少 ローム粒子 (φ 1 mm 程度) 多
- 4 暗褐色土 灰白色土微 暗褐色土 (φ 1 cm 程度) 少 全体的に均質
- 5 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 cm) 灰白色土粒子 (φ 1 mm 程度) 多 灰白色土
- 6 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 ~ 10 cm) 少
- 7 暗褐色土 灰白色土粒子 (φ 1 mm 程度) 多 炭化物粒子・焼土粒子微



第94図 土坑(18)



- SK 261
1 暗褐色土 ロームブロック少
2 暗褐色土 ロームブロック少 1層よりやや明るい
- SK 262
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ 1mm程度) 少 しまり強い
2 黄褐色土 暗褐色土多
- SK 263
1 暗褐色土 黄褐色土少
1 に近い黄褐色土
- SK 264
1 暗灰褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 微
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 5cm程度) 少 黒褐色土少
3 黄褐色土 黒褐色土少
- SK 265
1 黒褐色土 黄褐色土多 しまり強い
2 黄褐色土 暗褐色土少 しまり強い
- SK 266
1 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 多

- SK 267・268
1 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 少
2 黄褐色土 暗褐色土少
3 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 多
- SK 269
1 黄褐色土 暗褐色土ブロック (φ 5cm程度) 多
- SK 270
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 8cm程度) 多
- SK 271
1 黄褐色土 暗褐色土ブロック (φ 8cm程度) 多
- SK 272
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ 1~5mm) 多
- SK 273
1 黒褐色土 黄褐色土多
- SK 274
1 暗褐色土 黄褐色土多

第95図 土坑(19)

SK16



第97図 土城出土遺物(1)

第20表 土城出土銭貨観察表(第97図)

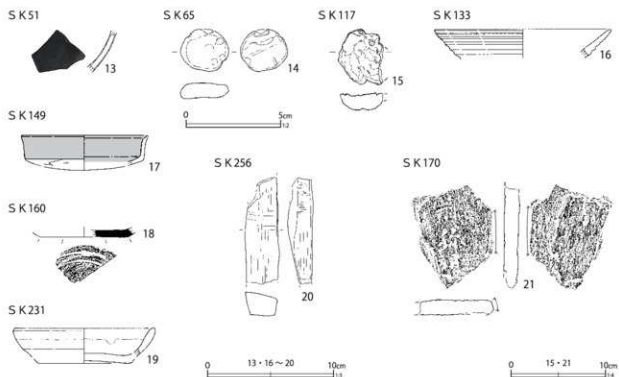
番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
1	銭貨	宋通元寶	24.75	24.72	1.15 ~ 1.30	2.8	SK16 北宋 960年初鋳	
2	銭貨	紹聖元寶 (23.21)	23.93	23.93	1.48 ~ 1.55	2.8	SK16 行書 北宋 1094年初鋳	
3	銭貨	至道元寶	25.18	24.94	1.15 ~ 1.25	3.6	SK17 北宋 995年初鋳	
4	銭貨	咸平元寶	24.45	24.70	1.18 ~ 1.28	3.5	SK17 北宋 998年初鋳	
5	銭貨	皇宋通寶	24.45	24.58	1.05 ~ 1.18	3.4	SK17 北宋 1038年初鋳	
6	銭貨	嘉祐元寶	24.50	24.55	1.05 ~ 1.15	2.4	SK17 北宋 1056年初鋳	
7	銭貨	治平元寶	24.00	24.00	1.30 ~ 1.40	3.5	SK17 北宋 1064年初鋳	
8	銭貨	治平通寶	24.45	24.51	1.15 ~ 1.21	2.8	SK17 北宋 1064年初鋳	
9	銭貨	紹聖元寶	23.69	23.69	1.40 ~ 1.50	4.3	SK17 篆書 北宋 1094年初鋳	
10	銭貨	政和通寶	24.80	24.40	1.20 ~ 1.40	3.6	SK17 篆書 北宋 1111年初鋳	
11	銭貨	洪武通寶	23.31	23.37	1.35 ~ 1.55	3.7	SK17 明 1368年初鋳	
12	銭貨	永樂通寶	24.70	24.10	1.30 ~ 1.40	3.6	SK17 明 1408年初鋳	

多い。

⑤の隅丸方形土城は第24・242・272号土城の3基である。共に小規模である。

⑥の溝状とした土城は第261・286・287号土城の3基である。このうち最大の第261号土城は長さ6.80m、幅0.80m、深さ0.40mである。

⑦の不整形は39基である。形態・規模は多様なうえ、遺物を伴うものがほとんどないため、用途や性格の特定には至らなかった。しかし、六道銭と想定される銭貨を出土した第16・17号土城は中世の土城墓と考えられる。また、第148号土城は近世末期の廃棄土城、いわゆるゴミ穴である。



第98図 土壌出土遺物(2)

第21表 土壌出土遺物観察表(第98図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
13	青磁	碗	—	[3.4]	—	—	5	良好	灰オリブ	SK51 龍泉窯 蓮弁文 13C代	21-3
14	土製品	円板	長さ2.2cm	幅2.5cm	厚さ0.9cm	重さ3.6g				SK65 素焼	27-2
15	土製品	椀形鍛冶滓	長さ4.5cm	幅5.7cm	厚さ1.7cm	重さ65.7g				SK117	
16	かわらけ	皿	(14.0)	[2.3]	—	H I K	10	普通	橙	SK133 15C ~ 16C 中世	
17	土師器	坏	(10.0)	[2.4]	—	CH I K	10	普通	にぶい赤褐	SK149 比金型坏 赤彩	
18	須恵器	坏	—	0.8	7.0	E H I J	20	普通	灰黄	SK160 南北金産 底部回転糸切り 後ヘラクスリ再調整 ロクロ右回転	
19	陶器	緑釉小皿	11.0	[2.3]	—	I K	10	良好	浅黄	SK231 古瀬戸 灰釉 15C中頃	
20	石製品	砥石	長さ[8.4]cm	幅2.7cm	厚さ2.0cm	重さ55.7g		凝灰岩		SK256 砥面は4面だが主として2面を使用 歯状工具痕 被熱	
21	石製品	板碑	長さ[11.2]cm	幅[8.7]cm	厚さ1.6cm	重さ241.2g		緑泥片岩		SK170 「□珍□」 側縁部一部研磨痕あり	

以下、遺物を出土した土壌について略述する。

第16・17号土壌出土遺物(第97図)

第1次調査区中央のK-15グリッドに位置する中世の土壌墓で、小規模な墓域を形成する。

第16号土壌からは北宋銭の宋通元寶・紹聖元寶が出土した。第17号土壌からは北宋銭の至道元寶・咸平元寶・皇宋通寶・嘉祐元寶・治平元寶・治平通寶・紹聖元寶・政和通寶、明銭の洪武通寶・永樂通寶の10枚が鋳銭の状態で、底面からやや浮いた状態で出土した。

第148号土壌出土遺物(第99～101図)

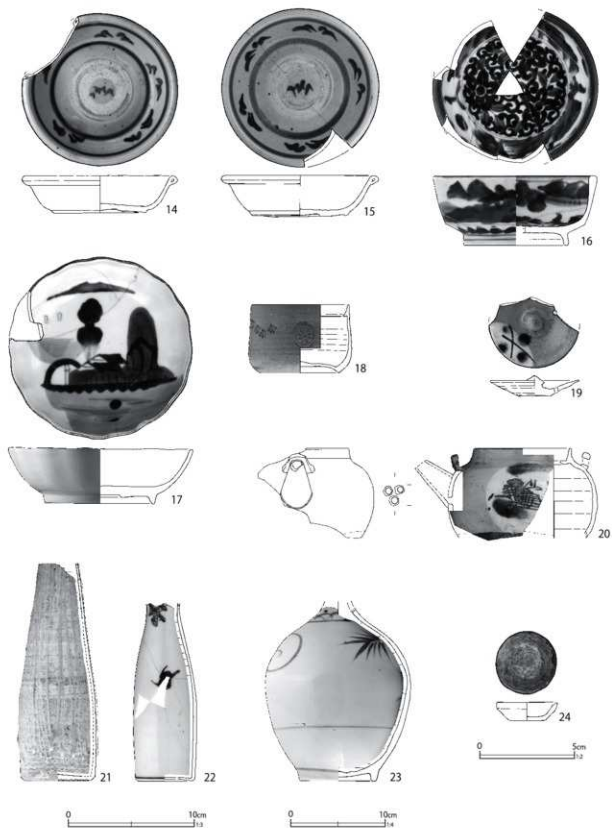
第148号土壌は、第22号溝跡の西側に接する大型の円形土壌である。ヤドロに近い灰褐色シルト層を主体とする覆土中に陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、銅製品、鉄製品、鉄銭等が廃棄されていた。幕末から明治期に位置づけられる。

その他の土壌出土遺物(第98図)

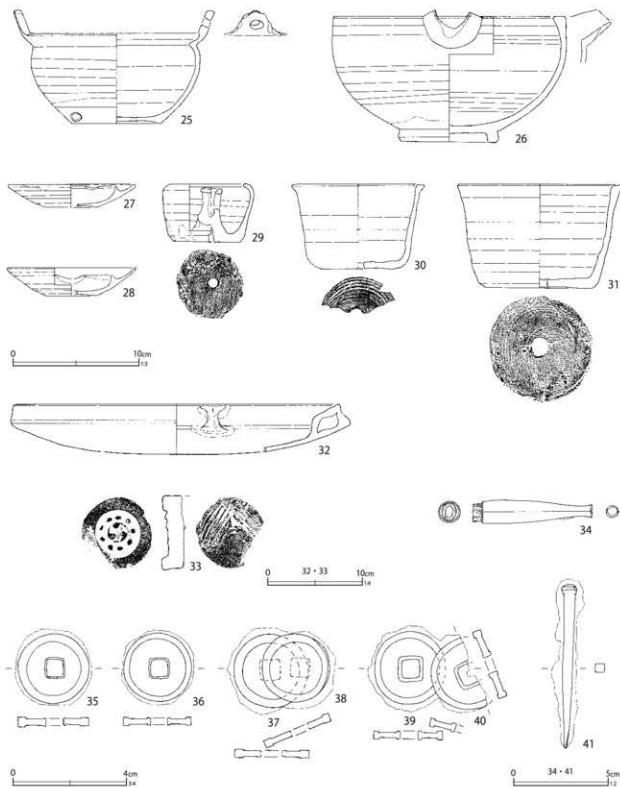
その他の土壌からは青磁碗、円板形土製品、椀形鍛冶滓、かわらけ皿、土師器坏、須恵器坏、古瀬戸緑釉小皿、砥石、板碑片などが出土した。



第99図 第148号土庫出土遺物(1)



第100图 第148号土城出土遗物(2)



第101図 第148号土坑出土遺物(3)

第22表 148号土坑出土遺物観察表(第99～101図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	坏	6.0	2.7	2.8	—	50	良好	灰白	肥前 19C代	24-6
2	磁器	猪口	(6.4)	3.8	3.0	K	70	良好	灰白	瀬戸美濃か	24-7
3	磁器	猪口	6.7	3.3	2.3	—	85	良好	灰白	瀬戸美濃 19C前半	24-8

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
4	磁器	碗	(10.4)	5.0	3.4	—	45	良好	灰白	肥前 19C前半	24-9
5	磁器	碗	10.0	5.1	3.6	I	90	良好	灰白	肥前 19C前半	24-10
6	磁器	碗	(11.2)	6.0	3.9	K	50	良好	灰白	瀬戸美濃 19C前半	25-1
7	磁器	碗	10.6	5.5	4.0	—	70	普通	灰白	肥前 19C前半	25-2
8	磁器	碗	9.4	5.3	3.8	K	95	良好	灰白	瀬戸美濃 19C前半	25-3
9	磁器	碗	(11.0)	5.6	(4.6)	K	30	良好	灰白	肥前 半球碗 19C前半	
10	磁器	蓋	(8.6)	2.6	—	K	50	良好	灰白	瀬戸美濃 つまみ径(3.2)cm	25-4
11	磁器	皿	8.0	2.4	3.8	—	80	普通	灰白	瀬戸美濃 19C中頃	25-5
12	陶器	皿	13.5	3.7	6.0	—	95	良好	灰白	瀬戸美濃 19C前半～中頃	25-6
13	陶器	皿	13.2	3.6	6.6	—	95	良好	灰白	瀬戸美濃 19C前半～中頃	25-7
14	磁器	皿	11.6	3.1	7.3	K	90	良好	灰白	肥前 19C中頃	25-8
15	磁器	皿	11.6	3.3	7.3	K	95	良好	灰白	肥前 19C中頃	25-9
16	磁器	碗	12.4	5.5	8.0	—	70	良好	灰白	肥前 高台内露胎	25-10
17	磁器	皿	14.6	4.3	8.6	I	90	良好	灰白	肥前	26-1
18	陶器	茶入れ	(7.6)	5.4	6.4	I K	50	良好	灰黄	産地不明 19C代 花文状の陰刻(スタンブ)	26-2
19	陶器	土瓶蓋	(7.0)	1.6	2.6	—	70	良好	灰白	京都信楽系 つまみ径1.4cm 底面同転糸切り 19C中頃	26-3
20	陶器	土瓶	7.6	[7.2]	—	H I K	30	良好	浅黄	京都信楽系 19C中頃	
21	陶器	樽徳利	—	[17.2]	5.2	H	95	良好	灰白	産地不明 外面イッチン描き 19C代	26-4
22	陶器	樽徳利	—	[14.1]	4.2	—	80	良好	灰白	瀬戸美濃 19C中～後半	
23	磁器	瓶類	—	[18.5]	7.4	K	70	良好	白	肥前 鶴首瓶 19C前半～中頃	26-5
24	土師質土器	飯事道具	3.2	1.0	1.8	H I K	100	不良	橙	ミニチュア鉢 内面花文浮彫 白土塗布 重量5.0g	27-1
25	陶器	鍋	14.4	7.2	7.0	I K	90	良好	にぶ・黄橙	産地不明(民窯系) 鉄軸 底部外面煤付着 19C代	26-6
26	陶器	片口鉢	18.2	10.0	7.5	E I K	90	良好	にぶ・黄橙	産地不明(民窯系) 鉄軸 見込5箇所目痕 19C代	26-7
27	陶器	灯明受皿	9.8	1.9	4.1	—	95	普通	灰白	京都信楽系 口径2 7cm 灰軸 口縁部外面油煙付着 19C前半～中頃	26-8
28	陶器	灯明受皿	(10.0)	2.3	(3.9)	E I K	50	良好	灰黄	京都信楽系 口径2 (6.4)cm 灰軸 口縁部外面油煙付着 19C前半～中頃	
29	陶器	乗燭	(5.6)	4.6	5.2	H K	70	良好	灰白	SD22覆瓦合 口径2 1.7cm	
30	土師質土器	植木鉢	(9.4)	6.7	(5.8)	K	25	良好	橙	在地産 底部同転糸切り 19C代	
31	瓦質土器	植木鉢	12.8	8.3	8.6	A I	60	普通	灰	在地産 底部同転糸切り 19C代	
32	土師質土器	焙烙	(34.0)	[5.0]	(36.0)	H I K	30	普通	にぶ・橙	在地産 丸底タイプ 19C中頃	
33	瓦	軒棧瓦	瓦当径7.8cm 厚さ1.6cm 胎土やや砂質 光沢無し 表面色調:黒褐 一部灰黄 内面色調:灰黄	珠文径0.5～0.8cm 周縁幅1.4～1.6cm							28-7
34	銅製品	煙管	長さ5.8cm 小口径1.1cm 重さ7.0g							吸口 罎子一部残存 銅付け痕	27-4
41	鉄製品	釘	長さ8.6cm 幅0.5cm 厚さ0.45cm 重さ11.2g							木質付着	

第23表 第148号土壌出土銭貨観察表(第101図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
35	銭貨	鉄銭	[24.50]	[25.00]	[3.00]	5.2		
36	銭貨	鉄銭	[24.00]	[24.00]	[3.00]	4.6		
37	銭貨	鉄銭	[26.00]	[26.00]	[3.00]	13.1	№38と錯着	
38	銭貨	鉄銭	[25.00]	[25.00]	[3.00]		№37と錯着	
39	銭貨	鉄銭	[25.00]	[25.00]	2.00	10.3	№40と錯着	
40	銭貨	鉄銭	[25.00]	[25.00]	2.00		№39と錯着	

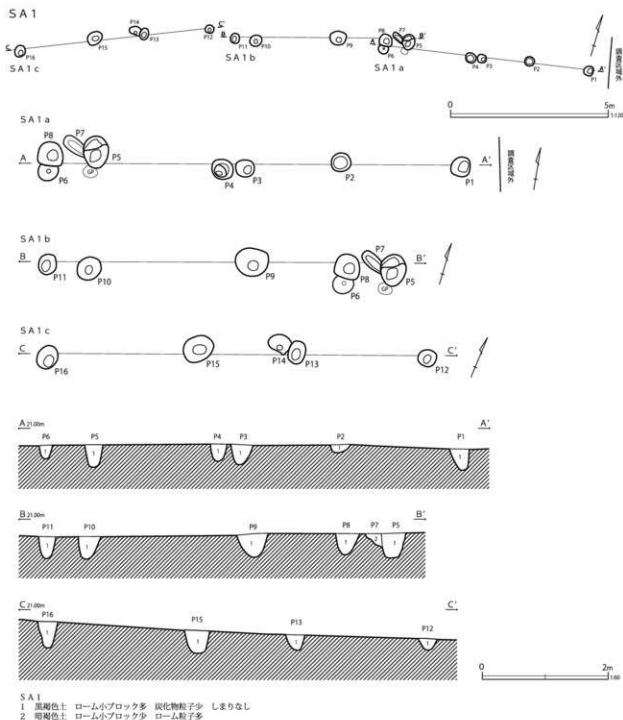
(8) 柵列跡

柵列跡は4条を検出した。いずれも第2次調査区東側の第21号溝跡に対し、直交するように東西方向に延びている。

第1号柵列跡 (第102図)

第2次調査区東側のG・H-11、H-12グリ

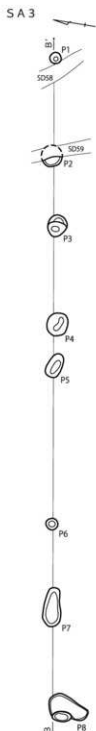
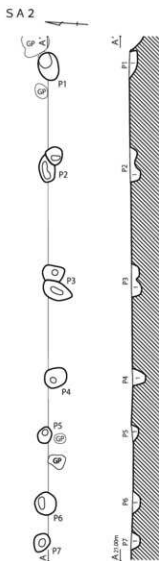
ッドに位置する。微妙に方向を変える3条の柵列跡(SA1a~c)からなり、総延長18.10mである。16本の柱穴から構成され、規模は径30~53cm、深さ10~40cmで、柱間寸法はやや不揃いである。第21号溝跡に直交するように東西方向に延びる。延長線上には第4号柵列跡が存在する。



第102図 第1号柵列跡

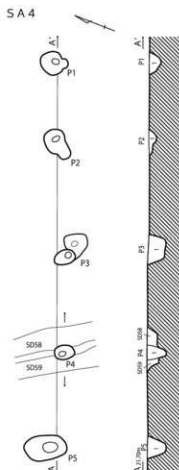
第2号柵列跡 (第103図)

第2次調査区東側のI-10・11グリッドに位置し、総延長10.20mである。7本の柱穴で構成される。柱穴は円形を基調とし、径30~78cm、深さ15~30cmである。柱間寸法は不揃いである。

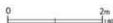


第3号柵列跡 (第103図)

第2次調査区中央南寄りのF-8~10グリッドに位置する。第21号溝跡が東へ向きを変えた屈曲部の西隣にあたる。総延長13.80mで、8本の柱穴で構成される。柱穴は径23~85cm、深さ6~15



SA2~4
I 黒色土 ロームブロック多 炭化物粒子少 しまりなし



第103図 第2~4号柵列跡

cmと浅く、柱間寸法は不揃いである。

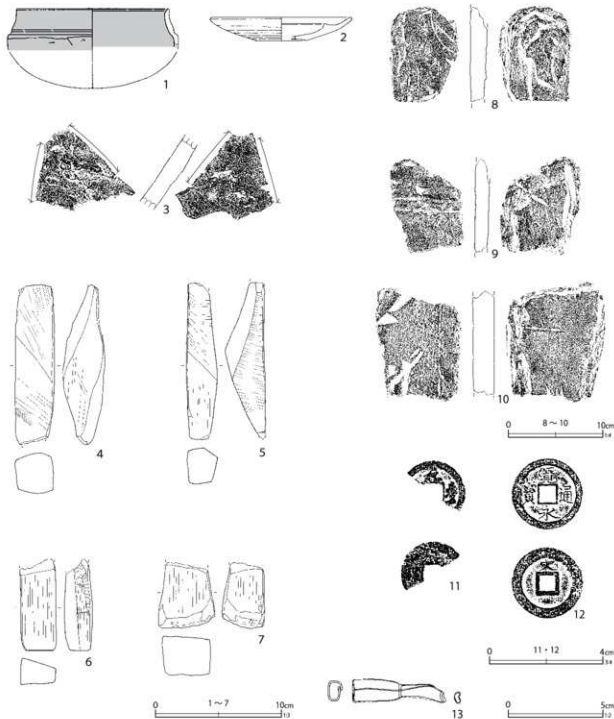
第4号櫓列跡（第103図）

第2次調査区中央南寄りのF-9、G-9・10グリッドに位置する。第21号溝跡の西側にあたり、総延長8.20mである。5本の柱穴で構成され、柱穴は径30～90cmと幅があり、深さも一様でない。

柱間寸法は210cm等間となるが、柱筋は不揃いである。

（9）ビット

調査区全体で単独のビット3,071基を検出した。遺構と重複したものも含めるとその数は倍するであろう。ビットの分布は調査区全体に及んでいる



第104図 ビット出土遺物

が、とりわけ第21号溝跡に沿うように、長さ約50m、幅約4mの範囲に集中している。

平面形は円形もしくは楕円形で、径30～40cm、深さ20～30cmのものが主体である。土層断面の観察では柱痕跡の認められるものもあったが、基本的には暗褐色土や黒褐色土の単一層からなる。しかし、断面形が薬研堀状の第21号溝跡の肩部から東の限定された範囲に集中していることからすれば、規則的な配列を示す柵列等の構築物よりも、植物を移植した垣根（生垣）状の施設を想定すべきものと思われる。

遺物を出土したものが少なく時期を確定することは難しいが、覆土の状態から大部分は中・近世に帰属するものと判断した。

ビット出土遺物（第104図）

ビットからは中・近世の陶磁器を中心に、縄文土器、古墳時代後期の土師器が出土している。

1は古墳時代後期の土師器甕である。口唇部内側に沈線を巡らし、口縁部から体部の内外面に赤彩を施す「比企系」のものである。時期的には6

世紀後半に位置づけられる。

2は京都信楽系の灰釉灯明受皿である。外面に重ね焼き痕を残す。19世紀中頃の所産である。

3は常滑の大甕の胴部破片である。破断面を砥具に転用している。

4～7は凝灰岩製の砥石である。被熱したものやヘラ工具痕、櫛歯状工具痕を残す。いずれも近世以降のものであろう。

8～10は板碑の破片である。8は月輪の一部が残り、破断面が二次的に加工されている。9は二条線の一部を残すものである。10は蓮座の一部がみられる。一次加工痕や研磨痕が顕著である。

11・12は銭貨である。11は折損しているが、北宋の元豊通寶（初鑄年 北宋1078年）であろう。12は寛永通寶の新寛永の文銭である。

13は煙管の吸口である。真鍮製で銅付け痕が明瞭に観察でき、大きく変形している。

(10) グリッド出土遺物

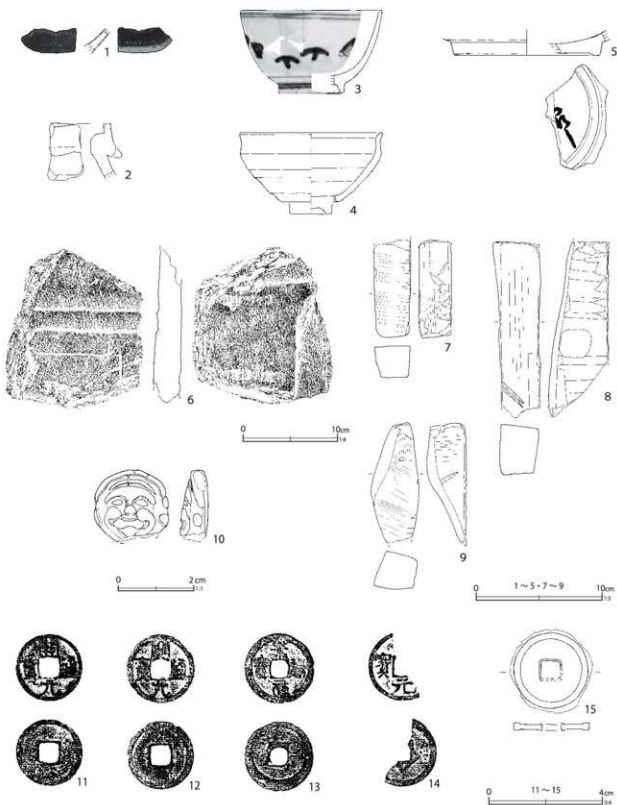
グリッド出土遺物には青磁、陶磁器、板碑、砥石、泥面子、銭貨等がある（第105図）。

第24表 ビット出土遺物観察表（第104図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(12.0)	(3.3)	—	H I K	10	普通	に濃い赤褐	M-12G P1 比企系 赤彩	
2	磁器	灯明受皿	(10.8)	1.8	(4.0)	H	25	良好	灰白	O-12G P1 京都信楽系 口径(6.8)cm 灰釉 外面重ね焼き痕 19C中頃	
3	陶器	甕	—	[5.9]	—	E I K	5	普通	黄灰	K-9G P1 常滑 転用砥具 中世	
4	石製品	砥石	長さ[12.7]cm	幅3.1cm	厚さ3.2cm	重さ133.9g	凝灰岩	J-7G P7	砥面は4面	被熱	
5	石製品	砥石	長さ[12.2]cm	幅2.4cm	厚さ3.0cm	重さ88.7g	凝灰岩	J-8G P7	砥面は3面	ヘラ状工具痕 被熱	
6	石製品	砥石	長さ[7.2]cm	幅2.8cm	厚さ2.2cm	重さ62.5g	凝灰岩	J-8G P3	砥面は2面	櫛歯状工具痕	
7	石製品	砥石	長さ[5.3]cm	幅4.4cm	厚さ3.3cm	重さ108.4g	凝灰岩	K-9G P1	砥面は5面		
8	石製品	板碑	長さ[10.1]cm	幅[12.2]cm	厚さ1.8cm	重さ224.4g	緑泥片岩	H-8G P4	月輪一部残存	二次被熱による黒変 二次加工痕	
9	石製品	板碑	長さ[10.1]cm	幅[12.7]cm	厚さ1.5cm	重さ192.2g	緑泥片岩	J-8G P2	二条線		
10	石製品	板碑	長さ[12.1]cm	幅[9.0]cm	厚さ2.3cm	重さ501.0g	緑泥片岩	H-8G P1	蓮座一部あり	一次加工痕・研磨痕	
13	銅製品	煙管	長さ4.9cm	径1.1×0.8cm	重さ6.4g			J-7G P2	銅付け痕	吸口変形	

第25表 ビット出土銭貨観察表（第104図）

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
11	銭貨	元豊通寶	(18.69)	(18.00)	0.92～0.95	1.0	L-10G P2 行書 北宋 1078年初鑄	
12	銭貨	寛永通寶	25.50	25.50	1.30～1.38	3.1	J-7G P3 新文 銭江 戸 1668～1683年	



第105図 グリッド出土遺物

1は龍泉窯産と考えられる青磁碗の小品である。13世紀代のものであろう。

2は常滑の大甕の口縁部である。14世紀前半に位置づけられる。

3は肥前産の磁器碗である。18世紀代に位置づけられる。

4は瀬戸美濃産の鉄釉天目茶碗である。17世紀前半の所産と考えられる。

5は瀬戸美濃産鉢の底部破片である。外面には灰釉が掛り、底外面に墨書が一部認められる。19世紀代の所産である。

6は板碑の頭頂部の破片である。二条線・枠線が残るほか、主尊種子の一部も認められる。裏面には押し削りされた工具痕が残る。

7～9は凝灰岩製の磁石である。7は櫛歯状工具痕、8はノミ状工具痕、9は櫛歯状工具痕がみられる。

10は泥面子の大黒天である。図示した下端を僅かに欠損する。色調は橙褐色で、柔らかい焼き上がりである。型作り成形で、19世紀後半の所産と考えられる。

11～15は銭貨である。11・12は開元通寶（唐 621年初鑄）、13は景祐元寶（北宋 1034年初鑄）、14は欠損のため判然としなが正隆元寶（金 1157年初鑄）と考えられる。15は近世の鉄銭である。錆化が顕著であるため、詳細については不明である。

第26表 グリッド出土遺物観察表(第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	青磁	碗	—	[2.0]	—	I K	5	良好	灰白	L-12G 龍泉窯 13C代	21-3
2	陶器	甕	—	[4.5]	—	E I	5	良好	黄灰	Q-8G 常滑 14C前半	
3	磁器	碗	(11.0)	6.6	(5.0)	I K	40	良好	灰白	F-7G・J-12G 肥前 18C代	
4	陶器	天目茶碗	(11.0)	[5.5]	—	I K	20	良好	灰白	J-6G 瀬戸美濃 鉄釉 17C前半	
5	陶器	鉢か	—	[2.0]	(11.5)	I	25	良好	灰白	Q-8G 瀬戸美濃 底部墨書あり 灰釉 重ね焼き痕 19C代	
6	石製品	板碑	長さ[16.2]cm 幅[14.5]cm 厚さ3.0cm 重さ1055.6g					緑泥片岩	M-10G 二条線・枠線あり 裏面加工痕 種子の一部が残る 押し削り痕	27-8	
7	石製品	磁石	長さ[7.7]cm 幅2.9cm 厚さ2.5cm 重さ95.8g					凝灰岩	J-12G 磁面は1面 他の面に櫛歯状工具痕		
8	石製品	磁石	長さ[13.9]cm 幅3.7cm 厚さ4.5cm 重さ266.3g					凝灰岩	P-8G 磁面は1面 他の面にノミ状工具痕		
9	石製品	磁石	長さ[9.5]cm 幅3.7cm 厚さ3.1cm 重さ104.1g					凝灰岩	E-5G 磁面は4面 櫛歯状工具痕		
10	土製品	泥面子	長さ1.9cm 幅2.0cm 厚さ0.7cm 重さ2.1g						L-14G 大黒天 19C後半	27-2	

第27表 グリッド出土銭貨観察表(第105図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
11	銭貨	開元通寶	23.96	24.10	1.08～1.20	2.3	SK21 (欠番) 唐 621年初鑄	
12	銭貨	開元通寶	24.32	24.20	1.10～1.15	2.7	SK21 (欠番) 唐 845年初鑄	
13	銭貨	景祐元寶	24.90	24.90	1.00～1.10	2.8	SK21 (欠番) 篆書 北宋 1034年初鑄	
14	銭貨	正隆元寶か	(24.00)	(18.60)	1.00～1.10	1.0	SK21 (欠番) 金 1157年初鑄	
15	銭貨	鉄銭	[26.00]	[26.00]	[2.50]	4.2	Q-8G	

V 諏訪南遺跡の調査

1. 遺跡の概要

諏訪南遺跡は大宮台地の北西部に位置し、JR高崎線桶川駅の西方約3.8kmの桶川市川田谷字諏訪南に所在する。遺跡は西方約1.5kmを南流する荒川と、その支流である江川に挟まれた標高約20mの台地のほぼ中央に立地する。遺跡の広がり方は南北約120m、東西約50mである。

諏訪南遺跡の南方約100mには、徳川家の旗本牧野氏の陣屋跡の可能性の高い大平遺跡、南西約200mには桶川市域で貴重な旧石器時代の調査例となった大沼遺跡、北方約50mには大規模な薬研堀で区画された館跡と考えられる諏訪北Ⅱ遺跡がそれぞれ分布する。

これらの遺跡の周辺には、荒川に注ぐ石川堀によって形成された樹枝状の開析谷が発達しており、各遺跡の乗る台地間は、その支谷によって細かく隔てられている。

諏訪南遺跡の調査では、縄文時代中期の竪穴住居跡3軒、炉跡1基、土壇1基、中・近世の溝跡14条、畝状遺構1面、土壇5基、ピット70基を検出した（第107図）。

縄文時代の住居跡は第1次調査で1軒、第2次調査で2軒を検出した。3軒はほぼ南北に連なっているが、これは遺跡の東側に存在する支谷に沿った分布状況を窺わせる。集落としての住居跡密度は濃いものではないが、谷の対岸に展開している可能性は十分に考慮されねばならない。出土した縄文土器の様相から、ほぼ加曾利EⅢ式古段階に限定される小規模集落と考えられる。

中・近世の遺構では、溝跡（根切り溝・ムロ・道路）、畝状遺構（畠跡）、土壇、ピット等が検出された。これらの遺構のあり方と、現地表から遺構検出面までの土層状況を加味すると、おおよそ、以下のような土地利用が想定できる。

近世後期、根切り溝に囲まれた第2次調査区北

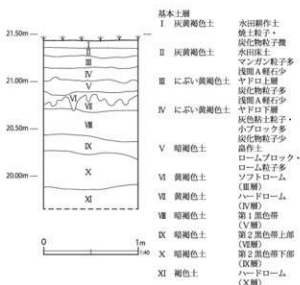
東部に畠が開かれ、外側には収穫物を貯蔵する「ムロ」（第11・12号溝跡）が設けられていた。根切りは、外側の竹木が繁茂するに応じて度々行なわれた。作物は不明ながら、畝状遺構や「ムロ」の形状からみて、サツマイモなどの根菜類ではないかと思われる。

その後、時期は不明ながらも、周囲には荒川の肥沃な堆積土である「ヤドロ」が運び上げられ畠として利用された。「ヤドロ」は俵などに詰められ、馬によって運搬されたという。検出された狭い道路跡（第8号溝跡）は、このとき使用されたものの可能性がある。30～40cmの厚さに盛られた「ヤドロ」の上には、やがて水田が営まれるようになり、近年まで耕作が続けられていた。

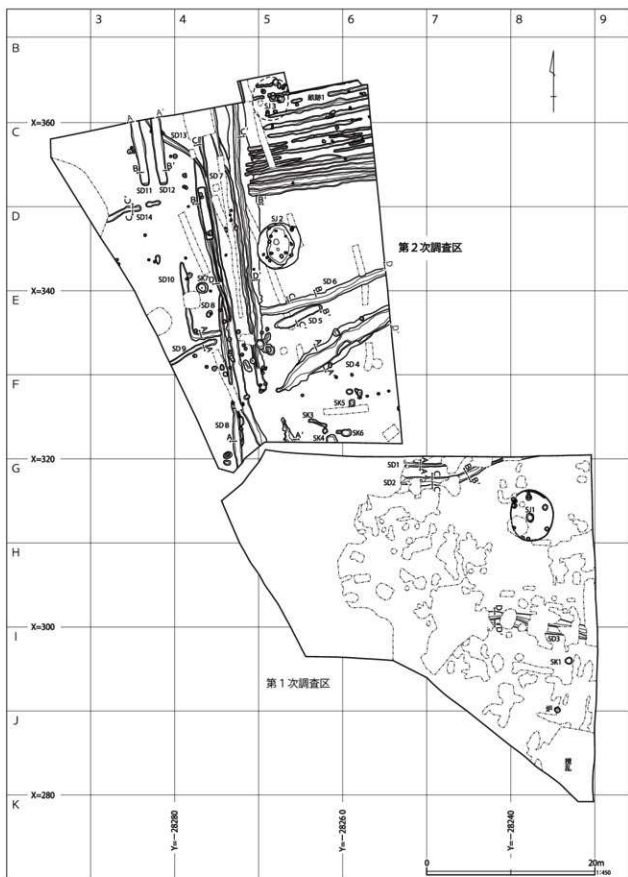
本遺跡の基本土層を第106図に示した。

第Ⅰ・Ⅱ層は近・現代における水田の耕作土及び床土である。第Ⅲ・Ⅳ層のふい黄褐色土はヤドロ層で、その下層には第Ⅴ層の畝状遺構に伴う耕作土が広がっている。

第Ⅵ層以下がローム層で、武蔵野台地標準層位（Ⅲ～Ⅹ層）に概ね相当する。



第106図 諏訪南遺跡基本土層



第107図 諏訪南遺跡全体図

2. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、中期の竪穴住居跡3軒、炉跡1基、土壌1基を検出した。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、第1次調査で1軒、第2次調査で2軒を検出した。3軒は遺跡の東側に存在する支谷に沿うように、ほぼ南北に連なる。

第1号住居跡（第108～110図）

第1次調査区北東隅部のG-8グリッドに位置する。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸6.10m、短軸5.10m、深さ0.08mである。床面の中央に炉跡をもち、壁際に沿って8本の柱穴を配していた。炉跡と柱穴の配置を基準とした主軸方位はN-3°-Wを指す。

炉跡はほぼ中央に位置し、平面形は楕円形で、長軸1.10m、短軸0.85m、深さ0.20mである。覆土は黒褐色土を主体とし、焼土ブロック・焼土粒子を含む。底面から壁面にかけて被熱により黒色化及び赤色化した硬化部分が確認された。

柱穴は8本が検出された。規模・覆土・深度等の検討から、五角形に配列されたP3～5・7・8の5本が主柱穴と想定される。また、南壁際に並列するP1・2は入口施設に関わるものであろう。柱穴の規模は径30～70cm、深さ20～70cmである。覆土の観察から第7層が柱痕跡に相当する。

この他に炉跡の北西側から第1号土壌が検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸0.75m、短軸0.55m、深さ0.05mで、浅く皿形に窪む。覆土は焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土である。位置的にみて炉の灰を掻き出した灰捨て場の可能性もあろう。

床面は概ね平坦で、炉跡の周辺は踏み締まりにより硬化面が認められた。壁溝は北壁際に部分的に巡っていた。

遺物は、覆土に残っていた住居跡の北半分を中心に出土し、とりわけ炉跡及び第1号土壌にまどまっていた。炉跡からは大型の深鉢の破片が磨石

や石皿と重なり合うように出土した。被熱痕が顕著でないことから、住居跡廃絶後、炉跡に意図的に破砕された土器と共に、折損した石器が廃棄されたものと考えられる。

第1号住居跡出土遺物

土器（第111・112図）

1は連弧文土器である。口縁部及び底部を欠失する。胴部中段にごく弱いくびれをもち、口縁に向かって直線的に開く。

胴部中段に交互刺突を伴う平行沈線が巡って器面を上下に分帯する。胴上半部には平行沈線の連弧文を描き、弧の接点に小渦巻文を配する。下方の区画帯との間には縦位の集合沈線文を描く。

胴下半部にも同様の連弧文+小渦巻文を描くが、その下方には、これに対向する上向きの連弧文を描く。上下の弧線文の間は縦位の集合沈線文で連結している。下方の弧の接点からは3本沈線の懸垂文が垂下して、逆U字の区画文を形成する。区画文の中央には平行沈線の蛇行懸垂文を描く。

地文はRの燃糸文が縦位回転で施文される。平行沈線間の地文は部分的に磨り消している。

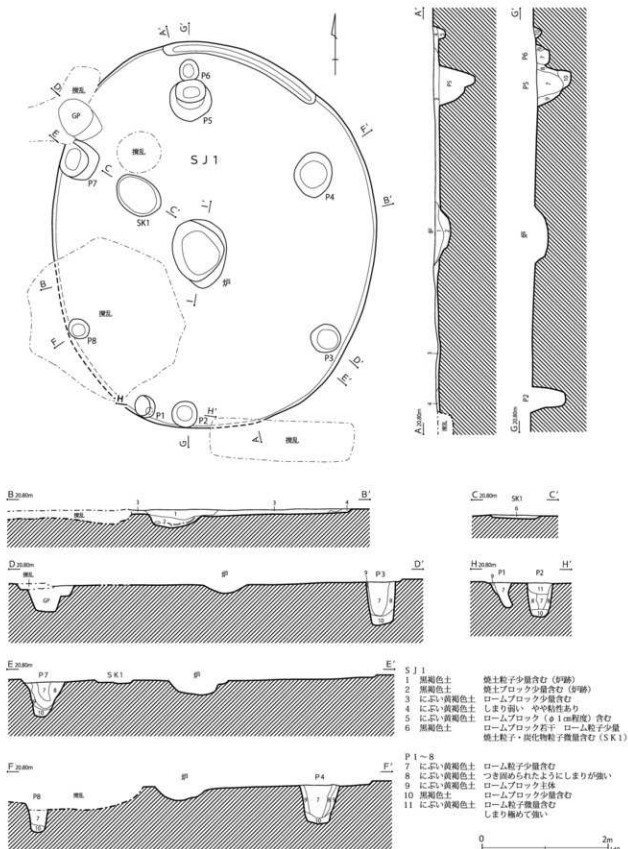
復元最大径は約44.6cm、高さ約30.1cmである。胎土はややシルト質で、石英の小礫直径1～5mmを若干含む。器面は灰橙色～橙色で、黒斑がみられる。焼成は良い。

2はキャリバー型深鉢の胴上半部である。器形の変化に乏しく、胴部中段から口縁に向かって直線的に開いている。

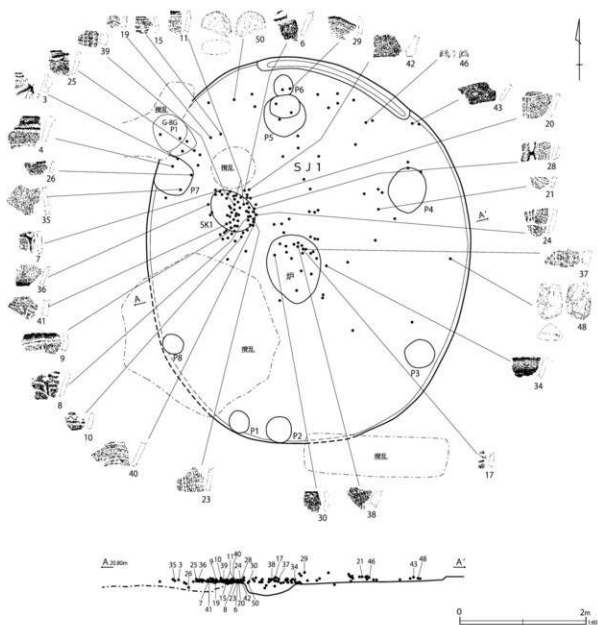
口縁部に1本隆帯の渦巻文ないし円文を描き、文様帯下端を2本の隆帯で区画する。胴部には平行沈線の懸垂文が垂下し、左右に末端閉塞する平行沈線による弧状モチーフが派生している。

地文は櫛歯状工具による縦位の条線文で、一部で左右に交差する弧状のモチーフを描いている。

復元最大径は約30.8cm、高さ約9.9cmである。胎土はややシルト質で、白色軽石やチャートの小



第108図 第1号住居跡(1)



第109図 第1号住居跡(2)

礫・砂粒を若干含む。器面は灰橙色で、黒斑がみられる。

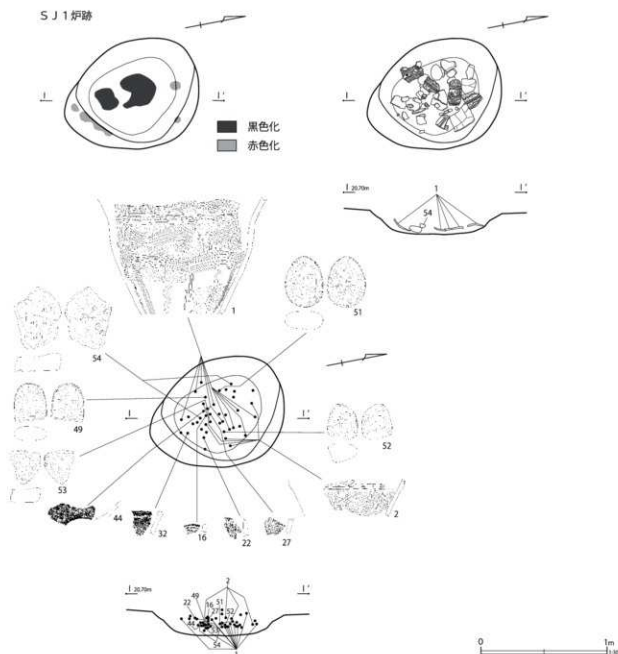
3～44は破片資料である。

3は繫ぎ弧文土器である。水平口縁で、口縁下に弧状の隆帯による半円形の区画を描き、モチーフの交点に小渦巻の突起を配する。区画の内部には縦位の条線を施文する一方、区画から下は無文であり、頸部無文帯に連続するものとみられる。突起の下方には3本の隆帯が垂下する。

4～6はキャリパー類深鉢である。4は口縁部の区画文で、両側に凹線をもつ扁平な隆帯で上端を区画する。地文は櫛歯状工具の条線である。

5は口縁部の渦巻文の一部で、形態化し円文化している。6は文様帯下端の区画で、なぞりを加えた扁平な隆帯による弧状文である。胴部には櫛歯状工具による縦位の条線を描く。浅鉢や両耳壺に伴う胴上半部の文様帯の可能性もある。

7・8は同一個体で、曾利Ⅳ式系の深鉢とみら



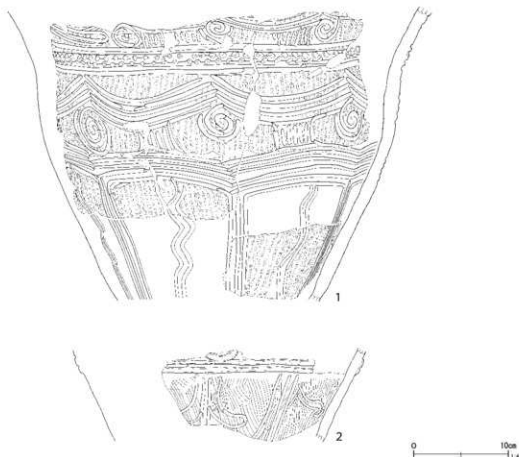
第110図 第1号住居跡(3)

れる。8は口縁で、平行沈線の区画文を描き、胴部の懸垂文と連結して方形の区画を作り出す。7は胴部で、磨り消しを伴う平行沈線が十字に交差し、交点に小渦巻文を配する。地文は判然としないうが、L R 単節縦位回転の縄文とみられる。

9～21は連弧文土器である。口縁直下及び胴部中段に平行沈線の区画が巡り、上下に連弧文を描いている。

9～16は口縁部である。水平口縁と、緩やかな波状口縁の両者が存在する。9・10は口縁部の平行沈線に交互刺突を伴うが、他は2～3本の平行沈線のみが巡る。13・14は連弧文の上端が口縁下の区画に接しているが、12では間隙が存在する。17は口縁直下の破片とみられ、9・10同様の交互刺突文がみられる。

18～21は胴部の連弧文の一部で、20は弧線文



第111図 第1号住居跡出土遺物(1)

の下底部から平行沈線の懸垂文が垂下する。

地文は12がR L単節、19がL R単節の縄文、9・11・20・21がRの撚糸文、14・15は橢圓状工具の条線である。

22～24・36は平行沈線の懸垂文を描く胴下半部である。地文は22が橢圓状工具の条線、23・24はL無節、36はR無節の縄文を施文する。

25～27は橢圓状工具の条線を描く深鉢である。25・26は口縁部で、25は口縁直下に多段の凹線が巡り、口唇断面内削ぎ状となり、縦横の条線が交差する。26は先細りの口縁で内面に稜をもち、口縁直下には縦位の条線に加えて波状のモチーフを描く。27は復元個体2に類似し、末端閉塞する平行沈線で曲線的なモチーフを描く。地文条線は左右の弧状モチーフが交差する。

28・39～41は唐草文系の深鉢である。集合沈

線を地文とし、懸垂文間に弧状や矢羽根状のモチーフを描く。28は上面に短沈線を描く背割れの隆帯が垂下する。

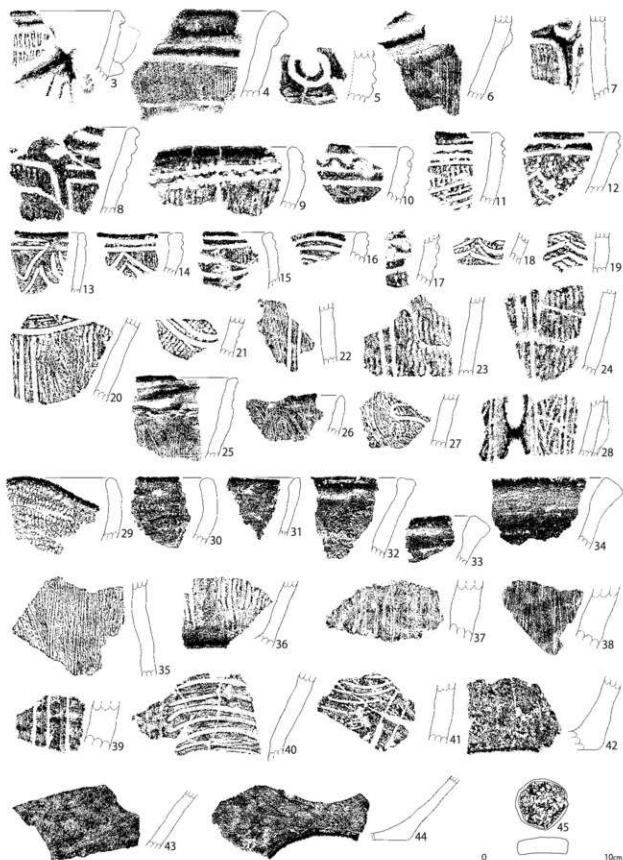
29は深鉢波状口縁で、R L単節の縄文のみ施文する。30～34は無文の口縁部で、30・31の内湾口縁は深鉢とみられる。32～34は浅鉢や兩耳壺に伴うものとみられ、口唇断面肥厚して口端上は平坦に整形しており、内面に段をもつ。

35は橢圓状工具の条線を地文とする胴部である。37・38は半裁竹管状工具による条線を地文とする。

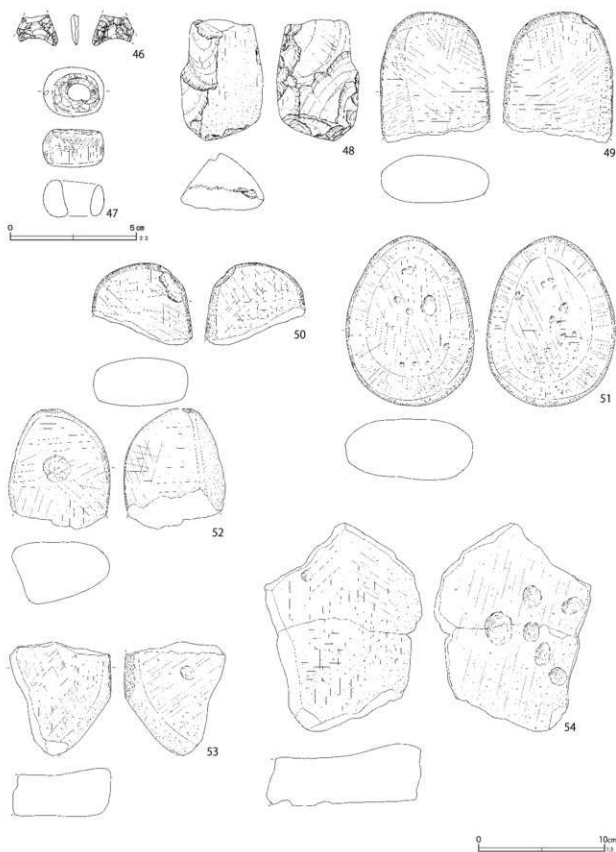
42は深鉢底部、43は浅鉢胴下半部、44は浅鉢底部で、いずれも無文である。45は土製円盤である。

石器 (第113図)

46は凹基の石鏃で、先端部と左脚を欠損する。



第112图 第1号住居跡出土遺物(2)



第113図 第1号住居跡出土遺物(3)

現存長1.2cm、現存幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gである。石材はチャートである。

47は垂飾である。胴の張った太鼓型で、貫通孔をもつ。長径2.4cm、短径1.9cm、厚さ1.5cm、重さ10.3gである。貫通孔は上孔径1.5×1.0cm、下孔径0.9×0.7cmと大きく開けられる。石材は滑石である。住居内の攪乱土中から出土した。

48は礫器である。断面三角形で背面右寄りに自然面を残し、下方に鈍角の刃部をもつ。現存長9.6cm、幅6.5cm、厚さ4.5cm、重さ299.2gである。石材は頁岩である。

49～52は磨石である。

49は小判型の磨石で、長軸方向一端を折損する。断面は胴張の長方形で、両面を使用する。現存長10.3cm、幅8.7cm、厚さ3.7cm、重さ507.7gである。石材は閃緑岩である。

50もほぼ同形とみられ、短軸方向に斜めに折損している。断面胴張の長方形で、両面を使用する。右上端に細かな剥離が集中する部分があり、叩き石として使用された可能性がある。現存長6.5cm、幅7.9cm、厚さ4.0cm、重さ271.3gである。石材は安山岩である。

51は完形品である。卵形の自然石を両面使用する。使用面にいくつかの凹孔がみられるが、人工的なものであるかどうかは判然としない。長さ13.5cm、幅10.2cm、厚さ4.8cm、重さ966.9gである。石材は閃緑岩である。

52は不整楕円形の磨石で、長軸側一端を折損する。表裏とも使用され、片面のみ凹石に転用されて一箇所の凹孔をもつ。現存長9.6cm、幅8.0cm、厚さ5.0cm、重さ460.5gである。石材は安山岩である。

53・54は石皿片である。53は側縁部及び使用面が残存する。側縁部は部分的に叩打による整形を施している。背面は平坦で、凹石に転用されている。現存長9.0cm、現存幅8.0cm、現存厚3.9cm、重さ322.1gである。石材は安山岩である。

54は使用面のみ残存する。平坦な背面が凹石に転用されており、複数の凹孔をもつ。現存長16.5cm、現存幅12.5cm、厚さ5.3cm、重さ1141.9gである。石材は安山岩である。

第2号住居跡 (第114・115図)

第2次調査区中央部のD-4・5グリッドに位置する。平面形は略円形で、規模は長径5.50m、短径5.40m、深さは0.15mである。床面は中心部に向かって緩やかに窪み、明確な壁面の立ち上がりは確認できなかった。このため、全体は皿状の浅い窪みとなっている。

ガ礫は床面中央に南北に並列する2基を検出した。北側の第1号ガ礫は床を浅く掘り窪めただけの地床である。平面形は不整形で、規模は長軸0.70m、短軸0.60m、深さ0.15mである。南側の第2号ガ礫は土器を円筒状に打ち欠いて据え置いた埋甕である。不整円形の掘り込みの中に土器を埋設する。規模は長軸0.35m、短軸0.30m、深さ0.15mである。ガ礫の配置を基準とした住居跡の主軸方位はN-12°-Wを指す。

床面から検出された17本のピットはいずれも浅く、配置も不規則である。

遺物は少量であるが、覆土より中期後半の深鉢と浅鉢が出土した。

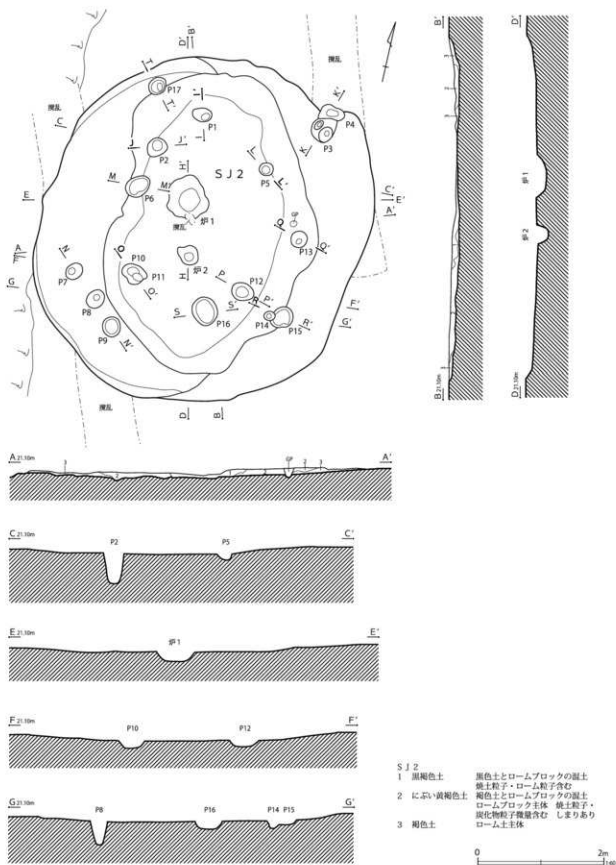
第2号住居跡出土遺物

土器 (第116・117図)

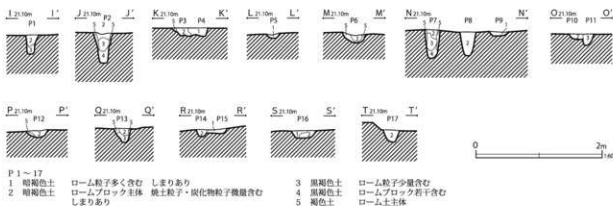
加曾利EⅢ式古段階の土器が出土している。

1は深鉢で、胴部中段から胴下半部にかけて残存する。2～3本の平行沈線による懸垂文が垂下する。これらの懸垂文は胴部中段で横位の3本沈線によって左右連繫し、長方形の区画文を作り出している。地文はRL単節の縄文で、縦位回転を基本として施文するが、局所的に横位回転の部分が存在し、部分的な羽状縄文を構成している。

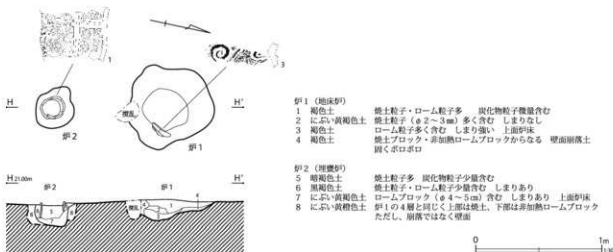
復元最大径は約18.5cm、高さ約14.5cmである。胎土に多量の砂と小礫を含む。器面は外面暗褐色、内面暗灰褐色である。焼成は比較的良好。



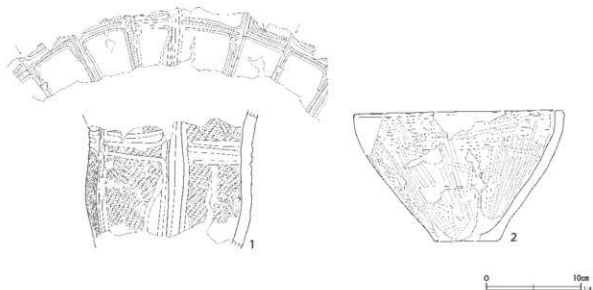
第114图 第2号住居跡(1)



S J 2 炉跡 1・2



第115図 第2号住居跡(2)



第116図 第2号住居跡出土遺物(1)



第117図 第2号住居跡出土遺物(2)

2は浅鉢である。口縁から底部まで残存する。

水平口縁で、底部直上に僅かにくびれをもち、胴部は緩やかに内湾しつつ立ち上がり、口縁はほぼ直立する。口端上は平坦に整形している。

文様は施文せず、胴部は縦方向、口縁では横方向の研磨を徹底し、光沢をもつ。

復元最大径は約22.2cm、高さ約13.6cmである。胎土はややシルト質で、器面は黒褐色である。焼成は良い。

3～7は破片資料である。3は唐草文系の土器で、深鉢胴部中段のくびれ部分である。無文地に隆帯による渦巻文を描き、刺突列を伴う平行沈線文が展開する。地文はLR単節の縄文である。4は無文地に沈線文を描く土器で、曾利Ⅳ式系の深鉢と考えられる。5～7は地文縄文の深鉢胴部で、5は磨消し懸垂文、7は3本沈線の懸垂文を描く。地文は5がLR単節、他はRL単節の縄文である。

第3号住居跡(第118・120～122図)

第2次調査区北端のB-4・5グリッドに位置する。第1号畝状遺構と重複するため、住居跡の床面まで大きく削平を受けていた。遺構確認時、全体にぶい黄褐色土(第1層)が極めて薄く広がっていたがロームとの境界は明瞭でなく、壁の立ち上がりも不明瞭であった。平面形は第1層の広がりから楕円形と推定され、規模は長軸5.20m、短軸4.30mである。

床面は不明確で、炉跡は中央に検出できなかった。ただし、柱穴と考えられるビット7本を検出した。規則的な配列状況は認められなかったものの、深度の大きなP1・3・5の3本は主柱穴としてよいだろう。柱穴は平面円形を基調とし、規模は径35～75cmで、深さは7～50cmと幅がある。

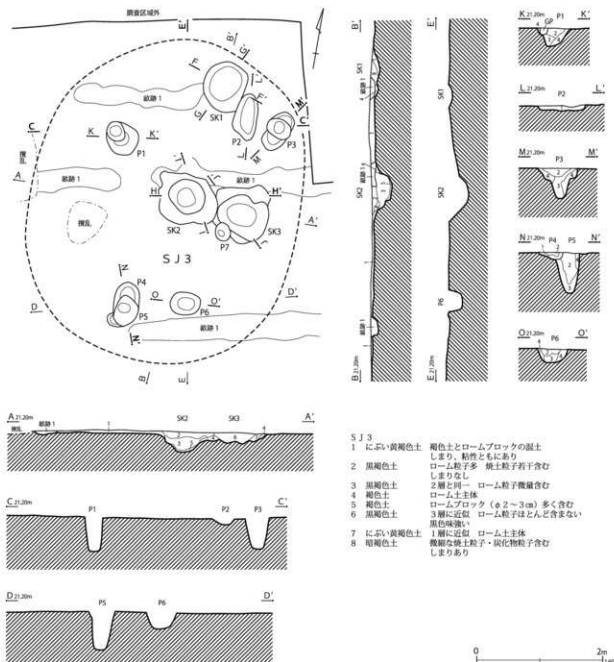
覆土は黒褐色土・褐色土を主体とする。

柱穴以外に、中央から北東部にかけて3基の土壌が検出された。ともに楕円形の掘り込みで、深鉢形土器片が詰め込まれたような状態で出土した。住居跡廃絶後に掘り込まれた土壌の可能性も考慮したが、覆土の状態や出土土器の様相から、住居跡に伴うものと判断した。

第1号土壌は、P2と接するように北側に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸0.85m、短軸0.65m、深さ0.10mである。覆土中に焼土粒子・炭化物粒子が微かに含まれていたことから、炉跡の可能性も考えたが、底面がほとんど焼けておらず、位置的にも北側に片寄ることから断定はできなかった。また、底面には大型の土器片が敷き詰められたような状態で出土している。

第2・3号土壌は中央部に東西に並列した状態で検出された。共に覆土中に土器片が多量に含まれていたが、第1号土壌に比べると、意図的に敷き詰めた様子はみられなかった。ただし、他の土壌に比べると第2号土壌は土器量が多く、複数個体の大型破片だけでなく、打製石斧や磨石なども出土した。第2号土壌は平面楕円形で、規模は長軸1.00m、短軸0.95m、深さ0.30mである。第3号土壌は平面楕円形で、規模は長軸0.85m、短軸0.65m、深さ0.15mである。

第1～3号土壌の覆土は柱穴の覆土に近似する黒褐色土や褐色土が主体である。概ね自然堆積を示すもので、人為的な埋戻しは行われていないものと判断した。3基の土壌から出土した土器群はいずれも中期後半の加曾利EⅢ式古段階に位置づけられる。ほとんど時期幅がなく、前後関係については明確に示できなかった。



第118図 第3号住居跡

第3号住居跡出土遺物

土器 (第119図)

床面を覆うように堆積していた第1層から出土した遺物は僅少で、掲載可能な資料は土器片1点のみであった。

1は深鉢の胴下半部で、R L単節の縄文を施文し、平行沈線による懸垂文と蛇行懸垂文が描かれていた。



第119図 第3号住居跡出土遺物

第3号住居跡第1号土壇出土遺物

土器（第123・124図）

加曾利EⅢ式古段階の土器が出土している。

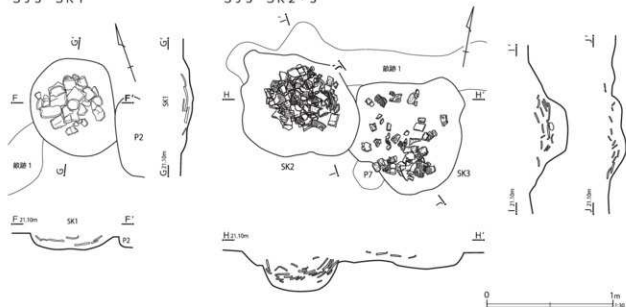
1は口縁から胴部中段までを残存する。胴部中段が「く」の字に張り、頸部にくびれをもつ。口

SJ3 SK1

縁は強く内屈して、口唇断面は先細りとなる。東信の唐草文土器の影響下にある土器で、紡錘形の胴部に寸詰まりの内湾口縁を付すものとみられる。

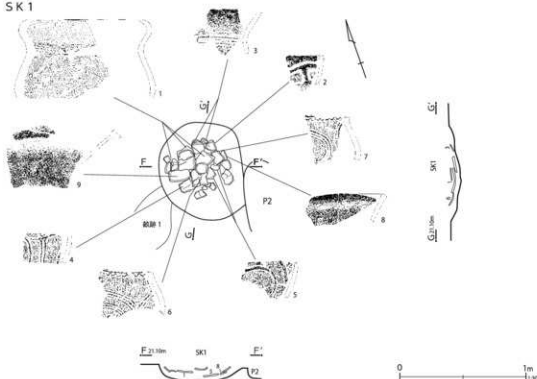
頸部に交互刺突を伴う平行沈線文が重畳して、器面を上下に分帯する。胴部には半裁竹管状工具

SJ3 SK2・3



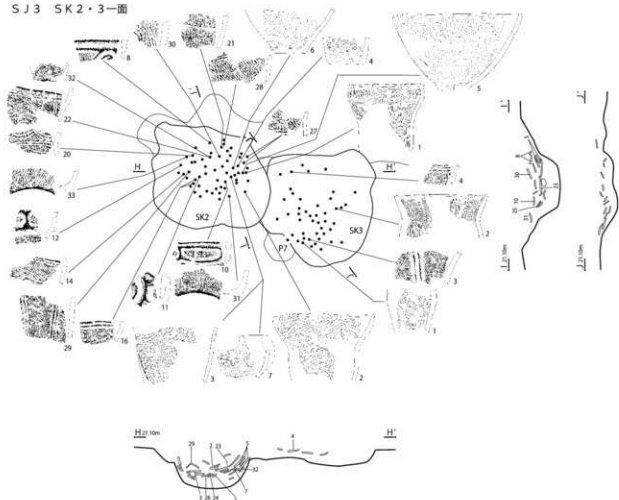
第120図 第3号住居跡第1～3号土壇

SJ3 SK1

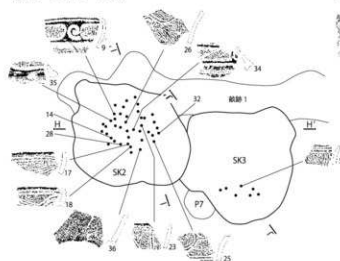


第121図 第3号住居跡第1号土壇

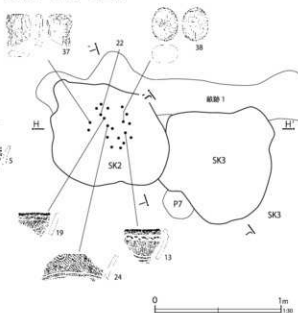
SJ3 SK2·3一面



SJ3 SK2·3二面



SJ3 SK2·3三面



第122图 第3号住居跡第2·3号土境

の平行沈線による大柄の渦巻文を描き、隣り合うモチーフどうしを弧状の平行沈線で連繋する。

地文は半裁竹管状工具による縦位の集合沈線で、口縁部では右下がりに、胴部ではモチーフの余白を充填するように描かれる。

復元最大径は約37cm、高さ約20.8cmである。胎土に若干の砂と小礫を含む。器面は外面灰黄褐色、内面灰黄褐色～灰橙色である。焼成は良好である。

2～9は破片資料である。

2はキャリバー類深鉢の口縁部である。扁平な隆帯で入り組み風の渦巻文を描く。地文はRL単節横位回転の縄文である。

3～7は唐草文系の土器である。3は頸部から胴上半部まで残存する。口縁無文で、頸部に多段の平行沈線が巡り、胴部は平行沈線の渦巻文を描く。地文は橢圓状工具の条線である。

4・5はこれと同一個体の胴部で、平行沈線の渦巻文を描き、沈線間の地文を磨り消している。地文は橢圓状工具の条線である。

6・7は復元個体1の一部とみられるが、接合し得なかった部分である。いずれも頸部から胴部中段にかけての大破片で、半裁竹管状工具により文様を描く。渦巻文中心部では地文沈線が放射状に施文されている。

8・9は浅鉢である。胴部中段が「く」の字に

張り、頸部屈曲して口縁外反する。

8は無文の口縁部で、口唇断面肥厚し、口端上は平坦に整形している。

9は胴部中段が「く」の字に張り出して鐙状の隆帯が巡り、胴上半部に沈線による楕円形区画文を描く。区画内にはLR単節横位回転の縄文を施文する。胴下半部は無文である。

第3号住居跡第2号土壌出土遺物 土器（第125～127図）

加曾利EⅢ式古段階の土器が出土している。

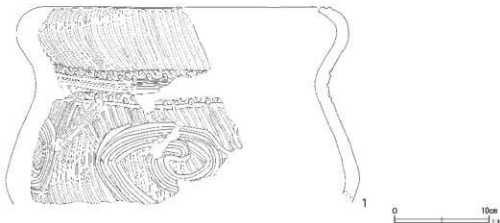
1はキャリバー類深鉢で、口縁部から胴下半部まで残存する。水平口縁で、胴部中段が緩やかにくびれ、口縁内湾する。

口縁直下に2本隆帯の楕円形区画文を描き、文様帯下端に軸玄の凹線が巡る。地文は橢圓状工具による縦位の条線である。

復元最大径は約20.3cm、高さ約17.9cmである。胎土はシルト質で、器面は灰黄色～灰橙色である。焼成はやや不良である。

2は連弧文土器で、口縁から胴下半部まで残存する。胴部中段にくびれをもち、口縁はごく軽微に内湾しつつ立ち上がる。

口縁直下に平行沈線が巡り、胴上半部には3本沈線の波状文を描く。胴部中段には3本沈線の区画が巡り、胴下半部には平行沈線の蛇行懸垂文が垂下する。



第123図 第3号住居跡第1号土壌出土遺物(1)

地文はR L R複節の縄文で、やや右下がりの縦位回転で施文する。沈線間の地文は、ほとんどの部分で磨り消している。

復元最大径は約27cm、高さ約17.8cmである。胎土はシルト質で、海綿骨針を含む。器面は灰褐色～灰橙色で、焼成はやや不良である。

3は深鉢で、胴中段から胴下半部にかけて残存する。くびれをもたず、口縁に向かって単調に開く器形である。

胴中段に3本沈線の区画が巡り、一部が胴上半部に向かって開放しており、連弧文等のモチーフに連結しているものとみられる。胴下半部には平行沈線の懸垂文が垂下する。

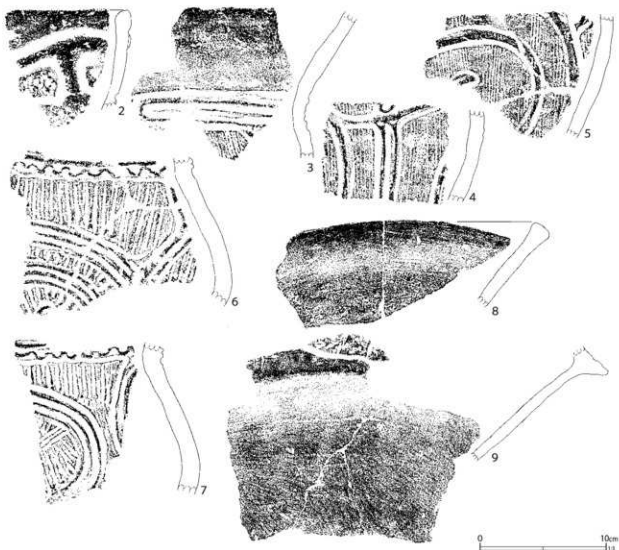
地文はL R単節縦位回転の縄文で、平行沈線間の地文は磨り消している。

復元最大径は約22.5cm、高さ約14.9cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器面は明灰褐色～灰橙色である。焼成は比較的良好い。

4は深鉢で、胴下半部から底部にかけて残存する。胴部は僅かに外傾しつつ直線的に立ち上がり、底面は軽微な上げ底状となっている。

L R単節縦位回転の縄文を施文する。底部直上は無文で、横位の研磨を施す。

復元最大径は約12.1cm、高さ約7.5cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器面は灰褐色で、焼成はやや不良である。



第124図 第3号住居跡第1号土坑出土遺物(2)

5は浅鉢である。口縁から底部まで残存する。水平口縁で、底部直上に僅かにくびれをもち、胴部から口縁にかけて緩やかに内湾しつつ立ち上がる。口端は僅かに内屈する。文様は施文せず、横方向を主体とする研磨が施される。

復元最大径は約34.2cm、高さ約20.3cmである。胎土はシルト質である。器面は灰褐色～黄橙色で、焼成はやや不良である。

6は浅鉢である。胴部中段から底部にかけて残存する。水平口縁で、底部直上に僅かにくびれをもち、胴部は緩やかに内湾しつつ立ち上がる。無文で、底部直上では横方向、他は縦方向の研磨が

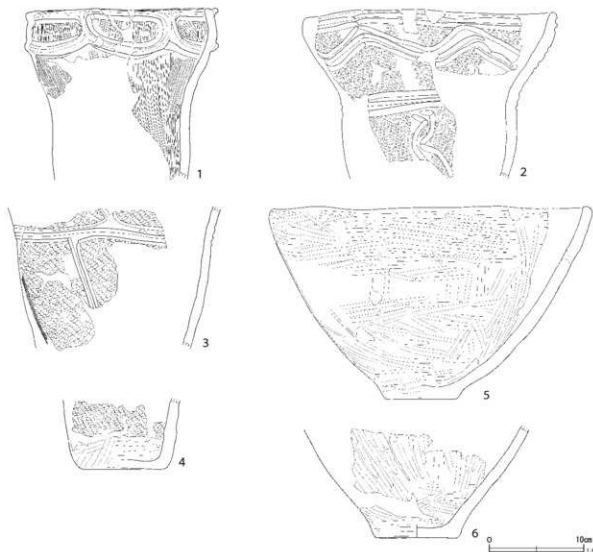
施される。

復元最大径は約23.7cm、高さ約11.7cmである。胎土はシルト質で、器面は灰褐色～灰橙色である。焼成はやや不良である。

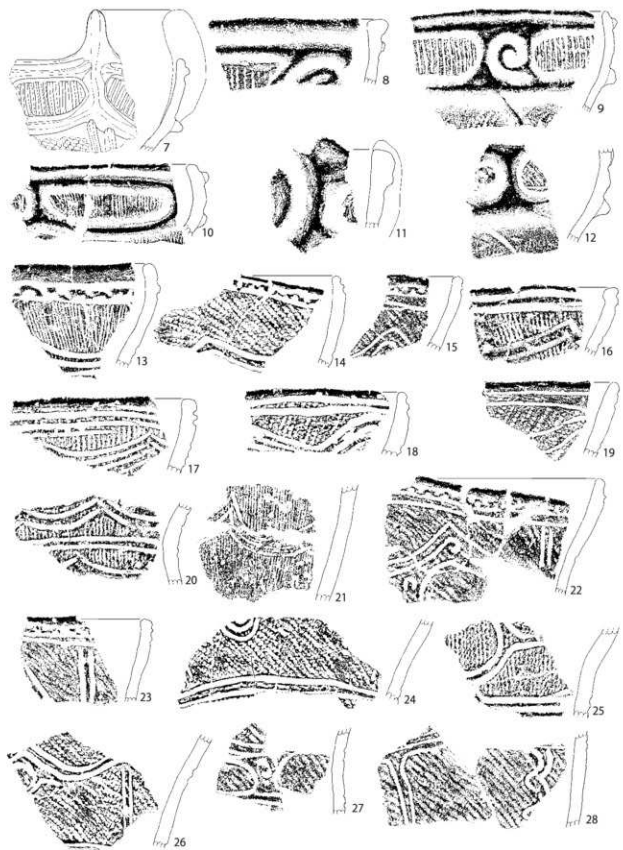
7～36は破片資料である。

7～11はキャリバー類深鉢の口縁部である。7は水平口縁上に縦位の鱗状突起を配し、左右に1本隆帯の楕円形区画文を配する。区画内部には縦位の集合沈線文を描く。胴部には突起を起点とした2本隆帯の懸垂文が垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

8は入り組み風の渦巻文で、地文はR縦位回転



第125図 第3号住居跡第2号土庫出土遺物(1)



第126图 第3号住居跡第2号土坑出土遺物(2)

の燃糸文である。9は独立した渦巻文を挟んで左右に楕円形の区画文を配する。区画内部には縦位の集合沈線文を描き、胴部にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。

10は円文化した渦巻文と楕円形区画文を描く。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。11は楕円形区画の接点で、口唇上に小突起を配する。

12は浅鉢ないし両耳壺の可能性があり。円文化した渦巻文と楕円形区画文を描き、区画内部にはL R単節縦位回転の縄文を施文する。

13～19・22・23は連弧文土器の口縁部である。口縁直下に平行沈線が巡り、13～15・22・23では沈線間に交互刺突文を伴う。16・17は末端が山形に交差する連弧文だが、14・15・18・19では波状文化している。また、22・23は同一個体とみられ、沈線間にわらび手状のモチーフを描き、上下の区画との間を縦位の平行沈線で連結する。13は沈線間の地文を磨り消している。

地文は14・15・22・23がL R単節、18・19がR L単節の縄文、16・17がRの燃糸文、13が櫛歯状工具の条線である。

20・21・24～28は連弧文土器の胴部である。20は磨り消し連弧文で、胴部中段に平行沈線の区画をもち上下に連弧文を描く。21は胴下半部である。

24・25・26は連弧文の接点に円文を描くもので、いずれも磨り消し連弧文である。27は連弧文の下底部と胴部中段の区画を平行沈線で連結し、交点に小渦巻文を配する。28は胴部中段の区画から平行沈線の懸垂文と蛇行懸垂文が垂下する。

地文は24・26～28がL R単節の縄文、20・25がRの燃糸文、21が櫛歯状工具の条線である。

29は曾利系の深鉢とみられ、櫛歯状工具の条線を地文とし、3本沈線の懸垂文と単沈線の蛇行懸垂文を描く。30は唐草文土器の胴部である。半裁竹管状工具の平行沈線で大柄の渦巻文を描き、間隙には同一工具の集合沈線文をモチーフに沿って放射状に施文する。

31～33は深鉢底部である。31のみ3本沈線の懸垂文を描く。地文は31・33がR L単節縦位回転の縄文で、32は櫛歯状工具の条線である。

34・35は胴部中段が「く」の字に張り出す浅鉢である。胴上半部にはキャリバー類深鉢由来の区画文を描く。区画内部にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。文様帯下端には鋸状の隆帯が巡る。胴下半部は無文である。

36は無文の浅鉢胴下半部である。

石器 (第127図)

37は打製石斧である。胴部中段から刃部側を斜めに折損する。扁平な石材を使用し、腹面に平滑な自然面を残す。現存長8.5cm、幅6.7cm、厚さ1.9cmで、重量は119.9gである。石材は粘板岩である。

38は楕円形の磨石である。断面は胴張り隅丸の長方形で、両面使用する。凹石に転用され、表面に一箇所の凹孔をもつ。長軸両端に剝離がみられ、叩き石としても使用された可能性がある。長さ8.9cm、幅6.9cm、厚さ4.8cmで、重量は393.7gである。石材は閃緑岩である。

第3号住居跡第3号土壌出土遺物

土器 (第128・129図)

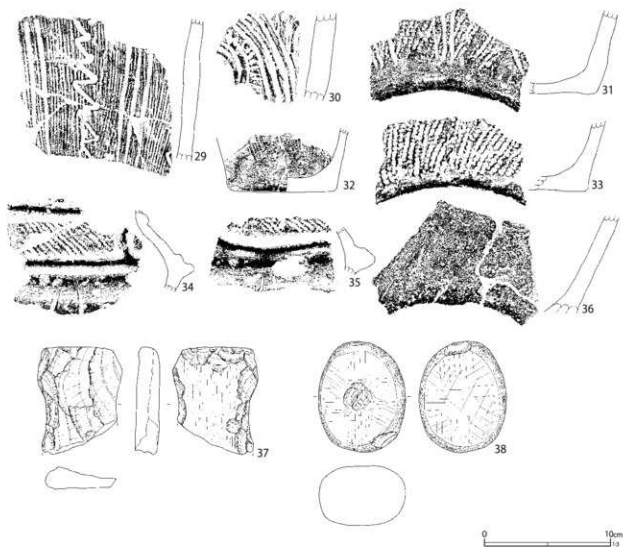
加曾利EⅢ式古段階の土器が出土している。

1は連弧文土器とみられ、胴部中段から胴下半部まで残存する。器壁の厚みに比較して径の小さい、細身の深鉢になると考えられる。

胴部中段に平行沈線の区画が巡り、胴下半部に3本沈線の連弧文を描く。弧の下端からは集合沈線の懸垂文が垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文で、平行沈線間の縄文は部分的に磨り消している。

復元最大径は約13.0cm、高さ約11.8cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器面は外面明灰褐色、内面灰黄褐色で、焼成はやや不良である。

2は深鉢で、口縁から胴部中段まで残存する。水平口縁で、胴下半部が張って中段にくびれをも



第127図 第3号住居跡第2号土坑出土遺物(3)

つ。胴上半部から口縁部にかけてほぼ直線的に開いて、口端は僅かに内屈する。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

復元最大径は約14.5cm、高さ約11.5cmである。胎土はシルト質で、外面明灰褐色、内面灰褐色である。焼成はやや不良である。

3～5は破片資料である。3は胴上半部で、2本隆帯の懸垂文が垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。4・5は同一個体とみられる。胴部中段に平行沈線の区画を設け、これに沿って小波状の沈線が巡る。胴下半部には平行沈線の懸垂文と波状懸垂文が垂下する。地文はR縦位回転の撚糸文である。

(2) 炉跡

明確な落ち込みや周囲にピットを伴わない炉跡が、第1次調査区から単独で検出された。

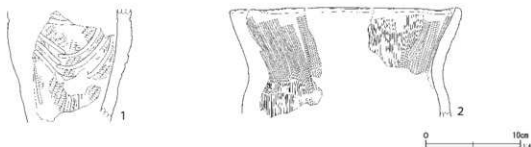
第1号炉跡 (第130図)

第1次調査区南端のI・J-8グリッドに位置する。調査区内では後世の掘乱が激しい部分にあっており、遺構の遺存状況は良くなかった。

平面不整形の地床がで、規模は長軸0.70m、短軸0.65mである。掘乱によって削平されており、約0.05mの掘り込みを僅かに残すのみであった。

覆土は被熱により焼土化した赤褐色土が主体で、焼土ブロック・焼土粒子を多く含んでいた。

底面は凹凸が顕著で、被熱により赤色に変色し、



第128図 第3号住居跡第3号土壌出土遺物(1)



第129図 第3号住居跡第3号土壌出土遺物(2)

硬化していた。

覆土や周辺から遺物がまったく出土していないため時期は不明であるが、覆土の状態から縄文時代に帰属すると判断した。

本来は住居跡に伴うが跡であった可能性が高い。

(3) 土壌

縄文時代の土壌は、第2次調査区から1基を検出した。第2・3住居跡の南西側に位置し、住居跡とはやや距離を置いている。

第7号土壌 (第131図)

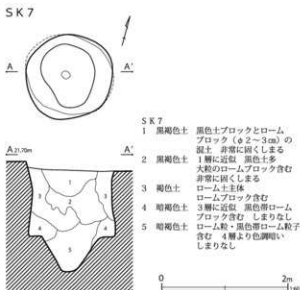
第2次調査区中央のD・E-4グリッドに位置する。平面形は径1.40mの円形で、深さ1.60mである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面の中央を土壌状に深く掘り込んでいた。

覆土はロームブロックを含む黒褐色土・暗褐色土が主体である。上層の第1・2層は非常に固くしまり、壁面(地山ローム)よりも固いほどであった。覆土中から遺物がまったく出土していないため時期は不明であるが、覆土の状態から縄文時代に帰属すると判断した。

土壌の用途に関しては、平面形や断面形状から推して貯蔵穴と考えられる。



第130図 第1号炉跡



第131図 第7号土壌

(4) ビット・グリッド出土遺物

土器 (第132図)

1は加曾利EⅢ式の浅鉢ないし両耳壺で、頸部が「く」の字に屈曲する。胴上半部にキャリバー類深鉢に由来する文様帯をもち、隆帯の渦巻文を描く。2は連弧文土器の胴部とみられ、平行沈線による弧状モチーフを描く。

3は半裁竹管状工具の平行沈線文を描く。4は平行沈線による懸垂文である。いずれも地文はR L単節縦位回転の縄文である。

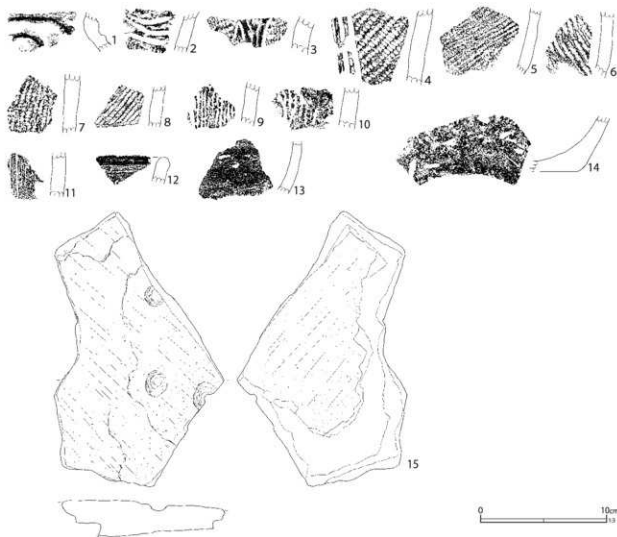
5～11は地文のみの胴部破片である。5～7はL R単節、8はR L単節の縄文、9・10はR

の燃糸文である。11は櫛歯状工具による縦位の条線である。5は後期中葉の可能性はあるが、その他はいずれも中期後葉の土器と考えられる。

12は無文の口縁部である。13は無文の胴下半部、14は無文の底部で、中期後葉～後期のものとみられる。

石器 (第132図)

15はG-8グリッドP1から出土した凹石片である。表裏とも平滑で、石皿片の可能性はある。現存部分の長さ21.6cm、幅13.5cm、厚さ2.9cmで、重量は901.2gである。石材は絹雲母片岩である。



第132図 グリッド出土遺物

3. 中・近世の遺構と遺物

(1) 溝跡

中・近世の溝跡は第1次調査区3条、第2次調査区11条の計14条を検出した(第107図)。

出土遺物が少なく、帰属時期の明確なものではなく、覆土の状態から判断したものが多い。

第1・2号溝跡(第107・133図)

第1次調査区北側のG-6・7グリッドに位置する。並行して東西に延びる溝跡である。東側で第2号溝跡は緩やかに向きを北に変える。

第1号溝跡は、攪乱のため長さ5.00mを検出したにすぎない。溝の幅は狭く、掘り込みも浅い。覆土は灰褐色土の単一層で、第2号溝跡に近似することから同一時期に機能した可能性がある。

第2号溝跡は検出長13.10m、幅0.30~1.00mである。深さは0.04~0.10mと浅い。

遺物は出土していないが、覆土の状態から近世に帰属すると考えられる。覆土や断面形状から、第2次調査区で検出された第7号溝跡に続く、地境の溝と思われる。

第3号溝跡(第107・133図)

第1次調査区中央のH-7・8、I-8グリッドに位置する。攪乱によって寸断されているが、緩やかなカーブを描きながら東西に延びる。検出長8.00m、幅1.60~1.80m、深さ0.10~0.20mである。底面は南側に平坦面をもち、二段に掘り込まれていた。断面形状から区画溝であろう。

溝の底面付近からかわらけ皿が出土したほか、覆土中から肥前産の染付磁器碗、瀬戸美濃産の陶器鉢・皿・香炉、在地産の鉢(第135図1~6)など、17世紀後半から18世紀前半までの遺物が出土した。

第4号溝跡(第107・133図)

第2次調査区南側のE-5・6、F-5グリッドに位置し、東側は調査区域外にかかる。検出長16.50m、幅0.50~2.90m、深さ0.40mである。覆土の観察からヤドロ上げ時には完全に埋没して

いないことが判明した。第2層(掘り返し土)や断面形状からみて根切り溝と思われる。

覆土中から瀬戸美濃産の陶器鉄釉灯皿・灰釉菊皿、肥前産の青磁釉瓶類口縁部(第135図7~9)が出土した。遺物の時期は17世紀前半から19世紀前半までのものがみられる。

第5号溝跡(第107・133図)

第2次調査区南側のE-5グリッドに位置し、北側の第6号溝跡によって壊されている。規模は長さ6.10m、幅0.70~1.20mである。深さは0.10mと極めて浅い。遺物が出土していないため時期は明確でないが、覆土の状態から近世に帰属すると考えられる。

第6号溝跡(第107・133図)

第2次調査区南側のD・E-5・6グリッドに位置する。東端部は調査区外に延び、西端部は第7号溝跡に合流する。検出長15.50m、幅0.85~1.30m、深さ0.20mである。第1号畝状遺構と覆土が同一であることから畠の境をなす区画溝と思われる。覆土の観察から第7号溝跡より古く、第5号溝跡より新しいことが分かった。

第7号溝跡(第107・133図)

第2次調査区中央のB~F-4、E・F-5グリッドに位置し、調査区を二分する南北溝である。両側がやや深くなる浅い溝で、調査区南半は確認面のロームが削平され、溝の上部は残存していない。このため2本の並行する溝状となっている。検出長41.00m、幅4.90~5.70m、深さ0.10~0.40mである。

底面の状況は凹凸が激しく、覆土のしまりが少なくボロボロしている。第4号溝跡とよく似た覆土で、根切り、または何らかの区画溝と考えられる。土層断面の観察所見からヤドロ上げ以前に埋没し、第6号溝跡よりも新しいことが判明した。

遺物は肥前系の銅緑釉皿、瀬戸美濃産の灰釉皿のほか丸瓦片(第135図10~14)が出土した。

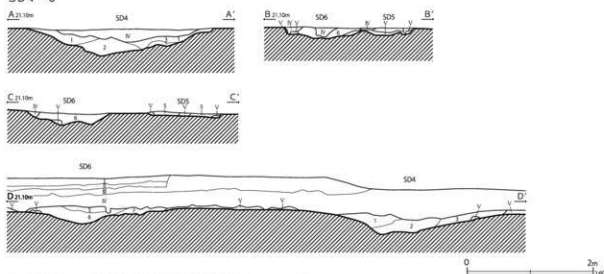
SD1~3



SD1~3

I 灰褐色土 シルト質 ロームブロック (φ3~5cm) 少量 ローム粒子多く含む しまりなし 粘性ややあり

SD4~6

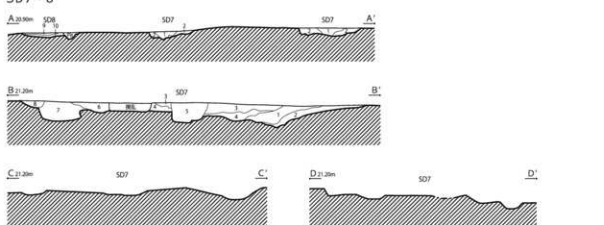


- I 灰黄褐色土 水田耕作土 焼土粒子・炭化物粒子微量含む
しまりあり
II 灰黄褐色土 水田床土 マンガン粒子多 浅間A軽石少量含む
しまりあり
III にぶい黄褐色土 ヤドロ土層 炭化物粒子多 浅間A軽石少量含む
しまりあり
IV にぶい黄褐色土 ヤドロ土層 灰色粘土粒子・小ブロック多
炭化物粒子少量含む しまりなし
V 暗褐色土 畑作土 ロームブロック・ローム粒子多く含む

SD4

- 1 黒褐色土 ローム小ブロック・ローム粒子多く含む しまりなし
2 褐色土 ロームブロック (φ1~10cm) 含む (掘り返し土)
3 褐色土 ローム小ブロック・ローム粒子多く含む しまりなし
- SD5・6
4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多く含む しまりなし
5 暗褐色土 きめ細かい均一な層 ローム粒子・炭化物粒子含む
6 にぶい黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む しまりなし
7 にぶい黄褐色土 ローム粒子含む しまりなし

SD7・8



SD7

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム粒子多く含む しまりなし
2 暗褐色土 ロームブロック含む
3 暗褐色土 ローム粒子少量 ヤドロ粒子・小ブロック多く含む
4 暗褐色土 ロームブロック (φ2~3cm)・ローム粒子多く含む しまりなし
5 灰黄褐色土 3層とヤドロの混土
6 暗褐色土 3層に近似的だが、しまり強くヤドロ粒子若干含む
7 暗褐色土 ロームブロック多く含む
8 暗褐色土 ローム粒子多く含む しまりあり

SD8

- 9 にぶい黄褐色土 ローム粒子多 炭化物粒子若干含む
10 暗褐色土 ローム粒子微量含む 非常に固くしめる

第133図 溝跡(1)

SD9・10



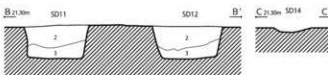
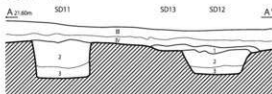
SD9

1 層褐色土 ロームブロック・ローム粒子多く含む しまりなし

SD10

2 きめ細かい褐色土主体 ローム粒子多く含む
3 層褐色土 ローム小ブロック・ローム粒子多く含む しまりなし

SD11～14



SD11～13

Ⅲ ヤドリ土層

Ⅳ ヤドリ土層

1 褐色土 ローム粒子含む (SD13)

2 褐色土 黒褐色土に多量のロームブロック (φ1～10 cm)・ローム粒子含む

3 層褐色土 1層と同様だが黒色土を含まず、ローム小ブロック (φ1～5 cm) 多く含む



第134図 溝跡(2)

遺物の時期は17世紀前半が中心である。

第8号溝跡 (第107・133図)

第2次調査区南側中央のE・F-4グリッドに位置する。検出長は19.00m、幅0.40～1.30mで、第7号溝跡によって壊された南北溝である。

覆土は人為的に突き固められたか、あるいは踏み固まったものである。きめ細やかな単一の、底面・壁面との境は明確で、道路跡の可能性が高い。ただし、底面は浅い皿状で凹凸もほとんどないことから、畝境の溝を通路としていたものと思われる。遺物が出土していないが、覆土の状態から近世に帰属するものであろう。

第9・10号溝跡 (第107・134図)

第9号は第2次調査区西側のE-3・4グリッドに位置し、第10号溝跡の南側に近接する。西側は調査区域外に延びており、検出長6.20m、幅0.45～0.70mで、掘り込みは浅い。

第10号溝跡は第2次調査区西側のD・E-4グリッドに位置する。L字状に屈曲した溝跡で、第8号溝跡と重複する。検出長11.00m、幅0.50～0.90mで、掘り込みが浅い。

共に掘り込みが浅く底面の凹凸が激しい。第4・7号溝跡と同様、根切り溝と思われる。覆土も第4・7号溝跡に近似している。

第11・12号溝跡 (第107・134図)

第2次調査区北西のB・C-3グリッドに位置する。平行する2条の溝跡で、断面箱形である。北側は調査区域外にかかり、覆土の観察から同時に埋め戻されていることが分かった。平面形や断面形状から推して細長いムロと考えられる。

第11号溝跡の規模は、検出長7.70m、幅0.95～1.30m、深さ0.40～0.60mである。第12号溝跡は検出長8.10m、幅1.00～1.30m、深さ0.35～0.50mである。遺物は第11号溝跡からかわかけ皿・在地産の焙烙、板碑基部 (第135図15～17) が出土した。また、第12号溝跡からは二条線を残す板碑の頭頂部片 (第135図18) が出土した。

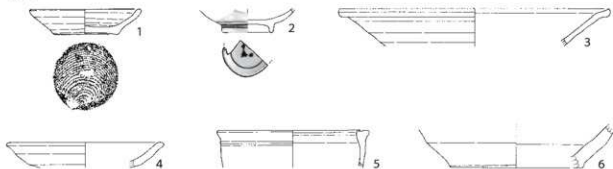
第13号溝跡 (第107・134図)

第2次調査区北西のB-3、C-3・4グリッドに位置する。第7・12号溝跡が埋没した後に掘り込まれており、S字状に屈曲した南北溝である。検出長8.00m、幅0.30～0.70mである。遺物は肥前系の磁器碗 (第135図19) が出土した。

第14号溝跡 (第107・134図)

第2次調査区北西のC・D-3グリッドに位置する東西溝で、西側は掘乱によって壊される。検出長5.90m、幅0.40～0.70m、掘り込みが浅く、一部途切れている。

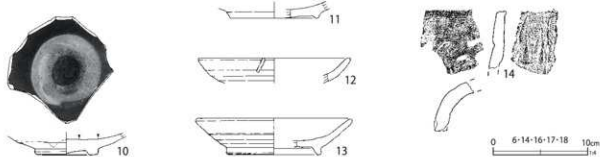
SD3



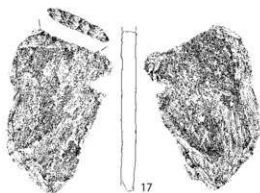
SD4



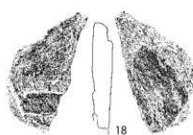
SD7



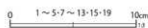
SD11



SD12



SD13



第135図 溝跡出土遺物

第28表 溝跡出土遺物観察表(第135図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	かわらけ	皿	8.6	2.0	5.2	CHIK	90	普通	灰白	SD3 №1 内面赤色顔料一部付着 底部回転糸切り 近世	39-1
2	磁器	碗	—	[1.9]	(4.0)	I	30	良好	白	SD3 肥前「大明年製」18C前半	39-2
3	陶器	鉢	(21.4)	[3.0]	—	K	5	良好	灰白	SD3 瀬戸美濃 灰釉 18C中頃～後半	39-2
4	陶器	皿	(12.0)	[2.0]	—	H I K	10	良好	灰黄	SD3 瀬戸美濃 灰釉 17C後半	39-2
5	陶器	香炉	(11.8)	[3.0]	—	I	10	良好	灰黄	SD3 瀬戸美濃 灰釉 17C後半～18C前半	39-2
6	瓦質土器	鉢	—	[4.6]	(14.0)	ACEIK	15	普通	灰黄	SD3 №2 中世	39-2
7	陶器	灯明皿	(9.2)	[1.5]	—	I	15	良好	浅黄	SD4 瀬戸美濃 鉄釉 19C前半	39-2
8	陶器	皿	(13.2)	2.8	(7.8)	I K	20	良好	灰白	SD4 瀬戸美濃 菊皿 灰釉 17C後半～18C前半	39-2
9	磁器	瓶類	(6.2)	[2.4]	—	K	20	良好	灰白	SD4 肥前 青磁釉 17C後半～18C	39-2
10	陶器	皿	—	[1.8]	4.9	I	80	良好	灰白	SD7 肥前系 銅緑釉 見込蛇の目 輪刺ぎ 17C後半～18C前半	39-3
11	陶器	皿	—	[1.3]	(7.0)	K	20	良好	灰黄	SD7 瀬戸美濃 ひだ皿 灰釉 底部 回転へラケズリ 16C末～17C前半	39-3
12	陶器	皿	(11.6)	[2.0]	—	K	5	良好	灰黄	SD7 瀬戸美濃 ひだ皿 灰釉 外面 くぼみ 16C末～17C前半	39-3
13	陶器	皿	(12.2)	2.9	(7.4)	I	20	良好	灰白	SD7 瀬戸美濃 灰釉 見込重ね焼 き痕 17C後半	39-3
14	瓦	丸瓦	長さ[5.0]cm 幅[4.2]cm 厚さ1.4cm 胎土精良 やや光沢あり 表面色調:灰オリーブ 内部色調:灰オリーブ							SD7 内面布目瓦版 古代か	39-5
15	かわらけ	皿	(9.0)	[1.8]	—	CHIK	10	普通	に近い橙	SD11 近世	39-3
16	瓦質土器	焙烙	(35.4)	5.6	33.6	H I K	15	普通	灰	SD11 在地産 近世	39-3
17	石製品	板碑	長さ[17.3]cm 幅[10.4]cm 厚さ1.5cm 重さ491.6g 緑泥片岩							SD11 板碑基部か 碑面との境に段 をもつ 二次加工痕顕著	39-4
18	石製品	板碑	長さ[13.0]cm 幅[7.6]cm 厚さ2.1cm 重さ274.7g 緑泥片岩							SD12 二条線 頭頂部一次加工時研 磨痕 13C～14C前半	39-4
19	磁器	碗	—	[2.1]	(4.0)	K	25	良好	灰白	SD13 肥前系 18C～19C前半	39-3

(2) 畝状遺構

第1号畝状遺構(第136図)

第2次調査区北東のB・C-4～6グリッドにおいて、東西方向に浅い溝が並行して延びる畝状遺構1面を検出した。東側は調査区域外へと続いているが、西側は第7号溝跡に直交し、上端部分で途切れていた。おそらく、第6・7号溝跡によって方形に囲まれた範囲の北半では、近世には畠作が行われていたものと想定される。

東西15.5m、南北13.3mの範囲に15条の畝(畝間溝)が同じ走行方向・間隔に並んでいた。畝の幅は約0.5m、間隔は約1.2mである。畝は浅く掘り込まれ、底面に凹凸がみられる。ただし、耕作痕と考えられる小ピットの連続するような状況で

はなかった。畝の走行方向はN-82°-Eを指す。

遺物は畝の覆土中から近世のかわらけ皿(第136図1)が出土したのみである。

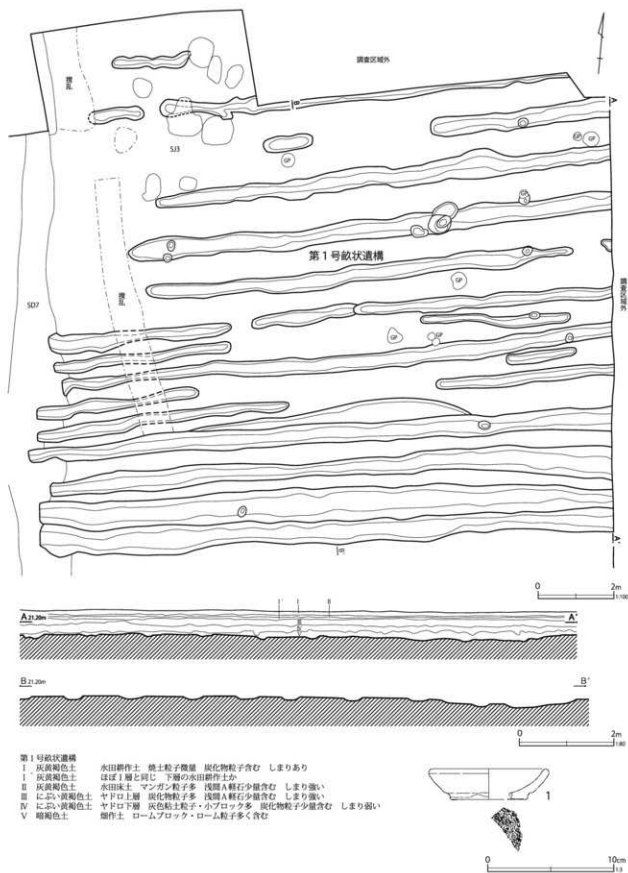
(3) 土壌

第1号土壌(第137図)

第1次調査区中央東寄りのI-8グリッドに位置する。平面形は不整形円形で、規模は長径0.85m、短径0.80m、深さ0.15mである。長軸方位はN-85°-Wを指す。時期は近世と考えられる。

第3号土壌(第137図)

第2次調査区南端のF-5グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸2.25m、短軸0.40m、深さ0.10mである。長軸方位はN-70°-Wを指す。覆土にヤドロを含まない近世土壌である。



第136図 第1号畝状遺構・出土遺物

第29表 第1号竇状遺構出土遺物観察表(第136図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	かわらけ	皿	(9.0)	2.4	(6.0)	CEHIK	15	普通	に50、黄橙	C-6G竇跡 底部回転糸切り 近世	39-6

第4号土壌 (第137図)

第2次調査区南端のF-5グリッドに位置し、南側は調査区域外にかかる。平面形は不整形で、規模は東西長1.40m、深さ0.25mである。覆土にヤドロを含まないことから、時期は近世であろう。

第5号土壌 (第137図)

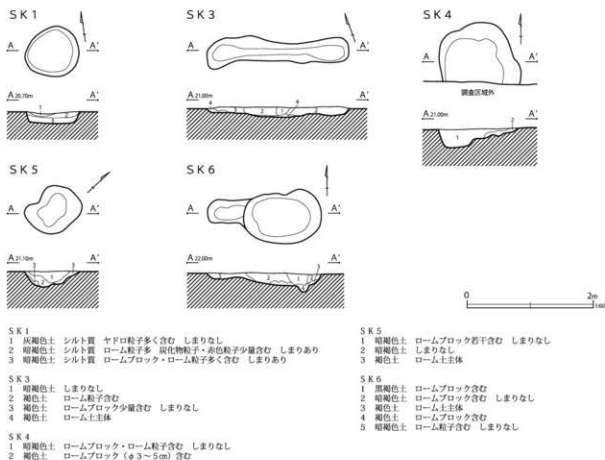
第2次調査区南端のF-6グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸0.94m、短軸0.75m、深さ0.25mである。長軸方位はN-35°-E

を指す。覆土にヤドロを含まないことから、近世に帰属するものと考えられる。

第6号土壌 (第137図)

第2次調査区南端のF-5・6グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.80m、短軸0.80m、深さは0.25mである。長軸方位はN-85°-Wを指す。底面には段差がみられる。

覆土にヤドロを含まないことから、近世の土壌と考えられる。



第137図 土壌

第30表 土壌一覧表(第131-137図)

番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考	番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考
1	I-8	不整形円形	0.85	0.80	0.15		5	F-6	不整形	0.94	0.75	0.25	
2	欠番						6	F-6	不整形	1.80	0.80	0.25	
3	F-5	不整形	2.25	0.40	0.10		7	D-4	円形	1.40	1.40	1.60	縄文
4	F-5	不整形	1.40	(1.00)	0.25								

(4) ビット

調査区全体でビットを70基検出した。攪乱の著しかった第1次調査区では1基のみであったが、第2次調査区からは69基を検出した。分布状況は調査区内に散在したあり方を示し、第7・8号溝跡周辺のE-4グリッドにやや集中していた。建物跡や柵列のような規則的な配列を示すものはみられなかった。

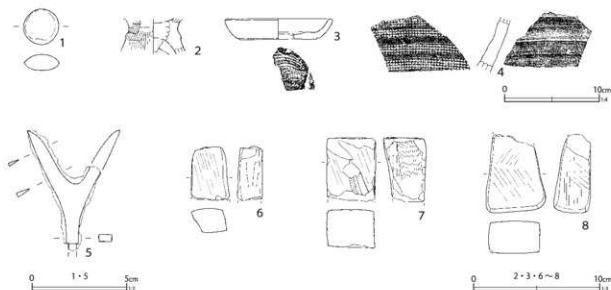
平面形は円形もしくは楕円形で、径30～40cmのものが大部分である。深さは10～70cmと幅があるが、20～40cmのものが多く、覆土はヤドロ状の灰褐色土のものもみられたが、大部分は褐色土・黒褐色土であった。

出土遺物がなく、時期区分は行えなかった。

(5) グリッド出土遺物

遺構外出土遺物のうち縄文時代の遺物を除く、各時代の遺物を一括した(第138図)。

1は土製の碁石である。第2次調査区F-5グリッドから出土した。近世の所産であろう。2は台付甕の脚台部片で、古墳時代前期(五領式期)の所産である。外面にハケメを施す。3は浅身のかわらけの皿で、底部回転糸切りである。4は瓦質土器の火鉢類の破片で、外面に叩きによる格子目文を施す。5は第1次調査区のG-8グリッドから出土した雁股鍬である。遺構確認作業時に、遺構の検出されなかった箇所から単独で出土した。形態的な特徴から古代に遡ると考えられる。6～8は凝灰岩製の碁石である。



第138図 グリッド出土遺物

第31表 グリッド出土遺物観察表(第138図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土製品	碁石	長さ1.9cm	幅1.9cm	厚さ0.8cm	重さ2.2g				F-5G 素焼 近世	39-7
2	土師器	台付甕	—	[2.8]	—	AHK	10	普通	橙	G-7G攪乱 古墳前期(五領)	
3	かわらけ	皿	(8.2)	[1.6]	(6.0)	HIK	20	普通	灰黄	表採 底部回転糸切り 近世	39-9
4	瓦質土器	火鉢類	—	[5.8]	—	HIK	5	普通	暗灰黄	表採 硬質タイプ 外面格子目文 19C	39-9
5	鉄製品	雁股鍬	長さ[6.4]cm	茎間長6.0cm	刃幅0.7cm	背幅0.2cm	重さ13.0g			G-8G 古代か	39-8
6	石製品	碁石	長さ[4.2]cm	幅3.0cm	厚さ1.9cm	重さ37.3g			凝灰岩	表採 紙面は4面 ヘラ状工具痕	39-10
7	石製品	碁石	長さ[5.0]cm	幅3.9cm	厚さ3.3cm	重さ103.2g			凝灰岩	表採 紙面は5面 櫛歯状工具痕 焼熱により赤化	39-10
8	石製品	碁石	長さ[6.2]cm	幅4.7cm	厚さ2.9cm	重さ117.8g			凝灰岩	表採 紙面は5面	39-10

VI 二ツ家下遺跡の調査

1. 遺跡の概要

二ツ家下遺跡は北本市二ツ家四丁目に所在し、JR高崎線北本駅の南東約2.6kmに位置する。遺跡は江戸時代の五街道の一つである中山道の西隣に広がり、桶川宿と鴻巣宿との間にあり、桶川宿の上の本戸から北へ約1.2kmの場所にある。

地形的には大宮台地北西部に位置し、荒川水系の江川と元荒川水系の赤堀川に挟まれた台地上に立地する。遺跡の標高は約23mである。

二ツ家下遺跡の調査では、縄文時代早期の竈穴1基、中期後半の土器埋設遺構2基、土壌11基、平安時代の土壌1基、近世の掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基、溝跡17条、畝状遺構14面、土壌108基、ビット65基を検出した（第140図）。

縄文時代の遺構は、第1次調査区を中心に分布している。最も時期の遡る遺構として、早期と推定される竈穴がある。埋没の進行した土壌の窪地を利用して構築されたもので、3ないし4回の造り替えが行われていた。

土器埋設遺構は、中期後半の浅鉢を出土した第1号土器埋設遺構と、加曾利EⅢ式新段階の深鉢を出土した第2号土器埋設遺構がある。

土壌は第41・43号土壌のように断面形や覆土の状態から陥穴と考えられるものもあるが、時期や用途を特定できるものは少ない。

縄文時代の遺物は、中期と後期の縄文土器が主体を占めている。第1・2号土器埋設遺構から中期後半の土器が出土したほか、遺構外から加曾利B2式の浅鉢が出土している。石器はチャート製の石鏃が出土したのみである。

平安時代の遺構は火葬跡と推定される土壌を検出した。長方形の土壌で、被熱により壁面が赤変し、底面に多量の炭化材を含む黒色土が堆積していた。覆土中に焼骨片はなかったが、遺骸を茶毘に付した火葬跡、あるいは木炭を多用した古墓の

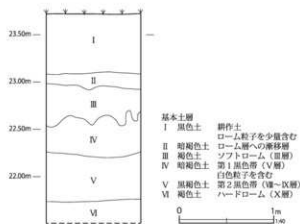
可能性がある。

近世の遺構は調査区全体に分布している。旧中山道に対して直交、もしくは並行する溝跡によって大きく区画された空間の内部に、街道沿いには屋敷地（居住空間）が、その周囲には畠地が開かれた景観を復元することができる。

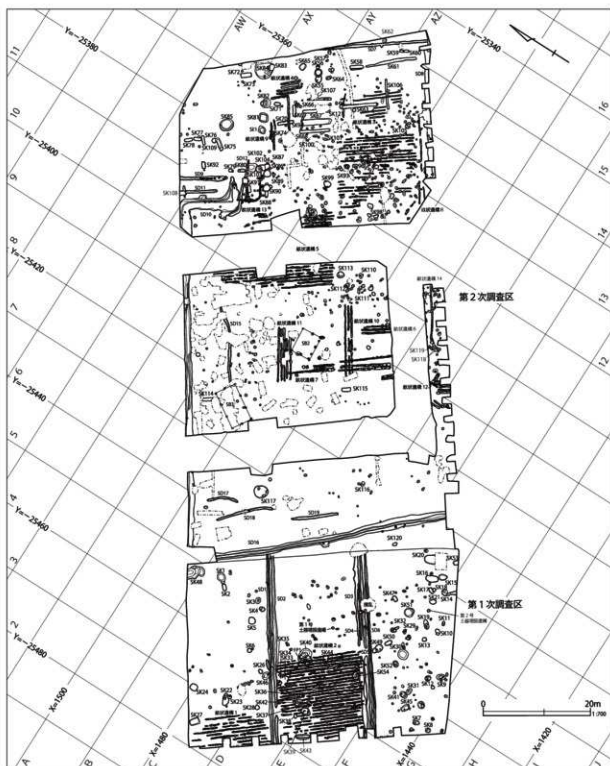
旧中山道寄りでは、直交するように伸びる第8・10号溝跡と、並行する第16号溝跡によって囲まれた長辺約90m、短辺約48mの長方形の区画が想定される。第10号溝跡は旧中山道の手前約30m付近でクランク状に南東側に屈曲し、その周辺には井戸跡や土壌などが集中することから、畠地と居住域の境界を示す区画溝と推定される。

第16号溝跡の南西側には、第1・2号溝跡及び第3～6号溝跡が直交するように伸びて短冊形的地割が形成されている。畝状遺構の作られた区画と、土壌のみが所在する区画に明瞭に分かれており、土地利用のあり方の違いが読み取れる。

第16号溝跡の覆土上層からは多量の炭化材に混じって瓦や近世陶磁器類が出土した。おそらく火災にあった建物の後片付けのために、溝跡の中に不要になったものを廃棄したことが窺われる。



第139図 二ツ家下遺跡基本土層



第140図 ニツ家下遺跡全体図

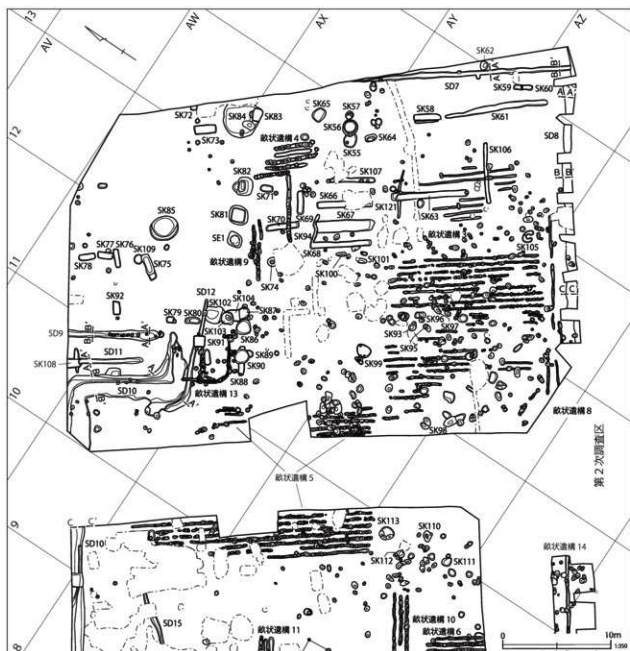
周辺に建物跡の存在を示すような痕跡はなかったが、瓦葺の建物跡か、もしくは堀などが存在した可能性を示唆するものである。

畝状遺構の広がりから、調査区の大半が畝地と

して耕作されていたと復元される。畝の走行方向は溝跡と同じく旧中山道に並行するものと直交するものに二分され、前者が中心となる。また、そのほとんどが同じ箇所で見切れることから、幅1



第141図 ニツ家下遺跡分測図(1)



第142図 ニツ家下遺跡分割図(2)

mほどの畦道等の存在が想定される。

掘立柱建物跡は2棟を検出したが、桁行方向は揃わず、周囲の溝跡や畝状遺構の走行方向とも異にしており、帰属時期が問題となる。

近世の遺物は、溝跡を中心に陶磁器類、瓦、砥石、銭貨(寛永通寶・鉄銭)、金属器等が出土した。時期は17世紀後半から19世紀後半の幅がみられ、大半は19世紀前半が占め、一部明治期の遺物も含まれている。この他に福助、大黒天等の土人形、

蛙の意匠をもつ土製品や玩具のばいごま等が出土しており、注目される。また、第10号溝跡周辺の遺構からは小型埴塼の破片がまとめて出土しており、周辺で金属器の修理に関わる作業を行っていたことが窺われる。

本遺跡の基本土層を第139図に示した。第Ⅱ層が近世の遺構掘り込み面となり、第Ⅲ層以下がローム層である。武蔵野台地の標準層位(Ⅲ～Ⅹ層)に概ね対比することができる。

2. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は第1次調査区を中心に早期の炉穴1基、中期の土器埋設遺構2基、土壌11基を検出した。

(1) 炉穴

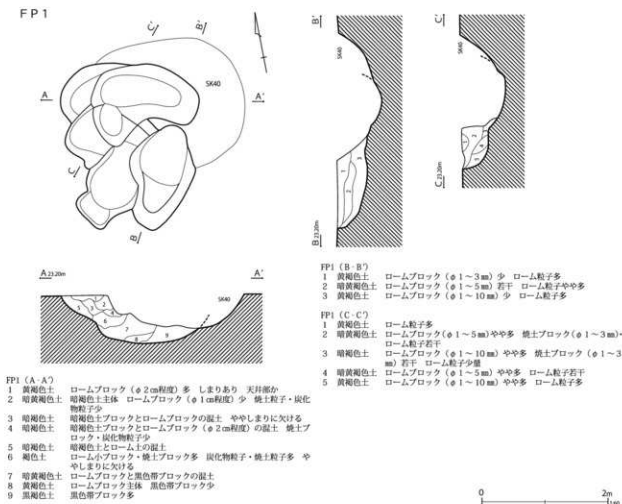
第1号炉穴 (第143図)

第1次調査区南西のD-4グリッドに位置する。埋没の進行した第40号土壌の窪地を利用して構築された炉穴(群)である。第40号土壌の西側壁面を掘削して3ないし4基の炉穴が、2.65×2.20mの範囲に連なるように存在する。土層断面による把握が十分でないため、それぞれの炉穴の形態・規模・構築順序等を明確にすることはできなかったが、長さ約1.60mの楕円形平面を基調とする炉

穴と推定される。焚口部は、第40号土壌の底面を浅く掘り窪めて構築し、焚口部から燃焼部の床面は緩やかに立ち上がり、奥壁は急峻となる。燃焼部はあまり被熱を受けておらず、明確な灰味や地山ロームの赤変箇所は認められなかった。

覆土は暗褐色土を主体とする。最上層に崩落した天井部と想定されるロームブロックを多量に含む黄褐色土が残されていた。覆土中における焼土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子の混入は全体に少なかった。

遺物がまったく出土していないため明確な時期は不明であるが、形状や覆土の状態から縄文時代早期の遺構と判断した。



第143図 第1号炉穴

(2) 土器埋設遺構

土域内に縄文土器を埋設していたと想定される土器埋設遺構を2基検出した。

第1号土器埋設遺構 (第144図)

第1次調査区西側のD-5グリッドに位置する。平面略円形に浅く掘り込んだ土壌の上面から浅鉢の底部及び胴部の一部が出土した。後世の削平により、遺存状態が良好でなく、埋設状況の詳細については不明である。

土器を埋設していた土壌の規模は長軸0.50m、短軸0.46m、深さ0.13mで、長軸方位はN-19°-Wを指す。

覆土は、暗黄褐色土と黄褐色土の2層に分層され、多量のローム粒子と炭化物粒子を少量混入していた。

時期は中期後半に位置づけられる。

第1号土器埋設遺構出土遺物 (第147・148図)

1は無文の浅鉢で、胴下半部から底部にかけて残存する。底部直上に僅かにくびれをもち、胴部はごく軽微に内湾しつつ直線的に立ち上がる。

3・4も無文の胴部破片で、1と同一個体の可能性がある。

第2号土器埋設遺構 (第144図)

第1次調査区西側のE-6グリッドに位置する。

浅く平面略円形に掘り込まれた土壌の上面から深鉢の口縁部片が数点出土したのみである。遺存状態が良好でなく、埋設状況の詳細については不明である。

土器を埋設していた土壌の規模は長軸0.58m、短軸0.50m、深さ0.12mである。長軸方位はN-63°-Wを指す。覆土は暗褐色土の単一層である。

時期は中期後半に位置づけられる。なお、調査時の遺構番号は第25号土壌である。

第2号土器埋設遺構出土遺物 (第148図)

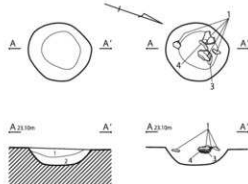
5～9は加曾利EⅢ式新段階の深鉢で、同一個体と考えられる。緩やかな波状口縁で、口縁部には扁平な隆帯と凹線により入り組み風の渦巻文と楕円形区画文が描かれる。文様帯下端の区画は形骸化しており、胴部の地文が隆帯上まで乗り上げている。胴部には磨り消し懸垂文が垂下する。地文はLR単節縦位回転の縄文である。

(3) 土溝

土溝は第1次調査区の南半部を中心に分布し、11基を検出した。

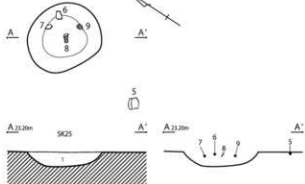
第41・43号土溝のように陥穴と考えられるものもあるが、用途を特定できるものは少ない。いずれも遺物が出土していないため、詳細な時期の判別はできなかった。

第1号土器埋設遺構



第1号土器埋設遺構
1 暗黄褐色土 ローム粒子多 炭化物 (φ1mm程度) 少
2 黄褐色土 ローム粒子極多 炭化物 (φ1mm程度) 少

第2号土器埋設遺構



第2号土器埋設遺構
1 暗褐色土 ローム小ブロック (φ1cm程度) 少
炭化物粒子・白色微粒子少

第144図 第1・2号土器埋設遺構

第31号土壌 (第145図)

第1次調査区南端のF-4・5グリッドに位置する。第41号土壌と重複し、西壁の一部が壊されていた。平面形は楕円形で、規模は長軸1.33m、短軸0.87m、深さ0.42mである。長軸方位はN-78°-Wを指す。浅い皿形に掘り込まれ、底面に小ピットが穿たれていた。

第40号土壌 (第145図)

第1次調査区中央のD-4グリッドに位置する。第1号炉穴と重複し、西壁が壊されていた。平面形は不整形で、規模は長軸2.50m、短軸2.00m、深さ0.75mである。長軸方位はN-48°-Wを指す。覆土はロームブロック・暗褐色土ブロックを多く含むことから、人為的な埋戻しと考えられる。

第41号土壌 (第145図)

第1次調査区南端のF-4グリッドに位置し、第31号土壌を壊す。平面形は楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、平坦な底面には小ピットが穿たれていた。規模は長軸1.43m、短軸1.10m、深さ2.15mである。長軸方位はN-3°-Eを指す。覆土はロームブロックを含む混土層が主体で、人為的な埋戻しであろう。断面形状からみて、いわゆる陥穴と考えられる。

第43号土壌 (第145図)

第1次調査区中央西端のE-3グリッドに位置する。平面形は楕円形で、壁が傾斜して立ち上がり、底面の幅は極端に狭くなる。規模は長軸2.66m、短軸0.97m、深さ1.05mである。長軸方位はN-35°-Wを指す。覆土は暗褐色土・黒褐色土・褐色土が主体である。断面形状からみて、いわゆる陥穴と考えられる。

第45号土壌 (第146図)

第1次調査区南端のF-4グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸1.63m、短軸0.95m、深さは0.30mで、長軸方位はN-64°-Wを指す。底面は概ね平坦で、小ピットが穿たれていた。

第46号土壌 (第146図)

第1次調査区中央のC・D-3グリッドに位置し、第1号溝跡と重複する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.60m、短軸1.25m、深さ0.70mである。長軸方位はN-75°-Wを指す。断面逆台形に掘り込み、底面に小ピットが穿たれていた。

第49号土壌 (第146図)

第1次調査区南側のE-5グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸2.15m、短軸1.30m、深さ0.22mである。長軸方位はN-62°-Wを指す。浅く皿形に掘り込み、底面に小ピットを穿つ。覆土は焼土粒子を含む暗褐色土である。

第50号土壌 (第146図)

第1次調査区南側のE-5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.45m、短軸0.76m、深さ0.19mである。長軸方位はN-60°-Wを指す。浅く皿形に掘り込まれる。

第51号土壌 (第146図)

第1次調査区南側のE-6グリッドに位置する。平面形は楕円形で、比較的大型の土壌である。長軸1.86m、短軸1.72m、深さ0.54m、長軸方位はN-60°-Wを指す。覆土はロームブロック・暗褐色土ブロックを多く含む、人為的な埋戻しと考えられる。

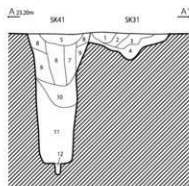
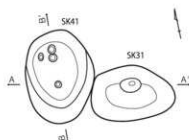
第53号土壌 (第146図)

第1次調査区南東端のE-7グリッドに位置し、南半分が調査区域外にかかる。平面形は楕円形で、規模は検出した長軸1.00m、短軸0.88m、深さ0.25mである。長軸方位はN-36°-Wを指す。逆台形に浅く掘り込まれていた。

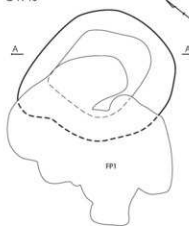
第54号土壌 (第146図)

第1次調査区中央のE-4グリッドに位置し、第2号畝状遺構と重複する。平面形は不整形で、規模は長軸1.45m、短軸1.15m、深さ0.50mである。長軸方位はN-53°-Eを指す。底面にピットが穿たれていた。覆土には焼土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子の混入が目立つ。

S K 31・41

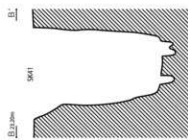


S K 40

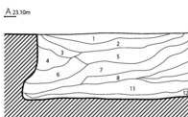
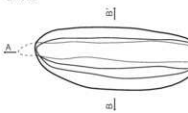


S K 40

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子微
- 2 暗褐色土 暗褐色土主体 ローム小ブロック (φ 5 mm程度) 多
- 3 暗褐色土 暗褐色土ブロック主体 ローム粒子多
- 4 暗黄褐色土 暗褐色土とロームブロック (φ 2 cm程度) の混土
- 5 黒褐色土 黒色帯ブロック多



S K 43



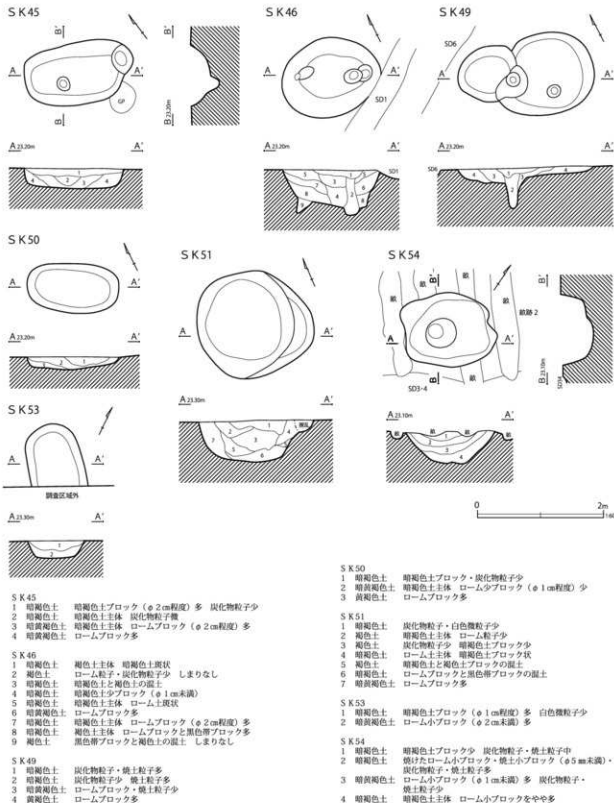
S K 31・41

- 1 暗褐色土 暗褐色土ブロック多
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック (φ 2 cm程度)
- 3 暗褐色土 暗褐色土ブロック多
- 4 黄褐色土 ロームブロック多
- 5 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒子少
- 6 暗褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック (φ 2 cm程度) 多 炭化物粒子少
- 7 暗褐色土 暗褐色土とローム状の混土 しまりなし
- 8 暗褐色土 白色炭粒子少
- 9 暗黄褐色土 ロームブロック多
- 10 暗黄褐色土 ロームブロックと暗褐色土ブロックの混土
- 11 暗褐色土 暗褐色土ブロック多 しまりなし
- 12 黄褐色土 ロームブロック多 黒褐色土粒子少 しまりなし

S K 43

- 1 暗褐色土 炭化物粒子微 白色粒子少
- 2 暗褐色土 ロームブロック (φ 2 cm程度) 炭状
- 3 暗褐色土 ロームブロック多
- 4 褐色土 暗褐色土主体 褐色土ブロック炭状
- 5 暗褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック (φ 4 cm程度) 炭状
- 6 黒褐色土 炭化物粒子多 しまりなし
- 7 暗褐色土 暗褐色土ブロックとロームブロックの混土
- 8 暗褐色土 ロームブロックと黒色帯ブロックの混土
- 9 褐色土 ロームブロック (φ 5 mm程度) 多
- 10 暗褐色土 黒色帯ブロック主体 ローム小ブロック (φ 2 cm程度) 炭状
- 11 褐色土 黒色帯ブロック多
- 12 黒褐色土 炭化物粒子少 しまりなし





第146図 土壌(2)

(4) グリッド出土遺物

すべて第1次調査区からの出土である。

土器 (第147・148図)

2は加曾利B 2式の浅鉢である。口縁から胴下半部にかけて残存する。内湾しながら立ち上がり、口縁部が内湾する碗形の器形である。

中央に短沈線と盲孔を配する対弧文を挟んで弧線文が巡り、口端との間にL R単節横位回転の縄文を施文する。頸部には刻み隆帯と平行沈線が巡り、胴部には弧線文が巡って、接点に対弧文を配し、文様帯下端を1条の沈線で区画する。

頸部以下に縄文は施文されないが、弧線文と下

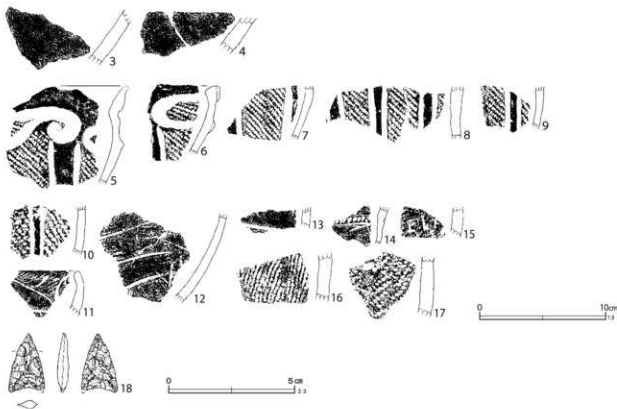
端の区画の間のみ研磨が施されず、粗い筭調整を残すことで文様を浮き立たせている。

復元最大径18.6cm、現存高9.8cmである。胎土は金雲母粒子を含み、器壁の色調は暗橙色～黒褐色で、焼成良好である。C-2グリッド出土。

10は加曾利EⅢ式の深鉢である。磨り消し懸垂文で、地文はL R単節縦位回転の縄文である。11は加曾利B 2式の浅鉢口縁部である。文様構成は復元個体2に似るが、頸部の区画には平行沈線を用いている。地文はL R単節横位回転の縄文である。12も加曾利B 2式の深鉢胴部である。2と同様の弧線文と対弧文が上下2段に描かれる。13も



第147図 出土遺物(1)



第148図 出土遺物(2)

同種の深鉢で、同一個体の可能性がある。

14は刺突を伴う平行沈線が巡る胴部で、後期の土器片である。15は無文地に篋状工具による縦位の刺突が巡る胴部で、胎土に金雲母粒子を混入する中期の阿玉台式である。

16・17は地文のみの胴部である。地文はいずれもRL単筋縦位回転の縄文で、16の原体は0段多

条の縄である。

石器 (第148図)

18は凹基の石鏃で、右脚先端を折損する。表裏から密な調整剥離が行われ、側縁部はなだらかな外向きのカーブを描く。長さ2.3cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmで、重さ1.1g、石材はチャートである。

3. 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は、火葬跡と推定される土壌1基を検出したのみである。

(1) 土壌

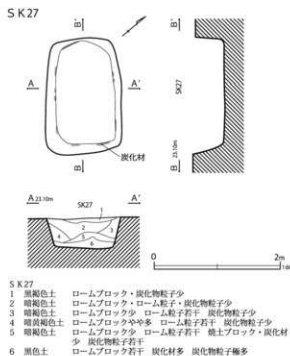
第27号土壌 (第149図)

第1次調査区北西隅のC-2グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸1.82m、短軸1.20m、深さ0.50mである。長軸方位はN-50°-Wを指す。

壁面は被熱により赤色化した部分が多く、底面に多量の炭化材を含む黒色土 (第6層) が厚さ10cmほど堆積していた。覆土中には焼骨片は含まれていなかったが、火葬跡 (茶毘跡)、あるいは木炭を多用した古墓の可能性が高い。

遺物が出土していないため、時期は特定できないが、覆土の状態から平安時代の遺構と判断した。

なお、近世溝の第9号溝跡の覆土中から、混入と考えられる9世紀前半の須恵器杯 (第155図5) が出土している。



第149図 第27号土壌

4. 近世の遺構と遺物

近世の遺構は掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基、溝跡17条、畝状遺構14面、土壌108基、ビット655基を検出した。

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、第2次調査区に2棟を検出した。なお、第1号掘立柱建物跡については柱間や柱穴の深度等を検討した結果、建物跡と確定するには至らなかったため、欠番とした。

第2号掘立柱建物跡 (第150図)

第2次調査区中央のA-9グリッドに位置する桁行4間、梁行2間の側柱建物跡である。西側約14mに第3号掘立柱建物跡がある。規模は桁行寸法4.60m、梁行寸法3.80mで、桁行の方位をN-86°-Eに採る東西棟である。

柱間寸法は、梁行で2.00m・1.80mに揃うが、柱筋の通りはわるく、中間の柱穴は内側にずれる。

桁行の柱間寸法は、南側桁行では間隔が狭く、不揃いであることから壁立であったと考えられる。一方、北側桁行は柱穴が確認されなかったことから推して、伏木を渡した上に柱を置いていた可能性がある。柱穴は円形を基調とし、径20~47cmとばらつきがある。深さは隅柱のP3が30cmとやや深いものの、他はすべて浅い掘り込みである。覆土は黒褐色土や暗褐色土の単一層が基本で、柱痕跡は明確にし得なかった。

遺物が出土していないため時期を特定できないが、覆土の状態から近世の遺構と判断した。

第3号掘立柱建物跡（第151図）

第2次調査区中央北側のA-7、AZ-7・8グリッドに位置する。東側へ約14m隔てて第2号掘立柱建物跡が所在しているが、主軸方位は異に

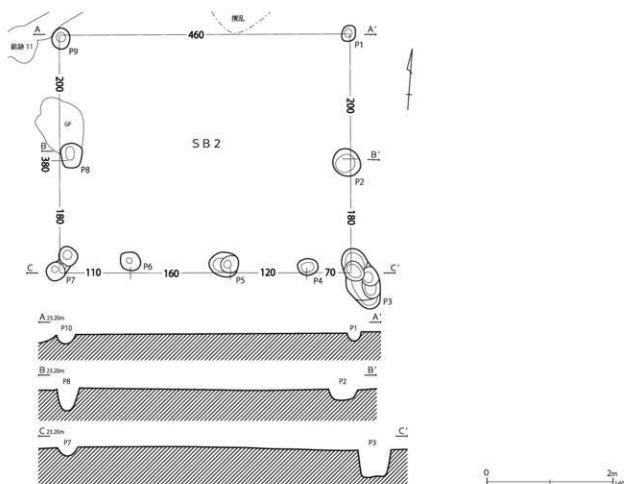
している。

攪乱が激しく全体を把握し得なかったが、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡に復元される。規模は桁行寸法7.20m、梁行寸法4.20mである。桁行の方位はN-32°-Eを指す。

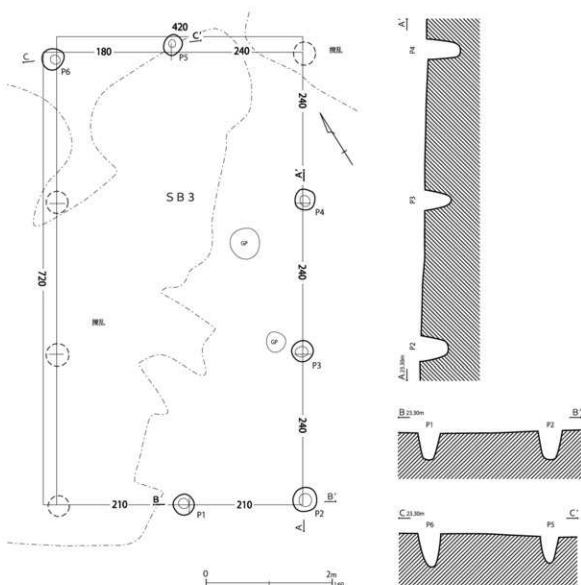
西側桁行は隅柱のP6のみであるため柱間寸法は不明であるが、東側桁行では2.4m等間、北側梁行では1.8m・2.4m、南側梁行では2.1m等間にほぼ揃う。北側梁行の柱筋はやや芯々を外れるものの、柱筋の通りは比較的良好である。

柱穴は円形を基調とし、径27~37cmと大きさも揃い、深度も40~50cmと一定している。

遺物が出土していないため時期を特定することはできないが、柱穴の覆土の状況から近世の遺構と判断した。



第150図 第2号掘立柱建物跡



第151図 第3号掘立柱建物跡

(2) 井戸跡

井戸跡は1基を検出したのみである。

第1号井戸跡（第152図）

第2次調査区東側中央のA X-12グリッドに位置し、旧中山道に隣接する部分である。南側には接するように第9号畝状遺構が広がっているものの、周囲には土壌が比較的まとまって分布しており、畝地と屋敷地との境目に位置しているものと思われる。

確認面における平面形は長軸1.30m、短軸1.25mの不整形方形だが、井戸内部は径1.05×0.87mの

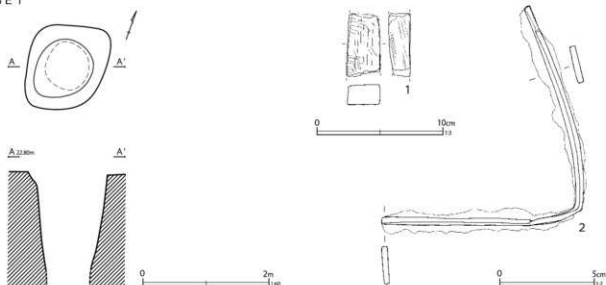
楕円形で、確認面からの深さは1.55m以上である。壁は急角度に掘り込まれ、下半部は円筒形、上半部は外側にやや開く。

覆土中から砥石、棒状鉄製品（第152図1・2）などが出土した。

1は凝灰岩製の砥石で、砥面は4面である。被熱により一部赤色に変色が認められる。2は幅2.0cm、厚さ0.3cmの延板を「く」の字に折り曲げた棒状鉄製品で、用途不明である。

共に時期を特定できるものではないが、遺構は近世に帰属するものと考えられる。

SE 1



第152図 第1号井戸跡・出土遺物

第32表 第1号井戸跡出土遺物観察表(第152図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	石製品	砥石	長さ5.0cm	幅2.7cm	厚さ1.7cm	重さ37.8g	凝灰岩			砥面は4面 被熱で一部赤味を帯びる	53-3
2	鉄製品	板状品	長さ21.6cm	幅2.0cm	厚さ0.3cm	重さ74.0g				ほぼ定存 「く」の字形に彎曲	

(3) 溝跡

近世の溝跡は、調査区全体で17条を検出した。調査区の東側を通る旧中山道に直交するものと、並行するものに二分される。

なお、第13・14号溝跡は断面形状の検討から、第13号畝状遺構に変更した。

第1・2号溝跡 (第141・153図)

第1次調査区のB-5、C-4・5、D-2～4グリッドに位置し、南西から北東に向かって延びる2条の溝跡である。直線的に開削され、北東端部は第16号溝跡に直交する。南西端部は調査区域外に延びているため明確でないものの、南東側に約15m離れて並行する第3～6号溝跡と共に、短冊形に区画された地割溝と考えられる。

第1号溝跡は直線的に開削されているが、第2号溝跡は土橋状に途切れている。規模は検出長33.00～35.00m、幅0.40～0.80mである。

覆土の状況は近似しており、同時に開口していたものと思われる。また、第1号溝跡の覆土上面

は踏み固めによる硬化面が形成されていたことから、畝境の溝を通路としていたようである。

第1号溝跡の覆土中から瀬戸美濃系の陶器灰釉香炉(第155図1)が出土していることから、遺構の時期は近世に帰属すると考えられる。

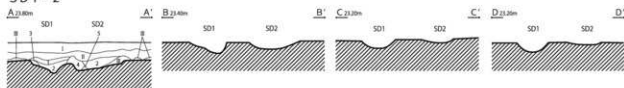
第3～6号溝跡 (第141・153図)

第1次調査区のD-5・6、E-4・5、F-3・4グリッドに位置する。第1・2号溝跡と同一方向に走行する4条の溝跡で、規模は長さ30.70～34.00m、幅0.25～0.90mである。北東端部が攪乱によって壊されているため不明確であるが、本来は第16号溝跡に直交するものと思われる。

第6号溝跡だけが途切れずに延びているほかは、第2号畝状遺構が終わる箇所と一致するように土橋状に途切れる。

覆土は暗褐色土を主体とし、第2層の上面に硬化面が形成されていた。第1・2号溝跡と同じく畝境の溝を通路として使用していたものと思われる。土層断面の観察所見でも、溝跡の埋没後に第

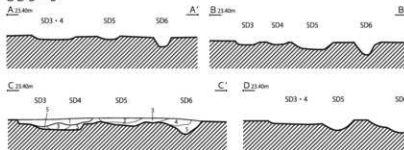
SD1・2



- SD1・2
 1 暗褐色土 耕作土
 2 暗褐色土 耕作土 焼土粒子・炭化物
 3 暗褐色土 粒土・白色粒子多
 4 暗褐色土
 5 暗褐色土

- SD1・2
 1 ローム粒子多 (酸化面)
 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少 やや砂質
 3 暗褐色土 ロームブロック多
 4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少
 5 暗褐色土 ロームブロック少

SD3~6



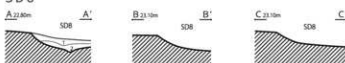
- SD3~6
 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物
 2 暗褐色土 粒土・白色粒子少 (底層)
 3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少
 4 暗褐色土 やや砂質
 5 暗褐色土 焼土粒子少
 6 暗褐色土 ロームブロック多

SD7



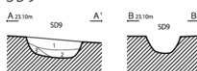
- SD7
 1 暗褐色土 ローム粒子多
 2 褐色土 ロームブロック少

SD8



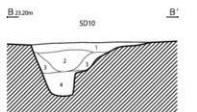
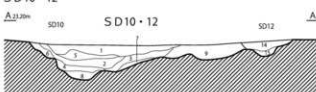
- SD8
 1 暗褐色土 ローム粒子少
 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多

SD9

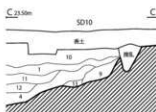


- SD9
 1 暗褐色土 ローム粒子多
 2 暗褐色土 ローム粒子少
 3 褐色土 ロームブロック少

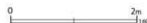
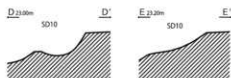
SD10・12

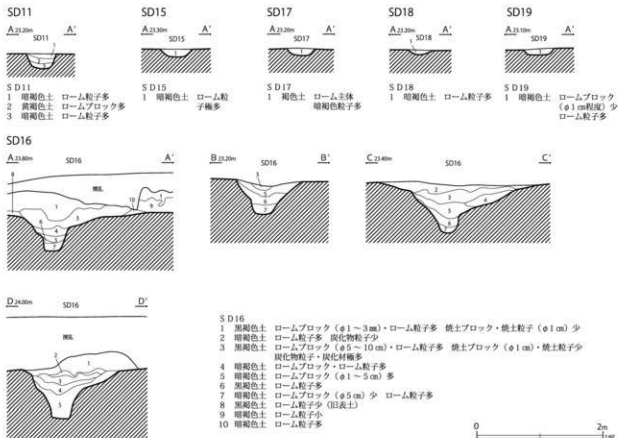


- SD10・12
 1 褐色土 ロームブロック・ローム粒子
 2 暗褐色土 ローム粒子少 炭化物粒子若干
 3 暗褐色土 ローム粒子多
 4 暗褐色土 黒色部ブロック多
 5 暗褐色土 粒土粒子極多 ローム粒子多 焼土粒子少
 6 褐色土 ローム土主体 暗褐色土粒子多
 7 暗褐色土 ロームブロック主体 暗褐色土粒子多



- 8 暗褐色土 ロームブロック (φ 3 mm程度)・ローム粒子多
 9 暗褐色土 ロームブロック (φ 3~5 mm)・ローム粒子極多
 10 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 mm程度)・ローム粒子少
 11 褐色土 ロームブロック (φ 3 mm程度) 少 ローム粒子極多
 12 暗褐色土 ロームブロック (φ 5~10 mm) 極多
 13 暗褐色土 ローム粒子極多
 14 暗褐色土 ロームブロック (φ 1~5 mm)・ローム粒子多
 15 褐色土 ローム土主体 暗褐色土粒子多





第154図 溝跡(2)

2号畝状遺構が掘削されていることが分かった。

第5号溝跡の覆土中から肥前産の磁器瓶類の底部片(第155図2)が出土した。18世紀後半から19世紀前半に位置づけられることから、遺構も近世に帰属すると考えられる。

第7号溝跡 (第142・153図)

第2次調査区東側のA X-14、A Y-14・15、A Z-15グリッドに位置する。旧中山道に軸方向を揃えた幅の狭い溝跡で、南西側に広がる畝状遺構との区画溝であろう。本溝跡の南東端は調査区際を走行する第8号溝跡に直交している。検出長20.40m、幅0.38~0.60mで、掘り込みは浅く、底面は平坦である。覆土は暗褐色土・褐色土を主体とし、自然堆積を示す。覆土の状態から近世に帰属するものである。

第8号溝跡 (第142・153図)

第2次調査区東側のA Z-14・15、A-13・14

グリッドに位置する。調査区の南東際を南西から北東に向かって直線的に延びる比較的大きな溝跡である。調査区の制約から規模・形状を把握できなかったが、第10・16号溝跡と同じ区画溝であろう。

検出長27.50m、幅1.20m、深さ0.13~0.30mである。覆土は暗褐色土・褐色土を基調とし、自然堆積を示す。

遺物はまったく出土していないが、覆土の状態から近世に帰属するものと考えられる。

第9号溝跡 (第142・153図)

第2次調査区東側のA W-10、A X-10・11グリッドに位置する。クランク状に屈曲した第10号溝跡に対して、並行して延びる溝跡である。第10号溝跡の北東端部との間に約1.00mの土橋状の空間が存在する。

北西側は調査区域外に延びているため規模や形

状は不明であるが、検出長8.40m、幅0.47～0.95m、深さ0.22～0.66mである。底面にはピットが連続して穿たれており、全体として南東に緩やかに傾斜していた。覆土は暗褐色土・褐色土を基調とし、概ね自然堆積を示す。

遺物は覆土中から小型の埴塼と、混入と考えられる須恵器環（第155図3～5）が出土した。時期を示す遺物はないが、第10号溝跡と一体となった区画溝であることから、近世に帰属するものである。

第10号溝跡（第141・142・153図）

第2次調査区のAW-10、AX-8～11、AY-7～9、AZ-5～7、A-5・6グリッドに位置する。第2次調査区の北西辺に沿うように直線的に伸び、旧中山道の手前約30m付近でクランク状に南東側に屈曲する。南西端部は調査区域外に伸びているため明確にし得ないが、第16号溝跡に直交する可能性がある。検出長63.30m、最大幅2.30m、深さ0.50～0.80mで、断面形は逆台形である。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主体とする。

遺物は、覆土中から近世の瀬戸美濃系陶器、肥前系磁器を中心に、在地産のかわけや施釉土器、埴塼、金属器（鎌・銅製鋸）、石臼や砥石などの石製品、土人形の福助、銭貨（寛永通寶・鉄銭）など（第155・156図6～38）が出土した。遺物の時期は18世紀前半から19世紀中頃のものである。

遺物や覆土の状態から近世に開削された区画溝と考えられる。

第11号溝跡（第142・154図）

第2次調査区東側のAW・AX-10グリッドに位置し、北西端部において第108号土塼と重複する。クランク状に大きく屈曲した第10号溝跡と第9号溝跡に挟まれた空間を、さらに区画する小規模な溝跡である。検出長5.90m、幅0.40～0.53m、深さ0.21～0.24mである。底面は平坦で、南東から北西に向かって緩やかに傾斜する。

覆土は暗褐色土・黄褐色土を基調とし、3層に

分層され、自然堆積を示す。遺物はまったく出土していないが、第9・10号溝跡と一体になった区画溝の可能性はある。

第12号溝跡（第142・153図）

第2次調査区東側のAX-10・11グリッドに位置し、第10号溝跡と重複する。長さ11.60m、幅0.30～0.60mの狭長な溝跡で、端部がJ字形に屈曲する。深さは0.08～0.25mと浅く、断面形は逆台形である。

遺物は覆土中から小型の埴塼片（第157図39～41）が出土した。覆土の状態から近世に帰属するものと考えられる。

第15号溝跡（第141・142・154図）

第2次調査区中央のAY-8・9、AZ-8グリッドに位置する。第10号溝跡と並行して北東から南西に向かって緩やかに蛇行する溝跡である。攪乱により分断され、検出長10.80m、幅0.30～0.55m、深さ0.05～0.15mである。断面形は逆台形で、覆土は暗褐色土の単一層である。遺物は出土しなかった。

緩やかに蛇行しながらも第10号溝跡との間に5.50～8.00mの距離を隔てて、並行して走行することから、何らかの区画溝として機能したのと考えられる。

第16号溝跡（第141・154図）

第2次調査区西側のB-5・6、C-5～7、D-6～8、E-7・8グリッドに位置する。調査区を縦断するように北西から南東に向かって直線的に伸びる規模の大きな溝跡である。旧中山道に並行しており、調査区域外で第8・10号溝跡と交差し、短冊形の大区画を形成する可能性がある。検出長43.20m、幅1.00～2.00m、深さ0.50～0.70mで、断面形は逆台形である。

覆土上層に堆積した黒褐色土（第3層）から多量の炭化材に混じって、近世の瓦や陶磁器類がまわって出土した。火災に遭った建物跡の後片付けのために、一括廃棄されたものと想定される。

SD1



1

SD5



2

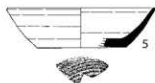
SD9



3



4



5

SD10



6



7



12



13



14



8



9



12



15



10



11



16



17



18



19



20



21



22



23



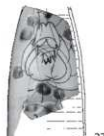
25



24



26



27

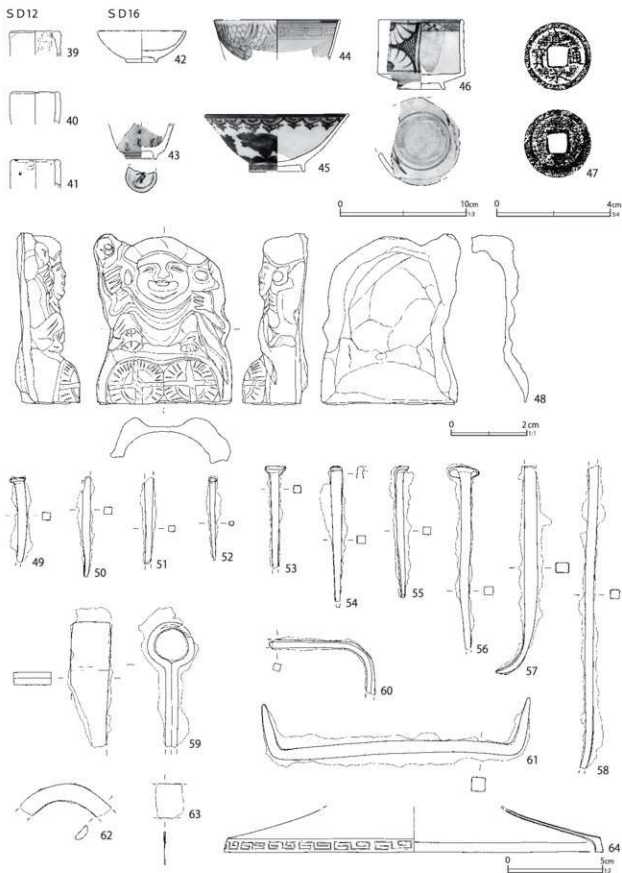


第155图 满迹出土遗物(1)

SD10

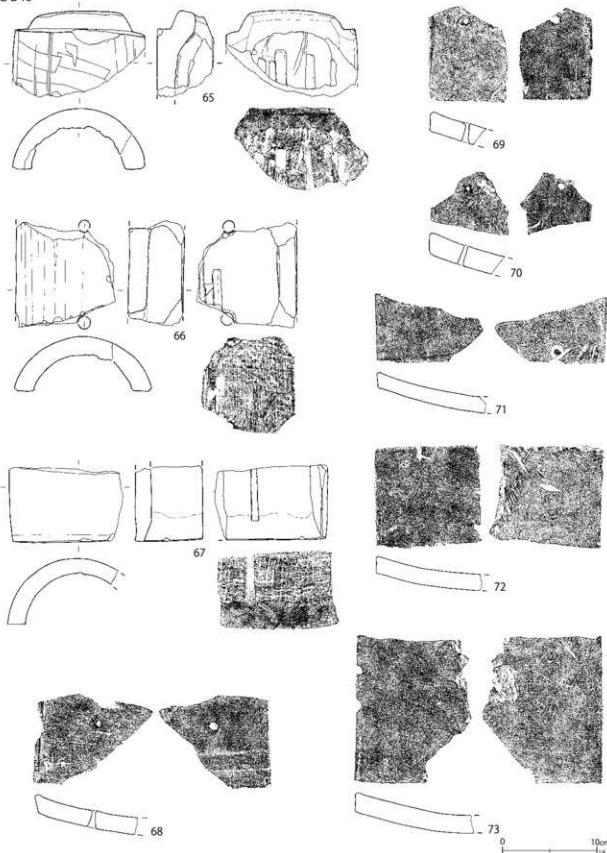


第156図 溝跡出土遺物(2)



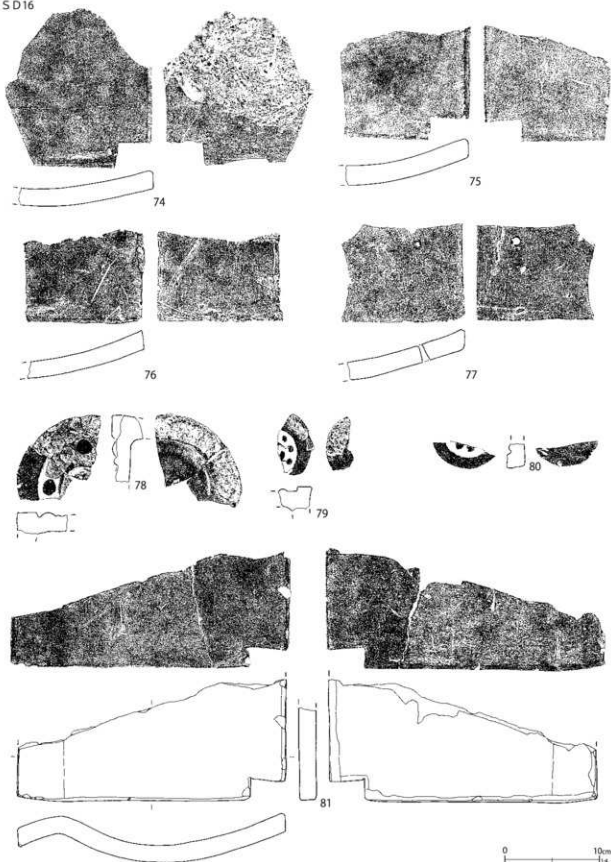
第157图 满跡出土遗物(3)

SD16



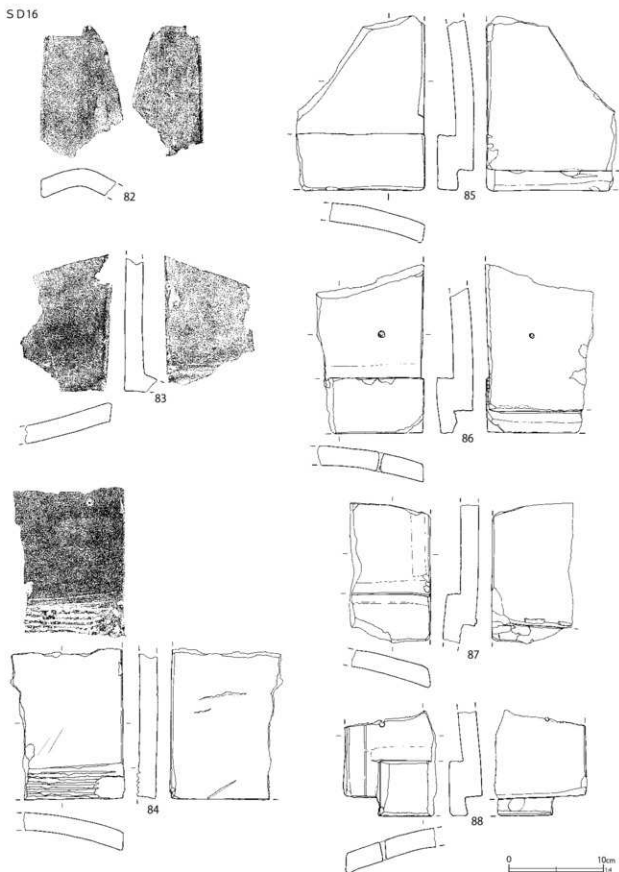
第158図 溝跡出土遺物(4)

SD16



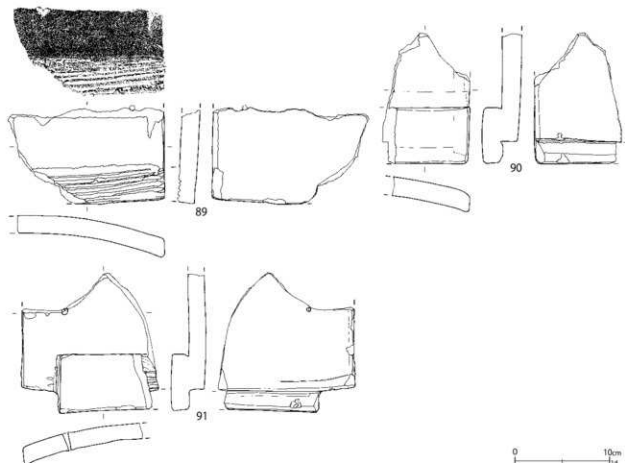
第159图 满迹出土遗物(5)

SD16



第160図 溝跡出土遺物(6)

SD16



第161図 溝跡出土遺物(7)

多量の瓦片を含むことから周辺に瓦葺きの建物跡が存在したことが窺われる。

遺物は肥前産を中心とする磁器坏・碗、土人形(大黒天)、鉄製品(釘・棒状品・輪金具・鋸)、銅製品(環状金具・板状品・容器脚部)、銭貨(寛永通寶)、瓦(軒丸瓦・軒棧瓦・平瓦・棧瓦・雁振瓦)など(第157～161図42～91)が出土した。

出土遺物は18世紀後半から19世紀後半までの幅がみられるが、19世紀前半が主体である。

第17号溝跡 (第141・154図)

第2次調査区西側のA-6グリッドに位置し、第18号溝跡の北東に存在する。北西から南に向かって緩やかにカーブする長さ5.80mの短い溝跡である。幅0.27～0.50m、深さ0.08～0.15mで、掘り込みは浅い。覆土は褐色土の単一層で、ローム土を主体とする。

第18号溝跡 (第141・154図)

第2次調査区西側のA-5・6、B-6グリッドに位置し、南西側に第16号溝跡と並行する。長さ10.70m、幅0.30～0.43mの狭長な溝跡で、深さは0.05mと浅い。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土の単一層である。

遺物は出土していないが、覆土の状態から近世に帰属する、小規模な区画溝と思われる。

第19号溝跡 (第141・154図)

第2次調査区西側のB-6、C-6・7グリッドに位置し、南西側に第16号溝跡と並行する。長さ8.65m、幅0.35～0.55mの狭長な溝跡で、直線的に延びる。深さ0.03～0.10mと浅く、覆土は暗褐色土の単一層である。

第18号溝跡と同じく、第16号溝跡に関連した小規模な区画溝であろう。

第33表 溝跡出土遺物観察表(第155～161図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	香炉	—	[3.5]	(7.2)	I K	15	良好	灰白	SD1 瀬戸美濃系 灰釉 半菊状のしぎ 17C後半～18C前半	53-1
2	磁器	瓶類	—	[2.3]	(4.0)	I K	85	良好	灰白	SD5 肥前 18C後半～19C前半	
3	土製品	埴埴	—	[3.6]	—	G I K	30	普通	青灰	SD9 内外面に発泡した黒色付着物	
4	土製品	埴埴	(3.6)	[2.7]	—	G I K	30	普通	青灰	SD9 内外面に発泡した黒色付着物 内面緑釉	
5	須恵器	坏	(11.5)	3.2	(7.0)	I K	20	良好	灰	SD9 東金子産 底部回転糸切り	51-1
6	施釉土器	灯明皿	(7.3)	[1.6]	(2.6)	I K	25	普通	橙	SD10 AX-10G 油皿 透明釉 19C代	
7	かわらけ	皿	(9.0)	[1.7]	(7.6)	H I K	10	普通	にぶい黄橙	SD10 AY-9G 底部回転糸切り 近世	
8	陶器	灯明皿	7.3	1.4	3.4	I K	100	良好	にぶい黄橙	SD10 №3 瀬戸美濃 油皿 鉄釉	
9	陶器	灯明皿	(9.8)	2.3	(4.0)	H K	20	良好	淡黄	SD10 AX-10G 瀬戸美濃 油皿 鉄釉 19C前半	51-2
10	陶器	灯明受皿	(9.7)	[1.8]	—	K	25	良好	灰	SD10 AX-10G 瀬戸美濃 口径2(6.6)cm 鉄釉 19C前半	
11	陶器	灯明受皿	(10.8)	2.3	4.6	I K	50	良好	黄灰	SD10 №2 瀬戸美濃 口径2(8.0)cm 鉄釉 19C前半	
12	陶器	垂燭	5.0	4.5	4.1	A E K	95	良好	灰黄	SD10 瀬戸美濃 鉄釉 底部回転糸切り 19C前半	
13	施釉土器	垂燭	(6.6)	2.3	3.8	E I K	20	良好	橙	SD10 透明釉 底部回転糸切り 19C代	53-1
14	土製品	埴埴	(4.4)	[2.8]	—	G I K	20	普通	灰	SD10 AX-10G 還元焰焼成	
15	土製品	埴埴	(4.4)	[2.0]	—	G I K	20	普通	灰	SD10 AX-10G 外面黒色付着物・緑釉付着 還元焰焼成	
16	土製品	埴埴	—	[2.0]	—	G I K	30	普通	灰	SD10 内外面黒色付着物 底部内面発泡した鉄滓状の付着物 還元焰焼成	
17	磁器	碗	(6.4)	3.0	2.4	K	50	良好	灰白	SD10 AX-10G 肥前	51-4
18	陶器	碗	(7.0)	[3.5]	—	K	25	良好	灰黄	SD10 AX-10G 瀬戸美濃か 青釉	
19	磁器	碗	(10.0)	[3.6]	—	I K	30	良好	灰白	SD10 AX-10G 肥前 18C代	
20	磁器	碗	(9.6)	5.3	(4.0)	I K	40	良好	灰白	SD10 AX-10G 肥前 18C前半	
21	磁器	碗	—	[2.8]	4.9	K	70	良好	灰白	SD10 AX-10G 瀬戸美濃 赤絵 19C中頃	51-5
22	磁器	碗	(9.8)	6.1	5.0	K	60	良好	灰白	SD10 AX-10G 肥前 19C前半	
23	磁器	碗	(11.0)	6.6	(5.2)	K	30	良好	灰白	SD10 AX-10G 肥前 19C前半	
24	磁器	碗	(12.2)	6.9	(5.8)	K	25	良好	灰白	SD10 AX-10G 肥前 19C代	
25	陶器	土瓶蓋	(9.2)	[1.8]	—	I K	25	良好	にぶい黄橙	SD10 産地不明(民窯系) 口径2(7.0)cm イッチン描き 19C前半～中頃	53-2
26	陶器	鉢	(12.8)	[3.4]	(11.2)	I K	20	良好	灰白	SD10 AY-8G 産地不明 口縁部切り込み 19C代	
27	陶器	霽徳利	—	[10.8]	—	K	40	良好	淡黄	SD10 AX-10G 京都信楽系 胴部最大径6.2cm 19C中頃	
28	陶器	有耳壺	(8.8)	[7.0]	—	I K	20	良好	灰白	SD10 AX-10G 瀬戸美濃 灰釉 三耳壺か	
29	陶器	土瓶	—	[8.9]	—	I	40	良好	淡黄	SD10 AX-10G 瀬戸美濃 鉄釉 18C後半	53-3
30	鉄製品	鎌	長さ[19.8]cm	刃幅2.35cm	背厚0.4cm	重さ94.9g				SD10 №1	
31	銅製品	鉾	長さ[1.0]cm	径0.1cm	重さ0.1g					SD10 AX-10G	
32	石製品	石臼	長さ[18.9]cm	幅[8.9]cm	厚さ[7.3]cm	重さ1788.9g	安山岩			SD10 上臼 横木打穴あり 推定径15.0cm	
33	石製品	砥石	長さ[5.7]cm	幅3.8cm	厚さ2.2cm	重さ80.5g	凝灰岩			SD10 砥面は4面 V字状の溝をもつ工具痕	50-5
38	土製品	福助	高さ1.9cm	幅1.85cm	厚さ1.4cm	重さ2.6g				SD10 AX-10G 彩色	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
39	土製品	埴埴	(3.6)	[2.0]	—	G I K	10	普通	灰	SD12 内面黒色付着物・緑錆付着 還元焰焼成	53-1
40	土製品	埴埴	(3.5)	[2.6]	—	G I K	20	普通	灰	SD12 還元焰焼成	53-1
41	土製品	埴埴	(3.5)	[2.3]	—	G I K	20	普通	灰	SD12 内外面緑錆付着 一部鉄錆付着 還元焰焼成	53-1
42	磁器	坏	(6.8)	2.5	2.3	K	40	良好	灰白	SD16 E-8G 肥前	
43	磁器	坏	—	[2.9]	2.2	K	50	良好	灰白	SD16 E-8G 産地不明	51-6
44	磁器	碗	(9.8)	[3.2]	—	K	30	良好	灰白	SD16 D-7G 肥前 19C前半	
45	磁器	碗	11.3	4.6	4.2	K	70	良好	白	SD16 E-8G 肥前 広東碗 19C後半	51-7
46	磁器	碗	(6.4)	5.6	[3.4]	K	40	良好	灰白	SD16 D-7・E-8G 肥前 筒茶碗 18C後半	
48	土製品	大黒天	高さ4.5cm	幅3.7cm	厚さ1.5cm	重さ12.9g				SD16 E-8G 型作り 外面煤付着	50-6
49	鉄製品	釘	長さ[4.4]cm	幅0.4cm	厚さ0.4cm	重さ5.0g				SD16 E-8G	
50	鉄製品	釘	長さ[5.3]cm	幅0.4cm	厚さ0.4cm	重さ2.9g				SD16 E-8G	
51	鉄製品	釘	長さ[4.6]cm	幅0.3cm	厚さ0.3cm	重さ2.2g				SD16 C-6G	
52	鉄製品	釘	長さ[4.2]cm	幅0.2cm	厚さ0.2cm	重さ1.6g				SD16 C-6G	
53	鉄製品	釘	長さ[5.4]cm	幅0.4cm	厚さ0.4cm	重さ5.1g				SD16 B-5G	
54	鉄製品	釘	長さ[7.2]cm	幅0.45cm	厚さ0.4cm	重さ8.2g				SD16 B-5G	
55	鉄製品	釘	長さ6.9cm	幅0.4cm	厚さ0.4cm	重さ6.4g				SD16 B-5G	
56	鉄製品	釘	長さ[9.7]cm	幅0.5cm	厚さ0.4cm	重さ12.7g				SD16 B-5G	
57	鉄製品	釘	長さ[11.0]cm	幅0.7cm	厚さ0.5cm	重さ26.4g				SD16 B-5G	
58	鉄製品	棒状品	長さ[15.9]cm	幅0.45cm	厚さ0.45cm	重さ21.2g				SD16 E-8G	
59	鉄製品	輪金具	長さ[6.6]cm	幅1.95cm	厚さ0.3cm	重さ39.8g				SD16 D-7G	
60	鉄製品	棒状品	長さ[6.2]cm	幅0.35cm	厚さ0.35cm	重さ5.4g				SD16 C-6G L字形に屈曲	
61	鉄製品	紐	長さ14.1cm	幅0.7cm	厚さ0.7cm	重さ56.5g				SD16 D-7G	
62	銅製品	環状金具	長さ[4.8]cm	幅0.9cm	厚さ0.3cm	重さ8.0g				SD16 D-7G 断面薄鋸形	53-2
63	銅製品	板状品	長さ[1.5]cm	幅1.8cm	厚さ0.09cm	重さ1.0g				SD16 E-8G 一部折り返し	53-2
64	銅製品	脚部か	径[20.2]cm	厚さ0.1cm	重さ79.7g					SD16 E-8G 端部側面雷文を刻む	53-2
65	瓦	丸瓦	長さ[9.1]cm やや砂質 光沢あり	幅14.0cm 表面色調:灰	厚さ1.6～2.1cm 内部色調:灰白	玉縁長2.0cm 高さ6.5cm				SD16 C-6G	
66	瓦	丸瓦	長さ[11.1]cm やや砂質 光沢あり	幅[10.4]cm 表面色調:灰	厚さ1.8～2.0cm 内部色調:灰白	孔径(1.2)cm 高さ5.8cm				SD16 D-7G	
67	瓦	丸瓦	長さ[7.9]cm 光沢無し	幅[11.9]cm 表面色調:灰	厚さ1.6～1.9cm 内部色調:灰白	高さ7.0cm やや砂質				SD16 D-7G	
68	瓦	平瓦	長さ[9.6]cm 光沢無し	幅[12.2]cm 表面色調:灰	厚さ1.8cm 内部色調:灰白	孔径0.4～0.9cm やや砂質				SD16 D-7G 孔に緑錆付着	
69	瓦	平瓦	長さ[10.2]cm やや光沢あり	幅[8.2]cm 表面色調:灰黄	厚さ1.9cm 内部色調:灰白	孔径0.4～0.8cm やや砂質				SD16 D-7G	
70	瓦	平瓦	長さ[6.3]cm やや光沢あり	幅[8.0]cm 表面色調:灰	厚さ2.2cm 内部色調:灰白	孔径0.3～0.7cm やや砂質				SD16 D-7G	
71	瓦	平瓦	長さ[7.2]cm 表面色調:灰黄	幅[11.6]cm 内部色調:灰白	厚さ1.5～1.6cm やや砂質	光沢無し				SD16 D-7G	
72	瓦	平瓦	長さ[11.3]cm 表面色調:灰	幅[10.4]cm 内部色調:灰白	厚さ1.7cm やや砂質	光沢無し				SD16 D-7G	
73	瓦	平瓦	長さ15.5cm 表面色調:灰	幅[12.7]cm 内部色調:灰白	厚さ1.8～2.0cm やや砂質	やや光沢あり				SD16 C-6G	
74	瓦	平瓦	長さ[16.8]cm あり	幅[15.5]cm 表面色調:灰	厚さ1.9～2.0cm 内部色調:灰白	やや砂質				SD16 C-6G 切り欠き 3.4×2.5cm	
75	瓦	平瓦	長さ[11.4]cm 表面色調:灰	幅[13.0]cm 内部色調:灰白	厚さ2.0cm やや砂質	やや光沢あり				SD16 D-7G 切り欠き 3.9×2.3cm	
76	瓦	平瓦	長さ[10.1]cm あり	幅[12.4]cm 表面色調:灰	厚さ1.8～2.0cm 内部色調:灰白	やや砂質				SD16 D-7G 凸面布目圧痕	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
77	瓦	平瓦	長さ10.4cm	幅12.4cm	厚さ1.9～2.0cm	孔径0.4～0.9cm	や	SD16	D-7G		
78	瓦	軒丸瓦	瓦当径12.2cm	厚さ1.6～2.2cm	珠文径1.7cm	周縁幅2.3cm	や	SD16	D-7G		52-8
79	瓦	軒棧瓦	瓦当径5.8cm	厚さ1.8cm	珠文径0.7～0.9cm	周縁幅1.5cm	や	SD16	D-7G		52-8
80	瓦	軒棧瓦	瓦当径7.0cm	厚さ1.5cm	珠文径0.8cm	周縁幅1.6cm	やや砂質	SD16	E-8G		52-8
81	瓦	棧瓦	長さ12.4cm	幅28.7cm	厚さ1.9cm	やや砂質	やや光沢あり	SD16	C-6G	切り欠き 4.0×2.0cm 弧深3.2cm	52-9
82	瓦	棧瓦	長さ14.8cm	幅8.2cm	厚さ1.8cm	やや砂質	やや光沢あり	SD16	D-7G	切り欠き	
83	瓦	軒平瓦	長さ14.5cm	幅9.3cm	厚さ1.9～2.0cm	やや砂質	やや光沢あり	SD16	D-7G		
84	瓦	雁振瓦	長さ15.9cm	幅11.8cm	厚さ1.9～2.0cm	胎土精良	やや光沢あり	SD16	D-7G		
85	瓦	雁振瓦	長さ18.5cm	幅13.6cm	厚さ2.1cm	胎土精良	やや光沢あり	SD16	C-6G		
86	瓦	雁振瓦	長さ17.8cm	幅11.2cm	厚さ2.0cm	孔径0.3～0.6cm	やや砂質	SD16	E-8G		
87	瓦	雁振瓦	長さ14.9cm	幅8.5cm	厚さ1.9～2.0cm	胎土精良	やや光沢あり	SD16	D-7G		
88	瓦	雁振瓦	長さ11.2cm	幅9.3cm	厚さ1.8～1.9cm	孔径0.7cm	胎土精良	SD16	D-7G		
89	瓦	雁振瓦	長さ10.0cm	幅16.0cm	厚さ1.9cm	孔径(0.5)cm	胎土精良	SD16	D-7G		
90	瓦	雁振瓦	長さ13.8cm	幅8.2cm	厚さ2.0cm	胎土精良	光沢あり	SD16	D-7G		
91	瓦	雁振瓦	長さ14.6cm	幅13.2cm	厚さ1.8cm	孔径0.6cm	胎土精良	SD16	D-7G		

第34表 溝跡出土銭貨観察表(第156・157図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
34	銭貨	寛永通寶	23.60	23.58	0.96～1.00	1.9	SD10 古 江戸 1636～1659年	
35	銭貨	寛永通寶	24.57	24.55	0.95～1.21	1.9	SD10 新 江戸 1697～1747年、1767～1781年	
36	銭貨	寛永通寶	22.80	22.70	1.08～1.20	2.2	SD10 新 青「小」元文 江戸 小梅初鋳銭	
37	銭貨	鉄銭	[24.00]	[24.00]	2.00	1.1	SD10	
47	銭貨	寛永通寶	24.10	24.10	1.00～1.08	2.2	SD16 新 江戸 1697～1747年、1767～1781年	

(4) 畝状遺構

畝状遺構は、調査区全体で14面を検出した。第1次調査区では、溝跡で区画された内部に溝跡に直交する2面の畝状遺構を検出した。第2次調査区では、調査区の中央から東側にかけて12面の畝状遺構が検出され、調査区の大部分が畝地として利用されていたものと判断した。

第1号畝状遺構(第162図)

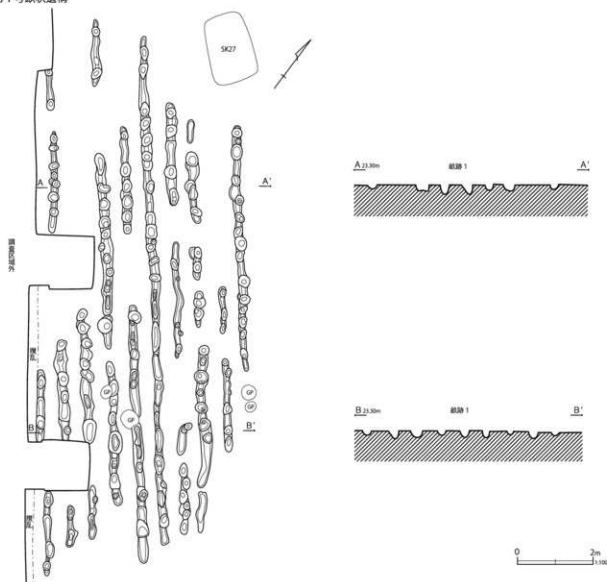
第1次調査区西端のC-2、D-2・3グリッドに位置する。北西から南東方向に浅い溝が並行して延びるもので、その形状から畝状遺構と判断

した。南西側は調査区域外にかかるため、全体の広がりとは判然としえないものの、長さ14.80m、幅5.70mの範囲に10条の畝(畝間溝)がほぼ等間隔に並び、第1・2号溝跡に直交するように、その手前で途切れていた。

畝の幅は20～30cm、間隔は30～40cmである。畝は浅く掘り込まれ、底面は耕作痕と考えられる不規則な凹みが連続する。畝の走行方向はN-37°-Wを指す。

遺物は鉄釉灯明皿、火打金(第166図1・2)が出土した。

第1号畝状遺構



第162図 第1号畝状遺構

第2号畝状遺構 (第163図)

第1次調査区中央西端のD-3・4、E-3～5、F-4グリッドに位置する。溝跡によって区画された幅一杯に、北西から南東方向に向かって浅い畝が並行して延びる。長さ16.95m、幅15.40mの範囲に27条の畝がほぼ等間隔に並んでいる。畝の走行方向はN-40°-Wを指す。

遺物は肥前系磁器碗、鉄銭 (第166図3・4) が出土した。3は染付で草花文を施す。18世紀代の所産である。4は錆化が著しく、詳細は不明である。

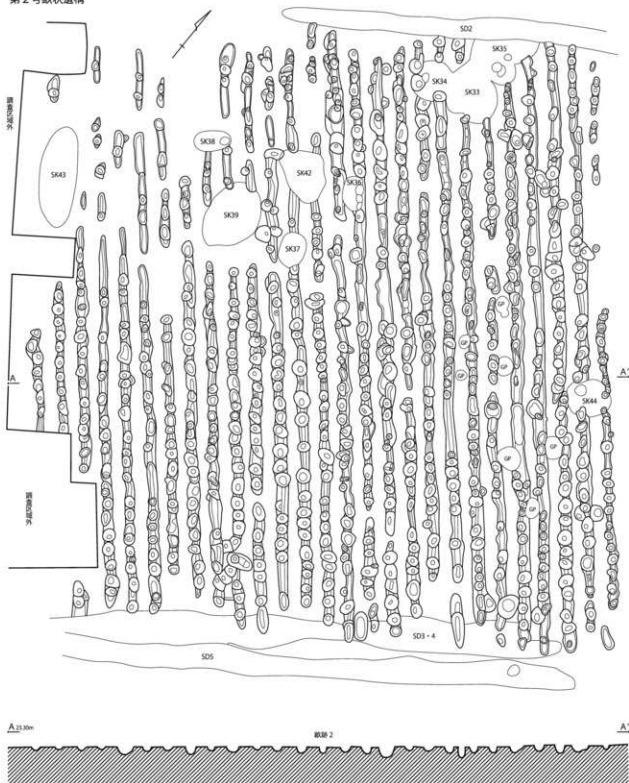
第3号畝状遺構 (第164・165図)

第2次調査区東側のA Y-12～14、A Z-11～14、A-12・13グリッドに位置する。長さ15.50m、幅23.20mの広範囲に北西から南東方向に浅い畝が、途切れながらも35条検出された。走行方向はN-35°-Wを指す。

第4号畝状遺構 (第165図)

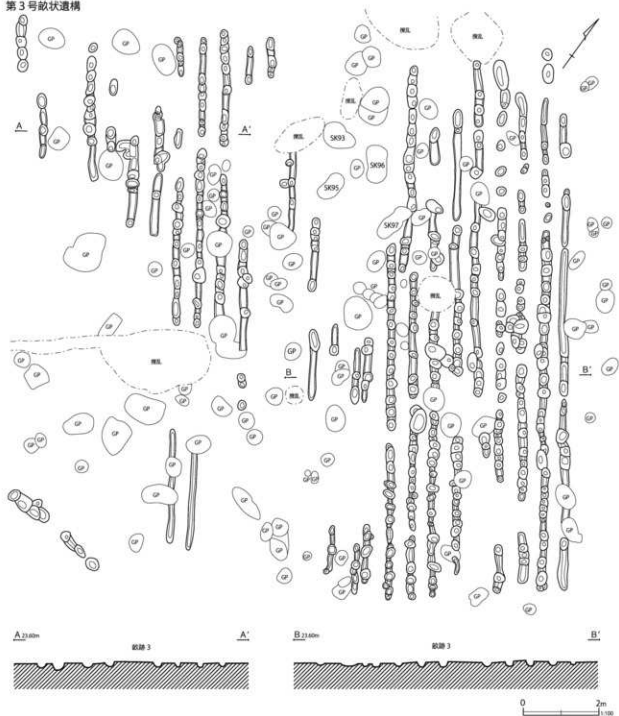
第2次調査区東端のA X-12・13グリッドに位置する。長さ6.20m、幅2.80mの範囲に、北西から南東に向かって小規模な畝が5条検出された。畝の走行方向はN-41°-Wを指す。

第2号欽狀遺構



第163图 第2号畝状遺構

第3号畝状遺構



第164図 第3号畝状遺構(1)

第5号畝状遺構 (第167図)

第2次調査区中央から東側のA Y・A Z-9～11、A-10グリッドに位置する。

長さ22.80m、幅14.20mの範囲に、北西から南東方向に向かって16条の畝が並行して延びる。南東側の第3号畝状遺構との間には畦道状の空閑地

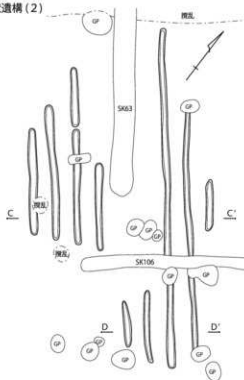
が存在する。畝の走行方向はN-36°-Wを指す。

第6号畝状遺構 (第168図)

第2次調査区中央のB-9・10、C-9グリッドに位置する。

南東側が調査区域外にかかるため全体の広がり是不明であるが、長さ10.20m、幅10.20mの範囲

第3号畝状遺構(2)



C 21.60m

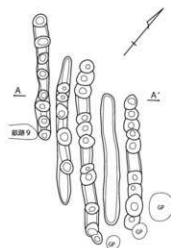


C'

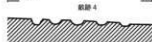
D 21.60m



第4号畝状遺構



A 21.30m



A'

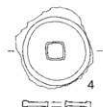
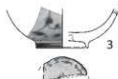


第165図 第3号畝状遺構(2)・第4号畝状遺構

第1号畝状遺構



第2号畝状遺構



第166図 畝状遺構出土遺物

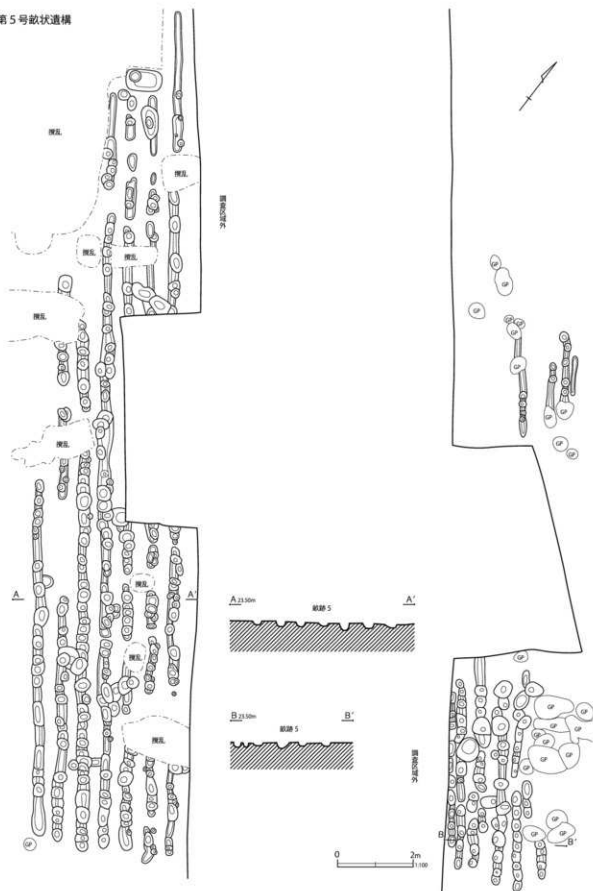
に北西から南東に向かって8条の畝が三つに大きく分かれていた。

畝の幅は20～50cm、深さ10～20cm、間隔は20～40cmである。畝の走行方向はN-35°-Wを指す。畝の底面には不規則な凹みがみられる。

第7号畝状遺構(第168図)

第2次調査区中央のA-8・9、B-9グリッドに位置し、隣接する第6号畝状遺構の延長であろう。長さ8.80m、幅1.40mに3条の畝が検出された。畝の走行方向はN-36°-Wを指す。

第5号畝状遺構



第167図 第5号畝状遺構

第35表 畝状遺構出土遺物観察表(第166図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	灯明皿	(8.2)	[1.3]	—	I K	30	良好	黄灰	畝1 D-2G畝 鉄軸	51-8
2	鉄製品	火打金	長さ7.7cm	幅1.2cm	厚さ0.25cm	重さ18.0g				畝1 C-2G畝 両端部を短く折り曲げ断面長方形 身部両端に目釘穴を穿つ	
3	磁器	碗	—	[3.2]	(4.0)	I K	20	良好	灰白	畝2 E-4G畝 肥前系 18C代	

第36表 畝状遺構出土銭貨観察表(第166図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
4	銭貨	鉄銭	24.00	24.00	2.00	4.2	畝2 D3G畝	

第8号畝状遺構 (第169図)

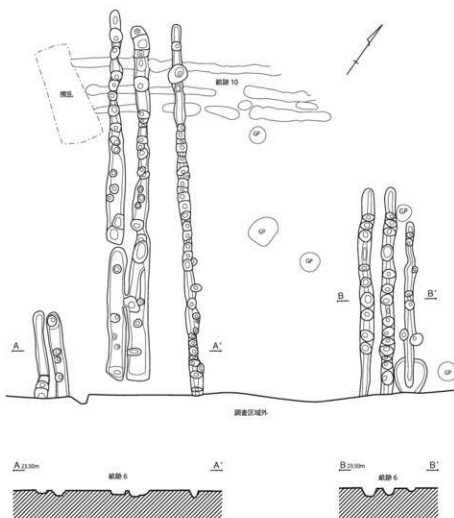
第2次調査区東側の南東端のA-12・13、A Z-13・14グリッドに位置し、北西に第3号畝状遺構が隣接する。長さ16.70m、幅1.70mの範囲に3条の浅い畝が断続的に延びる。底面はやや平坦

で、凹みは少ない。畝の走行方向はN-57°-Eを指す。

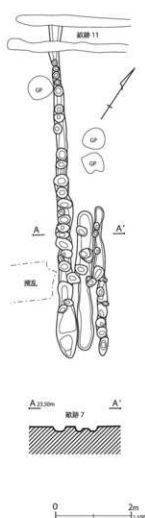
第9号畝状遺構 (第169図)

第2次調査区東側中央のA X-12・13グリッドに位置し、北東に第4号畝状遺構が隣接する。長

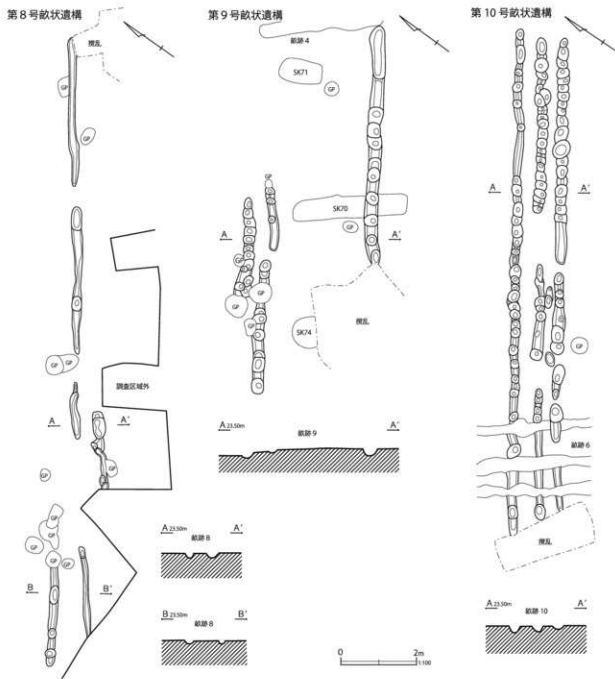
第6号畝状遺構



第7号畝状遺構



第168図 第6・7号畝状遺構



第169図 第8～10号畝状遺構

さ9.80m、幅3.80mの範囲に3条の浅い畝が断続的に延びていた。畝は浅く掘り込まれ、底面は凹凸が激しく、不規則な凹みが連続する。畝の走行方向はN-56°-Eを指す。

第10号畝状遺構（第169図）

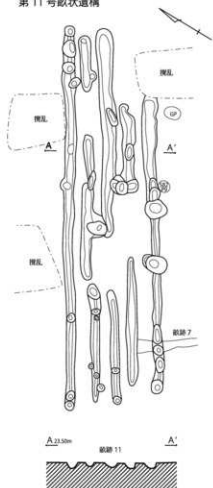
第2次調査区中央のA-9・10、B-9グリッドに位置し、南西側は直交する第6号畝状遺構によって壊されていた。長さ13.30m、幅1.50mの範

囲に3条の浅い畝が並行して延びる。畝の走行方向はN-55°-Eを指す。

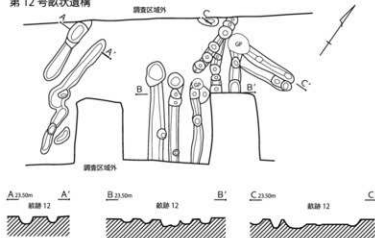
第11号畝状遺構（第170図）

第2次調査区中央のA-Z-9、A-8・9グリッドに位置する。南西側は第7号畝状遺構の一部を壊している。長さ10.30m、幅2.80mの範囲に5条の浅い畝が並行する。畝の走行方向はN-59°-Eを指す。

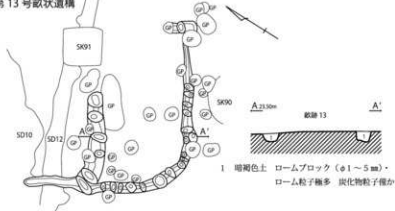
第11号畝状遺構



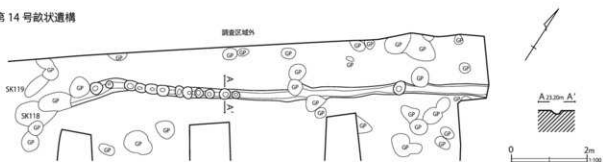
第12号畝状遺構



第13号畝状遺構



第14号畝状遺構



第170図 第11～14号畝状遺構

第12号畝状遺構 (第170図)

第2次調査区西側のC・D-9・10グリッドに位置する。北西から南東に向かって延びる畝に対し、短い畝が斜交する。長さ6.00m、幅5.60mの範囲に12条が検出された。中心的な畝の走行方向はN-34°-Wを指す。

第13号畝状遺構 (第170図)

第2次調査区東側のAX・AY-11グリッドに

位置する。底面に不規則な凹みをもつ2条のL字形の畝が連続している。畝の走行方向はN-57°-Eを指す。

第14号畝状遺構 (第170図)

第2次調査区西側のB-11、C-10グリッドに位置し、底面に不規則な凹みをもつことから畝と判断した。長さ10.90m、幅0.20~0.80mの細長い畝で、畝の走行方向はN-57°-Eを指す。

(5) 土壌

近世の土壌は、調査区全体から108基を検出した（第171～180図、第37表）。調査区の全域に分布し、特に第1次調査区の南半分と、旧中山道に面した第2次調査区東側の第10号溝跡周辺にまわっている。

土壌の形状や規模はさまざまであるが、平面形からは①円形、②不整形円形、③楕円形、④隅丸方形、⑤方形、⑥長方形、⑦溝状、⑧不整形に大きく分けられる。不整形・楕円形・長方形の三種類が多く、全体の85%以上を占める。

①の円形は8基である。規模は径0.68～1.90m、深さ0.07～0.32mと幅があり、径1.00m以下の断面皿形のものが多い。径1.00mを超える大型土壌は第30・90号土壌の2基だけで、前者は長径1.90m、後者は長径1.36mで、断面は逆台形である。

②の不整形円形は第5・113号土壌の2基で、規模は径1.20～1.35m、深さ0.10～0.30mである。

③の楕円形は34基あり、不整形に次いで数が多い。長軸を基準に細分すると1.00m未満、1.00～1.40m、1.50～2.00m、2.30～2.66m、4.45mの大きく五種類となる。大半が長軸1.00～1.40mの小型のもので、大型土壌の第85・117号土壌は長軸2.60m前後である。最も大きい第121号土壌は溝状に近い形態である。

④の隅丸方形は第6・24・81号土壌の3基である。規模は長軸0.95～1.73m、短軸0.80～1.72m、深さ0.10～0.55mである。このうち第81号土壌からは、近世陶磁器などがまわって出土している。ロームブロックを多量に含む暗褐色土を主体としており、人為的な埋戻しである。いわゆる廃棄土壌であろう。

⑤の方形のものは第91号土壌の1基のみである。規模は一辺1.02m、深さ0.20mである。

⑥の長方形は21基である。長軸を基準にすると1.00m以下2基、1.00m台8基、2.00m台5基、3.00m台2基、5.00m台3基、7.00m台1基に分けられる。長軸5.00mを超す大型の第63・66～68号土壌は、第2次調査区東側に位置し、畝状遺構と分布域が重なる。並列もしくは縦列した状態で分布し、壁を垂直に掘り込んだ断面箱形ないし逆台形のものが多く、全体の形状から推して、農作物の貯蔵施設である「ムロ」の可能性が高い。

⑦の溝状としたのは第61・106号土壌の2基である。

⑧の不整形は37基である。形態・規模は多様なうえ、遺物を伴うものがほとんどないため、用途や性格を特定し得るものは少ない。ただし、蛇行する溝状の掘り込みの第94号土壌の覆土層からは、漆碗が出土した（図版49-7）。赤漆の塗膜のみのため実測・図示はできなかった。また、第103号土壌からは陶器灯明皿と寛永通寶が出土しており、近世の土壌墓の可能性が高い。

以下、遺物を出土した土壌について略述する。

第48号土壌出土遺物（第181図1）

1は肥前系の碗で、山水文を鉄絵で描いた京焼風陶器である。

第67号土壌出土遺物（第181図2）

2は近世のかわらけ皿である。

第68号土壌出土遺物（第181図3）

3は板状鉄製品で、三つ葉状の透彫がみられる。

第70号土壌出土遺物（第181図4）

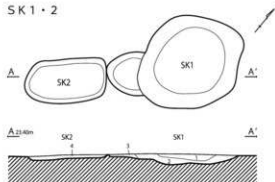
4は小型埴壇である。内面に黒色付着物、外面に自然釉が掛る。

第37表 土壌一覧表（第145・146・149・171～180図）

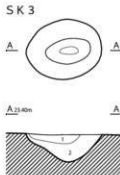
番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考	番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考
1	B-4	不整形	2.00	1.45	0.15		6	C-4	隅丸方形	0.95	0.80	0.10	
2	B-4	楕円形	1.30	0.70	0.05		7	F-4	不整形	1.22	0.74	0.13	
3	C-4	楕円形	1.20	0.95	0.40		8	G-4	円形	0.97	0.87	0.32	
4	C-4	楕円形	1.10	0.85	0.30		9	F-5	楕円形	1.67	1.03	0.30	
5	C-4	不整形円形	1.35	1.30	0.10		10	F-6	不整形	1.17	0.86	0.15	

番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考	番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	備考
11	F-6	楕円形	0.87	0.50	0.15		67	AY-13	長方形	(5.35)	1.10	0.20	SK94より古
12	F-5	楕円形	1.10	0.98	0.40		68	AY-12	長方形	(5.35)	0.55	0.22	SK94より古
13	F-6	円形	0.83	0.75	0.10		69	AX-12	長方形	2.15	0.58	0.10	
14	F-6	不整形	2.75	1.25	0.15		70	AX-12	長方形	3.02	0.57	0.10	
15	E-7	楕円形	1.60	1.10	0.12		71	AX-12	長方形	1.15	0.63	0.05	
16	E-7	楕円形	2.37	1.26	0.08		72	AW-13	長方形	0.60	(0.40)	0.20	
17	E-6	楕円形	1.25	0.65	0.10	SK18より新	73	AW-13	長方形	2.00	0.84	0.23	
18	E-6	円形	0.68	(0.60)	0.07	SK17より古	74	AX-12	楕円形	0.83	(0.65)	0.45	
19	F-6	楕円形	1.78	0.84	0.15		75	AX-11	長方形	2.47	0.75	0.33	SK109より新
20	E-7	楕円形	(1.96)	1.73	0.08		76	AW-11	長方形	1.75	0.45	0.20	SK77より新
21	E-6	楕円形	1.25	0.87	0.10		77	AW-11	長方形	1.45	0.60	0.17	SK76より古
22	C-3	楕円形	2.30	1.15	0.30		78	AW-11	長方形	1.57	0.60	0.12	
23	C-3	円形	0.78	0.73	0.20		79	AX-11	不整形	0.87	0.57	0.10	
24	C-2	隅丸方形	1.35	1.27	0.10		80	AX-11	楕円形	1.40	0.56	0.45	
25	欠番					第2号土器埋設遺構	81	AX-12	隅丸方形	1.73	1.72	0.55	
26	C-3	楕円形	0.95	0.73	0.12		82	AX-12	不整形	1.80	1.67	1.00	
27	C-2	長方形	1.82	1.20	0.50	平安	83	AX-13	不整形	1.20	(1.15)	0.30	SK84より古
28	D-3	円形	0.85	0.80	0.10		84	AW-13	不整形	3.30	(2.95)	0.54	SK83より新
29	E-5	不整形	1.02	0.90	0.25		85	AW-12	楕円形	2.60	2.16	0.52	
30	E-5	円形	1.90	1.80	0.25		86	AY-11	不整形	1.37	1.32	0.35	
31	F-5	楕円形	1.33	0.87	0.42	縄文 SK41より古	87	AX-11	不整形	(1.05)	1.00	0.25	
32	E-5	不整形	1.67	0.86	0.20		88	AY-11	長方形	2.72	0.53	0.10	SK90より古
33	D-3	不整形	1.55	(1.30)	0.10	SK34・35より新	89	AY-11	楕円形	0.63	(0.63)	0.10	SK90より新
34	D-3	不整形	1.05	(1.00)	0.20	SK33より古	90	AY-11	円形	1.36	1.30	0.30	SK88より新 SK89より古
35	D-3	不整形	1.45	(1.30)	0.20	SK33より古	91	AX-11	方形	1.02	1.02	0.20	
36	D-3	楕円形	0.90	0.50	0.36		92	AW-11	長方形	1.25	0.62	0.20	
37	D-3	不整形	0.93	0.66	0.35		93	AZ-12	不整形	0.90	0.65	0.15	
38	D-3	不整形	1.00	0.55	0.17		94	AY-12	不整形	3.20	0.30	0.35	SK67・68より新
39	E-3	不整形	1.90	0.35	0.20		95	AZ-12	不整形	0.80	0.45	0.15	
40	D-4	不整形	2.50	2.00	0.75	縄文 FP1より新	96	AZ-12	楕円形	1.00	0.55	0.25	
41	F-4	楕円形	1.43	1.10	2.15	縄文 SK31より新	97	AZ-12	不整形	1.05	0.45	0.15	
42	D-3	不整形	1.36	1.15	0.35		98	A-12	不整形	2.20	0.70	0.35	
43	E-3	楕円形	2.66	0.97	1.05	縄文	99	AZ-12	楕円形	1.35	1.15	0.15	
44	D-4	楕円形	1.15	0.96	0.10		100	AY-12	不整形	0.95	0.40	0.30	
45	F-4	楕円形	1.63	0.95	0.30	縄文	101	AY-12	楕円形	0.90	0.42	0.25	
46	D-3	楕円形	1.60	1.25	0.70	縄文 SD1より古	102	AX-11	不整形	(1.70)	1.52	0.45	SK103 SD12より古
47	E-6	楕円形	1.17	0.80	0.12		103	AX-11	不整形	(1.10)	1.10	0.40	SK102・104より新
48	A-4	不整形	(3.53)	2.40	0.30		104	AX-11	不整形	(1.20)	1.07	0.10	SK103より古
49	E-5	不整形	2.15	1.30	0.22	縄文	105	AZ-13	不整形	1.10	0.90	0.15	
50	E-5	楕円形	1.45	0.76	0.19	縄文	106	AZ-14	溝状	5.55	0.30	0.05	
51	E-6	楕円形	1.86	1.72	0.54	縄文	107	AY-13	長方形	(3.40)	0.45	0.10	
52	E-5	楕円形	1.20	0.95	0.30		108	AW-10	不整形	(1.25)	0.85	0.13	SD11より古
53	E-7	楕円形	(1.00)	0.88	0.25	縄文	109	AW-11	円形	0.88	(0.68)	0.07	SK75より古
54	E-4	不整形	1.45	1.15	0.50	縄文	110	A-11	不整形	1.00	0.85	0.35	
55	AX-13	楕円形	(1.35)	1.15	0.15	SK56より古	111	A-10	不整形	0.97	0.80	0.15	
56	AX-13	楕円形	1.53	1.36	0.30	SK55より新	112	A-10	不整形	1.00	0.65	0.25	
57	AX-13	楕円形	0.77	0.70	0.50		113	A-10	不整形	1.35	1.20	0.30	
58	AY-14	長方形	2.48	0.80	0.05		114	AZ-7	長方形	(1.90)	0.60	0.12	
59	AY-14	長方形	0.80	0.47	0.20	SK60より新	115	B-9	長方形	1.68	0.75	0.10	
60	AZ-15	長方形	1.08	0.47	0.25	SK59より古	116	C-7	不整形	0.90	0.70	0.35	
61	AY-14	溝状	9.50	0.55	0.06		117	B-6	楕円形	2.66	2.32	0.13	
62	AY-14	不整形	0.73	0.70	0.32		118	C-10	不整形	1.10	0.65	0.30	
63	AY-13	長方形	7.17	0.73	0.30	SK121より古	119	C-10	楕円形	(0.70)	0.32	0.20	
64	AY-13	楕円形	1.08	0.60	0.50		120	D-7	楕円形	0.92	0.57	0.10	
65	AX-13	楕円形	1.28	1.05	0.10		121	AY-13	楕円形	4.45	0.28	0.06	SK63より新
66	AY-13	長方形	5.07	0.60	0.20								

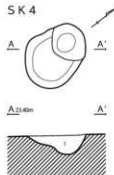
SK1・2



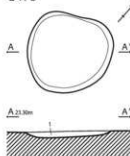
SK3



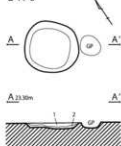
SK4



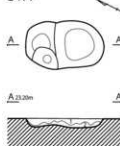
SK5



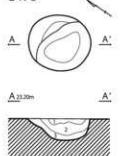
SK6



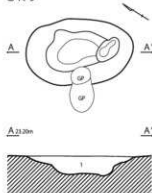
SK7



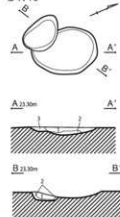
SK8



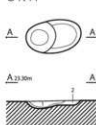
SK9



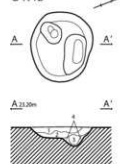
SK10



SK11



SK12



- SK1・2
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3mm) 少 炭化物粒子極少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~7mm) 多
3 暗褐色土 ロームブロック (φ1~7mm) 若干
4 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) ローム粒子若干

- SK3
1 暗黄褐色土 ロームブロック (φ1~10mm)・ローム粒子若干
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3mm) 若干 ローム粒子少

- SK4
1 暗黄褐色土 ロームブロック (φ1~10mm)・ローム粒子若干

- SK5
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干・ローム粒子少

- SK6
1 黒褐色土 ロームブロック (φ1~5mm) 若干 炭化物粒子 (φ1~15mm) やや多
2 暗黄褐色土 ローム粒子極多 炭化物粒子 (φ1mm程度) 少

- SK7
1 暗褐色土 炭化物粒子・白色粒子少 砂質
2 暗黄褐色土 ロームブロック多

- SK8
1 暗褐色土 炭化物粒子少
2 暗黄褐色土 暗褐色土主体 ローム粒子多
3 黄褐色土 ロームブロック多

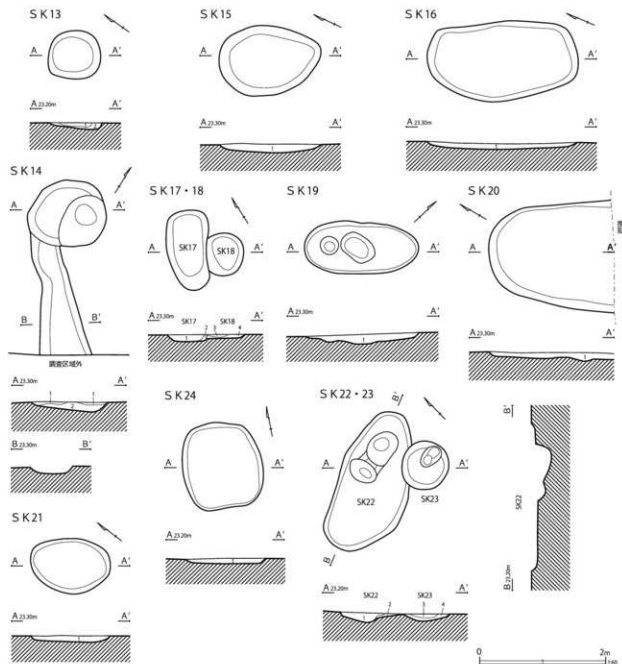
- SK9
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm)・ローム粒子・炭化物粒子少

- SK10
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~5mm)・ローム粒子少
2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) やや多 ローム粒子少
3 暗黄褐色土 ロームブロック (φ1~5mm)・ローム粒子やや多

- SK11
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~5mm) 少 ローム粒子若干
2 暗黄褐色土 ロームブロック (φ1~2mm)・ローム粒子若干

- SK12
1 極暗褐色土 ロームブロック (φ1~3mm)・ローム粒子若干
2 極暗褐色土 ロームブロック (φ1~30mm) 若干 ローム粒子少
3 暗褐色土 ロームブロック (φ1~10mm)・ローム粒子若干
4 暗黄褐色土 ロームブロック (φ1~10mm) 若干 ローム粒子やや多

第171図 土墳(1)



SK13
1 暗褐色土 ロームブロック(φ1~7mm)少 ローム粒子若干
2 暗黄褐色土 ロームブロック(φ1~3mm)若干 ローム粒子やや多

SK14
1 暗黄褐色土 ロームブロック(φ1~5mm)・ローム粒子若干
2 暗黄褐色土 ロームブロック(φ1~10mm)多 ローム粒子若干

SK15
1 暗黄褐色土 ロームブロック(φ1~10mm)若干 ローム粒子やや多

SK16
1 暗黄褐色土 ロームブロック(φ1~10mm)若干 ローム粒子やや多

SK17・18
1 暗褐色土 ロームブロック(φ1~5mm)・ローム粒子若干
2 暗褐色土 ロームブロック(φ1~20mm)少
3 暗褐色土 ロームブロック(φ1~3mm)・ローム粒子若干
4 暗褐色土 ロームブロック(φ1~10mm)やや多 ローム粒子若干

SK19
1 暗褐色土 ロームブロック(φ1~15mm)・ローム粒子若干

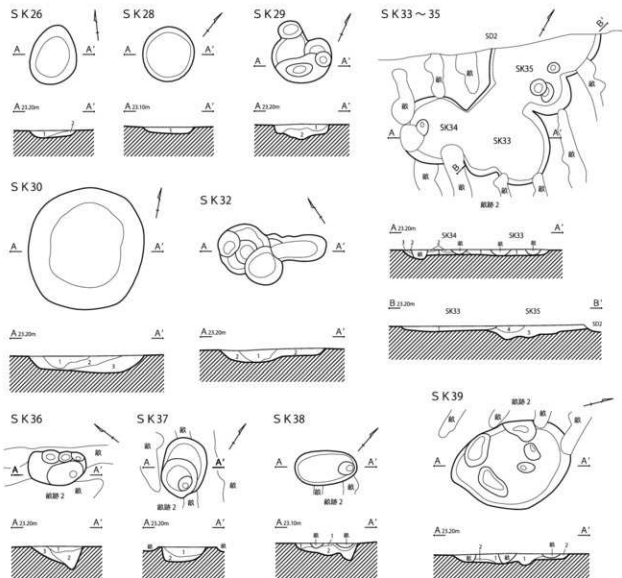
SK20
1 暗褐色土 ロームブロック(φ1~15mm)・ローム粒子若干

SK21
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・白色粒子少 しまり良

SK22・23
1 暗褐色土 ロームブロック(φ1~30mm)少 ローム粒子若干
2 暗黄褐色土 ロームブロック(φ1~10mm)少 ローム粒子やや多
3 暗褐色土 ロームブロック(φ1~3mm)少 ローム粒子若干
4 暗褐色土 ロームブロック(φ1~20mm)・ローム粒子若干

SK24
1 暗褐色土 ロームブロック(φ1~20mm)・ローム粒子若干

第172図 土壌(2)



S K 26
1 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) 若干 ローム粒子少
2 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 20 mm) 若干 ローム粒子多

S K 28
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 mm) ・ローム粒子若干 炭化物粒子少

S K 29
1 暗褐色土 炭化物粒子・暗褐色土ブロック (φ 2 cm程度) 少
2 暗褐色土 暗褐色土主体 ローム土塊状 炭化物粒子微

S K 30
1 黒褐色土 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土
2 暗褐色土 暗褐色土主体 黒色膠ブロック痕状
3 暗褐色土 ローム粒子多 炭化物粒子少

S K 32
1 黒褐色土 ローム小ブロック (φ 1 cm程度) 少 炭化物粒子多
2 暗褐色土 ローム小ブロック (φ 2 cm程度) 多 炭化物粒子微

S K 33 ~ 35
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm) ・ローム粒子若干
2 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 2 mm) ・ローム粒子少
3 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 20 mm) やや多 ローム粒子若干
4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色粒子少
5 暗褐色土 暗褐色土主体 ローム粒子痕状

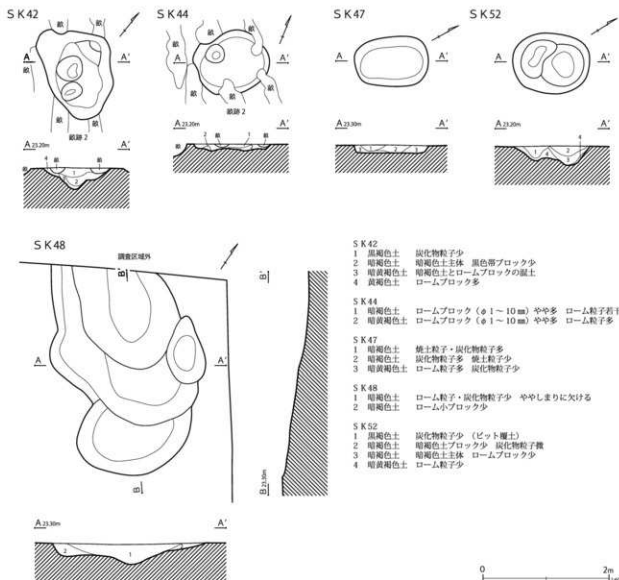
S K 36
1 暗褐色土 ローム粒子少
2 黒褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 15 mm) 極少 ローム粒子少
3 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 10 mm) やや多 ローム粒子若干

S K 37
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 mm) 少 ローム粒子若干
2 暗黄褐色土 ロームブロック (φ 10 ~ 30 mm) 若干 ローム粒子多

S K 38
1 暗褐色土 ロームブロック少 炭化物粒子微
2 暗褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック多

S K 39
1 暗褐色土 炭化物粒子多 白色粒子少
2 暗黄褐色土 ロームブロック多

第173図 土坑(3)



第174図 土坑(4)

第72号土坑出土遺物 (第181図5~11)

5は瀬戸美濃産の磁器坏類である。口縁部は端反で、見込みに花文を描く。6は肥前産の磁器碗である。7~9は在地産土器の火鉢で、7は瓦質、8・9は土師質である。10は延板状銅製品で、端部を折り曲げる。11は寛永通寶の新寛永である。

第75号土坑出土遺物 (第181図12~14)

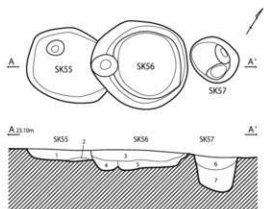
12は瀬戸美濃産陶器の鉄軸灯明受皿である。13は頭巻き釘である。14の銭貨は錆化のため銭名が判読できないが、寛永通寶と考えられる。

第81号土坑出土遺物 (第182・183図15~38)

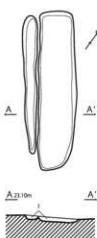
15は肥前産の磁器碗で、「くらわんか手」である。

16は肥前産の磁器蓋で、口縁部は端反となる。17は瀬戸美濃産の陶器皿である。18は陶器の土瓶で、京都信楽産と考えられる。19は陶器の土瓶蓋で、民窯系である。20は鞆羽口である。21は堺・明石産の陶器摺鉢である。22は瓦質土器の焙烙である。23~25は瓦質土器の鉢で、薄手の作りである。26~30は凝灰岩製の砥石である。31~35は頭巻き釘である。36は銅製の簪で、頭部に円板形の装飾がつき、先端が尖る。髪に差す部分は二股となる。37は文久永寶で、文久3(1863)年初鋳である。38は蛙の土製品で、型作りによる単純な作りである。19世紀前半に位置づけられる。

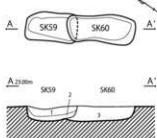
S K 55 ~ 57



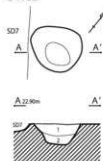
S K 58



S K 59・60



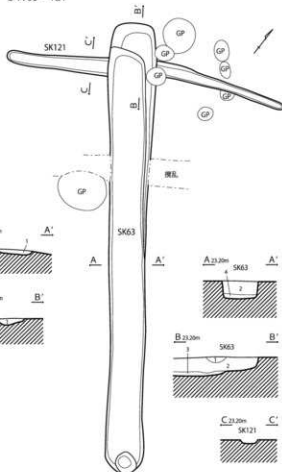
S K 62



S K 61



S K 63・121



S K 55 ~ 57

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子
- 2 黄褐色土 ロームブロック多
- 3 暗褐色土 ロームブロック (φ10~20mm)・ローム粒子多
- 4 黒褐色土 ローム粒子少
- 5 黒色土 しまりあり
- 6 暗褐色土 ロームブロック多 黒色土との互層
- 7 黒褐色土 ロームブロック多 しまりなし

S K 58

- 1 黒褐色土 ロームブロック少

S K 59・60

- 1 暗褐色土 ローム粒子多 しまりなし
- 2 黒褐色土 ローム粒子少 しまりあり
- 3 褐色土 ロームブロック多

S K 61

- 1 褐色土 ロームブロック主体

S K 62

- 1 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多
- 2 暗褐色土 黒色帯ブロック多

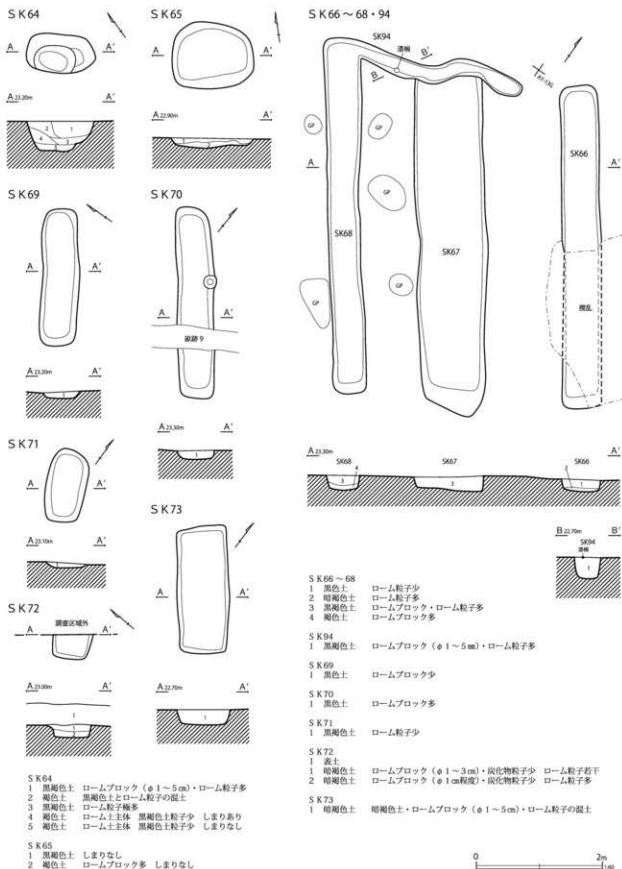
S K 63

- 1 黒褐色土 ロームブロック (φ1cm程度)・ローム粒子極多
- 2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3cm)・ローム粒子極多
- 3 黒褐色土 ロームブロック (φ1cm程度)・ローム粒子極多
- 4 褐色土 黒褐色土とローム粒子の混土

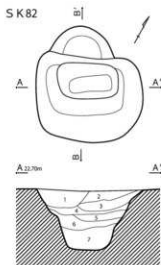
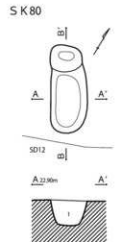
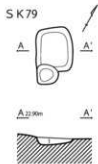
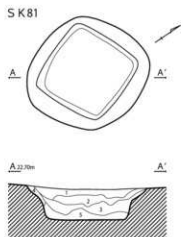
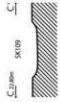
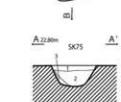
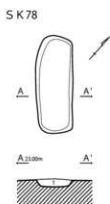
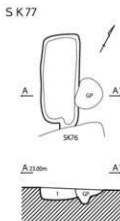
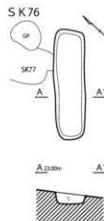
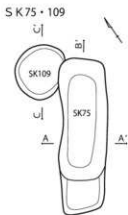
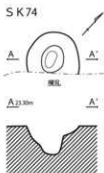
炭化物粒子若干

0 2m 1m

第175図 土壌(5)



第176図 土坑(6)

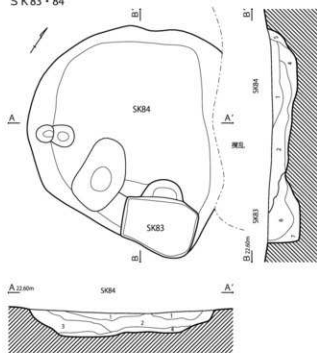


- S K 75
1 暗褐色土 ロームブロック少
2 褐色土 ロームブロック多 斑状
3 黒色土 ローム粒子少
- S K 76
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多
- S K 77
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多
- S K 78
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子
- S K 79
1 暗褐色土 ロームブロック少 ローム粒子多
- S K 80
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 cm程度)・ローム粒子多
- S K 81
1 暗褐色土 ローム粒子・小礫少
2 褐色土 ロームブロック・ローム粒子主体 暗褐色粒子若干
3 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 cm程度)・ローム粒子少 礫土粒子若干
4 暗褐色土 ロームブロック (φ 5 cm程度) 多 ローム粒子少
5 暗褐色土 ロームブロック (φ 1 ~ 5 cm)・ローム粒子多 礫土粒子若干
- S K 82
1 暗褐色土 ロームブロック (φ 3 ~ 5 cm)・ローム粒子極多 炭化物粒子若干
2 暗褐色土 ローム粒子・小礫多
3 暗褐色土 小礫極多 ローム粒子多
4 暗褐色土 ローム粒子少 炭化物粒子若干
5 暗褐色土 ローム粒子多 炭化物粒子若干
6 暗褐色土 ローム粒子少 ロームブロック (φ 1 cm程度)・炭化物粒子若干
7 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少

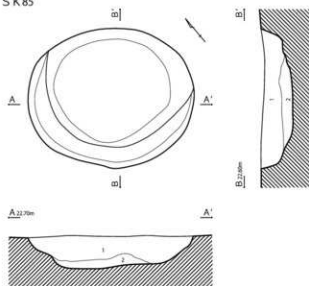


第177図 土壌(7)

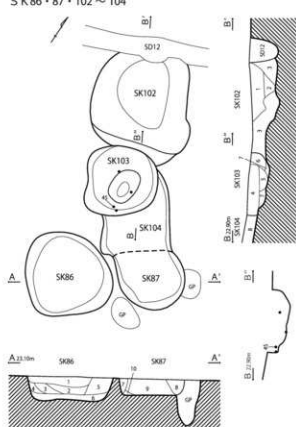
S K 83・84



S K 85



S K 86・87・102～104



S K 83・84

- 1 黒褐色土 ロームブロック (φ 2～10 cm)・ローム粒子多
- 2 褐色土 ローム粒子主体 ロームブロック (φ 2～5 mm)・黒褐色土粒子多
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒子主体 黒褐色土粒子少
- 4 黒褐色土 ロームブロック (φ 1～3 mm)・ローム粒子少
- 5 暗褐色土 ロームブロック (φ 1～2 mm)・ローム粒子少
- 6 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多
- 7 黒褐色土 ローム粒子少 炭化物粒子若干

S K 85

- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1～5 mm)・ローム粒子極多
- 2 黒褐色土 ロームブロック (φ 1～5 mm)・ローム粒子少

S K 86・87

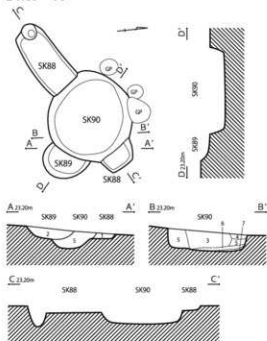
- 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子少
- 2 黒褐色土 ローム粒子多
- 3 暗褐色土 ローム粒子多
- 4 褐色土 ロームブロック多
- 5 暗褐色土 ロームブロック多 斑状
- 6 黄褐色土 ロームブロック多
- 7 黒褐色土 ローム粒子少
- 8 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子少
- 9 暗褐色土 ロームブロック多
- 10 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多

S K 102～104

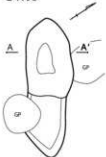
- 1 暗褐色土 ローム粒子多
- 2 暗褐色土 ローム粒子少
- 3 暗褐色土 ロームブロック少
- 4 暗褐色土 ローム粒子少 炭土粒子若干
- 5 暗褐色土 ローム粒子多 炭化物粒子若干
- 6 暗褐色土 ロームブロック多
- 7 褐色土 ロームブロック少
- 8 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多



S K 88 ~ 90



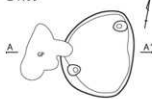
S K 98



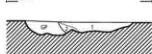
A 21.30m



S K 99



A 21.30m



S K 100



S K 88 ~ 90

- 1 暗褐色土 ロームブロック少
- 2 暗褐色土 ローム粒子少
- 3 黒褐色土 ローム粒子多 下層に焼土・炭化物少
- 4 暗褐色土 ロームブロック多
- 5 褐色土 ロームブロック多 斑状
- 6 黒色土 ローム粒子少
- 7 黄褐色土 ロームブロック多

S K 91

- 1 暗褐色土 ローム粒子多
- 2 黒褐色土 ローム粒子多
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多

S K 92

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多
- 2 褐色土 ロームブロック多
- 3 暗褐色土 ローム粒子多

S K 93

- 1 暗褐色土 ローム粒子多
- 2 褐色土 ロームブロック多

S K 95

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多
- 2 暗褐色土 ロームブロック多

S K 96

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多
- 2 黄褐色土 ロームブロック多

S K 97

- 1 褐色土 ロームブロック多
- 2 黄褐色土 ロームブロック多

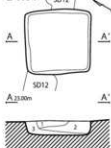
S K 98

- 1 黒褐色土 ローム粒子少
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多
- 3 褐色土 ロームブロック多

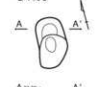
S K 99

- 1 暗褐色土 ロームブロック多 斑状
- 2 褐色土 ロームブロック多

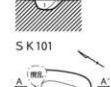
S K 91



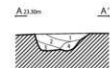
S K 95



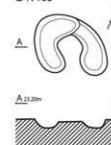
S K 96



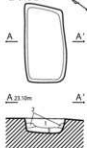
S K 101



S K 105



S K 92



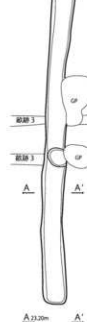
S K 96



S K 97



S K 106



S K 100

- 1 暗褐色土 ローム粒子多
- 2 黒褐色土 ロームブロック少
- 3 黄褐色土 ロームブロック多

S K 101

- 1 黒褐色土 ローム粒子多
- 2 褐色土 ロームブロック少
- 3 褐色土 ロームブロック多 斑状
- 4 黒褐色土 ロームブロック多

S K 93



S K 97



S K 107



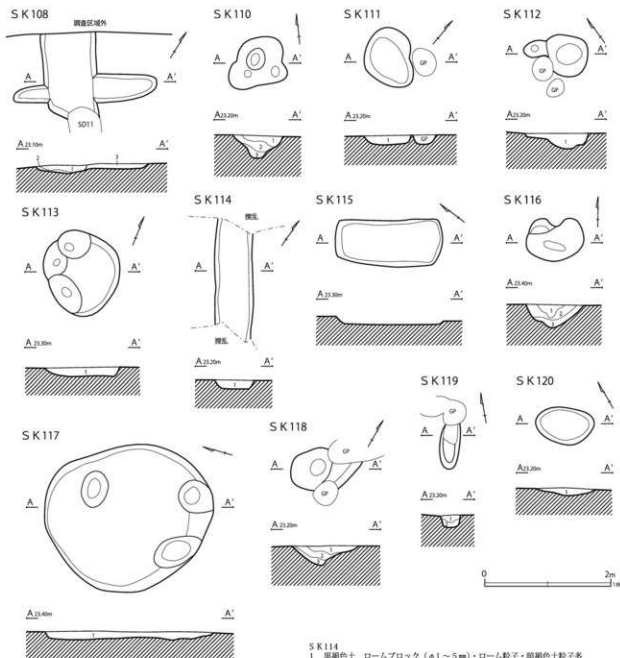
A 21.10m



B 21.10m



0 2m 1:40



- S K108
- | | | |
|---|------|----------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒子多 |
| 2 | 黄褐色土 | ロームブロック少 |
| 3 | 黄褐色土 | ロームブロック多 |

- S K110
- | | |
|--------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子多 白色粒子微 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック (φ 1cm程度)・ローム粒子多 |
| 3 暗褐色土 | ロームブロック (φ 1~3mm)・ローム粒子多 |

- SK111
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1cm程度) 少

- SK112
1 暗褐色土 口—土粒子·黑褐色土粒子多
2 褐色土 口—土主体 暗褐色土粒子少

- SK113
1 暗褐色土 黒褐色土とローム土の混土

- SK114
1 黒褐色土 ロームブロック(φ1~5mm)・ローム粒子・暗褐色土粒子多

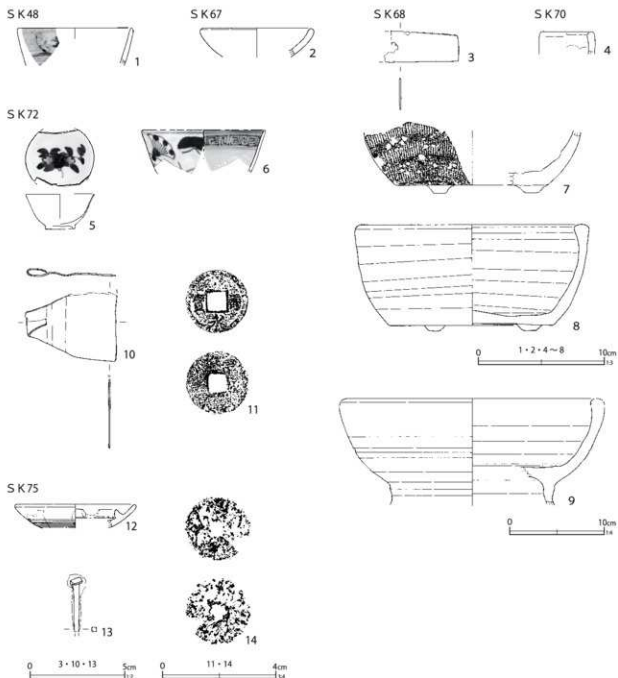
- S K 116
- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒子少 |
| 2 | 暗褐色土 | ロームブロック (φ 1~3 cm) 少 |
| 3 | 暗褐色土 | 暗褐色土とローム土の混土 |

- S K117
1 暗褐色土 口—ム 砂子多

- S K118
- | | |
|--------|---------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子少 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック (φ 1cm程度)・ローム粒子多 |
| 3 暗褐色土 | ロームブロック (φ 1cm程度)・ローム粒子極多 |

- S K119
1 暗褐色土 ローム粒子多
2 黒褐色土 ロームブロック (φ 1cm程度)・ローム粒子少

- SK120
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の凝土



第181図 土壌出土遺物(1)

第82号土壌出土遺物 (第183図39・40)

39は陶器乗燭で、鉄軸が掛り、底部は回転糸切りである。40は丸底の土師質土器の焙烙である。

第85号土壌出土遺物 (第183図41)

41は軽石製の砥石で、表面・裏面・周縁部に僅かに擦痕を残す。

第90号土壌出土遺物 (第183図42)

42は銅製の鉤金具で、先端部を欠損する。

第91号土壌出土遺物 (第183図43)

43は鉄銭で、錆化が著しく銭種は判然としない。

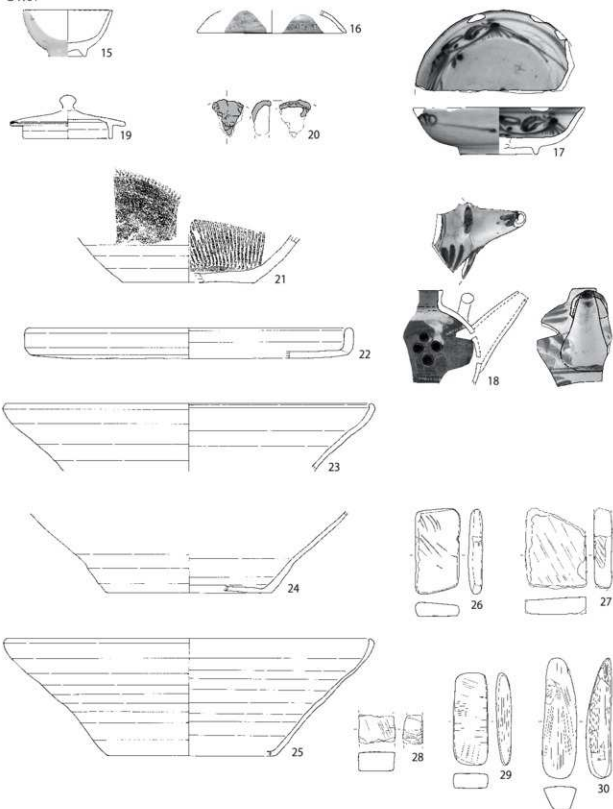
第102号土壌出土遺物 (第183図44)

44は瀬戸美濃産の摺鉢で、破断面を砥具として使用する。

第103号土壌出土遺物 (第181図45~47)

45は鉄軸の灯明油皿である。46の鉄釘は先端がL字形に曲がる。47は寛永通寶で、新寛永である。

S K 81

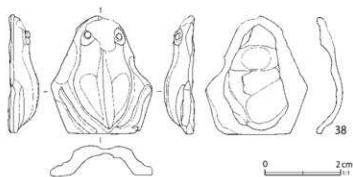
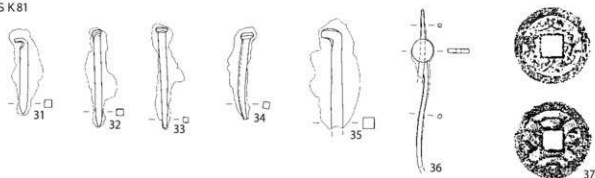


0 21 ~ 25 10cm
1/4

0 10cm
1/3

第182図 土城出土遺物(2)

SK81



SK82



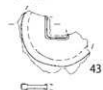
SK85



SK90



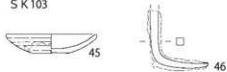
SK91



SK102



SK103



0 39・41・44・45 10cm 0 31・36・42・46 5cm 0 37・43・47 4cm

第183図 土坑出土遺物(3)

第38表 土壌出土遺物観察表(第181～183図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	碗	(9.0)	[3.0]	—	H I	10	良好	淡黄	SK48 肥前系 灰輪・鉄絵 17C後半～18C前半	53-1
2	かわらけ	皿	(8.4)	[2.3]	—	H I K	15	普通	にぶい橙	SK67 近世	
3	鉄製品	板状品	長さ3.95cm	幅1.15cm	厚さ0.5cm	重さ1.4 g				SK68 透彫	
4	土製品	埴塼	(4.0)	[1.8]	—	G I K	5	良好	灰	SK70 内面黒色付着物 外面一部自然釉付着	51-9
5	磁器	坏類	5.4	2.8	2.3	—	75	良好	灰白	SK72 瀬戸美濃 柳毬手 19C前半～中頃	
6	磁器	碗	(9.7)	[3.4]	—	K	20	良好	灰白	SK72-SK81 肥前 19C前半	
7	土師質土器	火鉢	—	[4.9]	(12.0)	H I K	15	普通	にぶい黄橙	SK72 在地産 19C代	51-10
8	土師質土器	火鉢	18.2	8.5	12.9	A H I K	80	普通	にぶい橙	SK72 在地産 柳3箇所 19C代	
9	土師質土器	火鉢	(26.4)	[11.2]	—	C H I K	10	普通	橙	SK72 在地産 19C代	
10	銅製品	板状品	長さ4.8cm	幅3.7cm	厚さ0.09cm	重さ5.8 g				SK72 端部折り返し	53-2
12	陶器	灯明受皿	(9.4)	[1.9]	—	I K	30	良好	灰	SK75 表採 瀬戸美濃 口径2(6.4)cm 鉄輪	
13	鉄製品	釘	長さ2.8cm	幅0.25cm	厚さ0.25cm	重さ1.5 g				SK75	
15	磁器	碗	(7.0)	3.7	2.9	K	60	良好	灰白	SK81 肥前 くらわんか手 18C代	52-1
16	磁器	蓋	(11.6)	[1.8]	—	K	5	良好	灰白	SK81 肥前 19C前半	
17	陶器	皿	(13.4)	3.7	(6.0)	I	40	良好	灰白	SK81 瀬戸美濃 19C前半～中頃	
18	陶器	土瓶	—	[7.6]	—	K	5	良好	にぶい黄橙	SK81 産地不明(京都府京家か) 19C前半	52-2
19	陶器	土瓶蓋	9.2	[2.2]	—	I K	95	良好	にぶい黄橙	SK81 産地不明(民窯系)口径2 7.0cm 19C代	
20	土製品	羽口	長さ3.0cm	幅2.5cm	厚さ1.5cm	重さ8.6 g				SK81 先端部 一部溶化(ガラス質)	
21	陶器	播鉢	—	[5.1]	(14.0)	E H I	20	良好	にぶい赤褐	SK81 堺・明石 18C後半～19C前半	52-3
22	瓦質土器	焙烙	(34.0)	[3.2]	(33.2)	H I K	15	普通	黄灰	SK81 19C代	
23	瓦質土器	鉢	(38.8)	[7.1]	—	H I K	25	普通	にぶい黄橙	SK81 外面黒色	
24	瓦質土器	鉢	—	[8.6]	(17.6)	C H I K	30	普通	にぶい黄橙	SK81 外面暗灰色	52-3
25	瓦質土器	鉢	38.5	12.4	(18.0)	C H I K	60	普通	灰褐	SK81 外面黒褐色 底部粘土板形成 薄手軽量	
26	石製品	砥石	長さ6.8cm	幅3.6cm	厚さ1.1cm	重さ40.1 g		凝灰岩		SK81 砥面は4面だが主として平坦な2面を使用 側面にU字状の溝をもつ工具痕	53-3
27	石製品	砥石	長さ6.4cm	幅4.8cm	厚さ1.4cm	重さ60.6 g		凝灰岩		SK81 砥面は4面以上だが2面のみ残存 被熱で表面が剥落し、全体に赤味を帯びる	53-3
28	石製品	砥石	長さ2.3cm	幅2.9cm	厚さ1.6cm	重さ16.5 g		凝灰岩		SK81 砥面は4面	53-3
29	石製品	砥石	長さ7.4cm	幅2.7cm	厚さ1.2cm	重さ39.6 g		凝灰岩		SK81 砥面は4面	53-3
30	石製品	砥石	長さ9.5cm	幅2.7cm	厚さ1.9cm	重さ61.8 g		凝灰岩		SK81 砥面は4面だが表面をよく使用 他の3面に磨削状の工具痕 被熱痕	53-3
31	鉄製品	釘	長さ4.0cm	幅0.4cm	厚さ0.4cm	重さ7.3 g				SK81	53-2
32	鉄製品	釘	長さ5.1cm	幅0.4cm	厚さ0.4cm	重さ7.2 g				SK81	
33	鉄製品	釘	長さ5.3cm	幅0.3cm	厚さ0.3cm	重さ5.5 g				SK81	
34	鉄製品	釘	長さ4.5cm	幅0.35cm	厚さ0.35cm	重さ4.4 g				SK81	50-7
35	鉄製品	釘	長さ5.3cm	幅0.6cm	厚さ0.6cm	重さ23.8 g				SK81	
36	銅製品	簪	長さ8.3cm		重さ4.3 g					SK81	
38	土製品	蛙	長さ3.1cm	幅2.7cm	厚さ0.8cm	重さ2.8 g				SK81 型作り	50-7
39	陶器	垂燭	(5.6)	3.7	4.3	K	70	良好	灰白	SK82 産地不明 鉄輪 底部回転糸切り	52-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
40	土師質土器	焙烙	(34.0)	[3.3]	(34.0)	CHIK	15	普通	明赤褐	SK82 丸底タイプ 19C代	53-3
41	石製品	砥石	長さ16.3cm	幅3.1cm	厚さ1.4cm	重さ14.3g	軽石			SK85 表面・裏面・周縁部に僅かに擦痕	
42	銅製品	銅金具	長さ3.3cm	幅0.2cm	厚さ0.2cm	重さ1.5g				SK90 先端部欠損 頭部扁平	53-2
44	陶器	播鉢	—	[4.6]	—	EHIK	5	普通	浅黄	SK102 瀬戸美濃 転用砥具 近世	
45	陶器	灯明皿	7.1	1.5	3.0	HIK	100	良好	灰白	SK103 №3 油皿 鉄軸	52-5
46	鉄製品	釘	長さ4.3cm	幅0.4cm	厚さ0.4cm	重さ3.2g				SK103 L字形に屈曲	

第39表 土壌出土銭貨観察表(第181・183図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
11	銭貨	寛永通寶	22.45	22.50	1.00～1.31	1.7	SK72 新 江戸 1697～1747年、1767～1781年	
14	銭貨	寛永通寶か	23.51	23.75	2.00～2.10	1.7	SK75	
37	銭貨	文久永寶	27.35	27.35	1.28～1.40	2.7	SK81 背11波 草文 江戸 1863年初鋳	
43	銭貨	鉄銭	[26.00]	[26.00]	2.00	1.7	SK91	
47	銭貨	寛永通寶	23.10	23.20	1.30～1.41	2.7	SK103 新 江戸 1697～1747年、1767～1781年	

(6) ビット

ビットは調査区全体で655基を検出した。第1次調査区で122基、第2次調査区で533基である。

第1次調査区では全体に広く分布しているものの、第3～6号溝跡南東側のE-5・6、F-4・5グリッドや、第2号畝状遺構東側のD-4・5グリッドにややまとまっていた。

第2次調査区でも調査区全体に広がりをみせているが、旧中山道に隣接する東側調査区に集中していた。特に、第3号畝状遺構から第10号溝跡にかけてのA Y-11～13、A Z-11～14、A-12・13グリッドにまとまりがある。また、その広がりは街路を隔てた、第2次調査区中央の第6・10号畝状遺構周辺にまで及んでいる。

平面形は円形もしくは楕円形を基調とし、規模は径15～125cm、深さ4～140cmと幅があり様でないが、径40～50cm、深さ30～40cmのものが大半を占める。

覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体としている。土層断面の観察では、柱痕跡のみられるものも多いが、掘立柱建物跡や柵跡のように規則的な配列を示すものは僅かであった。

遺物を出土するものが少なく、時期を特定することはできないが、覆土の状態から近世に属する

ものと判断した。性格についても判然としないが、畝状遺構に重なるものも多いことから畝作に関連する耕作痕なども含まれていると思われる。

(7) ビット・グリッド出土遺物

1～3は近世のかわけ皿である。いずれもロクロ整形で、底部回転糸切りである。1はA X-11グリッドP 1、2はA Z-13グリッドP 15から出土した。

4は陶器の鉄軸灯明皿である。見込みに重ね焼き痕を残す。A X-10グリッドから出土した。

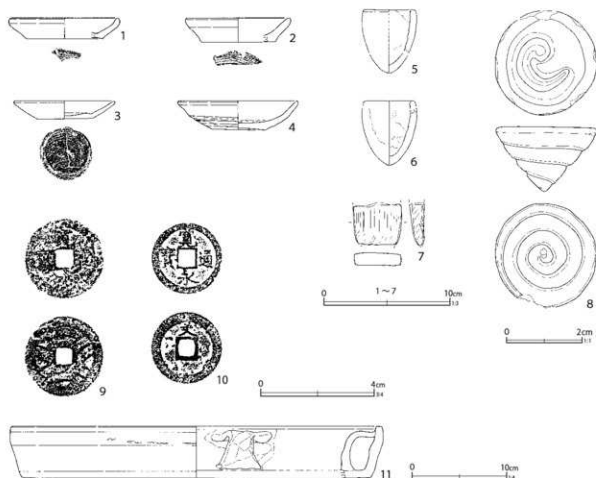
5・6は小型の埴塼である。内外面に黒色の付着物がみられ、還元焰焼成である。A X-10グリッドから出土した。

7は凝灰岩製の砥石である。櫛歯状工具痕を残し、被熱により赤味を帯びる。

8は土製品のばいごま(貝独楽)である。乳白色の素地で作られている。A-11グリッドから出土した。

9・10は寛永通寶である。9は真鍮製の四文銭で、背11波である。10は新寛永の文銭である。

11は瓦質土器の焙烙である。平底タイプで、体部外面に煤が付着する。A W-11グリッドP 8から出土した。



第184図 ピット・グリッド出土遺物

第40表 ピット・グリッド出土遺物観察表(第184図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	かわらけ	皿	(8.4)	[1.7]	(6.0)	H I K	15	普通	淡黄	AX-11G P1 底部回転糸切り 近世	52-6
2	かわらけ	皿	(8.2)	1.9	(6.0)	C I K	20	良好	黄灰	AZ-13G P15 底部回転糸切り 近世	
3	かわらけ	皿	(7.9)	1.4	4.4	A H I K	45	普通	橙	AY-11G一括 底部回転糸切り 18C以降	
4	陶器	灯明皿	9.3	2.3	4.2	I	75	良好	褐灰	AX-10G 鉄軸 重ね焼き痕	52-7
5	土製品	増埴	(4.0)	[3.4]	—	G I K	40	良好	灰	AX-10G 内面黒色付着物 還元焰焼成	53-1
6	土製品	増埴	—	[4.6]	—	G I K	30	良好	灰	AX-10G 内外面黒色付着物 還元焰焼成	53-1
7	石製品	砥石	長さ3.4cm 幅3.8cm 厚さ1.2cm 重さ20.3g					凝灰岩		D-5G-E-6G植栽 砥面は4面 櫛歯状工具痕 被熱により赤味を帯びる	53-3
8	土製品	ばいごま	口径2.7×2.7cm 高さ1.7cm 重さ7.0g							A-11G	50-8
11	瓦質土器	焙烙	(39.0)	5.4	(37.0)	B H I K	15	普通	黄灰	AW-11G P8 平底タイプ 外面煤付着 18C～19C	

第41表 グリッド出土銭貨観察表(第184図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	銭厚(mm)	重量(g)	備考	図版
9	銭貨	寛永通寶	28.30	28.30	1.50～1.60	4.3	西文銭 背11波 江戸 1769年～	
10	銭貨	寛永通寶	25.28	25.31	1.28～1.45	3.2	新文銭 江戸 1668～1683年	

Ⅶ 調査のまとめ

各遺跡における調査成果の要点は次のとおりである。

諏訪北Ⅰ遺跡

諏訪北Ⅰ遺跡は、石戸領総鎮守である諏訪神社の南西約50mに位置しているが、今回の調査成果として中世以降の境内地周辺の土地利用のあり方が明らかになった意義は大きい。

縄文時代の土壌は、調査区の南側を中心に分布している。その広がりは、諏訪北Ⅱ遺跡との間に湾入する浅い谷に面した緩斜面に及ぶようである。遺物は中期後葉から後期前葉の土器を主体とするものの、少量とはいえ晩期の土器を含む点は注意される。晩期の集落跡として著名な高井東遺跡、宮岡水川神社遺跡と本遺跡はほぼ等距離にあり、近隣に後・晩期の拠点的な集落が存在することも予想される。

中・近世では、調査区の東西両端を南北に縦断する2条の溝跡から、短冊形に細長く区画された地割の存在を想定した。区画内には小規模な掘立柱建物跡に向って、入口部を開口する2基の地下式城が規則的に配置されていた。地下式城は横長方形の地下室の長辺中央に階段状の入口部を付設したもので、築瀬裕一による形態分類のC2類に該当する(築瀬2006)。また、井上哲朗の示した関東地方の地下式城の編年観に従えば、概ね16世紀前半に位置づけられる(井上2007)。

地下式城の性格については大きく墓域説と貯蔵施設説の二説に分かれ、今なお解明するに至っていない。本遺跡でのあり方からすれば、周囲の掘立柱建物跡や長軸8mを超える長大な長方形土壌との関わりが強く、貯蔵穴などの生業関連遺構とする方が妥当と思われる。

周辺では桶川市砂ヶ谷Ⅰ遺跡(関根1992)、北本市諏訪山南遺跡(磯野他1995)・中井遺跡(磯野他2009)、上尾市西通Ⅱ遺跡(田中他1985)等

で検出されている。地下式城の機能・性格を解明するためには、各遺跡における配置状況など他遺構との関連性を分析することが重要な視点になると考えられる。

諏訪北Ⅱ遺跡

諏訪北Ⅱ遺跡は、浅い谷を挟んで諏訪北Ⅰ遺跡の西に対峙している。縄文時代の遺構は、南東から湾入する浅い谷を取り巻くように、谷奥と西側緩斜面の二箇所を中心に分布する。

調査の結果、西側緩斜面の第4号住居跡と第1号埋甕が中期後半の加曾利EⅢ式古段階に属することが明らかになった。土壌を含めても遺構の分布は極めて散漫であり、南方に位置する諏訪南遺跡の縄文中期集落の周縁部的な様相を窺わせる。

後期では、谷奥の第3号住居跡と東側緩斜面の第20号土壌が堀之内1式期に属する。遺物の出土はなかったが、第161号土壌はその断面形状から推して同時期の貯蔵穴とみられる。また、グリッド出土遺物の中にも同時期の土器片が一定量出土している。未報告ながら、園央道建設に伴い発掘調査を実施した大平遺跡の低地部でも後期前葉の遺構・遺物を検出しており、両者の関連性についての検討が今後の課題である。

中・近世の遺構を数多く検出したが、遺跡の性格を特徴づけるものとして、L字形に巡る大規模な築研堀である第21号溝跡が挙げられる。溝跡の全容については明らかでないが、北端は普門寺の旧境内地にある桶川市天然記念物の「しだれ桜」に向って真直ぐに伸びていることから、普門寺との関連のある溝跡であることはまちがいないだろう。

覆土中から暦底三(1340)年銘の阿弥陀一尊種子板碑をはじめ、中世から近世に至る陶磁器類がまとまって発見されている。遺物からは、少なくとも14世紀末葉から15世紀前半には開削されていたものと思われる。また、隣接する第22号溝跡を

含め、碗形鍛冶滓や砥石が覆土中に廃棄されており、近世には周辺で小鍛冶が行われていたことを示唆するものとして注目される。

この溝跡の性格については、中世領主層の方形館、あるいは普門寺の周辺地に広がる宗教施設を圍繞する大規模な区画溝や参道に付属する溝跡など（村山2009）と推定されるが、現状でその性格を特定することは難しい。

今後の課題としては、現況地形の観察及び地籍図や文献史料をもとに普門寺周辺の地割を復元し、中世寺院周辺地における土地利用のあり方を明らかにすることが重要であろう。

諏訪南遺跡

諏訪北Ⅱ遺跡の南に隣接する諏訪南遺跡では、遺跡の東側に存在する支谷に沿うように、縄文時代中期の住居跡3軒が南北に連なっていた。出土した縄文土器からみて、ほぼ加曾利EⅢ式古段階に限定される小規模集落の一部と考えられる。おそらく、遺跡の北東約1kmに位置する諏訪野遺跡の大規模環状集落解体後に営まれた小集落のひとつであろう。また、南西約800mに位置する前原遺跡（宮井2010）では、後続する加曾利EⅢ式新段階の住居跡が検出されている。本遺跡から移動した可能性もあり、小地域における遺跡群の動態を検討する上でも貴重な調査例といえよう。

各住居跡の概要を述べると、第1号住居跡の炉跡からは大型の連弧文土器と共に磨石や石皿が重なり合うように出土しているほか、覆土中からは滑石製垂飾が発見された。第2号住居跡は地床炉と埋壺炉を備え、埋壺炉には加曾利EⅢ式古段階の深鉢を埋設していた。第3号住居跡では3基の土壇が検出され、各土壇に意図的に破碎した深鉢の破片が詰め込まれていた。とりわけ第2号土壇は出土量も多く、キャリパー類深鉢と連弧文土器が共存する良好な一括資料である。

近世の遺構は、根切り溝によって囲まれた中に畝状遺構やムロと思われる土壇を検出した。これ

らの遺構のあり方と、現地表から遺構確認面までの土層状況の観察から、ドロツケと呼ばれる大宮台地西縁部に特徴的な荒川の氾濫土（ヤドロ）を台地上の耕作地に運ぶ客土農法（吉川1988）が近世後期以降、活発に行われていたことが明らかになった。

遺物は瀬戸美濃産陶器と肥前産磁器を主体に、在地産のかわらけや焙烙が伴う器種組成を示す。時期は17世紀後半から19世紀前半と幅があるものの、中心は18世紀後半である。

二ツ家下遺跡

二ツ家下遺跡は中山道六十九次の江戸日本橋から数えて6番目の桶川宿北東部、本陣から約1.8kmの街道沿いに所在する遺跡である。

縄文時代の遺構では早期と考えられるが穴や土壇のほか、中期後半の土器埋設遺構2基を検出した。第2号土器埋設遺構から出土した深鉢は加曾利EⅢ式新段階に属し、第1号土器埋設遺構から出土した浅鉢もこれに近い時期のものであろう。東に隣接する提灯木山遺跡は、これらと同時期かやや新しい時期の集落跡であることから、本遺跡はその周縁にあたると思われる。

後期では加曾利B2式の土器片が出土している。同一水系には後・晩期の代表的な集落跡である後谷遺跡が存在しており、今回の調査地点も後谷集落の活動圏の一部をなしていた可能性がある。

近世では、中山道沿いの土地利用の一端が明らかになったことが大きな成果である。

街道に対して直交もしくは並行する地割溝によって整然と区画された中に、畠の耕作痕と考えられる畝状遺構が大きく開かれ、街道際を中心に井戸跡や土壇が集中して発見された。これらは畠地を備えた屋敷地の一部であることを物語っている。

今回の調査地点は江戸時代の下石戸下村の南東端にあたるが、文化・文政期（1804～1829年）の家屋数は80軒を数えていた。『武蔵国郡村誌』によれば、下石戸下村の物産には、米・大麦・小麦・

大豆・小豆・甘藷・菜種・苳・胡麻・薪・芋・栗・鹿柴(粗柴)等が挙げられている。この畠地ですぐれに作物を栽培していたのかは明らかにし得ないが、おそらく根菜類であろう。時期を示す遺物が少なくこれも明確でないが、遺跡内に初めて畠が開かれたのは18世紀後半以降と思われる。

遺物は瀬戸美濃産陶器と肥前産磁器を主体に、在地産のかわらけや丸底・平底の焙烙、薄手の鉢などが出土している。出土量は少ないながらもさまざまな器種がみられ、食膳具・調理具・灯火具・暖房具など生活の全般にわたっている。時期は幕末に近い19世紀前葉から中葉が主体である。磁器の碗・皿類は丈夫で安価な製品が目につき、村落から出土する器種組成に近い(岡田2009)。

その他に招福のための縁起人形である大黒天や福助、箱庭の置物と考えられる蛙を模した土製品、

玩具のばいごま(ペーゴマ)などが出土しており、当時の人々の暮らしぶりや民間信仰を考える上で貴重な資料(小林2012)である。

特殊な遺物としては、溝跡や土壌など複数の遺構から出土した小型埴塼の破片がある。埴塼は口径3.5～4.4cm、器高5.1cmに復元される尖底で砲弾形をしている。容量は約17ccで、ほぼ一匁(18cc)に近く、器面に黒色の付着物や緑錆がみられる。第10号溝跡からは埴塼と一緒に鋳型と思われる焼土塊が出土した。この他に金属加工に関連する遺物としては、第81号土壌から輪羽口の破片が出土したのみである。

埴塼の容量が少ないことから推して、金属器の修理などの作業を当地で小規模に行っていたものと思われる。居住者の生活を推測する上で貴重な発見といえよう。

引用・参考文献

- 安芸健子・小林照子・堀内秀樹 2012「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 2009・2010年度 東京大学理蔵文化財調査室
- 磯野治司他 1995「堀ノ内前跡(第1・3次調査) 調布山南遺跡 調布山北遺跡」北本市埋蔵文化財調査報告書第2集 北本市教育委員会
- 磯野治司他 2009「八幡遺跡第2次調査 中井遺跡第2次調査 下宿遺跡第5次調査」北本市埋蔵文化財調査報告書第17集 北本市教育委員会
- 井上哲朗 2007「関東地域地下式坑について」第3回東中世考古学研究会大会『地下式坑を考える一地下式坑の全国集成とその検討一』東中世考古学研究会 房総中近世考古学研究会
- 大成可乃 2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7 2007・2008年度 東京大学理蔵文化財調査室
- 岡田賢治 2009「北武蔵における江戸時代後期の陶磁器の生産と流通」第19回九州近世陶磁学会資料「江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通」(関東・東北・北海道編) 九州近世陶磁学会
- 樋川市 1979「樋川市史」第二巻 原始・古代資料編
- 樋川市 1990「樋川市史」第一巻 通史編
- 北本市教育委員会市史編さん室 1994「北本市史」第1巻 通史編1 自然、原始・古代・中世近世編
- 小林照子 2012「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の年代的推移について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 2009・2010年度 東京大学理蔵文化財調査室
- 関根 訪 1992「平成3年度 樋川市遺跡発掘調査報告書」樋川市教育委員会
- 高崎直成 2007「関東地方の「T」字形地下式坑について」第3回東中世考古学研究会大会『地下式坑を考える一地下式坑の全国集成とその検討一』東中世考古学研究会 房総中近世考古学研究会
- 田中広明他 1985「西通1遺跡」上尾市文化財調査報告第22集 上尾市教育委員会
- 東京大学理蔵文化財調査室 1999「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1) 1997年度」東京大学構内遺跡調査研究年報2別冊
- 宮井英一 2010「前原/大沼 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第373集
- 村山 卓 2009「中世後期における集落の検討ー北関東地域における土壌腐植の様相を中心としてー」『考古学論究』第12号 立正大学考古学会
- 築瀬裕一 2006「地下式坑の分類と編年試論ー中馬場遺跡他の千葉県の事例をもとにー」『房総中近世考古』第2号 房総中近世考古学研究会
- 吉川國男 1988「ドロッケ」『荒川』人文Ⅲ 荒川総合調査報告書4 埼玉県